東北大学東北アジア研究センター

活動報告 2013

2014 年 6 月 30 日

東北大学東北アジア研究センター

活動報告 2013

2014 年 6 月 30 日

巻頭言 …… 1
2013 年度行事表 …… 2
総合的自己評価 …… 3
⑴ 理念と目的 …… 4
⑵ 概念図 …… 6
⑶ 組織運営活動 …… 6
⑷ 研究活動 …… 21
組織運営活動 …… 39
⑴ 人員配置と業務分担 …… 40
Ⓐ 教員等の配置、研究組織構成状況（2014 年 3 月現在） …… 40
Ⓑ 現職専任教員等の年齢、勤続年数、博士号取得状況 …… 41
Ⓒ 専任教員の最終出身大学院（2014 年 3 月現在） …… 41
Ⓓ 研究支援組織の整備・機能状況（2014 年 3 月現在） …… 42
Ⓔ 教育研究支援者受け入れ状況 …… 42
Ⓕ 客員教授（海外）受け入れ状況 …… 42
Ⓖ 兼務教員受け入れ状況（2014 年 3 月現在） …… 48
Ⓗ 非常勤講師受け入れ状況（2014 年 3 月現在） …… 48
Ⓘ 東北アジア研究センターフェロー …… 49
Ⓙ その他研究員 …… 49
Ⓚ センター内委員会構成図 …… 50
Ⓛ 委員会名簿（2013 年度） …… 51
⑵ 研究資金 …… 56
Ⓐ 経費総額 …… 56
Ⓑ 歳出決算額 …… 57
Ⓒ 科研費の申請・採択状況 …… 58
Ⓓ 外部資金受入状況 …… 59
研究活動 …… 65
⑴ プロジェクト研究ユニット …… 66
Ⓐ 2013 年度センター・プロジェクト部門研究ユニット一覧 …… 66
シベリアにおける人類生態と社会技術の相互作用研究ユニット …… 67
21 世紀東北アジア地域像の構築に関する研究ユニット …… 71
森林火災から発生する二酸化炭素削減研究ユニット …… 76
現代中国社会の変容に関する文化人類学研究ユニット …… 80
20 世紀ロシア・中国史再考研究ユニット …… 85
減災をめざした電波科学研究ユニット …… 88
東北アジア言語文化遺産研究ユニット …… 93
出版文化資料データベース研究ユニット …… 97

⑵　共同研究……107
⒜　2013 年度センター共同研究課題一覧……107
氷融洪水とその社会的対応からみる極北圏地域社会の比較研究……108
東北アジアにおける辺疆地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究……114
近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究…122
現代中国社会の変容とその研究視座の変遷―「宗族」を通した検証 ……127
江戸時代から現代に通じる東北の歴史……131
日本列島の文化交渉史 ― 経済と外交 ……136
震災復興のための地中レーダによる遺跡探査推進 ……141
新疆、満州をめぐる 20 世紀前半のソ連、中国の政策……144
東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用 ……147
典籍文化遺産の研究……153
⒝　過去に実施した共同研究・プロジェクト一覧……162
⑶　公募共同研究……166
⒜　2013 年度センター共同研究課題一覧……166
⑷　研究紹介発表……177
⑸　学術協定　……180
⒜　学術協定による海外の学術機関等との連携強化……180
⒝　共同ラボによる国際的研究支援……180
⑹　研究成果公開……181
⒜　既刊の刊行物……181
⒝　2013 年度に実施された公開講演、共同研究会等……192
⒞　センターが作成し公開中または公開予定のデータベース ……210
教員の研究活動……211
ロシア・シベリア研究分野
寺山　恭輔……212
高倉　浩樹……216
塩谷　昌史……221
モンゴル・中央アジア研究分野
栗林　均……224
岡　洋樹……227
柳田　賢二……232
中国研究分野
磯部　彰……236
瀬川　昌久……241
明日香　壽川（張　壽川）……245
上野　稔弘……249

日本・朝鮮半島研究分野
石井　敦……252
地域生態系研究分野
千葉　聡……256
鹿野　秀一……262
地球化学研究分野
石渡　明……266
平野　直人……273
後藤　章夫……277
宮本　毅……280
環境情報科学研究分野
工藤　純一……283
資源環境科学研究分野
佐藤　源之……287
高橋　一徳……299
駒木野　智寛……306
学術交流分野
金　賢貞……310
寄附研究部門　上廣歴史資料学研究部門
荒武　賢一朗……314
高橋　陽一……319
友田　昌宏……324
専属教員以外の研究者の研究活動……327
巽　由樹子……328
麻田　雅文……328
滝澤　克彦……329
斯欽巴図……331
青木　雅浩……331
佐藤　憲行……333
盧向春……333
稲澤　努……334
Turmunh Odontuya……335
李　善　姫……335
佐々木　聡……336
コヤマ クリスティアン……337
劉　海……338

巻頭言

2013 年度（平成 25 年度）の東北アジア研究センターの活動は、本拠地である川北合同研究棟の改修が遅延し、昨年度に引き続き川北キャンパス内のプレハブや、学内の他部局の好意で拝借したスペースで開始された。研究棟改修工事は、8 月にようやく竣工し、9 月いっぱいはプレハブや避難先からの移転業務に費やされた。震災以後、限られた条件の中で本センターにスペースを提供された諸部局には、心からお礼申し上げたい。また本センターの事務や所掌の文学研究科等事務部には、ひとかたならぬ努力をいただき、無事に合同棟への復帰を果たすことができた。あわせて感謝申し上げる。

昨年度のセンターの教員の活動を概観すると、講演会やシンポジウム、研究会などの研究センターとしての基本的な業務で、合同棟復帰前の 6 件を含む 31 件の企画が実施されている。これは昨年度の実績を大幅に上回るものであり、震災のダメージが克服されていることを示すように思われる。

2013 年度の活動を概観してみると、本センターの研究上の特色がいっそう顕著になってきたように思われる。近年、地域研究も含め、学術研究の有用性や意義が改めて問い直されている。それは､文系･理系それぞれにおいて細分化した学の状況に対する批判であったり、研究の国際化の要請であったり、あるいは地域社会へのいっそうの貢献を求めるものであったりする。そこで要請されているのは、地域を研究する際に、ほんらい避けて通ることができない事柄である。東北アジア研究センターは、文系・理系の研究者がそれぞれに、あるいは連携しながら、東北アジアのさまざまな課題に関する研究プロジェクトを展開してきた。あるものは東北アジアの国境を越えた移動や交流、異文化の共存といった問題を扱い、またある者は地域社会との協働の中から成果を紡ぎ出している。地域という研究対象は、それ自体が多様であり、対応する学術分野は多岐にわたるのであって、本来特定分野の研究に限定できるものではない。そしてその研究は、東北アジア地域の国々をはじめとする世界の研究者との協力の下で進められるのである。

2013 年度の活動報告として編集された本書は、本センターの研究活動の全貌を詳細に示している。東北アジアの重要性の高まりは、東北アジアを枠組みとする地域理解を要請するものである。センター教員各位のいっそうのご活躍を期待したい。

2014 年 6 月

センター長　岡　洋樹

2013年度行事表

期　　日	行　　事
2013年　4月22日	センター運営会議
2013年　5月27日	センター運営会議
2013年　6月24日	センター運営会議
2013年　7月29日	センター運営会議
2013年　9月30日	センター運営会議
2013年10月23日	総長と部局との意見交換
2013年10月26日	伊達市噴火湾文化研究所・東北大学東北アジア研究センター第５回学術交流連携講演会「地域を見つめる多様な視点「清代モンゴルの世界」と「有珠山噴火の活動予測」」
2013年10月28日	センター運営会議
2013年11月11日	第６回学生研究交流会
2013年11月25日	センター運営会議
2013年12月　7日	センター公開講演会「世界遺産からのメッセージ―平泉・石見銀山の歴史力」
2013年12月24日	センター運営会議
2014年　1月27日	センター運営会議
2014年　2月15日	センターシンポジウム「ヴェールの向こう側から―北朝鮮民衆の文化人類学的分析」
2014年　2月24日	センター運営会議
2014年　3月24日	センター運営会議
2014年　3月28日	センター研究成果報告会

総合的自己評価

⑴ 理念と目的

本センターは、東北アジアという地域理解の枠組みを確立し、普及させることを第一の目的としている。東北アジア研究センターが設立された 1996 年以後の 17 年間は、まさに東北アジアが地域枠組みとして実質化していった時代だったと言えよう。中国の経済発展と日本・韓国などの結びつき、ロシア、モンゴルのアジア太平洋国家としての再定義と東アジアとの関係構築、そして中国とロシアを中心とする関係調整機構の出現など、今やロシアのシベリア・極東、中国、朝鮮半島、モンゴル及び日本から成る東北アジアは、冷戦時代とは比較にならないほど密接な関係をもっている。北アジア、東アジアといった既存の地域概念では、現今の情況を捉えることができなくなっているのである。しかしわが国では、未だに日中・日露・日韓などといった二国間関係の枠組みでの理解を克服できておらず、日本が東北アジアの一部としてあることも充分に認識されているとは言えないのが実情である。東北アジア地域概念の確立は、わが国にとって急務であると言えるだろう。

本センターは、東北アジアの地域社会と課題を共有しながら研究を進めていく。2011 年 3 月の東日本大震災は、地域からの要請が、最も鋭い形で学術研究に突きつけられた事例だったと言えるだろう。しかし大規模な災害ほどではなくても、地域社会の学術研究への要請は、すでにさまざまな形で提示されている。そのような地域の要請は、地域社会との恒常的な絆の中ではじめて感知することができる。地域研究のニーズを、学術的動機だけではなく、地域社会の中に求めることが重要である。もはや「先進国」による一方的な異文化研究の時代ではないのである。

地域研究に求められるのは、実践性である。経済発展の中で、東北アジアは今急激な変化を経験している。変化への戸惑いは、ときに深刻な亀裂を社会に走らせる。開発に伴う環境問題、民族の対立、グローバル化とそれへの反発、領土問題などなど、亀裂の露頭はじつに様々な形で現れる。そのような課題を、東北アジアの枠組みにおいて共有することが重要である。一方で東北アジア諸国・地方は、関係緊密化の中で、すでに多くのものを共有している。地域の文化的な価値をどのように評価し、何を残し、何を変えなければならないのか。正負の遺産にどのように向き合うのか。それが東北アジア地域研究に求められている課題である。

だから東北アジア研究センターは、地域の文化を、地域社会が遺すべき価値、すなわち文化遺産（Cultural heritage）として、地域の研究者、住民と共に考えていくことをめざす。地域を研究するということは、学術研究が地域の文化を操作・管理することではなく、地域住民が継承し、あるいは創出しようとする文化のあり方を、住民とともに考えていくことである。そのためには、文化的多様性に対する鋭敏な感性が不可欠である。グローバル化時代の今日、文化の多様性をどのように確保していくのかが、問われているのである。東北アジア研究センターのスタッフは、英語のみならず、中国語・

ロシア語・韓国語・モンゴル語など、地域の多様な文化を支える言語を駆使して、地域とともに学術研究を実践していく。

地域研究への要請は、けっして地域住民の社会・文化の領域にとどまらない。地域の山河も、そこに住む人々が生を営む、人間的な意味づけを与えられた「環境」としてある。だから「自然環境」の研究も、地域研究の対象にほかならない。地域研究において学際性が要求されるのは、学問が細分化されているからではなく、地域「環境」の多様性とそれに与えられた意味の包括性に起因するのである。

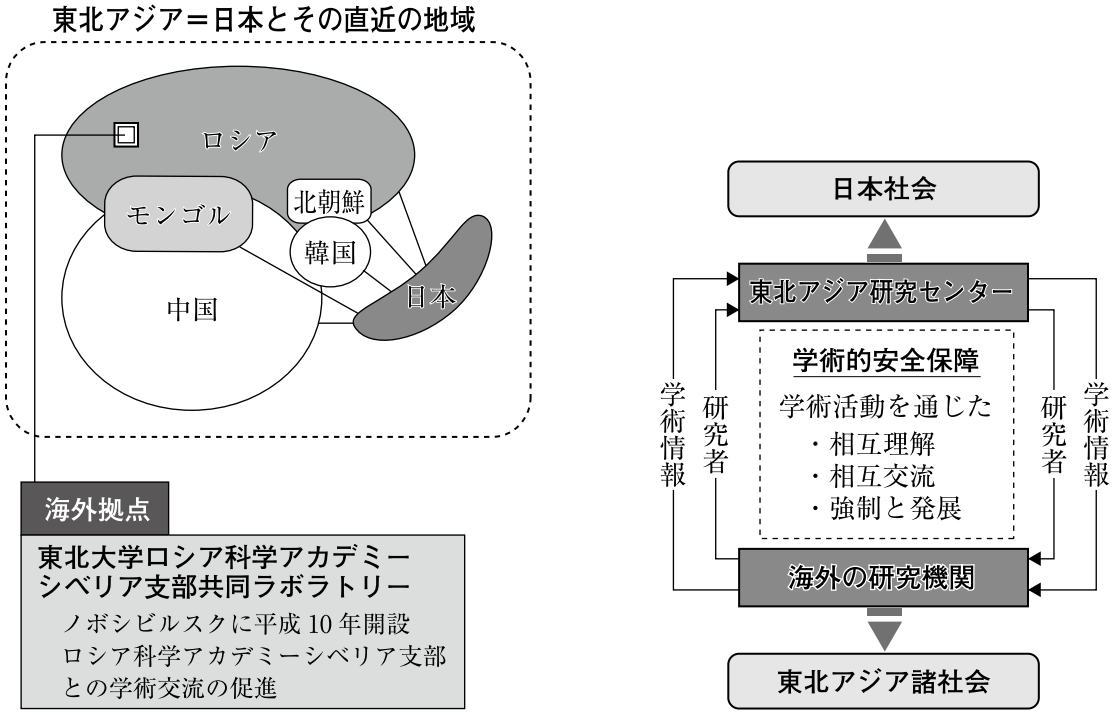
東北アジア研究センターは、文系・理系のさまざまな研究分野の連携によって、地域を見つめる多様な視座を確保することをめざす。我々は、高度に専門化し、分厚い蓄積をもつ諸学の成果を有している。地域研究の学際性とは、専門研究の到達点を安易に否定することではなく、その蓄積を地域理解のために動員し、活用することである。文系・理系の研究者の連携を確保し、諸学がそれぞれの分野で東北アジアを考えることで、地域のより多様な課題を視野に収めることが可能となる。

また地域研究者にとって、地域の研究者達の研究成果と向き合いことなくして、研究は成り立たない。我々が彼等を研究するように、彼等も我々を研究しているのである。我々には、東北アジアの研究者コミュニティーの一員として、そのような双方向性をもった東北アジア地域研究を進めていくことが求められている。このような東北アジア研究センターのポリシーは、「門戸開放」「実学尊重」、そして「研究第一主義」を校是とする東北大学の精神を体現するものと考えている。地域研究は、まさにそのような学知としてある。

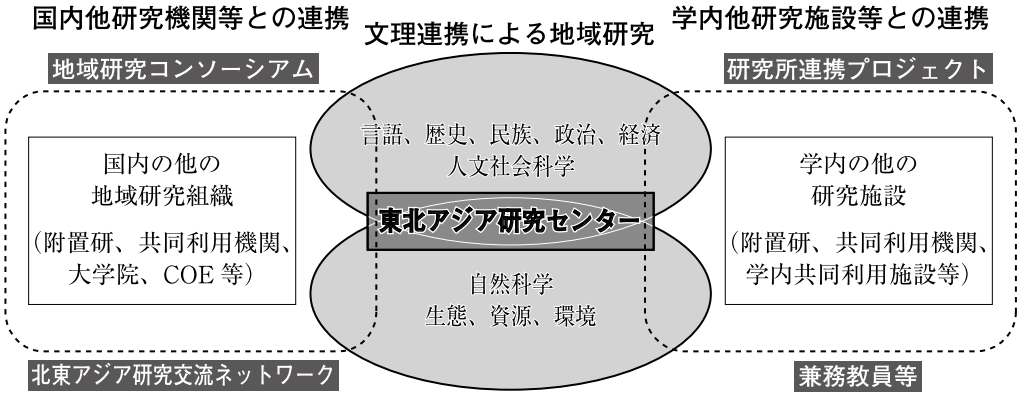
我々は、このような考えに立って、東北アジアという地域の理解を紡ぎ出したいと考えている。

⑵ 概念図

〔東北アジア研究センターの地域研究理念〕

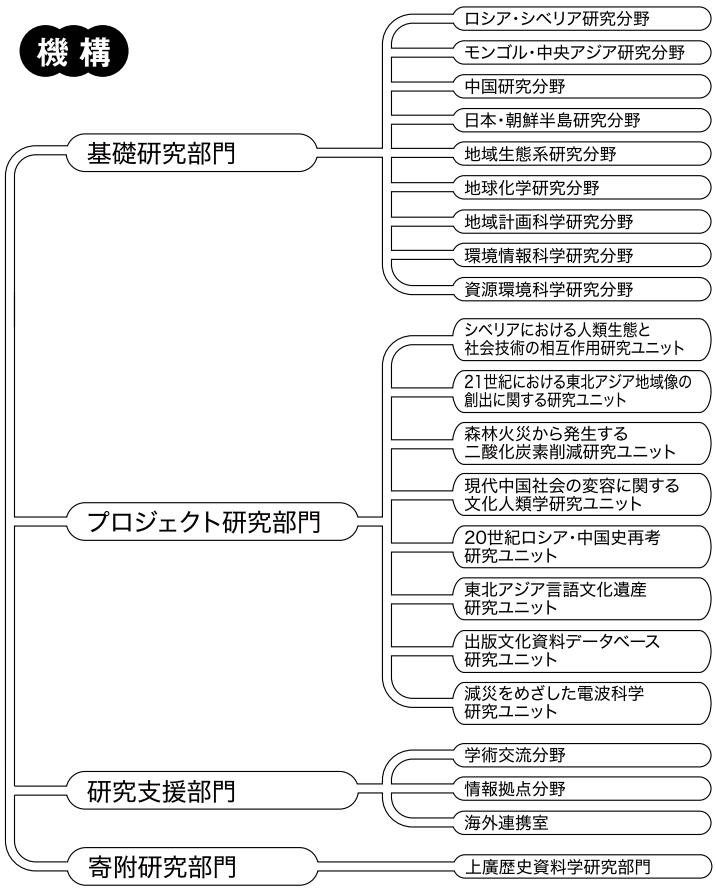


〔東北アジア研究センターの研究戦略〕



⑶ 組織運営活動

文系・理系の研究者の連携による東北アジア地域研究を目的とする本センターでは、文理それぞれの研究・教育文化を十全に活かしながら、効果的な研究遂行環境を整備することが極めて重要である。現在の組織体制は、平成 20 年度に実施した組織改編に基づいている。以下、本年度のセンターの組織運営について報告を行う。



研究環境

東日本大震災にともなう川北合同研究棟の改修工事のため、東北アジア研究センターは今年度前半は引き続きプレハブでの業務を余儀なくされた。工事は当初予定より遅れたが、平成 25 年 8 月にようやく竣工し、9 月いっぱいかけて本センターは合同研究棟に戻った。これにより震災前の環境がようやく回復した。また合同棟南側に新設された倉庫の一部も使用できるようになり、物品の置き場をある程度確保できた。

全国的組織協力

本センターは、全国附置研究所・センター長会議第 3 部会に所属している。平成 24（2012）年度は第 3 部会（文系）部会長を務め、25（2013）年度には監事を務めている。

共同利用・共同研究拠点認定については、これまでのところ実現をみていないが、昨年度活動報告で総括したように、実質的な共同利用的活動は進めているところである。

組織構成面では、専任スタッフは基礎研究部門に所属する一方で、プロジェクト研究部門においてプロジェクト・ユニットを立ち上げ、時限的な研究を実施している。プロジェクト・ユニットはセンター専任教員が基礎研究部門の分野を越えて設置し、外部資金を運用しながら、外部研究者の参加による共同研究を実施する組織的母体となっている。後述するように、平成 25 年度には 8 件のプロジェクト・ユニットが活動し、合計

10 件の共同研究が実施されている。共同研究に参加している外部研究者は、学内 8 人、学外 47 人となっており、実質的に全国規模の研究協力態勢として機能している。

プロジェクト研究部門の特色は、一つには学外研究者の協力を確保するための組織的枠組みとして機能する一方で、スタッフの本来の専門分野のディスシプリンを越えた学際的でフレキシブルな組織編成を可能とする点にある。ユニットの活動に対しては定常的な外部評価を行うこととしているほか、年度末に開催している「東北アジア研究センター研究成果発表会」で研究の進展状況を公開している。外部資金の調達という点でも科研費などの受け皿として貢献している。

またユニット等が中心となって、内外の研究機関との連携・協力も進められている。たとえば研究ユニット「21 世紀東北アジア地域像の構築に関する研究ユニット」では、東北アジア（北東アジア）に関わる研究を行っている富山大学極東地域研究センターや島根県立大学北東アジア地域研究センターと部局間学術交流協定を締結し、科研費基盤研究 (A) による共同研究を運営している。また「シベリアにおける人類生態と社会技術の相互作用研究ユニット」は、文理連携の態勢で、ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学北方民族問題研究所との部局間協定に基づく研究活動を展開している。これらの例からもわかるように、各ユニットは国内ばかりでなく、海外との連携にも効果的な媒体として機能しているのである。

上廣歴史資料学研究部門

平成 24 年 4 月に、上廣倫理財団の寄附により設置された上廣歴史資料学研究部門は、平川新教授（東北大学災害科学国際研究所）を兼務教授とし、准教授 1 名、助教 2 名（平成 25 年度に 1 名増員）の態勢で活動を続けている。同部門は、災害科学国際研究所・大学院文学研究科などとの協力により、歴史資料保全活動をおこなっており、民間に保存されている資料の所在把握や、災害時等のレスキュー活動、地域社会に出向いての講演・啓蒙活動を展開している。これらを通じて、平川教授が確立した「宮城方式」と言われる歴史資料保全活動は大きな広がりを見せているところである。同部門が展開する特色ある活動として、昨年度はドイツ・ハイデルベルグ大学における「古文書講座」の開催が上げられる。日本の文化の研究は、世界的な広がりをもつ研究領域であり、世界の研究者・学生を対象とした実践的な講座の開催は、たいへんな好評をもって迎えられた。また平成 25 年度には、同部門の荒武賢一朗准教授が、東北大学ロシア交流推進室が実施したロシア・ノボシビルスク国立大学での「日本アジア講座」の講師をつとめ、好評であった。

教職員人事

教授、准教授の選考は、センター長を委員長とする選考委員会を設置して行い、教授・

准教授で構成される運営会議に候補者を提案し、可否を議決している。また助教・助手については、分野教授からの推薦に基づいてセンター長が運営会議に提案して可否を議決している。いずれも公募制を原則としており、人事選考過程について外部からの開示請求があった場合にも対応できるよう、透明性の確保に心がけている。

上廣歴史資料学研究部門の教員選考に関しては、同運営委員会が母体となって選考を行い、運営委員会で議決している。

本センターには、教授・准教授・助教が配置されている。このうち助教は、ロシア・シベリア研究分野、地球化学研究分野、資源環境科学研究分野に 4 名が配置されているが、この外に研究支援部門に助教 1 名を配置し、海外からの客員教員や留学生を対象とした支援業務に当たらせている。また、これとは別に上廣歴史資料学研究部門に助教 2 名を任用している。

人事採用面では男女共同参画体制実現にむけての取組に引き続き努力している。教授・准教授の選考委員会委員長であるセンター長は、応募者の男女のうち、研究業績が対等であれば女性を優先的に候補とすることを心がけている。また助教人事についても、推薦を行う担当教授に対して、応募者のうち研究業績が同等であれば、女性を優先的に候補とするよう要請している。

本センターでは、常時 2 名の外国人客員研究員（客員教授・客員准教授）を招聘し、国際的レベルの研究水準の確保、国際的連携態勢の構築に努めている。本年度は、3 名を招聘した。

本センターでは、スタッフの研究活動や外国人研究員招聘、留学生への連絡業務、広報・アウトリーチ活動などの実務支援のために、研究支援部門を置き、教員 1 名（兼務）、助教 1 名を配置しているほか、その下にコラボレーション・オフィスを設置している。これは、当初文系諸部局との連携による人文・社会科学研究振興を目的として設置されたもので、現在も文系七部局からなる運営委員会で運用しているものである。平成 25 年度は、職員 1 名、派遣職員 1 名の態勢に加えて、ホームページ等の多言語による発信のために外国人職員 1 名を増員した。研究支援部門の設置により、センター内での英語・ロシア語・韓国語などによる支援態勢が整えられており、中国語・モンゴル語など教員スタッフの語学能力を活かした業務支援を合わせることにより、英語および東北アジア諸言語による運営が可能となっている。

国内の研究教育機関との交流・連携

センターでは、国内の研究教育機関と部局間学術協力協定を締結し、さまざまな企画や、共同研究を実施している。現在のところ、伊達市噴火湾文化研究所（2006 年 2 月）、北海道立北方民族博物館（2008 年 9 月）、富山大学極東地域研究センター（2010 年 5 月）、

島根県立大学北東アジア地域研究センター（2010 年 6 月）、宮城件栗原市（2011 年 8 月）と学術交流協定を締結し、研究協力を行っている。

またセンターは、全国的な研究コンソーシアムにも積極的に参加している。すなわち地域研究コンソーシアム（JCAS）では、2004 年の設立以来、幹事組織に名を列ねている。本年度も、センター長が理事会メンバーに、教員 2 名がコンソーシアム運営委員となっている。また、北東アジア研究交流ネットワーク（NEASE-Net）でも幹事組織として、副代表幹事を出しているほか、ネットワーク広報委員会の役割を果たし、ニューズレター、年報の編集刊行を行っている。

また本センターは、全国附置研・センター長会議第 3 部会に参加しており、2012 年度は部会長校をつとめたが、本年度は監事を務めている。

また本センターの教員は、それぞれの分野での学会でも重要な役割を果たしている。教員が理事・評議員などの役職についている学会は、日本文化人類学会、内陸アジア史学会、日本モンゴル学会、日本道教学会、東方学会、環境経済政策学会、日本地質学会、日本地球惑星科学連合、日本都市計画学会、IEEE Geoscience and Remote Sensing Society など、東北アジアや個別分野に関わる学会に及んでいる。

国際的交流・連携

本学は、中期計画において「国際的ネットワークの構築による国際共同研究の推進」をうたい（本学中期計画「2. 研究に関する目標を達成するための措置」の③―1）、また「里見ビジョン」においても、重点戦略⑩として「国際社会との連携強化」を挙げている。

本センターは、国際的な研究協力のネットワークの基盤として、東北アジア諸国（中国・ロシア・モンゴル・韓国など）との関係構築を特に重視している。これらの国々は、東北アジア地域に関するあらゆる分野の研究に著しい進展が見られ、また研究対象たる諸国・地方の研究者との協力を重視する本センターの活動において、主たるターゲットとなっている。本センターは、英語のような国際言語のみならず、東北アジア諸国のロシア語・中国語・モンゴル語・韓国語などに通じた研究者を擁しており、これは研究協力において大きな力となっている。

これまでロシア科学アカデミー・シベリア支部（1992 年 8 月）及びノボシビルスク国立大学（2003 年 7 月）と締結した大学間学術交流協定の世話部局となり、ロシアとの交流に尽力しているが、さらに同支部スカチョフ森林研究所、人文学・北方民族問題研究所、ロシア科学アカデミー極東支部経済研究所、ロシア連邦ユゴラ情報技術研究所（2002 年 10 月）とも部局間学術交流協定を締結している。客員教授の招聘数もロシアからの招聘が最も多く、1996 年のセンター設置以来 33 人（34%）を占めている。本センターはロシア科学アカデミー・シベリア支部との間で共同ラボを設置しており、ノボシビルスクと本センター内にスペースを確保している。この共同ラボは、これまで本セ

ンターが実施したロシアとの交流に活用されている。東北大学は、2010 年にノボシビルスクに代表事務所を設置している。

全学に設置されているロシア交流推進室には、センターの教員 5 名が委員となっており、全学のロシアとの交流にも貢献している。本センターは、2008 年から 12 年まで、ノボシビルスク国立大学人文学部との間の覚書に基づき、「日本アジア講座」を開催してきたが、2013 年度はロシア交流推進室の企画として実施し、本センターの荒武賢一朗准教授が講師として派遣されている。また同室の企画としてロシアの日本語教員を招いたワークショップの開催を担当している。

中国との交流では、中国吉林大学との大学間協定の世話部局（2011 年 3 月）となっているほか、広東省民族研究所(2001 年 6 月)、内蒙古師範大学蒙古学学院(2008 年 4 月)、内蒙古大学蒙古学学院（2008 年 9 月)、内蒙古師範大学旅游学院（2011 年 9 月）と部局間協定を締結している。2013 年度には、中国中央民族大学蒙古語言文学系との間で部局間協定を締結した。中国からの客員教授招聘は、ロシアに次ぐ 29 名（30%）である。

モンゴルに関しては、モンゴル科学アカデミー、モンゴル科学技術大学との大学間学術交流協定の世話部局である。いずれも教員による研究交流が続けられているが、モンゴル科学アカデミーとは、ほぼ隔年で国際シンポジウムを開催するなどの蓄積がある。モンゴルからの客員教授招聘は 10 名（10%）となっている。

韓国では、高麗大学校中国学研究所 (2008 年 4 月)、同日本研究センター (2008 年 4 月) との間で部局間協定を有し、客員教授の招聘実績は 9 名である。高麗大学とは研究者の短期招聘や研究集会への参加などの実績があり、また韓国のそのほかの研究教育機関の研究者との研究協力も行われている。

これら東北アジア諸国からの客員招聘は、全体の 84%に達しており、これらの協定を用いて、センターの教員と現地研究者との研究交流が行われている。

基礎研究部門

基礎研究部門は 9 分野からなり、文系については研究対象とする地域別に「ロシア・シベリア」「モンゴル・中央アジア」「中国」「日本・朝鮮半島」の 4 分野、理系についてはディスシプリン・ベースに「地域生態系」「地球化学」「地域計画科学」「環境情報科学」「資源環境科学」の 5 分野をもって構成している。かかる編成をとるのは、文系では専門分野・使用言語などの研究技術・方法が地域に即して共有されているのに対して、理系諸分野はむしろ研究ディスシプリンに即した研究室態勢を維持することがより効果的との判断によるものである。

センターの専任教員は、基礎研究部門のいずれかの分野に所属して、各人の専門分野に関する研究を行う一方で、センターの他分野教員や学内外の研究者と共同研究を組織して日常の研究活動を展開している。また、外部資金による大型プロジェクトを実施す

る場合には、プロジェクト研究ユニットを組織し、内外の研究者・研究機関と組織的に連携した共同研究による研究活動を展開している。

基礎研究部門の在り方については、つとに外部評価においても話題となっている。とくに、文系と理系で組織方法が異なること、専門分野別になっていることと学際研究の遂行との関係が指摘されており、検討課題となっている。しかし、東北アジア研究の安定的な遂行と、研究課題の多様性・国際性に対応する機動的な研究展開の要請から、基礎研究部門において安定性を、プロジェクト部門において機動性を確保するというのが、かかる組織構造の趣旨である。専門分野の研究と学際的・国際的研究協力の成果を統合することによる東北アジア地域理解の獲得という要請に鑑みれば、このような二重の組織編成は不可欠と思われる。実際、平成 25 年度も 8 つのプロジェクト研究ユニットが活動し、多くが何らかの意味で専門分野・対象領域に対して越境的な共同研究を実施していることから、この組織編成が機能していることが知られる。

学内他部局の研究者との研究協力・連携のために、兼務教員を設けている。平成 25 年度は、文学研究科 3 名、教育学研究科 1 名、理学研究科 1 名、災害科学国際研究所 2 名（内 1 名は寄附部門）が兼務教員となっており、専任教員と連携した研究活動をおこなっている。所属分野・ユニット別に見ると、ロシア・シベリア研究分野に文学研究科から教授 1 名、中国研究分野に教育学研究科から准教授 1 名、地球化学研究分野に理学研究科から教授 1 名、地域計画科学研究分野に災害科学国際研究所から教授 1 名がおり、ユニットでは「シベリアにおける人類生態と社会技術の相互作用研究ユニット」に文学研究科から准教授 1 名、「現代中国社会の変容に関する文化人類学研究ユニット」に文学研究科から准教授 1 名が置かれている。また上廣歴史資料学研究部門（寄附部門）には、災害科学国際研究所から教授 1 名が兼務となっている。

個々の分野の専任教員の研究活動の詳細は、「教員の研究活動」の項目で詳述されるが、その概略をまとめると、以下のごとくである。

「ロシア・シベリア研究分野」は、ロシア近現代史、社会人類学、ロシア経済史を専門とする教員が所属し、スターリン時代のソ連の対アジア政策や、帝政期の木綿生産などの経済史的研究を行う一方、サハなどシベリアの牧畜民を対象とした人類学的研究を行っている。「モンゴル・中央アジア研究分野」では、モンゴル言語学、モンゴル史、ロシア言語学を専門とする研究者が所属し、清代モンゴルの辞書資料の索引作成や、清朝のモンゴル統治政策の研究、あるいは中央アジアにおけるロシア語の変容に関する研究を行っている。「中国研究分野」には中国文学、文化人類学、環境研究をテーマとする研究者が所属し、清代の宮廷演劇や古典文献に関する研究や、中国南部の宗族に関する研究、中国における環境問題の研究を行っている。「日本・朝鮮半島研究分野」では、環境をめぐる国際的な課題に関わる研究を行っている。環境情報科学研究分野では、ノア・データによる環境観測を行い、資源情報科学研究分野は、電磁波応用工学分野にお

いて、地中レーダやリモートセンシング技術を駆使した災害救助、地雷探知、地下水、遺跡探査などの応用研究を国際的な態勢で進めている。

各基礎部門の研究者は、プロジェクト研究ユニットを組織し、分野横断的・国際的な研究プロジェクトを展開している。平成 25 年度には 8 ユニットが活動を展開している。これらのユニットは、それぞれ既存の研究領域を越えた学際的、越境的研究課題を設定したり、課題を国際的な研究協力の下で研究する態勢を整え、研究の学際化・国際化の場として機能している。ユニットの存続期間は研究実施期間であり、研究終了によって廃止となる流動的組織である。

このように、センターの教員は、ユニットを組織することによって、あるいは分野横断的な学際研究、あるいは国外の研究者を取り込んだ国際的な研究を行っており、かかる学際的・国際的研究を可能とする組織として、プロジェクト研究部門は有効に機能している。

また、本センターの研究活動のもう一つの特色として、社会貢献的研究を挙げることができる。これは、主として地域がもつ文化的遺産や、それをめぐる課題に関わる研究活動を通じて、地域社会に直接貢献しうる研究展開を企図するものである。

このように、本センターでは、安定的な専門研究を確保しつつ、プロジェクト部門における学際的・国際的研究プロジェクトの展開を行うとともに、地域の研究に求められる社会貢献的要請を研究課題としたプロジェクトを実施している。

また学内研究所群の研究協力として実施されている研究所連携プロジェクトでも、「スマートエイジングを支える社会システムテクノロジ」研究を進めている。

センターでは、専任教員以外に産学官連携研究員（3 名）、専門研究員（7 名）、教育研究支援者（6 名）を設置しているほか、日本学術振興会特別研究員（7 名）、客員研究支援者（2 名）、リサーチアシスタント（3 名）、客員研究員（1 名）を置き、若手・外部の研究者に研究の場を提供している。

上廣歴史資料学研究部門（寄附研究部門）

歴史研究の基本対象となる古文書等歴史資料の多くは個人宅で所蔵管理されているため、災害や諸般の事情によって廃棄・散逸・消滅の危機に瀕している。そこで、この課題（歴史資料の保全）に取り組んできた東北アジア研究センター平川研究室の歴史資料保存のノウハウ確立と、その普及を強力に支援し、さらにこれら資料の研究から、「人々の生き方」に寄与する研究成果を広く社会に普及させることを目的として 2012 年 4 月本部門が 5 年間の時限組織として創設された。

本部門は教授（兼務）1、准教授（専任）、助教（専任）1 の定員で発足し、以下の活動を開始したが、平成 25 年度より、上廣倫理財団のご好意によって寄附金額が増額され、さらに助教 1 を採用した。

＊東日本大震災にかかわる被災資料の保全活動

東日本大震災の津波被災地では大量の歴史資料が泥まみれになったが、これらのクリーニング作業と写真撮影による記録保全をはかる。

＊被災地以外での資料保全活動

被災資料の保全活動と並行しながら、被災地以外の歴史資料の保全活動も適宜実施する。

＊資料データの活用と保存

歴史資料の写真データは、プリント版・DVD 版一式を所蔵者および地元自治体の教育委員会、東北歴史博物館などに寄贈し、地元郷土史研究での活用等をはかる。

＊歴史研究成果の発信

保全された資料をもとに歴史研究を進め、歴史資料保存セミナーや歴史フォーラムを適宜開催して、講座スタッフや共同研究者等による歴史文化研究の成果を社会に発信する。

プロジェクト研究部門

各基礎部門の研究者は、プロジェクト研究ユニットを組織し、分野横断的・国際的な研究プロジェクトを展開している。「20 世紀ロシア・中国史再考研究ユニット」は、ロシア近現代史の寺山恭輔教授と中国近現代史の上野稔弘准教授らによって組織されたもので、20 世紀前半の中ソの歴史を、歴史研究における西洋史･東洋史の区分を越え、アーカイヴ資料を用いて研究しようとするものである。「シベリアにおける人類生態と社会技術の相互作用研究ユニット」は、シベリアを対象に、社会人類学の高倉浩樹教授を中心に、環境研究の石井敦准教授、宗教学の滝澤克彦教育研究支援者、土木計画学の奥村誠教授（兼務）、神話学の山田仁史准教授（兼務）のメンバーから成る学際的研究プロジェクトである。「減災をめざした電波科学研究ユニット」では、電磁波応用工学の佐藤源之教授を中心として、東日本大震災被災地の高台移転に際する遺跡探査の効率化を目指すため、奈良文化財研究所などとの協力による文理連携的研究を行っている。「出版文化資料データベース研究ユニット」は、磯部彰教授を代表として、これまで中国・韓国の研究者との連携のもとに実施してきた特定領域研究「東アジア出版文化の研究」などの成果として資料のデータベース構築を行っている。「21 世紀東北アジア地域像の構築に関する研究ユニット」で、岡洋樹教授を代表として、富山大学・島根県立大学との学術交流協定に基づき、ロシア、中国、モンゴルなどの研究機関の協力を得つつ、歴史学･経済学などの連携した研究プロジェクトである。「東北アジア言語文化遺産研究ユニット」では、栗林均教授が内外モンゴルの研究者・研究機関との協力でモンゴル語文献のデジタル化や索引作成を行っている。「東北アジアにおけるジオパークの可能性の研究ユニット」は、地質学の石渡明教授を中心に、歴史学・社会人類学・生態学の研究者が

加わって、ロシア、モンゴルとの協力による研究を目指している。瀬川昌久教授を中心とする「現代中国社会の変容に関する文化人類学研究ユニット」は、中国における宗族を対象とした文化人類学分野の研究プロジェクトで、学外研究者を組織した研究を行っている。

このように、センターの教員は、ユニットを組織することによって、あるいは分野横断的な学際研究、あるいは国外の研究者を取り込んだ国際的な研究を行っており、かかる学際的・国際的研究を可能とする組織として、プロジェクト研究部門は有効に機能している。

また、本センターの研究プロジェクトの特色として、社会貢献性を意識した研究が挙げられる。たとえば、上述の「減災をめざした電波科学研究ユニット」では、レーダ技術を遺跡の探査という文化遺産研究に応用すると同時に、高台移転という社会的課題への貢献を目指すもので、研究と社会貢献を直接結びつけている点に特色がある。この点でとくに顕著な活動を行っているのが、上廣歴史資料学研究部門である。この部門では、上廣倫理財団の寄附により、宮城県の地域社会に眠る歴史資料の発見・保全を行う歴史資料保全活動の展開のために設置されたもので、単なる資料の所在・内容のデータ収集のみならず、地域社会で開催するセミナーなどを通じて、住民の歴史資料への関心に応えるものである。歴史研究者が、民間の資料の継承に直接関わる歴史資料学の試みは、従来の歴史学の在り方に社会貢献性という観点から新たな方向性を示すものと言え、有意義である。また高倉浩樹教授を中心としたプロジェクト・ユニット「災害と地域文化遺産に関わる応用人文学研究ユニット」では、震災で被害を受けた東北地方の伝統的民俗芸能・祭礼・生業などの地域における継承発展に実践的に関与しようとするもので、同様の課題意識に立つものである。

一方で、これまでプロジェクト研究ユニットの目的の設定や、その運用に関して、資金援助を伴うセンターの制度である共同研究との差異が明確ではない、また継続あるいは更新するユニットの判断が曖昧であるとの反省から、プロジェクトユニットの評価に関する申し合わせを今年度改めて確認した。

(参考：「プロジェクト研究部門の運用方法に関する申し合わせ」抜粋)

「⑸ プロジェクトユニットの経費：プロジェクトユニットの経常的な研究経費は獲得した外部資金等で賄う．研究活動の組織化や情報発信などの目的のための対外的な活動にセンターの運営費交付金等を投入する場合には、それについて年度ごとの予算請求と決算報告を要するものとする。投入額は前年度までのユニットの名称を冠した対外的な活動実績，決算報告，外部評価結果等に基づき，執行会議の議を経てセンター長が決定する。」

今後、評価では申し合わせに挙げられた事項を推進する事業を重視し、また申し合わせに準拠した経費の使用が望ましいと考える。従って支出は、「外部資金でまかなうことができない使途」を重視することし、例えば：共同研究に参加していない研究者の招聘や外部資金の目的に包括されにくい会議開催費、研究集会費等は、目的に適合しており、またホームページ製作（外注）や共通的な図書（図書館所蔵が原則）も支出可とするが、データ購入費、PC 購入、通常の研究活動で必要なコピー経費はプロジェクト研究の経費として支出が好ましくないとの基準を設定した。

研究支援部門

研究支援部門には､客員研究員（客員教授･准教授）として招聘する国内教員 5 ポスト、外国人研究員 2 ポストからなる学術交流分野、協定組織であるロシア科学アカデミー・シベリア支部と相互設置した共同ラボの運営や、外国人客員研究員のサポートなどの国際的活動を支援する海外連携室（国際交流委員長兼務、助教 1 名配置）が設置されている。客員研究員は、必要に応じてセンターの各分野・ユニットが研究連携を創出するために活用するもので、センターの国際的研究活動にとって重要な意義を有している。そこでは、これまで欧米の研究者招聘の実績もあるが、大多数は東北アジア諸国の研究機関に所属する研究者であり、地域研究にとって不可欠な現地研究者との協力による双方向的な地域理解の創出に寄与しうる制度となっている。

海外連携室は、センターが外国研究機関や、外国人研究者と円滑に研究活動をおこなうための支援組織として活動している。特に、センターが招聘する外国人研究者の生活環境のサポートなども主要な業務としている。一方、ロシア科学アカデミー・シベリア支部との研究交流に関わる業務のほか、コラボレーション･オフィスとともに、センターが実施するさまざまな企画の運営に協力している。

コラボレーション・オフィス

平成21年4月から文系部局が行う人文社会系の研究活動支援のためにコラボレーション・オフィスを設置した。このオフィスは、東北大学の文系振興策の一環として文系七部局（文学研究科、経済学研究科、法学研究科、教育学研究科、国際文化研究科、東北アジア研究センター、教育情報学研究部・教育部）が組織する文系部局長協議会が運営するもので、協議会の下にコラボレーション・オフィス運営委員会が設置されている。オフィスには職員 1 名、派遣職員 1 名が勤務している。

コラボレーション・オフィスでは、東北アジア研究センター内部の業務支援のほか、法学研究科、文学研究科、国際文化研究科など文系他部局が企画運営する催し物への支援業務を行った。

東北アジア研究センター内部の業務としては、ニューズレターや学術刊行物、学術雑

誌『東北アジア研究』の編集・出版支援、公開講演会や東北アジア研究センターシンポジウムの開催支援などを行っている。

コラボレーション・オフィスの活動は、大学から高く評価されているとともに、次第に文系諸部局の認知を受けて具体的な業務依頼を受けるようになっており、部局横断的な研究支援組織としての実績を上げている。

またコラボレーション・オフィスは東北大学全学のアウトリーチ活動であるリベラルアーツサロンの企画・運営に、その中核として携わっている。

2013 年度は、東北アジア研究センターの情報発信の多言語化を図り、コラボレーション・オフィスに一名の外国人職員を雇用した。これにより、英語版ホームページの日本語同等の内容充実、ロシア語版・中国語版・韓国語版の根本的な更新を行う準備を進めた。年度末までに、各語版の翻訳はほぼ完了し、平成 26 年度前半期での公開を目指している。

またコラボレーション・オフィスは、東北アジア学術交流懇話会の業務支援も行っており、懇話会が主催・共催する公開講演会開催を支援した。

外部資金獲得

外部資金獲得のため、センター教員による研究資金への応募状況や、採択状況をセンター全体会議において周知すると共に、一定額以上の申請に対し、センターからインセンティブ資金を支援している。

平成 25 年度の科研費の獲得状況を見ると、申請件数 39 件で、本学規定による文系・理系教員比率調整後の申請率は 312％（全学平均 159.4％）である。これに対して採択数は 25 件で、採択数を対象教員数で除した採択率は 125％（全学平均 96.8％）、採択金額 1 億 75 万円となっている。申請率では未来科学技術共同研究センターに次ぐ全学 2 位、採択率で 6 位となっており、昨年度に引き続き高率を維持している。

これに科研費以外の外部資金を合わせると、1 億 9 千万強となり、教員一人当たりの外部資金獲得額は 9,584,433 円である。

共同研究の推進

本センターでは、共同利用・共同研究拠点としての機能を充実させるために、 外部組織の研究者を構成員に組み込んだセンター専任教員のイニシアティブに基づく所内共同研究を推進しており、一件あたりの年間最大助成総額は 30 万である。特に外部資金とのマッチングでの利用を奨励している。

また平成 21 年度より外部からの公募による共同研究制度を設け、次の三つの分野の研究を推進している。

⑷　東北アジア地域課題解決型研究：東北アジア地域が抱える課題を認識する研究者が、

当センターの設備・資料や教員の持つ学術を活用して、課題の解決方法を探るための研究

(B) フィールド適用型研究：自然・人文・社会科学などの学術的知識を持つ研究者が、東北アジア地域の実情に詳しい当センター教員と共同して、その適用フィールドを拡大するための研究

(C) 東北アジア学術深化型研究：東北アジア地域の自然・人間・社会をより深く理解するための研究

対象となる研究は、東北アジア地域の複数の国にまたがる課題、東北アジアとの比較地域研究、あるいは既存の学問研究分野の枠組みを越えた分野横断型とし、研究者の独創的な発想や優れた研究成果に基づき、当センターの設備・資料を利用して、あるいは当センター教員との共同研究として実施・展開する企画・提案を広く公募している。一件あたりの最大助成総額は 30 万。

2013 年度の場合、所内共同研究は 10 件採択された。共同研究の構成員の平均数は 7.7 人。この組織化によってセンター外の研究者の 54 名がセンター研究活動に参加したことになる。所内共同研究に関わった総人数は 77 名なので、外部研究者の割合は 70％となる。また関係した外部機関は 42 であり、一つの共同研究毎に関係した外部機関は 4.2 となる。

公募共同研究は 4 件が採択された。共同研究の構成員の平均数は 5.5 人であった。公募共同研究を通してセンターに関わった外部研究者数は 16 名だった。公募共同研究に関わった総人数は 22 名であり、外部研究者の割合は 73％となる。また関係した外部機関数は 13 であり、これを一共同研究単位で平均化すると 3.3 機関となった（以上、すべて延べ数)。

所内・公募共同研究双方を通して、70 名のセンター外研究者、55 の他機関と関わる形で共同研究をおこなったといえる。いずれの場合もセンター外部の研究者の割合は 70％強であり、共同研究を通して東北アジア研究の共同利用・共同拠点としての機能を発揮していると言える。

とはいえ、所内共同研究と公募共同研究を比べると、前者の平均構成員数がより多い。おそらくこれは所内共同研究の場合、別予算を加えた形で共同研究を組織化していることが多いことに起因すると思われる。外部研究者の割合が双方同程度であったが、公募型の構成員が少ないことを考えると、おそらく公募共同研究の予算に準じる形で共同研究が組織化されていると思われる。この点、今後は公募共同研究にあってもマッチングファンドを積極的に推進するのも一つの手かもしれない。とはいえ、公募共同研究の場合、研究事業の中味それ自体がセンター専任教員外から発案されていることを考慮すれば、センターの研究領域の拡張さらに拠点としての機能という点で重要な意味をもって

いることも事実である。これらの点を配慮しながら次年度以降の所内・公募共同研究の仕組みを考える必要があろう。

研究活動の発信・広報

本センターのスタッフや研究会・講演会・シンポジウムなどの開催情報は、随時ホームページ（http://www.cneas.tohoku.ac.jp/）上で公開している。

広報情報委員会は、「東北アジア研究センター・ニューズレター」を刊行している。平成 25 年度には、57、58、59、60 号が刊行された。最新刊のニューズレターは、センターホームページで公開している（http://www.cneas.tohoku.ac.jp/img/handbook/news_new.pdf)。またセンターが開催するセミナー、シンポジウム、公開講演会などの企画は、随時ホームページ上に掲載されている。

センターの研究成果発表の場として機関誌「東北アジア研究」を刊行している。本年度は、第 18 号を刊行し、論文 6 本、史料紹介 1 本、研究動向 1 本、書評 4 本を収録した。「東北アジア研究」掲載論文は、ネット上で閲覧することが可能になっている（http://www.cneas.tohoku.ac.jp/publication01.html)。

東北アジア研究センターが行う、東北アジア地域の学術機関および科学技術機関等との交流を助成し、その発展に寄与することを目的として、東北アジア学術交流懇話会を組織している。懇話会は、ニューズレター「うしとら」を刊行している。平成 25 年度には、57、58、59、60 号が刊行された。

外部資金

平成 25 年度の外部資金獲得状況は、以下の通りである。

科学研究費補助金

基盤 A	2 件	(14,600,000 円	間接 4,380,000 円)
基盤 B	5 件	(15,100,000 円	間接 4,530,000 円)
基盤 C	11 件	(12,500,000 円	間接 3,750,000 円)
挑戦的萌芽	3 件	(2,400,000 円	間接 720,000 円)
若手 B	4 件	(3,000,000 円	間接 900,000 円)
研究活動スタート支援	2 件	(1,800,000 円	間接 540,000 円)
特別研究員奨励費	7 件	(5,900,000 円)	
研究成果公開促進費	3 件	(8,100,000 円)	
	合計	63,400,000 円	間接 14,820,000 円

その他の外部資金

受託研究	5 件	(63,367,000 円)

受託事業	3 件	(3,453,500 円)
寄附金	4 件	(39,810,000 円)
	合計	106,630,500 円

平成 25 年度のセンターの研究資金の内、競争的資金は 170,030,500 円であり、経費総額 671,000,000 円の内 25.3% を占めている。昨年と比較して金額は増加し、割合はほぼ同じである。

⑷ 研究活動

研究の理念・目標実現のための研究推進企画・立案の組織的な取り組みとして、本センターの目標とする学際的・総合的研究を推進するために、総務担当副センター長のほかに研究戦略担当の副センター長を置き、同副センター長が研究推進委員会と国際交流委員会の委員長を兼務して、国の内外に目配りをした研究を推進する態勢をとっている。また将来計画委員会などにおいて将来的な研究展開のあり方に関する検討を行っている。

センターの研究活動は、スタッフがそれぞれの専門分野で個別に実施している研究と、研究グループを組織して行う共同研究、プロジェクト・ユニットとがある。特に後者では、成果・進捗状況報告の場として年一回の発表会を実施している。プロジェクト・ユニットの活動は、すべてが十分な研究資金獲得に成功しているわけではないものの、それぞれ全国的・国際的な研究協力態勢の構築を急速に進めており、論文等の形で成果が現れている。

研究推進委員会は、これらセンター教員・研究員等の研究を相互に理解し、関連情報を交換するために、毎月 1 回 1 人ずつ（持ち時間 20 分）、センター全体会議（構成員は教授・准教授・助教・助手・教育研究支援者）後に研究紹介を行っている。

〔東北アジア地域の全体に関わる研究〕

センターでは、例年春に東北アジア研究センター・シンポジウムを実施し、東北アジアの全体に関わるようなテーマで議論を行ってきた。これは、平成 14 年度から 18 年度まで実施した共同研究「東北アジア世界の形成と地域構造」（研究代表山田勝芳教授）の枠で企画した一連のシンポジウムを引き継いだものである。この共同研究では、以下のシンポジウムを開催した。

平成 13 年度「東北アジア地域論の可能性：歴史学・言語学・人類学・政治経済学の視座」
平成 14 年度「東北アジアにおける民族と政治」
平成 15 年度「『中国研究』の可能性と課題」
平成 16 年度「開国以前の日露関係」
平成 17 年度「地域協力から見えてくる地球温暖化」

平成 18 年度「内なる他者＝周辺民族の自己認識のなかの『中国』― モンゴルと華南の視座から」

共同研究終了後の平成 19 年度には、有志により次のシンポジウムが開催された。

平成 19 年度「帝国の貿易 ― 18 ～ 19 世紀ユーラシアの流通とキャフタ」

平成 20 年度からは、新たに設置された公開講演会・シンポジウム企画委員会がシンポジウム企画業務を継承し、以下のシンポジウムを開催している。

平成 20 年度「ノマド化する宗教　浮遊する共同性　現代東北アジアにおける『救い』の位相」
平成 21 年度「歴史の再定義　旧ソ連圏アジア諸国における歴史認識と学術・教育」
平成 22 年度「歴史遺産を未来へ」
平成 23 年度「聖典とチベット　仏のことばを求めて」
平成 24 年度「民俗芸能と祭礼からみた地域復興 ― 東日本大震災にともなう被災した無形の民族文化財調査から」
平成 25 年度「ヴェールの向こう側から ― 北朝鮮民衆の文化人類学的分析」

これらのシンポジウムは、いずれも歴史学（東洋史・西洋史・日本史）、文化人類学、宗教学、民俗学、環境研究などの複数の学問領域や複数の国・民族にまたがる問題を、それぞれの分野のスタッフと国内外の研究者の講演･報告を通じて議論したものであり、分野横断的研究関心の創出と東北アジア地域概念の構築に大きく寄与するものと考えている。平成 23 年度のシンポジウム「聖典とチベット　仏のことばを求めて」は初めて大学院文学研究科の後援で開催されたものである。平成 24 年度のシンポジウム「民俗芸能と祭礼からみた地域復興―東日本大震災にともなう被災した無形の民族文化財調査から」は、東日本大震災によって被災した地域の無形文化財の現状調査プロジェクトにかかわるものであり、震災復興を意識した企画となった。これは大学院文学研究科に加えて東北学院大学の共催を得て開催された。また､平成 25 年度のシンポジウム「ヴェールの向こう側から ― 北朝鮮民衆の文化人類学的分析」では脱北者への聞き取りやその手記などをもとに、ヴェールから垣間見える北朝鮮民衆の懸命に生きる姿を通して彼らを取り巻く社会・経済的環境や人権的状況について可能なかぎり客観的な理解を目指した。これまでのシンポジウムの成果は論文集として刊行されており、平成 25 年度シンポジウムの成果についても本年 12 月には刊行の予定である。

〔ロシア・シベリア研究〕

ロシア・シベリア関係では、高倉浩樹教授（社会人類学）がこれまで継続して進めてきたシベリア人類学の領域における気候変動と地域住民の適応に関わる研究のとりまとめ作業に入っている。シベリアの温暖化とレナ川中流域住民の適応については、とりわけ生態水文学の知見から湿潤化の地域環境での進行が現地における春洪水の頻出化や夏洪水の発生に寄与し、春の融氷洪水は地域社会の生産活動に肯定的な影響を与える一方で融氷洪水後の融雪洪水や夏の降雨洪水は住民の生産活動に深刻な影響を与えており、降雨洪水というこれまでにない現象に対して地域住民の在来知による対応の限界と行政介入の必要性が見られることを明らかにした。これらの成果については 2013 年度末時点で英文および和文による論文が査読中である一方、一般紙においてその概要を報告している。このほか、2012 年度に出版した著書『極北の牧畜民サハ』に関しては出版助成プロジェクトに基づき英訳作業を進めており、2014 年度の刊行を予定している。

寺山恭輔教授（ソ連史）はロシア・ノヴォシビルスクで刊行された論文集にソ連の対モンゴルおよび対中国新疆政策に関する論文各一編を掲載した。これはプロジェクト研究部門『20 世紀ロシア・中国史再考』プロジェクトユニットの活動の一環として、2012 年度末にノヴォシビルスクで開催した日露歴史セミナーにおけるシンポジウムの成果である。また寺山教授は著書『スターリンと新疆：1931 － 1949』の執筆に注力し、年度末には脱稿して 2014 年度のセンター専書としての刊行を予定している。同書はまた上野稔弘准教授との共同研究「二十世紀の東北アジアをめぐる中国、ロシア史の課題と展望」の成果でもある。また今年度は、戦前期極東地域におけるソ連諜報機関の活動を描いた著書やスターリンの右腕として活躍した人物の評伝など、20 世紀前半のソ連史に関する著作についての書評を 5 編発表している。

塩谷昌史助教（ロシア経済史）は、センター専書として単著『ロシア綿業発展の契機 ― ロシア更紗とアジア商人』（知泉書館）を刊行し､同書の中でロシア経済史研究に「モノ研究」の手法を取り入れ、ロシア工業化におけるブハラ更紗の役割や中央アジアに対する憧れ、そして工業化以降はそれが見下しの対象へと変わる状況がヨーロッパとインド更紗およびインドとの関係と対応している点を明らかにすることで、西ヨーロッパを工業化先発国、ロシアを後発国と見なす従来の発展段階論に疑問を提示するとともに、ロシア綿業史における封建時代から近代への連続性を見いだすことで、唯物史観に基づく従来のロシア経済史研究の視座を揺るがし、ロシア革命の意義を相対化させる研究となっている。このほかに塩谷助教はサンクト・ペテルブルクとロシア系ユダヤ人に関する雑誌論文を発表している。

鹿野秀一准教授（生態学）は、日本学術振興会・二国間交流事業「西シベリア河口域生態系における食物網内の寄生虫類の摂食リンク」より、西シベリア河口域において、ロシア研究者グループとの共同研究を行った。本年度は、Plagiorchis 属の吸虫類を用

いて、巻き貝に寄生する吸虫類幼生の放出速度を、温度条件や光条件を変えて実験的に測定し、更に放出された吸虫類幼生の捕食者による摂食速度を実験的に求め、食物網における吸虫類幼生の量的な寄与を推定した。

工藤純一教授（環境情報学、リモートセンシング画像解析学）は全学組織であるロシア交流推進室に副室長として所属し、日露学長会議などの運営に関わった。日露両国首脳の合意により平成26年3月16日～22日に行われた両国政府とモスクワ大学による「モスクワ大学への日本人学生100名派遣」事業では本学が日露学長会議幹事校として団長の木島明博総長補佐（ロシア交流推進室長）以下5名の引率教員を出したが、その際工藤教授は副団長として実施の1ヶ月以上前からモスクワ大学内に常駐し、巨大組織である同大内の学問分野を問わぬ諸方面と折衝し、日本人学生とロシア人学生との数多くの交流行事の全てを設定して実現に漕ぎ着けた。

アジア地域の環境問題は国境によって分断されることはなく、近年黄砂、森林火災による煤煙など越境大気汚染の飛来に関する関心が高まっている。工藤純一教授は越境大気汚染をリモートセンシングデータの解析から追跡する手法に関して研究を行っている。工藤教授は本学「東北大学における設備整備に関するマスタープラン」に基づく整備計画により導入された「地球観測衛星受信解析システム」の運用責任者であるが、同システムは新規導入後に発生した東日本大震災により機能を停止した状態である。一刻も早い設備の復旧と、本来の目的である衛星データの学内外への提供サービスの開始が待たれる。

柳田賢二准教授（ロシア語学）は平成26年3月よりロシア交流推進室の室員となり、上出「モスクワ大学への日本人学生100名派遣」事業において木島総長補佐（ロシア交流推進室長)、工藤教授（同副室長)、高等教育開発推進センター准教授2名（同室員）とともに引率教員を務めた。

〔モンゴル・中央アジア研究〕

岡洋樹教授（東洋史学）は、プロジェクト研究ユニットで運営する科研費（基盤研究(A)）による共同研究「東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究」に関連して、中国内モンゴル自治区フフホト市で文献調査を行い、現地での資料の刊行状況及びアーカイヴの状況について情報を集めたほか、年度末に国際シンポジウムを開催し、共同研究分担者及び外部研究者との研究交流を行っている。清代モンゴル史に関しては、北京および仙台において、清朝統治下のモンゴルと清朝への服属前の北元末期のモンゴル史との連続性に着目した講演を行い、盟旗制度や王公制度といった「外藩」の制度的諸要件と清代に先立つ北元期モンゴルの支配・統治制度との間の継承関係の解明による清代モンゴル史理解への新たな視角提示の可能性を示すとともに、清初のモンゴル法制と北元末期モンゴル法制の連続性を主張した。また共同研究「近世・

近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究」の研究代表者として二回の研究会を主催している。このほか、北海道伊達市で開催された講演会では、現在進行中の『清代前期理藩院満蒙文題本』所収の満洲文文書に見える窃盗事案の分析を通じて、18 世紀末のモンゴルにおけるモンゴル人の生活について論じた。

栗林均教授（モンゴル語学）は斯欽巴図との共著で、字母順配列のモンゴル語辞書の嚆矢として清朝の後期に通行し、近代モンゴル語辞典の発展に大きな影響を与えたモンゴル語・漢語・満洲語の 3 言語対照辞典である『蒙文倒綱』（1851 年のサイシャンガによる序あり）の全項目についてモンゴル語と満洲語をローマ字転写し、漢語を翻刻し、モンゴル語のローマ字転写のアルファベット順に配列した著書『蒙文倒綱 ― モンゴル語ローマ字転写配列 ― 』（東北アジア研究センター叢書第 52 号）を刊行した。また栗林教授は、儒教の経典として名高い『孝経』について、『孝経 ― モンゴル語古訳本 ― 』（東北アジア研究センター報告第 12 号）を刊行した。この著書は、13 世紀の元朝の時代にモンゴル語に翻訳・開版されたと考えられる漢語とモンゴル語の対訳木版本「孝経」の影印と本文のローマ字転写、モンゴル語の全単語と語尾の索引である。これまでの影印本は全てモノクロ・縮小印刷であったが、本書においては初めて全 74 頁を中国故宮博物院図書館に所蔵される孤本である原本の体裁に合わせて原寸大のカラーで再現した。ここに記されるモンゴル語は、元朝の時代にまでさかのぼるウイグル式モンゴル文字の資料としてモンゴル語文献学、モンゴル語史の研究にとって貴重な資料である。

柳田賢二准教授（ロシア語学）は平成 25 年の 9 月と 12 月に平成 25 年度～平成 27 年度科研費補助金（基盤研究(C)）「現在の中央アジアにおけるリングァフランカとしてのロシア語の特徴と変容の研究」を使ってウズベキスタンを訪問し、3 名のロシア語単一言語話者にインタビューを行った。その結果を前年度までに得られた知見と併せ、現在なお同国に残っているのは「そもそもロシアへ行きたいと思わない者」か、さもなければ（ロシアに縁者がいないか、ロシアに文化的違和感を覚えるか、あるいは経済的理由などで)「行きたくても行けない者」に限られてしまったとの結論に至った。こうした人々はロシアを「いずれ帰るべき自分の国」とは考えていない。これはもはやロシア人のディアスポラ化であり、同国の朝鮮人の場合と同様に周辺諸民族との接触を通じてその生活文化と言語に変容が起こっても何の不思議もなく、実際、中央アジアロシア語で話者の母語を問わず現れる「時」の接続詞 когда が文頭から 2 番目の位置を取るという現象について、同国のロシア人もウズベク人のロシア語併用者もともに文頭に主格のみならず主格と同形の対格を置くことまで支持するが、副詞 сюда を置いた例文については強い拒否反応を示すという事実を知った。これは中央アジアロシア語に未知のシンタクス規則が発生していることを強く示唆する重要な事実である。また、柳田准教授は、若いサマルカンドのロシア人がその話し言葉において兄 / 弟、姉 / 妹を区別しており、さらに、同地のウズベク語とタジク語にまたがる広域方言語彙 Хай「はい」までもが同地のロシ

ア語方言に入り込み、「ロシアではそうは言わない」と指摘されねば気付かないほど当然の現地ロシア語方言語彙となっているという驚くべき事実を確認した。

佐藤源之教授（地下電磁計測、地中レーダー）はモンゴル並びにロシアの研究者と協力し、モンゴル北部からバイカル湖に至る地域での広域的な環境計測を衛星搭載合成開口レーダと、地表での地中レーダを利用した現場実験との組あわせで行うための準備を進めており、現地視察を行っている。

〔中国研究〕

瀬川昌久教授（文化人類学）は科研費（基盤研究(C)）「現代中国社会の変容とその研究視座の変遷―宗族を通した検証」ならびに東北アジア研究センター共同研究「現代中国社会の変容とその研究視座の変遷 ― 宗族を通した検証」の代表者として、国内居住の主要な宗族研究者の参加する研究会を 2 回実施した。またその成果をもとにした論文集の編纂に当たると同時に担当部分の論文執筆を行っており、2014 年度中の論文集刊行に向けて作業を進めている。またその成果の一端については、日本文化人類学会研究大会における分科会「宗族研究展望 ― 古典的研究対象の現在を再考する」の組織と口頭発表という形で公表している。これらの活動を通じて、宗族の存在様態を日常的・非組織的次元と儀礼的・組織的次元に分けて考える必要性、および宗族の持つ歴史的正統性生成ツールとしての性格を地域社会が広く共有・実践しており、人々の「親密圏」には限定されない宗族の潜在的機能の多様性や、そこに仮託される文化的意味の多様性を改めて確認するといった宗族研究の最先端的な議論が展開された。現代中国に見られる宗族再生の事例を分析することで、かつて近代社会の支配的パラダイムの下で、人類学者や社会学者から中国社会の前近代性･後進性の証とみなされた宗族の公共領域への「浸出」現象を再評価し、親族関係を「親密圏」の呪縛から解き放って再考することが、「儒教思想」の称揚や家族倫理の復権のような最近の中国における社会現象を理解する上でも重要であることが示された。このほか瀬川教授は現代中国における宗族の再生と文化資源化および客家エスニシティーの導体と文化資源化に関する論文各一編を発表している。

上野稔弘准教授（中国史）は科研費による海外文献調査を継続し、英国、米国、台湾の公文書館や研究機関等を訪問し、20 世紀前半の中国辺疆民族問題に関する一次史料の検索・収集を進めた。また寺山教授との共同研究プロジェクト「20 世紀ロシア・中国史再考ユニット」の活動の一環として 2013 年 12 月 26 日に研究会を開催し、学外の関連分野研究者を交えて研究報告および学術交流を行ったほか、「第二次大戦終結前後の新疆と中ソ関係」と題して研究報告を行い、『蒋介石日記』や南京政府文書、および英国外交史料といった一次史料に基づき、1944 年から 45 年にかけての新疆の混乱状況を、中国中央政府がソ連による「第二モンゴル化」の動きとして対処しようとしていた

ことを論じた。また近年の中国民主化・民族運動に関係する海外諸団体の動向について触れた著書についての書評を発表している。

磯部彰教授（中国文学､東アジア文化史）は特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」の研究終了を受けて、連台大戯（長編戯曲作品）及び節戯類の個別作品の研究論文をまとめ、平成 25 年度科研費研究成果公開促進費（学術図書）の補助金により『清朝宮廷演劇文化の研究』という書名で出版した。典籍文化形成の基本である漢籍や絵巻、絵画などの原本を広く公開する取り組みにおいて、磯部教授は、平成 25 年度科研費研究成果公開促進費データベース（研究成果データベース・重点・2 年間）「東アジア出版文化研究資料画像データベース」の補助金により、東アジア出版文化に関連する典籍文化財を資料画像の形で広く公開し、東アジア出版文化の研究拠点としての位置づけを着実なものとしつつある。公開データは宋版経（思渓版）から元刊『詩集伝』、明刊本『遠西奇器図説』､『納書楹曲譜』など多彩なジャンルを含む。また個人研究において、磯部教授は平成 25 年度科研費基盤研究(C)により、教派系宝巻、とりわけ西大乗教と北京・山東省方面の地域文化形成の関係についての研究を進め、民間故事と宗教文化との関係を明らかにしつつある。

栗林均教授は本センターのプロジェクト研究「東北アジア民族文字・言語情報処理研究ユニット」の活動の成果として『「土族語詞彙」蒙古文語索引』（東北アジア研究センター叢書第 51 号）を刊行した。「土族語」は中国青海省に居住する土族によって話されるモンゴル系の言語で、モングォル語とも呼ばれる。本書は、哈斯巴特尔（ハスバートル）等編『土族语词汇』（内蒙古人民出版社、1985 年）に収録されている土族語の語彙約 6 千項目の中からモンゴル語と共通の起源を有する単語を抽出して対応するモンゴル文語のローマ字転写形を見出し語として配列し、対応する土族語を音声記号表記で掲載したものであり、モンゴル文語のモンゴル文字表記および日本語訳を付してある。これは数百年にわたって独自の発展を遂げてきたと考えられる土族語においてモンゴル系の単語がどのように保持されあるいは変化を蒙ったのかについて、土族語の歴史とモンゴル系言語の歴史を研究する資料となる。

明日香寿川教授（環境エネルギー政策論）は広域大気汚染のモデル提唱や、それに基づく中国の大気汚染対策への提言などの活動を行っており、新聞、テレビ報道などに関わった。

〔日本・朝鮮半島研究〕

高倉浩樹教授（社会人類学）は東日本大震災によって被災した無形民俗文化財に対する災害人類学的研究としてここ数年実施してきた研究成果のとりまとめとして、日本文化人類学会研究大会および英国で開催された国際人類学民族学連合世界大会における分科会の組織と口頭発表を通じ、国内外の人類学者に向けて被災無形民族文化財に対する

人類学の取り組みを紹介し、その可能性を議論した。また成果の地元への還元として複数調査地での出張ワークショップを行い、その成果を書籍化し刊行した。

上廣歴史資料科学研究部門の荒武賢一朗准教授（日本近世・近代史）は、研究分担者として参画した科研費の成果として編著『近世・近代における日本列島の沿海社会と海運』を発刊し、日本海沿岸の歴史的特質を明らかにするという目的の下、19 世紀の社会的動向を詳細に論じた。また今年度からは出羽国飛島に関する歴史資料、および石見国宅野浦の海運資料についての調査に着手し、調査で得られた所見の一端を口頭発表にて紹介している。また宮城県の地域史研究に関する成果として「岩出山伊達家の武士と地域史」と題した論考を発表し、「本藩 ― 支藩」関係や武士と領民の関係論に重要な事例を提供した。さらには近世日本における大名家財政と商人による貸付金をテーマとした調査に着手している。

また同じく上廣歴史資料科学研究部門の高橋陽一助教（日本史、近世旅行史）はセンター叢書として『江戸時代の温泉と交流 ― 陸奥国柴田郡前川村佐藤仁右衛門家文書の世界―』を刊行し、佐藤家所蔵の古文書の解読と分析を通じて、江戸時代における温泉の社会状況を通時的に明らかにしている。また科研費課題「日本近世近代における観光地形成過程の歴史学的研究」研究作業の一環として、江戸時代で旅行者の来訪割合が高かった松島を対象に、中でも歌枕・霊場として中世から衆目を集めてきた雄島に焦点を絞って旅行者のミクロな行動について検証を行い、その結果を口頭発表した。そのほか江戸時代の仙台藩領地域社会研究として、一関市博物館所蔵の槻山家文書の調査及び分析を継続的に進めており、その成果を論文として発表している。

2013 年 10 月に着任した上廣歴史資料科学研究部門の友田昌宏助教（日本近代史、明治維新史）は、『日本歴史』誌上に「幕末期における草莽と諸藩 ― 大野倹次郎とその周辺 ― 」を発表し、幕末期に草莽として国事に奔走し、維新後は長野県令として令名を馳せた大野倹次郎を材にとり、幕末期における草莽と諸藩との関係を探りつつ、多くの草莽運動が挫折する中で彼が栄達を果たした背景に権力との巧妙な距離の取り方にあったことを指摘し、従来とは異なる草莽像の提示を試みている。

磯部彰教授（中国文学､東アジア文化史）は東アジア出版文化方面の研究で研究ユニットを設けた共同研究を進め、戦国大名家の典籍蒐集のバックグラウンドについて、武家政治の源流として平清盛の漢籍輸入から鎌倉幕府御家人の漢籍研究が平安朝の古代律令体制を基軸とした法治体制の中世的適用と再編成にあったことに着目し、とりわけ金沢北条氏とともに幕政に参与した大江長井氏の漢籍蒐集と紀伝道家としての役割に眼を向けつつある。現在、足利義満と対明外交、足利義政の文治を考慮しつつ、戦国大名家における宋版蒐集の意義、五山版や古活字本、朝鮮本を等しく所有する意味について分析し、典籍文化と武断政治との関係をめぐるプロジェクト発足の準備に入っている。

また朝鮮半島関係では金賢貞助教（民俗学、日韓比較社会・文化論）が科研費課題と

して韓国における植民地時代遺産としての建築物の保存と活用 ― 資源化 ― に対する実証的調査研究を進め、韓国において従来恥辱の対象とされた建築物などの有形の日本植民地遺産が、当該地域社会における「負の遺産」として「保存」「活用」の対象に位置づけられ、まちづくりの実践で積極的に資源化されつつある韓国の社会的実態の分析を通じて、地域社会における不幸な歴史的事件の否定性の超克の試みを検証しており、その成果は韓国でのシンポジウムにおけるパネル発表として公開している。

石渡明教授（地質学、鉱床学）は、科学研究費補助金・基盤研究(C)の研究課題「日本の古生代オフィオライトの多様性と沈み込み帯プロセス」よって、東北地方の北部北上帯の緑色岩ならびに砂岩、福島県の阿武隈帯の超苦鉄質岩、岐阜県美濃帯の緑色岩の地質学的、岩石学的、地球化学的研究を行った。比較対象としてモンゴルの付加体緑色岩、エチオピアやロシアの巨大火成岩区の火山岩、宮城県内の新生代火山岩の研究も行って、多くの学会講演および数編の論文発表を行うことができた。また、モンゴルのプルーム型オフィオライト（緑色岩）に関する研究や、宮城県岩沼市の安山岩の採石場における節理や分結脈の研究から、地球内部の大規模な運動やマグマ活動に関してプルーム型オフィオライトの重要性が明らかになった。

後藤章夫助教（火山学）は、雲仙普賢岳における平成噴火時のローブ溶岩の運動メカニズムを解明するため、溶岩の粘性係数を測定する研究を行った。その結果、ローブ溶岩の運動は粘性流動では説明できず、ローブ底部における破壊とその面の滑りが主な移動メカニズムであることが示された。

宮本毅助教（火山地質学）は、南九州霧島火山群の新燃岳における 2011 年 3 月の最新の噴火活動に伴う噴出物について調査し、解析を行った。この噴火に関して多くの研究者は、今回の噴火のみを対象とした噴火モデルを提示しているが、宮本助教は過去の享保年間に起きた噴火のマグマが 2011 年噴火にも大きく関与していたことを明らかにした。この成果は、7 月に開催された IAVCEI 2014 において報告された。

千葉聡教授（進化生態学）は、小笠原諸島において陸産貝類の生態学的、進化生物学的研究を行った結果、形態的に区別ができないため従来認識されていなかった多数の種を、遺伝学的に識別することができた。以上の成果は、従来の貝類のレッドリストに基づいた生態リスク評価や、地域評価には問題があり、遺伝子解析の情報に基づいてレッドリストの再検討が必要であることを示している。また、貝類の生息状況を指標として、日本各地の湿地および湖沼の現況に関する調査研究を行った。中国北部の湿地と比較して、東北地方は比較的良好に維持されている湿地が比較的多く存在する一方、東北大震災の津波により、特に北上川周辺の良好な湿地が消失し、希少種を多く含む貝類群集が失われたことが明らかになった。

鹿野秀一准教授（生態学）は、宮城県北部の伊豆沼において、本年度より科学研究費補助金（基盤研究(C)）「浅い湖沼におけるハス群落拡大がメタン食物網へあたえる影響」

の経費を用いて、ハス群落内外のメタン濃度測定と安定同位体比による食物網の調査研究を始めた。その結果、近年のハス群落の拡大は、伊豆沼全体をメタンが起点となる食物連鎖を強めていることが示唆された。また、伊豆沼に生育するユスリカ幼虫についても、巣穴の形状によりメタン起源の餌としてのメタン酸化細菌の寄与が異なることを飼育実験と安定同位体比の測定により確かめることができ、その内容は Limnology 誌に掲載された。

東北アジア研究センターは文系、理系の連携を謳い、またその実践を進めている。工学系の研究者にとって、手法の開発は必ずしも特定の地域を意識する必要はないが、本センターにおける活動はそのアウトプットとしての地域が重要であるケースが見られる。佐藤源之教授（地下電磁計測、地中レーダー）の進める震災復興のための地中レーダー（GPR）の利用は、その一例である。佐藤教授は東日本大震災以降、地中レーダー（GPR）技術を利用して減災、復興活動を行ってきた。また佐藤教授はセンター制度であるプロジェクト研究ユニットとして「減災をめざした電波科学研究ユニット」を立ち上げ、宮城県、福島県を中核に岩手県、栃木県、埼玉県、奈良県などでの遺跡調査活動を行った。東北地方では東日本大震災からの復興過程において、多数の緊急を要する遺跡調査が行われており地中レーダ技術によってこれを促進するのが目的である。加えて、震災に関係し、全国的に不足する遺跡調査専門家の後方支援の意味も重要である。また佐藤教授が進めるレーダーによる地滑りモニタリングは GB-SAR（地表設置型合成開口レーダー）を用いて宮城県・栗原市と協力して実践的な電波科学による防災・減災技術の検証を行ってきている。科学研究成果の実践的な社会、地域貢献の例として注目される。

〔より広い地域にかかわる研究および地域に依存しない研究〕

千葉聡教授（進化生態学）は、東アジア地域の生物相の形成過程を解明することを目的として、陸産貝類をモデル系として用い、東アジア地域各地のフィールド調査と分子系統解析を行った。従来単一のグループとされていた、中国、韓国、台湾、ベトナムおよび日本のオナジマイマイ科陸産貝類は、大きく大陸と島嶼の 2 つのグループに分けられ、それぞれアジア大陸南部から沿海部と内陸部を独立に北上しつつ多様化を遂げたことが示され、その進化史の解明に成功した。この研究成果は、分子系統学の最も重要な雑誌である Mol. Phyl. Evol 誌などに公表した。また、中国系ヨロイオサムシ群と陸貝をモデル系としたフィールド調査と、遺伝子解析による実験的研究を行った。その結果、中国系ヨロイオサムシ群の形態の多様化は、餌生物との捕食－被食の共進化によって生じたことが示された。この成果は生態学の最も権威ある雑誌である Ecology 誌などに発表した。

平野直人准教授（地球宇宙化学）は、新型火山・プチスポット海底火山が放出する

二酸化炭素量を見積もるために、LECO 社製の炭素硫黄分析装置を使用して溶岩中の二酸化炭素濃度の分析と脱ガス前の濃度の見積もる研究を行った。その結果、プチスポット火山からの二酸化炭素量は、地球上の火山の様々なマグマと比べても異常な量であり、プチスポット火山の存在量からは、現在の世界の全火山の二酸化炭素放出量の10%にも達することが見積もることができた。本成果は、イタリアのフィレンツェで行われた国際学会 Goldschmidt 2013 において口頭発表され、また Geology 誌にも掲載された。さらに、チリ海溝沖におけるプチスポット火山の発見に関する研究は、新種の火山・プチスポットが世界的に普遍である事を証明する重要な報告となった（Hirano et al., 2013, *Geochem. J.*）。

石井敦准教授（科学技術社会学、環境政策論）は環境レジーム研究における効果性の議論のレビューと、環境問題以外の研究において効果性の概念がどのように用いられているのかについて論文を寄稿した。国際環境レジームの科学アセスメントに関する研究という立場から日本の捕鯨外交と国際捕鯨管理の問題に関する研究を継続し、またマグロの漁業権に関する研究も開始している。

佐藤源之教授がカンボジアで進める人道的地雷除去活動は､在カンボジア日本大使館、JICA などとも連携しながら、政府開発援助（ODA）プログラムとして日本からの支援が行えることを目標としている。

また高橋一徳助教（電磁波計測、環境計測）は土壌不均質度より電波の散乱量を推定する手法の開発を行い、人道的地雷検知に関する研究への国際機関を通じての技術的貢献を行った。

⑸ 教育活動

〔大学院教育・研究生〕

本センターは部局として学生定員を持たず、教育は学内の大学院に設置された協力講座と、全学教育において行っている。本センターの教員による協力講座は、下表のように大学院環境科学研究科、理学研究科、情報科学研究科、生命科学研究科、文学研究科および工学研究科に設置されている。本センター教員を指導教員とするこれらの研究科の大学院生（および学部学生)、学術振興会特別研究員、研究所等研究生は本センターを拠点として研究活動を行っている。全学教育については、平成 25 年度は 24 コマの負担原則に対して 24.5 コマを提供した。

各研究科の大学院学生（および学部学生）のうち本センターを研究拠点とする者は、平成 25 年度は 62 名おり、文系の学生に関しては合同棟内の 3 室を合同研究室として提供しているほか、理系の学生は各教員の実験室・学生室を利用し、指導を受けている。

生活支援等に関する学生のニーズの把握に関しては、文系学生合同研究室を担当する

教員を 1 名配置するとともに、学生側には各室 1 名の連絡係を設置し、随時そのニーズが教員側に伝わる態勢をとることで、ニーズ把握に万全を期している。

平成 23 年 3 月 11 日の震災後の補修工事のため、平成 25 年度前半は川北合同研究棟が使用できず、学生の研究条件がある程度制約されたことは否めない。本センター教員が指導している学生には、プレハブ（さくら棟）の利用や学内他部局からスペースを借りるなど、最大限の努力によって研究の場を確保した。平成 25 年 9 月に川北合同研究棟の補修工事が完了して引っ越しが行われ、同年度後半からは研究条件が完全に復旧した。

大学院生の履修指導や生活相談は、基本的に所属各研究科において個別的に行っている。また本センター教員の研究室ならびに実験設備等は、基本的には指導大学院生等が随時出入りできる体制をとっており、学習相談も適切に行われている。

日本学術振興会特別研究員（DC、PD）の受け入れに関しては、平成 25 年度は 6 名を受け入れており、居室を提供している。これらの学生・研究員は本センターの教員が開催する共同研究やセミナー、シンポジウムに参加することで、専門的な研究環境に接することが可能となっている。特に震災対応工事に際しては特別研究員の研究場所の確保に努めた。

平成 25 年度は研究所等研究生 2 名を受け入れた。受け入れ教員は、それぞれの専攻分野に関するきめ細かい指導を行っている。

平成 25 年 11 月 11 日に毎年恒例の東北大学東北アジア研究センター学生研究交流会が開催された。今回は第 6 回に当たり、14:00 ～ 17:00 に川内北キャンパス講義棟 C-205 室において口頭発表 9 件、17:10 ～ 18:00 に川北合同研究棟 4 階大会議室においてポスター発表 22 件を行い、その後同室にて懇親会を行った。学生 40 名、教員 12 名、計 52 名の参加を得て活発な討論が行われ、盛会だった。

東北アジア研究センター教員の協力講座

氏名	役職	協力期間	研究科	専攻	講座（または分野）
寺山恭輔	教授	2000 年 4 月 1 日～現在	文学	歴史科学	比較文化史学
高倉浩樹	教授	2003 年 4 月 1 日～現在	環境科学	環境科学	東北アジア地域社会論
栗林　均	教授	2003 年 4 月 1 日～現在	環境科学	環境科学	東北アジア地域文化論
岡　洋樹	教授	2003 年 4 月 1 日～現在	環境科学	環境科学	東北アジア地域文化論
柳田賢二	准教授	2003 年 4 月 1 日～現在	環境科学	環境科学	東北アジア地域文化論

磯部　彰	教授	1997 年 4 月 1 日～現在	文学	歴史科学	比較文化史学
瀬川昌久	教授	2003 年 4 月 1 日～現在	環境科学	環境科学	東北アジア地域社会論
明日香壽川	教授	2003 年 4 月 1 日～現在	環境科学	環境科学	東北アジア地域社会論
明日香壽川	教授	2000 年 4 月 1 日～現在	文学	人間科学	科学技術社会論
上野稔弘	准教授	2003 年 4 月 1 日～現在	環境科学	環境科学	東北アジア地域社会論
石井　敦	准教授	2005 年 4 月 1 日～現在	環境科学	環境科学	東北アジア地域社会論
石井　敦	准教授	2005 年 4 月 1 日～現在	文学	人間科学	科学技術社会論
千葉　聡	教授	2013 年 4 月 1 日～現在	生命科学	生態システム生命科学	地域生態学
鹿野秀一	准教授	2001 年 4 月 1 日～現在	生命科学	生態システム生命科学	地域生態学
石渡　明	教授	2008 年 4 月 1 日～現在	理学	地学	岩石地質学
平野直人	准教授	2009 年 6 月 1 日～現在	理学	地学	岩石地質学
後藤章夫	助教	1999 年 8 月 1 日～現在	理学	地学	岩石地質学
宮本　毅	助教	2000 年 4 月 1 日～現在	理学	地学	岩石地質学
工藤純一	教授	1996 年 4 月 1 日～現在	情報科学	情報基礎科学	広域情報処理論
佐藤源之	教授	2003 年 4 月 1 日～現在	環境科学	環境科学	地殻環境システム創生学
高橋一徳	助教	2013 年 4 月 1 日～現在	環境科学	環境科学	地殻環境システム創生学

〔全学教育〕

全学教育では、学務審議会より 24 コマを東北アジア研究センターの担当原則として求められている。これに対して、平成 25 年度は本センターから基幹科目 1 コマ、展開科目 5.5 コマ、共通科目 18 コマ、合計 24.5 コマを担当した。いずれの講義でも担当教員は自分の専門分野をテーマとする講義を行うが、これを通じて東北アジアに関わる内容が全学教育の場で学生に教授されている。また、本センターの教員は、全学教育において東北アジア言語の講義を提供しており、現在は中国語・ロシア語・モンゴル語の講義を担当し、本学における言語教育の多様化に貢献している。また基礎ゼミとして平成 25 年度は 1 コマ提供した。

⑹　社会貢献活動

研究内容の社会への還元は大学の果たすべき重要な使命の一つである。これに加え、研究の社会還元を通じて「東北アジア」という地域概念の普及と定着をはかり、同地域に対する認識の向上や人的交流の拡大の実現が、本センターの第一義的な社会貢献であると考える。また、国際的な学術交流活動の促進を通じ、相互理解を深めることが、我が国の安定した発展には不可欠であるとの立場から、共同ラボラトリや大学間交流協定・部局間交流協定を活用しつつ、学術交流を積極的に展開している。

〔社会貢献を目指す研究活動〕

本学中期計画は、「社会との連携や社会貢献に関する目標を達成するための措置」として、「教育と文化への貢献活動として、社会の要望を取り入れた企画を実施する」ことを唱っている。本センターは、創設当初から、社会貢献を意識した活動を行っているが、単なる奉仕活動としてではなく、この分野の活動を積極的に「社会貢献研究」として位置づけ、プロジェクト研究部門に設置されたユニットを通じた研究活動を展開している。

2011 年 3 月の東日本大震災に関しては、本学中期目標においても「東日本大震災による被災からの復旧・復興支援の取組に努める」ことが唱われており（本学中期計画 3 頁「3. その他の目標を達成するための措置」）これに即した多くの研究活動が社会実践を伴い行われた。

平成 23 年度より継続で高倉浩樹准教授は、宮城県からの委託調査「東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査」を実施している。国内 20 名の研究者を組織し、宮城県沿岸部の津波被災地における無形民俗文化財の被災と復興過程についての聞き書き調査を実施している。このことで文化財保護行政に対する支援を行うと共に、学術・行政・地域社会が連携する形での無形文化財の活用方法の開発を行った。この結果、東日本大震災後、地域社会において伝承されてきた民俗芸能・祭礼・生業などの無形の民俗文化財の被災状況と復興過程についての社会調査を収集でき、22 地区約 200 人からの膨大な記述資料となっており、漸次東北大学リポジトリで電子ファイルとして公開されている。自然災害や社会紛争後の地域復興における無形民俗文化財の活用に関わる研究開発のためにこれらを共同利用に供することをめざしている。

佐藤源之教授とその研究室は、防災・減災に資する科学技術開発を進め、2009 年から開始した人道的地雷除去技術のカンボジアでの ALIS の実証試験での地雷除去により 440,000 平米以上の農地を住民に返還する成果を挙げた。また 2008 年 6 月の岩手・宮城内陸地震に関して、宮城県栗原市と被災車両の検知に関して地滑りのモニタリングのため GB-SAR（地表設置型合成開口レーダ）の設置準備を進め、2012 年より継続的なモニタリングを行っている。さらに従来より鮮明な地下構造可視化を行う 3DGPR システムを遺跡調査に適用する研究を、宮崎県西都原遺跡や埼玉県さきたま古墳、栃木県琵

琶塚古墳などで行い、実用性を確認した。東日本大震災の津波被害により、宮城・岩手など東北各県の沿岸部の多くの市町村で住宅地の高台移転が計画されている。高台移転では移転用地の遺跡調査が条例により義務付けられているが、膨大な数の遺跡調査が必要となることから事業の遅延が危惧される。これまでの地中レーダの研究の実績に基づき、地中構造や埋設物を可視化できる地中レーダを遺跡調査に用いることで、発掘必要性の検討や効率的な発掘作業の計画に役立てられることを実証し、自治体への技術供与などにより遺跡調査を効率化し、高台移転実現への貢献につなげる活動を実践している。2014 年度は福島県南相馬市などで大規模な遺跡調査を実施したほか、都合 20 回に及ぶ遺跡調査活動を行った。

東北アジア研究センターは、これまで災害科学研究の観点から歴史的文化財、とくに歴史資料の保全に関わる実践的研究活動を行い、2012 年 4 月には寄付部門「上廣歴史資料学研究部門」を設置した。これは古文書の解読者養成、地域社会との連携による学術利用と地域でのその活用のための基盤を創出しようとする実践的研究であった。この経験を踏まえて、本分野は、東北アジア諸国における歴史遺産保全の方法的問題、文化遺産がどのように継承され、いかに活用されようとしているのかをめぐる諸課題を研究している。宮城県内を中心とし、多くの古文書講座を市民向けに開講したり、歴史資料保全活動を精力的に行っている。

一方、宮城地域での歴史資料保全活動から、民間に保存される古文書のような文化遺産が消滅の危機にあり、地域住民がその保全・継承に強い関心を持っていることが明らかになった。このことは、地域住民が自らの歴史的アイデンティティー形成において、文化遺産に大きな意義を見出していることを示している。急激な開発と社会変容が進む東北アジアでも、同様の問題が随所に存在する。例えば中国では、族譜・家譜のような民間文書が継承・作成されつづけており、その伝承様態の比較研究は、多くの研究者の関心を集めている。またモンゴルでは、草原の自然環境や遊牧文化それ自体が歴史的な文化遺産と認識され、モンゴル人のアイデンティティー認識の中核に位置づけられている。また遺跡や古文献、古文書の研究も、その成果が観光開発に直ちに反映されることにより意味解釈が改変されたり、新たな伝統理解が創出されたりしている。さらにロシアでは、社会主義体制の崩壊後、地域の民族文化の再興が叫ばれ、考古学的な遺物が、ときに少数民族の政治的な主張の象徴として利用されたりしている。

また近年、人文社会科学分野においては、「グローバル・ヒストリー」や「多面的な地域研究」が方法論として提起されている。このことは、従来民族独自の文化遺産とされてきたものが、広いエリアからみたときに、異なる意味づけを与えられる可能性を示している。ある文化遺産が国境をまたいで分布する場合のように、時として政治的な文化圏領有の主張となって現れることもある。

以上のような認識にたち、本センターでは、これまでの宮城での歴史資料保全活動の

経験を敷衍しつつ、東北アジア諸国を対象として、資料保全のノウハウに関する技術的研究を展開しようとしている。

〔公開講演会など〕

センターでは、毎年 12 月に公開講演会を開催し、広く一般市民に対し東北アジア地域への関心の喚起に努めている。平成 25 年度は、12 月 7 日に仙台戦災復興記念館を会場に、公開講演会「世界遺産からのメッセージ ― 平泉・石見銀山の歴史力」と題して、入間田宣夫氏（東北大学名誉教授、一関市博物館館長）、中野義文氏（島根・石見銀山資料館館長）の各氏による講演が行われた。本年度の公開講演会では、平泉そして石見銀山の世界遺産登録申請に尽力された両氏の講演を通じて、世界遺産の歴史的意義や申請と保全における地域研究の重要性が強調され、富士山の世界遺産登録という直近の話題もあり盛況であった。

また本センターは伊達市噴火湾文化研究所と学術交流協定を結び、交代で相互訪問し講演会を開催しているが、今年度は伊達市にて 10 月 26 日に第 5 回学術交流講演会を開催し、本センターの岡洋樹センター長と後藤章夫助教が講演を行った。

さらに本センターは 10 月 23 日から毎週水曜にみやぎ県民大学「東北アジアの人間と環境」を東北大学片平キャンパスのさくらホールで開催し、岡洋樹センター長、佐藤源之教授、磯部彰教授、石渡明教授の四人のセンター教員によるオムニバス講義を行った。

また本センターは 10 月 12･13 日に開催された「東北大学片平まつり 2013」に、「東北アジア　人の営み　母なる大地」をテーマとして出展参加したが、このうち石渡明教授の地球化学分野では、IODP（総合国際深海掘削計画）との連携企画として展示と講演会「地球探査船「ちきゅう」が解き明かす東北沖地震の謎」（講師は海洋研究開発機構の斎藤実篤氏）を行った。また特別企画として本センターと災害科学国際研究所との共同による特別記念講演会「水と大気：国を超える環境問題」が開催され、本センターからは明日香寿川教授が講演を行った。

このように本センターは学内外の諸機関・組織とも連携しつつ講演会を開催し、本センター教員も講演を行っている。

このほか、共同研究「東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用」では活動の一環として県内外の 5 カ所における出張報告会を実施している。また本センター上廣歴史資料学研究部門は東北大学災害科学国際研究所、NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワークとの共催で 6 月 29 日に公開講演会「よみがえる村田の歴史～江戸時代からのメッセージ」を柴田町にて開催した。また昨年度に続き岩出山古文書を読む会との共催で「講座 : 地域の歴史を学ぶ◎鬼首」を大崎市鳴子温泉鬼首で開催した。また上廣歴史資料学研究部門では日本の歴史資料研究の国際的普及に向け、9 月 16 日から 20 日にかけてドイツ・ハイデルベルク大学人文学部日本学科において「古文書

ワークショップ」を開催した。このように本センターは共同研究や研究部門による学外でのワークショップや一般向け講演会等の積極的開催をも通じて、研究成果の社会への還元を積極的に行っている。

本センターは覚え書きに基づき平成 20 年度よりロシア・ノボシビルスク国立大学で 5 年にわたる訪問講座を実施し、同時にこれを契機に本学の他部局とノボシビルスクの学術研究機関との交流を促進するなど、本学とシベリアの学術交流の触媒的役割を果たしており、本センターの工藤純一教授が本学のロシア交流促進室副室長、岡洋樹教授、高倉浩樹教授、柳田賢二准教授、塩谷昌文助教が室員として携わっている。9 月 25 日に本学ロシア交流推進室主催による日露ワークショップ「日本文化を教える：ロシアと日本の日本語教育の現場から」が本学さくらホールで開催され、本センターは共催部局の一つとして積極的に参与し、岡洋樹センター長が趣旨説明を行った。また本年度の日本アジア講座では、本センター荒武賢一朗准教授が講師を務め、岡センター長とともにノボシビルスクを訪問した。このように本センターは本学のロシアとの学術交流において引き続き重要な役割を担っている。

また平成 21 年度以来学内文系七部局と連携して企画・実施している文系版サイエンスカフェ「東北大学リベラルアーツサロン」では、本年度第 22 回から第 27 回までの 6 回が開催された。第 22 回が 4 月 12 日、第 23 回が 6 月 14 日、第 24 回が 7 月 12 日、第 25 回が 9 月 6 日、第 26 回が 11 月 22 日、第 27 回が 1 月 17 日にそれぞれ開催された。リベラルアーツサロンの準備･運営は､東北アジア研究センターに設置されたコラボレーション・オフィスが大学広報課と連携しながら行っている。オフィスの運営委員会はセンター長岡洋樹教授を委員長として、文系七部局の委員によって構成されているが、ここでサロンの講師選定が行われている。

センターが行うこれらの活動は、地域の教育・文化への貢献として意義あるものと考えている。

〔行政への貢献〕

本センターの教員は国や地方公共団体の審議会などへの参加を積極的に行っている。この中には、環境省中央環境審議会（明日香教授)、環境省小笠原世界遺産候補地科学委員会、環境省プラナリア対策陸産貝類保全検討会、小笠原諸島ネズミ類対策検討会、小笠原諸島修復事業検討委員会、小笠原諸島森林生態系保護地域保全管理委員会、小笠原諸島科学委員会、小笠原諸島生態系保全アクションプラン改定 WG、新たな外来種の侵入拡散防止 WG、グリーンアノール対策 WG、東平ノヤギ・ノネコ排除区に関わる検討委員会、父島ノヤギ排除検討委員会、父島外来植物対策委員会（以上千葉教授)、宮城県伊豆沼内沼自然再生協議会（鹿野准教授)、文部科学省科学技術･学術審議会、(独)大学評価・学位授与機構大学機関別認証評価委員会（以上石渡教授)、環境省国内にお

ける毒ガス弾等に関する総合調査検討会、宮城県自然環境保全審議会、（独）石油天然ガス・金属鉱物資源機構金属資源探査技術開発研究会（以上佐藤教授）が含まれる。

〔公益財団法人への貢献〕

本センター教員は公益財団法人の次に挙げる委員会などへも参加している。地球環境戦略研究機関（IGES)、地球環境センター JCM 支援委員会（以上明日香教授)、原子力環境整備促進・資金管理センター地層処分モニタリングシステム検討委員会（佐藤教授)。

〔東北アジア学術交流懇話会〕

本センターの研究を社会に還元するための外部組織として、「東北アジア学術交流懇話会」が活動している。本センターは、懇話会ニューズレター「うしとら」を編集し（年 4 回刊行）の近刊の出版物とともに会員に配布することで、東北アジアに関する情報提供を行っている。本年度は、「うしとら」57 ～ 60 号を刊行し会員に配布した。今年度は 5 月 24 日に学術交流懇話会公開講演会・総会を東京の東北大学東京分室会議室で開催した。講演会では、横手慎二氏（慶應義塾大学)、本村眞澄氏（石油天然ガス・金属鉱物資源機構）による公開講演会「すぐそこのロシア“隣人の今”」を開催した。

⑺ 外部評価・自己評価

東北大学の中期計画第 93 項目「各教育研究組織は、専門領域ごとに研究活動とその成果に関する定期的な自己評価・外部評価を通じて、国内及び国際的水準での成果の把握に努め、結果を公表するとともに、外部からの客観的意見等の把握に努める」に従い、本センターでも定期的自己評価・外部評価に基づいてその水準の維持・向上に努力している。

自己評価報告書として「活動報告 2012」を刊行し、ホームページ上で公開した。

組織運営活動

(1) 人員配置と業務分担

(A) 教員等の配置、研究組織構成状況（2014 年 3 月現在）

部門	分　野	職位／在職期間		氏　名	専　門　領　域
基礎研究部門	ロシア・シベリア研究	教　授	2013.4-	寺山　恭輔	ロシア・ソ連史、日露・日ソ関係史
		教　授	2013.4-	高倉　浩樹	社会人類学、シベリア民族誌
		助　教	1999.2-	塩谷　昌史	ロシア経済史、ロシアとアジアとの経済関係
	モンゴル・中央アジア研究	教　授	1999.10-	栗林　　均	言語学・音声学、モンゴル語学
		教　授	2006.4-	岡　　洋樹	東洋史、モンゴル史
		准教授	1997.4-	柳田　賢二	言語学、ロシア語学、言語接触の研究
	中国研究	教　授	1996.10-	磯部　　彰	中国文学、東アジア文化史
		教　授	1996.5-	瀬川　昌久	文化人類学、華南地域研究
		教　授	2004.4-	明日香壽川	環境政策論
		准教授	2001.4-	上野　稔弘	中国現代史、中国民族学
	日本・朝鮮半島研究	准教授	2004.10-	石井　　敦	国際関係論、科学技術社会学
	地域生態系研究	教　授	2013.4-	千葉　　聡	生態学、保全生物学、進化生物学
		准教授	1997.4-	鹿野　秀一	微生物生態学、システム生態学
	地球化学研究	教　授	2008.4-	石渡　　明	岩石学、地質学
		准教授	2013.4-	平野　直人	地質学、岩石・鉱物・鉱床学、地球宇宙科学
		助　教	1999.2-	後藤　章夫	火山物理学、マグマ物性
		助　教	1997.5-	宮本　　毅	火山岩岩石学、火山地質学
	地域計画科学研究				
	環境情報科学研究	教　授	2001.4-	工藤　純一	環境情報学、デジタル画像理解学
	資源環境科学研究	教　授	1997.4-	佐藤　源之	電磁波応用工学
		助　教	2013.4-	高橋　一徳	電磁波計測、応用地球物理学
		助　手	2013.9-	駒木野智寛	GPR による遺跡探査、災害考古学、地理情報システム（GIS)

プロジェクト研究	ユ　ニ　ッ　ト　名	代　表　者	期　間
	森林火災から発生する二酸化炭素削減研究ユニット	工藤　純一	
	21 世紀東北アジア地域像の構築に関する研究ユニット	岡　　洋樹	
	シベリアにおける人類生態と社会技術の相互作用研究ユニット	高倉　浩樹	
	現代中国社会の変容に関する文化人類学研究ユニット	瀬川　昌久	
	20 世紀ロシア・中国史再考研究ユニット	寺山　恭輔 上野　稔弘	
	東北アジア言語文化遺産研究ユニット	栗林　均	
	出版文化資料データベース研究ユニット	磯部 彰	
	減災をめざした電波科学研究ユニット	佐藤 源之	

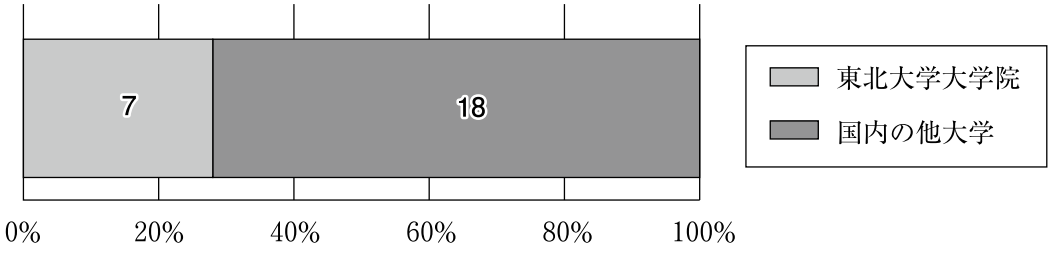
部門	分　　野	職位／在職期間		氏　　名	専　　門　　領　　域
研究支援部門	学術交流	教　授		外国人研究員 (客員教授)	→　別表参照
		助　教	2012.5-	金　　賢貞	民俗学、日韓比較社会・文化論
	情報拠点 (海外連携室)	国際交流委員長		高倉　浩樹	国際的学術交流推進
		助　教		金　　賢貞	

部門	分　　野	職位／在職期間		氏　　名	専　　門　　領　　域
寄附研究部門	上廣歴史資料学研究部門	准教授	2012.4-	荒武賢一朗	日本近世・近代史
		助　教	2012.4-	高橋　陽一	日本史、近世旅行史
		助　教	2013.10-	友田　昌宏	日本近代政治史

⑻　現職専任教員等の年齢、勤続年数、博士号取得状況

区　　分	教　　授	准 教 授	助教・助手
教員の平均年齢　　(2014 年 3 月現在)	56.1 歳	47.3 歳	40.1 歳
教員の平均勤続年数　(　　〃　　)	9 年 8 月	9 年 11 月	6 年 7 月
博士号取得者数　　(　　〃　　)	10 人	3 人	7 人

⑹　専任教員の最終出身大学院（2014 年 3 月現在）



⑹ 研究支援組織の整備・機能状況（2014 年 3 月現在）

所　　属	職　　名	氏　　名
事　務　室	文学部・文学研究科事務長	志田　昌幸
	専　門　員	日野　謙二
	主　　任	高橋　篤志
	事務一般職員	森田　史哉
	事務補佐員	前川　順子
	事務補佐員	及川　二美
	事務補佐員	阿部由比子
	事務補佐員	横山　尚子
図　書　室	事務補佐員	佐々木理都子
	事務補佐員	海口　織江
コラボレーション・オフィス	事務補佐員	小川　千穂
	事務補佐員	Polovinka Mariya
	派遣職員	熊谷　　香

⑹ 教育研究支援者受け入れ状況

氏　名	期　間	受入プロジェクトユニット名	受入教員
斯欽巴図	2010.5.1 ～ 2013.4.30	東北アジア民族文字・言語情報処理研究ユニット (2010.5.1-2013.3.31) 東北アジア言語文化遺産研究ユニット (2013.4.1-2013.4.30)	栗林　　均
Tsogbadrakh Gantsetseg	2013.7.1 ～ 2014.3.31	東北アジア言語文化遺産研究ユニット	栗林　　均
稲澤　　努	2012.4.1 ～ 2014.3.31	現代中国社会の変容に関する文化人類学研究ユニット	瀬川　昌久
巽　由樹子	2012.8.1 ～ 2013.9.30	20 世紀ロシア・中国史再考研究ユニット	寺山　恭輔
麻田　雅文	2013.10.1 ～ 2014.3.31	20 世紀ロシア・中国史再考研究ユニット	寺山　恭輔
滝澤　克彦	2013.4.1 ～ 2014.3.31	シベリアにおける人類生態と社会技術の相互作用研究ユニット	高倉　浩樹

⑹ 客員教授（海外）受け入れ状況

※**太字**が本年度招聘者

〔氏名／在任期間：所属〕

カザンツェフ，セルゲイ・V.／1996.10.1 ～ 1996.12.31

：ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部　経済産業技術研究所副所長

石　昌渝（セキ　ショウユ）／1997.1.1 ～ 1997.6.30

：中国、中国社会科学院大学院教授

オチル，アユーダイ／1997.10.1 ～ 1998.3.31
　：モンゴル、モンゴル科学アカデミー歴史研究所所長
李　仁遠（リ　インウォン）／1997.12.1 ～ 1998.3.31
　：韓国、韓国弘益大学校都市土木工学科教授
セリベルストフ，ビァチェスラフ／1998.4.1 ～ 1998.6.30
　：ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部経済・産業管理技術研究所副所長
スミルノワ，タマラ／1998.5.1 ～ 1998.8.31
　：ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部　無機化学研究所主任研究員
許　志宏（キョ　シコウ）／1998.8.1 ～ 1998.11.30
　：中国、中国科学院冶金研究所　上級教授
ゲレル，オチル／1998.9.1 ～ 1998.12.25
　：モンゴル、モンゴル技術大学教授
朴　星來（パク　ソンネ）／1999.1.1 ～ 1999.3.31
　：韓国、韓国外国語大学校人文大学史学科教授
クズネツォフ，フョードル，A.／1999.1.1 ～ 1999.3.31
　：ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部　無機化学研究所長
劉　世徳（リュウ　セトク）／1999.4.10 ～ 1999.7.9
　：中国、中国社会科学院文学研究所教授
イワノフ，ヴィクトル／1999.5.1 ～ 1999.8.31
　：ロシア、ロシア科学アカデミー極東支部　火山研究所教授
朝　克（チョウ　コク）／1999.8.1 ～ 1999.10.31
　：中国、中国社会科学院民族研究所教授
セナラス，ユダヤ　ガミニ／1999.9.1 ～ 1999.11.30
　：スリランカ、モラツワ大学上級講師
鄭　在貞（チョン　ジェジョン）／1999.12.2 ～ 2000.3.5
　：韓国、ソウル市立大学校教授
ブラック，ジョン　アンドルー／1999.12.1 ～ 2000.3.31
　：オーストラリア、ニューサウスウェールズ大学教授
キム・レチュン／2000.4.1 ～ 2000.6.30
　：ロシア、ロシア科学アカデミー世界文学研究所首席研究員
モシキン，ミハイル／2000.4.1 ～ 2000.7.31
　：ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部　動物分類・生態学研究所教授
李淵昊（ソ　ヨノ）／2000.7.1 ～ 2000.9.30
　：韓国高麗大学教授
イローヒン，ゲナディ／2000.8.1 ～ 2000.11.30
　：ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部
確精扎布（チョイジンジャブ）／2000.10.1 ～ 2001.1.15
　：中国内蒙古大学教授

高　哲煥　(コー　チュルワン)／2000.12.1 ～ 2001.2.28
　：韓国、ソウル大学校海洋学部教授
馬　建釗（マー　チエンチャオ)／2001.2.10 ～ 2001.5.31
　：中国広東省民族研究所所長
劉嘉麒（リュー　ジャーチ)／2001.4.1 ～ 2001.6.30
　：中国科学院地質学地球物理学研究所所長
タマーラ　エセノヴァ／2001.6.1 ～ 2001.9.15
　：ロシアカルムイク国立大学
ミカエル　エポフ／2001.7.1 ～ 2001.10.31
　：ロシア科学アカデミーシベリア支部地球物理科学研究所副所長
恩和巴図／2001.9.16 ～ 2002.2.28
　：内蒙古大学蒙古語文研
Dendevin Badarch ／ 2001.11.1 ～ 2002.2.14
　：モンゴル科学技術大学学長
Victor Okurgin ／ 2002.2.15 ～ 2002.6.14
　：ロシア科学アカデミー極東支部　火山学研究所
鄭　永振／2002.3.31 ～ 2002.8.31
　：中国延辺大学・渤海史研究所教授
Fan-Niang Kong ／ 2002.6.15 ～ 2002.10.14
　：ノルウエー土木研究所
アレクセイ A. キリチェンコ／2002.9. 1 ～ 2003.1.10
　：ロシア科学アカデミー東洋学研究所
ウラジミール　ロマノビッチ　ベロスロドフ／2002.10.15 ～ 2003.2.14
　：ロシア科学アカデミーシベリア支部　無機化学研究所教授
王満特嘎／2003.1.11 ～ 2003.5.14
　：モンゴル中央民族大学言語学院　蒙古語言文学部
Wolfgang-Martin Boerner ／ 2003.2.17 ～ 2003.6.14
　：イリノイ大学シカゴ校教授
ツイムジト　プルブエワ　ワンチコワ／2003.5.16 ～ 2003.9.30
　：ロシア科学アカデミーシベリア支部モンゴル学チベット学仏教学研究所
金　旭／2003.6.15 ～ 2003.10.14
　：中国吉林大学・地球探測科学興技術学院教授
朴　承憲／2003.10.1 ～ 2004.1.31
　：中国・延辺大学東北亜研究院院長
レオポルド　イサク チェルニャフスキー／2003.11.10 ～ 2004.2.29
　：ロシア科学アカデミーシベリア支部　無機化学研究所情報研究部部長
ネリー　レシチェンコ／2004.2.2 ～ 2004.5.31
　：ロシア科学アカデミー東洋学研究所・上級研究員

サンドラ　ジェロニモ　カテーン／2004.3.7 ～ 2004.6.30
　：フイリピン大学国立地質学研究所助教授
S. V. Rasskazov ／ 2004.7.1 ～ 2004.10.31
　：イルクーツク州立大学教授
尹　豪／ 2004.6.1 ～ 2004.9.30
　：吉林大学東北亜研究院・副院長
ミン・ビョンウク／ 2004.10.1 ～ 2005.2.10
　：釜山大学校師範大学国語教育科教授
ウラジミール　ロマノビッチ　ベロスロドフ／ 2004.11.1 ～ 2005.2.28
　：ロシア科学アカデミーシベリア支部無機化学研究所固体統計熱力学研究部門教授
フグジルト／ 2005.2.11 ～ 2005.5.31
　：内蒙古大学教授　兼副学長
A. Yurlov ／ 2005.3.1 ～ 2005.6.30
　：ロシア科学アカデミーシベリア支部動物分類学生態学研究所主任研究員
銭　杭（チエン・ハン)／ 2005.6.1 ～ 2005.9.30
　：中国　上海社会科学院歴史研究所研究員
金　喜俊／ 2005.7.1 ～ 2005.10.31
　：釜山大学教授
S. A. Papkov ／ 2005.10.1 ～ 2006.1.31
　：ロシア科学アカデミーシベリア支部歴史研究所上級研究員
金　亜秋／ 2005.11.1 ～ 2006.2.28
　：中国　復旦大学教授
S. Bouterey ／ 2006.2.13 ～ 2006.6.30
　：カンタベリー大学言語文化学部助教授・学部長
N. Yurlova ／ 2006.3.1 ～ 2006.6.30
　：ロシア科学アカデミーシベリア支部動物分類学生態学研究所上級研究員
魏　海泉／ 2006.7.1 ～ 2006.10.31
　：中国　地震局地質研究所副研究員
S. Formanek ／ 2006.7.17 ～ 2006.11.30
　：オーストリア国立学術アカデミーアジア文化・思想史研究所上級研究員
劉　財／ 2006.11.3 ～ 2007.2.28
　：中国　吉林大学教授・地球探測科学与技術学院長、地球物理研究所長
ダシダワー，チョローン／ 2006.12.2 ～ 2007.3.15
　：モンゴル科学アカデミー歴史研究所長
L. Kondrashov ／ 2007.3.13 ～ 2007.6.30
　：ロシア　ハバロフスク州立自然環境管理訓練所長
ツォルモン，ソドノム／ 2007.3.16 ～ 2007.6.30
　：モンゴル科学アカデミー歴史研究所　シニア・サイエンティスト

Ignatyeva Vanda ／ 2007.7.1 ～ 2007.9.30
：ロシア　サハ共和国アカデミー人文科学研究所政治学社会学部門部長
Belosludov Vladimir ／ 2007.7.2 ～ 2007.10.31
：ロシア科学アカデミーシベリア支部無機化学研究所教授
特木爾巴根／ 2007.10.1 ～ 2008.1.15
：中国　内蒙古師範大学蒙古語言文学研究所教授
Voytishek Elena ／ 2007.11.5 ～ 2008.2.29
：ロシア　ノボシビルスク国立大学准教授
Yadrenkina Elena ／ 2008.1.16 ～ 2008.5.15
：ロシア科学アカデミーシベリア支部動物分類学生態学研究所上級研究員
白音門徳／ 2008.3.1 ～ 2008.6.30
：中国　内蒙古大学蒙古言語研究所教授
Jan Olof Svantesson ／ 2008.5.19 ～ 2008.8.31
：スウェーデン　ルンド大学教授
飯坂　譲二／ 2008.7.1 ～ 2008.10.31
：カナダ　ビクトリア大学地理学科教授
布仁巴図／ 2008.9.1 ～ 2009.1.15
：中国　内蒙古大学蒙古学学院教授
Black John Andrew ／ 2008.11.1 ～ 2009.3.31
：オーストラリア　シドニー大学建築、設計計画学部教授
Stammler Florian ／ 2009.1.16 ～ 2009.7.15
：フィンランド　ラップランド大学北極センター上級研究員
Dubinina Nina ／ 2009.4.1 ～ 2009.6.30
：ロシア　ハバロフスク国立教育大学教授
Dashi D. Darizhapov ／ 2009.7.1 ～ 2009.12.31
：ロシア科学アカデミー・シベリア支部ブリヤート科学センター物理学部リモートセンシング研究室長
Erdene Purevjav ／ 2009.8.1 ～ 2009.11.30
：モンゴル科学アカデミー言語文化研究所言語研究部門主任
嘎日迪／ 2009.12.1 ～ 2010.3.31
：内蒙古師範大学蒙古学学院教授
曺三相／ 2010.1.1 ～ 2010.5.31
：韓国　釜山大学韓国研究所 研究員
Boyakova Sardana ／ 2010.4.11 ～ 2010.7.15
：ロシア　ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学・北方民族問題研究所 20-21 世紀歴史学部門部長
朴慶洙／ 2010.6.1 ～ 2010.8.30
：韓国　江陵大学校人文大学日本学科教授

那順烏日図／ 2010.8.1 ～ 2010.11.30
：中国　内蒙古大学蒙古学学院教授
李晶／ 2010.9.1 ～ 2011.1.31
：中国　広東海洋大学外国語学院教授
ウラジミール・ヤクボフ／ 20010.12.1 ～ 2011.3.31
：ロシア　トムスク国立大学教授
セルゲイ・ソコロフ／ 2011.2.1 ～ 2011.2.28
：ロシア科学アカデミー地質研究所教授・所長代理
金　旭／ 2011.3.1 ～ 2011.6.30
：中国　吉林大学教授
哈琴巴特爾／ 2011.6.11 ～ 2011.9.30
：中国　黒竜江大学・教授
Boerner Wolfgang-Martin ／ 2011.7.1 ～ 2011.9.29
：アメリカ　イリノイ大学シカゴ校・名誉教授
斯琴巴特爾（スチンバートル）／ 2011.10.1 ～ 2012.1.31
：中国　内蒙古大学・教授
敖 特根／ 2012.2.1 ～ 2012.5.31
：中国　西北民族大学・教授
Sereenen JARGALAN ／ 2012.2.1 ～ 2012.4.30
：モンゴル　モンゴル科学技術大学・教授
Gavrilyeva Tuyara/2012.5.1 ～ 2012.8.31
: ロシア　サハ共和国北方地域経済研究所・主任研究員
烏力吉巴雅爾／ 2012.6.1 ～ 2012.8.31
: 中国　中央民族大学・教授
Koch Magaly ／ 2012.9.1 ～ 2012.11.30
: アメリカ　ボストン大学リモートセンシングセンター・研究准教授
陳　正宏 /2012.10.1 ～ 2012.11.30
: 中国　復旦大学・古籍整理研究所・教授
Borisov　Andrian ／ 2012.12.1 ～ 2013.3.31
: ロシア　ロシア科学アカデミーシベリア支部・人文学北方先住民研究所・上席研究員
Chimitdorzhiev Tumen ／ 2013.1.1 ～ 2013.1.31
: ロシア　ロシア科学アカデミーシベリア支部・ブリアート科学センター・物理物質研究所副所長
Laikhansuren Altanzaya ／ 2013.4.1 ～ 2013.7.31
：モンゴル　モンゴル国立教育大学・歴史・社会科学部・教授
潘　建国／ 2013.9.1 ～ 2013.11.30
：中国　北京市北京大学・中文系・教授

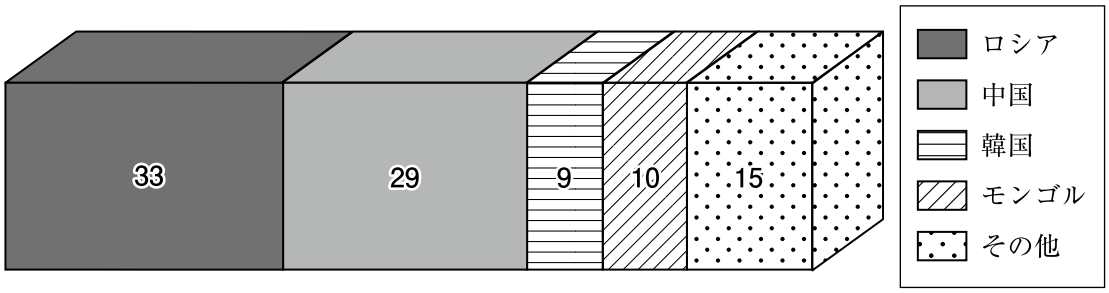
巴雅爾／ 2013.9.2 ～ 2013.12.31

：中国　内蒙古師範大学・旅游学院・教授

Ligthart Leonardus Petrus ／ 2014.2.1 ～ 2014.3.14

：オランダ　デルフト工科大学・名誉教授

〔客員教授の出身国（1996 年度～ 2013 年度)〕



⑹　兼務教員受け入れ状況（2014 年 3 月現在）

阿子島　香	文学研究科　教授（考古学、先史学）
李　　仁子	教育学研究科　准教授（文化人類学、在日移民研究）
大谷　栄治	理学研究科　教授（実験岩石学、高圧地球物理学）
奥村　　誠	災害科学国際研究所　教授（土木計画学、交通計画）
山田　仁史	文学研究科　准教授（神話学、民族学）
川口　幸大	文学研究科　准教授（文化人類学）
平川　　新	災害科学国際研究所　教授（日本近世政治経済史）

⑻　非常勤講師受け入れ状況（2014 年 3 月現在）

柳澤　文孝	山形大学理学部（地球環境学）
河野　公一	東北工業大学（衛星画像処理、リモートセンシング）
伊藤　正直	㈱ミツバ（ロシア政策論）
園田　　潤	仙台高等専門学校（計算電磁気学）

(I) 東北アジア研究センターフェロー

氏　名	所　属
和田　春樹	東京大学名誉教授
渡辺　　之	元日本鋼管取締役・技監、元東北アジア研究センター環境技術移転寄附研究部門教授

(J) その他研究員

客員研究員

※太字は現職

氏　名	期　間	研　究　課　題
劉　　四新	2007.7.5 － 2007.10.1	ボアホールレーダの数値計算並びに実験
キム　ヂョンホ	2007.7.25 － 2007.8.25	近世韓日の科学技術史と科学技術政策の政治思想的特性に関する比較研究
包　　聯群	2007.4.1 － 2010.3.31	モンゴル語と周辺言語との言語接触の研究
ハーリィド　フォウド　アブド　エルワケール	2007.5.1 － 2010.3.31	陸域生態系の物質循環における土壌動物の役割に関する研究
アンナ　ステムラー　ゴスマン	2009.1.16 － 2009.7.15	北方におけるコミュニティ適応・脆弱性とレジリアンス、境界領域の関係と交易に関する比較研究
王　三　慶	2009.5.27 － 2009.8.26	日本の漢文小説研究
ハタンバーナル　ナツァグ　ドルジ	2009.6.10 － 2009.8.29	エルデニ・ゾー寺院の歴史
ダリチャポフ　ブラット	2009.9.18 － 2009.12.31	日本企業のシベリアへの投資に関する研究
カジ　エ　カレポマ	2009.11.1 － 2011.3.31	人工衛星の画像処理とデータベース構築
恩　和	2010.6.1 － 2010.6.30	福沢諭吉にみる民族主義思想の形成
チョローン　ダシダワー	2011.8.23 － 2012.6.30	モンゴルにおける日本人抑留兵（1945-1947 年）
シャルグラノワ　オリガ	2012.3.15 － 2013.3.14	東北アジアにおけるモンゴル系移民の民族的統合の構築：民族社会学と宗教の諸要素
Chen　Jie	2012.11.16 － 2013.1.14	環境リモートセンシング
Yu Quan	2013.10.1 – 2014.10.31	中世モンゴル語の研究

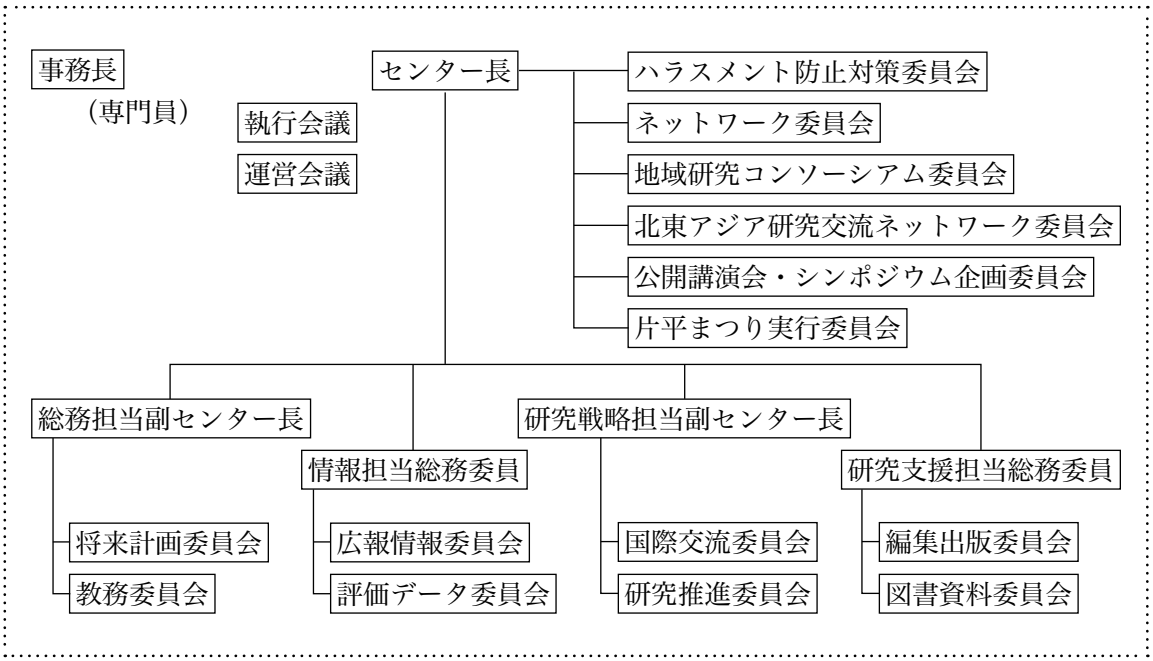
専門研究員

氏　名	期　間	専　門　分　野
張　政	2010.4.1 － 2014.3.31	文化人類学・博物館学
青木　雅浩	2011.4.1 － 2014.3.31	モンゴル近現代史・東北アジア国際関係史
トゥルムンフ　オドントヤ	2011.4.1 － 2015.3.31	文化人類学・モンゴル研究
佐藤　憲行	2012.7.17 － 2014.5.30	東洋史・清代モンゴル史
斯欽巴図	2013.5.1 － 2013.6.30	モンゴル語文献学の研究
李　善姫	2013.4.1 － 2015.3.31	文化人類学・ジェンダー研究
佐々木　聡	2013.4.1 － 2015.3.31	宗教文化史・術数文献の書誌研究

学振特別研究員

氏　名	期　間	受　入　教　員	資格
金本圭一朗	2011.4.1 － 2014.3.26	明日香壽川教授	DC1
森井　悠太	2011.4.1 － 2014.3.31	千葉　聡　教授	DC1
朝山　慎一郎	2012.4.1 － 2014.3.31	明日香壽川教授	PD
小林　宏至	2013.4.1 － 2016.3.31	瀬川　昌久　教授	PD
和田　慎一郎	2012.4.1 － 2014.3.31	千葉　聡　教授	PD
亀田　勇一	2011.4.1 － 2013.12.31	千葉　聡　教授	PD
鈴木　紀之	2012.4.1 － 2015.3.31	千葉　聡　教授	PD

⑹　センター内委員会構成図（2011 年 4 月改正）



(L) 委員会名簿（2013 年度）

＜学内各種委員会＞

委　員　会　名	委員氏名	任　期	備　考
教育研究評議会	センター長	2013.4.1 ～ 2015.3.31	評議員
部局長連絡会議	センター長	2013.4.1 ～ 2015.3.31	部局長
研究所長会議	センター長	2013.4.1 ～ 2015.3.31	部局長
入学試験審議会			研究所長会議代表（　　）
国立大学附置研究所・センター長会議	センター長	2013.4.1 ～ 2015.3.31	通称「全国研究所長会議」
教養教育改革会議	センター長	2007.10.16 ～	
文系部局長連絡協議会	センター長	2013.4.1 ～ 2015.3.31	部局長
総長特任補佐	石渡　明	2013.4.1 ～ 2014.3.31	
基金企画推進室員	岡　洋樹	2009.4.1 ～	(本部推薦)
キャンパス将来計画委員会	センター長	2013.4.1 ～ 2015.3.31	
広域交通計画等検討委員会			(本部推薦)
研究推進審議会	石渡　明	2013.4.1 ～ 2015.3.31	教授
研究倫理専門委員会	石渡　明	2013.4.1 ～ 2015.3.31	
評価分析室	工藤純一	2013.4.1 ～ 2016.3.31	(本部推薦)
広報連絡員	柳田賢二	2013.4.1 ～ 2015.3.31	
ロシア交流推進室員	センター長	2013.4.1 ～	(室員)
	工藤純一	2013.4.1 ～ 2014.3.31	(副室長)
	高倉浩樹	2009.12.1 ～	
	塩谷昌史	2009.12.1 ～	
	徳田由佳子	2009.12.1 ～	
	柳田賢二	2014.31 ～	2014.2.4 依頼
学生生活協議会	鹿野秀一	2013.4.1 ～ 2014.3.31	協議員
	明日香壽川		予備協議員
学務審議会	明日香壽川	2012.4.1 ～ 2014.3.31	
全学教育科目委員会			
社会科学、総合科目、外国語			
外国語（ロシア語）	柳田賢二		

外国語（中国語）	上野稔弘		
広報編集委員会			
片平まつり実行委員会	岡　洋樹	2013.4.1 ～ 2015.3.31	5 研究所と東北アジアの開催
コラボレーション・オフィス運営委員会	瀬川昌久	2013.4.1 ～ 2015.3.31	人文社会系諸部局
情報シナジー機構情報システム利用連絡会議			
（部局実施責任者）	栗林　均	2012.4.1 ～ 2014.3.31	
（部局技術担当者）	後藤章夫	2013.4.1 ～	
国際高等研究教育機構運営審議会	センター長	2013.4.1 ～ 2015.3.31	部局長
学際科学国際高等研究センター運営専門委員会	石渡　明	2012.4.1 ～ 2014.3.31	
附属図書館商議会	磯部　彰	2012.4.1 ～ 2014.3.31	
貴重図書等委員会	栗林　均	2013.4.1 ～ 2015.3.31	
東北大学出版会評議員会	センター長	2013.4.1 ～ 2015.3.31	
学友会全学協議会	千葉　聡	2013.4.1 ～ 2014.3.31	
運輸交通専門委員会			（本部推薦）
入試実施委員会			研究所群から 2 人 （本年度割当て有）
男女共同参画委員会	寺山恭輔	2013.4.1 ～ 2015.3.31	
情報公開・個人情報開示等審査委員会			研究所群から 1 人 （本年度割当て無）
情報公開・個人情報開示等委員会			研究所群から 1 人 （本年度割当て無）
環境保全センター運営専門委員会			研究所群から 1 人 （本年度割当て無）
ハラスメント全学防止対策委員会			研究所群から 1 人 （本年度割当て無）
大学情報データベース委員会	石渡　明 高倉浩樹 寺山恭輔 宮本　毅		（評価責任者）石渡教授 （運用責任者）高倉教授 髙橋篤志（事務室）
研究教育基盤技術センター運営専門委員会	石渡　明	2012.4.1 ～ 2014.3.31	
研究教育基盤技術センターワーキンググループ	石渡　明		運営専門委員会から
埋蔵文化財調査室運営委員会	佐藤源之	2012.4.1 ～ 2014.3.31	教授・准教授

埋蔵文化財調査室運営専門委員会			川内キャンパス整備委員会推薦
埋蔵文化財調査室運営専門委員会調査部会			
研究所連携プロジェクト GL 会議	平野直人	2013.4.1 ～	第 4 期プロジェクト 2012 ～
六カ所村センター検討委員会（仮称）	佐藤源之	2013.4.1 ～ 2014.3.31	
学術資源研究公開センター運営専門委員会	栗林　均	2012.4.1 ～ 2014.3.31	
川内キャンパス環境整備委員会	センター長	2013.4.1 ～ 2014.3.31	
川内北キャンパス協議会	センター長	2013.4.1 ～ 2014.3.31	
川北合同研究棟管理委員会	岡　洋樹	任期なし	センター長
安全保障輸出管理アドバイザー	佐藤源之	2012.4.1 ～	※年度当初佐藤教授としていたが、高橋助教継続（発足当初から佐藤教授、佐藤研助教が担当（2013.6.3 補足））
安全保障輸出管理アドバイザー 兼安全保障輸出管理委員会	高橋一徳	2012.4.1 ～	
安全保障輸出管理担当者	高橋篤志	2013.4.1 ～	
産学連携推進会議	高倉浩樹	2013.4.1 ～	副センター長 (研究戦略担当)
文系サマープログラム実施 WG 委員	高倉浩樹	2013.4.1 ～	
「東北大学サイエンスカフェ」WG 委員	岡　洋樹		
	瀬川昌久		
	小川千穂		
環境・安全委員会安全管理専門委員会危険物質総合管理システム専門部会専門部員	鹿野秀一 (管理責任者)	2013.4.1 ～ 2015.3.31	日野専門員 (運用担当者)
リーディングプログラム推進機構運営会議	センター長	2013.4.1 ～ 2015.3.31	
(研究用微生物安全管理規定) 微生物安全主任者	千葉　聡	2013.4.1 ～	

＜センター内各種委員会＞

委　員　会　名	委員氏名	任　期	備　考
センター長	岡　洋樹		
副センター長			
副センター長（総務担当）	石渡　明		
副センター長（研究戦略担当）	高倉浩樹		
執行会議	センター長		
	副センター長 2 名		
	総務委員 2 名		
	事　務　長		
執行会議の参議	専門員及び関係教員が必要に応じて参加		

総務委員			
研究支援担当総務委員	瀬川昌久		
情報担当総務委員	柳田賢二		
総務担当副センター長（石渡）が担当して、委員長を兼任する委員会			
将来計画委員会	佐藤源之		副委員長
	磯部　彰		
	高倉浩樹		
	千葉　聡		
	平野直人		
教務委員会	明日香寿川		留学生・学生発表会担当
	柳田賢二		
研究戦略担当副センター長（高倉）が担当して、委員長を兼任する委員会			
国際交流委員会	寺山恭輔		
	工藤純一		
	塩谷昌史		
	後藤章夫		
	金　賢貞		
研究推進委員会	石渡　明		
	工藤純一		
情報担当総務委員（柳田）が担当して、委員長を兼任する委員会			
広報情報委員会	栗林　均		
	高倉浩樹		
	平野直人		
	宮本　毅		
	高橋陽一		
評価データ委員会	佐藤源之		（部局評価責任者）石渡教授
	鹿野秀一		
	上野稔弘		
研究支援担当総務委員（瀬川）が担当して、委員長を兼任する委員会			
編集出版委員会	寺山恭輔		
	荒武賢一郎		
	明日香寿川		
	石井　敦		
	金　賢貞		
図書資料委員会	寺山恭輔		
	上野稔弘		
センター長直属の専門委員会			
ハラスメント防止対策委員会	センター長		
	副センター長２名		
	事務長		
ネットワーク委員会	栗林　均		委員長
	平野直人		
	後藤章夫		

片平まつり実行委員会	岡　洋樹		委員長
	平野直人		
	宮本　毅		
地域研究コンソーシアム委員会	上野稔弘		委員長
	瀬川昌久		
	塩谷昌史		
北東アジア研究交流	岡　洋樹		委員長
ネットワーク委員会	石井　敦		
公開講演会・シンポジウム	瀬川昌久		委員長
企画委員会	鹿野秀一		
	金　賢貞		
文学研究科等安全衛生委員会	柳田賢二		
その他			
ハラスメント相談窓口	石井　敦		
	金　賢貞		
	及川二美		
親睦会	平野直人		
	塩谷昌史		
	高橋陽一		
上廣歴史資料学研究部門委員会	平川新		
	荒武賢一朗		
	岡洋　樹（執行会議）		
	石渡　明（執行会議）		
	瀬川昌久（執行会議）		
	柳田賢二（執行会議）		
	高倉浩樹（執行会議）		

⑵ 研究資金

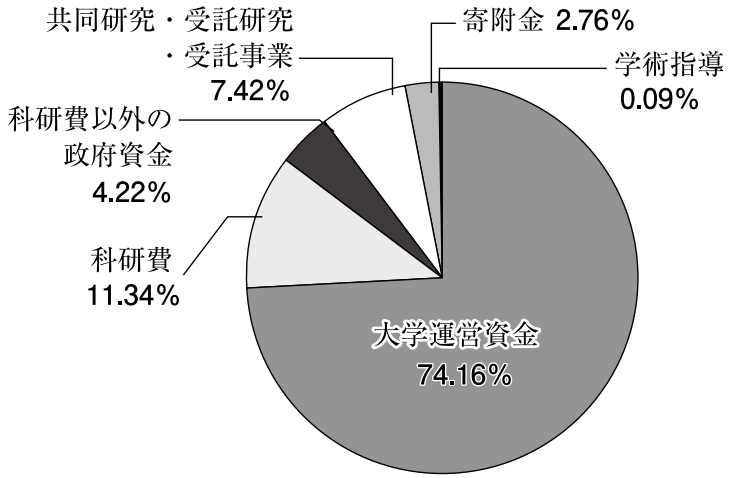
⒜ 経費総額

※ 2013（平成 25）年度は見込額 （単位：百万円）

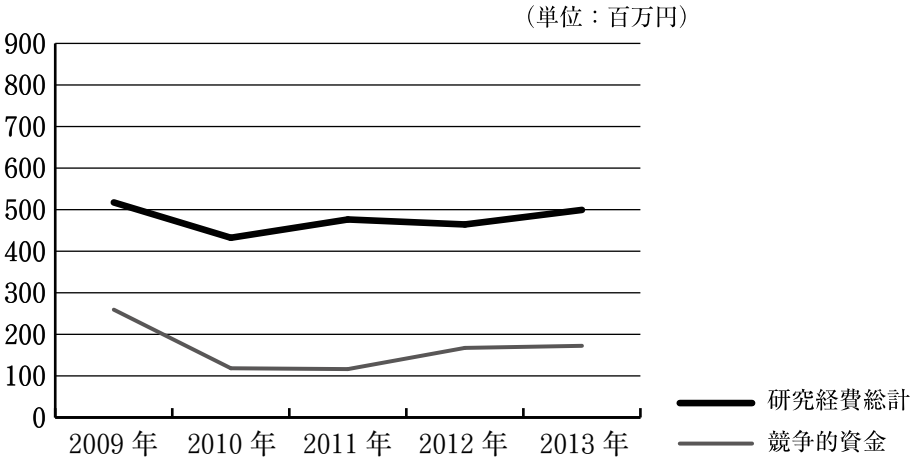
区分		2009	2010	2011	2012	2013
大学運営資金		517	432	476	464	499
競争的資金	科学研究費補助金	78	78	77	68	64
	科学研究費補助金以外の政府資金	136	0	0	0	0
	民間等との共同研究	14	16	8	0	0
	受託研究	21	17	30	51	64
	受託事業	6	5	0	3	4
	寄附金	2	1	1	45	40
	学術指導	2	1	0	0	0
総計		776	550	592	631	671
総計に占める競争的資金の割合		33%	21%	20%	26%	26%

※競争的資金の各区分ごとの 100 万円未満の額は 50 万円以上切り上げ、50 万円未満切り捨て。このことにより他の集計結果と合致しない場合がある。

研究活動関連経費の構成（2009 ～ 2013 年度の平均）



経費総額と競争的資金の推移



(B) 歳出決算額（国立学校特別会計／大学運営資金・寄付金）

(単位：百万円)

区　　分		2009 年度	2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度
人件費	運営費交付金	280	279	292	236	250
物件費	運営費交付金	205	134	160	144	151
	その他	32	19	24	84	98
計		517	432	476	464	499

⑹ 科研費の申請・採択状況

＜種目別実績＞

（単位：百万円）

研究種目	2009年度		2010年度		2011年度		2012年度		2013年度		計	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
特別推進	(1) 1	24	(2) 1	28	(2) 1	28	(2) 1	22	(1) 0		(8) 4	102
新学術領域（公募）	(1) 0		(1) 1	1	(1) 1	1					(3) 2	2
基盤（S）	(1) 1	15	(1) 1	16			(1) 0				(3) 2	31
基盤（A）			(1) 0		(2) 2	19	(3) 2	19	(2) 2	15	(8) 6	53
基盤（B）	(11) 6	23	(7) 6	20	(8) 5	15	(10) 4	11	(7) 5	15	(43) 26	84
基盤（C）	(15) 10	9	(13) 7	6	(11) 5	5	(10) 5	4	(11) 11	13	(60) 38	37
萌芽 (2008年度まで) 挑戦的萌芽 (2009年度から)	(5) 1	1	(7) 1	0	(3) 2	2	(6) 4	4	(5) 3	2	(26) 11	9
若手（S）	(1) 0										(1) 0	0
若手（A）	(1) 0						(1) 0				(2) 0	0
若手（B）	(10) 3	3	(15) 5	5	(18) 6	6	(9) 5	3	(9) 4	3	(61) 23	20
若手研究スタートアップ (2009年度まで) 活動スタート支援 (2009年度から)	(5) 0		(4) 0				(2) 1	1	(4) 2	2	(15) 3	3
特別研究員推奨費	(3) 3	2	(3) 3	2	(2) 2	1	(3) 3	2	(3) 7	6	(14) 18	13
研究成果公開促進 (学術図書)	(2) 1	1	(4) 0		(2) 1	1	(1) 1	2	(2) 2	5	(11) 5	9
研究成果公開促進 (研究成果データベース)									(1) 1	3	(1) 1	3
計	(56) 26	78	(58) 25	78	(49) 25	78	(48) 26	68	(45) 37	64	(256) 139	366

※件数の上段（ ）書は申請件数、下段は採択件数。金額は研究代表者として採択された研究課題の直接経費の金額を表す。

※各種目ごとの100万円未満の額は50万円以上切り上げ、50万円未満切り捨て。このことにより他の集計結果と合致しない場合がある。

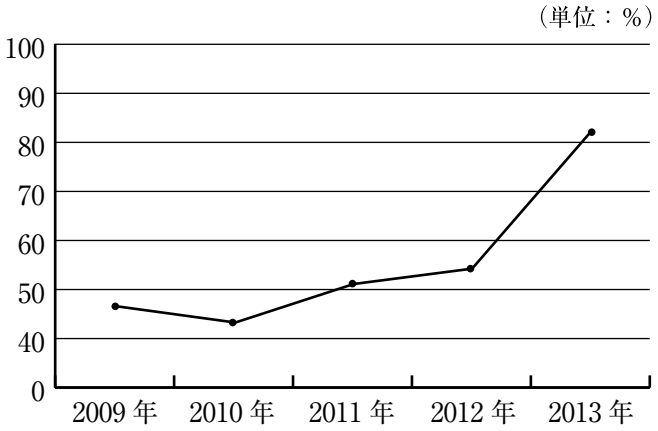
＜一人当たりの申請率（申請件数／教員数)＞

2009 年度 (教員数 23 名)	2010 年度 (教員数 24 名)	2011 年度 (教員数 24 名)	2012 年度 (教員数 22 名)	2013 年度 (教員数 25 名)	平均
2.43	2.42	2.04	2.18	1.80	2.17

＜一人当たりの獲得額（採択金額／教員数)＞（単位：百万円)

2009 年度	2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度	平均
3.39	3.25	3.25	3.09	2.54	3.10

＜科研費採択率実績（2009 年度～ 2013 年度)＞



⑹ 外部資金受入状況

＜民間等との共同研究、受託研究、奨学寄付金受け入れ状況＞

(金額単位：千円)

区　分		2009 年	2010 年	2011 年	2012 年	2013 年
民間等との共同研究	件数	2	2	2	0	3
	金額	13,152	15,352	7,100	0	0
受　託　研　究	件数	5	7	8	6	5
	金額	20,329	16,748	29,085	50,372	63,367
受　託　事　業	件数	2	2	0	1	3
	金額	5,780	4,260	0	2,480	3,454
寄　附　金	件数	2	1	1	4	4
	金額	1,182	1,000	300	44,280	39,810
学　術　指　導	件数	2	1	0	0	0
	金額	1,210	500	0	0	0
計	件数	13	13	11	11	15
	金額	41,653	37,860	36,485	97,132	106,631

＜科研費以外の外部資金明細＞

（金額単位：千円）

区分	2008 年度		2009 年度		2010 年度	
	金額	受　入　先	金額	受　入　先	金額	受　入　先
共同研究	12,025	東北電力㈱研究開発センター	12,052	東北電力㈱研究開発センター	14,252	東北電力㈱研究開発センター
			1,100	三菱電機特機システム㈱	1,100	三菱電機特機システム㈱
受託研究	2,860	科学技術振興機構	5,900	科学技術振興機構	2,200	科学技術振興機構
	2,500	日本学術振興会	7,865	金沢大学	1,300	科学技術振興機構
	2,049	埼玉大学	1,300	埼玉大学	7,099	金沢大学
			4,264	福島大学	1,199	埼玉大学
			1,000	宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団	950	宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団
					3,500	福島大学
					500	三菱電機㈱
受託事業	5,500	日本学術振興会	5,500	日本学術振興会	2,010	日本学術振興会
			280	日本学術振興会	2,250	日本学術振興会
寄附金	220	村田学術振興財団	1,000	カシオ科学振興財団	1,000	稲森財団
	700	日本科学協会	182	日本科学協会		
	2,150	高速道路関連社会貢献協議会				
	350	斎藤報恩会				
学術指導	500	三菱電機特機システム㈱	1,000	鹿島建設㈱土木設計本部	500	鹿島建設㈱土木設計本部
			210	日本ガス協会		

区分	2011 年度		2012 年度		2013 年度	
	金額	受　入　先	金額	受　入　先	金額	受　入　先
共同研究	6,000	東北電力㈱研究開発センター				
	1,100	三菱電機特機システム㈱				
受託研究	1,300	科学技術振興機構	4,264	宮城県地域文化遺産復興プロジェクト実行委員会	6,500	宮城県地域文化遺産復興プロジェクト実行委員会
	760	宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団	2,080	宮城県地域文化遺産復興プロジェクト実行委員会	5,967	金沢大学
	6,744	金沢大学	6,070	金沢大学	13,750	独立行政法人情報通信研究機構
	3,215	福島大学	14,960	独立行政法人情報通信研究機構	34,210	独立行政法人情報通信研究機構
	6,500	科学技術振興機構	22,473	独立行政法人情報通信研究機構	2,940	独立行政法人土木研究所
	3,800	栗原市	525	鹿島建設株式会社		
	500	三菱電機				
	6,266	宮城県				
受託事業			2,480	日本学術振興会	2,460	日本学術振興会
					74	宮城県知事
					920	日本学術振興会
寄附金	300	公益財団法人野村財団	24,000	特例民法法人上廣倫理財団	28,000	公益財団法人上廣倫理財団
			4,990	三井物産株式会社	11,440	公益財団法人東レ科学振興会
			15,130	公益財団法人東レ科学振興会	100	財団法人東北開発記念財団
			160	公益財団法人日本科学協会	270	公益法人トヨタ財団
学術指導						

＜科研費以外の外部資金一覧（2013 年度）＞

（金額単位：円）

名　称　・　題　目	研究者	相手方・委託者・寄附者	金　額
民間等との共同研究			
Pi-SAR2 公募研究：自然災害の状況把握のためのレーダポーラリメトリ・インターフェロメトリ応用研究	佐藤源之	独立行政法人情報通信研究機構	0
偏波校正と東北アジア地域におけるレーダポーラリメトリを利用した環境計測	佐藤源之	独立行政法人宇宙航空研究開発機構	0
多時間偏波 SAR データを利用した自然災害被害の被災状況把握	佐藤源之	独立行政法人宇宙航空研究開発機構	0
受託研究			
宮城県被災民俗文化財調査成果公開事業	高倉浩樹	宮城県地域文化遺産復興プロジェクト実行委員会	6,500,000
環境研究総合推進費「大気汚染物質削減交渉に資するコベネフィットアプローチの制度設計に関する研究」	明日香壽川	金沢大学 (環境省総合環境政策局再委託)	5,967,000
電磁波を用いた建造物非破壊センシング技術の研究開発課題 イ 建造物非破壊診断技術の研究開発	佐藤源之	独立行政法人情報通信研究機構	13,750,000
電磁波を用いた建造物非破壊センシング技術の研究開発課題 ア 建造物非破壊センサーの研究開発	佐藤源之	独立行政法人情報通信研究機構	34,210,000
平成 25 年度堤防及び河川構造物の総合的な点検・診断技術の実用化に関する研究開発(その 2)	佐藤源之	独立行政法人土木研究所	2,940,000
受託事業			
二国間交流事業	鹿野秀一	独立行政法人日本学術振興会	2,460,000
みやぎ県民大学「大学開放講座」	センター長	宮城県知事	73,500
論文博士号取得希望者に対する支援事業	岡洋樹	独立行政法人日本学術振興会	920,000
寄附金			
上廣歴史資料学研究部門（寄附研究部門）	平川新	公益財団法人上廣倫理財団	28,000,000
公益財団法人東レ科学振興会 第 52 回東レ科学技術研究助成	平野直人	公益財団法人東レ科学振興会 (平野直人)	11,440,000
財団法人東北開発記念財団平成 25 年度海外派遣援助	稲澤努	財団法人東北開発記念財団（稲澤努）	100,000
トヨタ財団 2011 年度　研究助成	李 善姫	公益財団法人トヨタ財団（李善姫）	270,000
学術指導			

＜補助金間接経費＞

（金額単位：百万円）

区　　分		2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度
補助金間接経　費	件　数	26	22	22	27
	金　額（百万円）	12	12	8	8
受入該当費目		特別推進、基盤研究　S、A、B、C 若手 B	特別推進、基盤研究　A、B、C 若手 B 挑戦的萌芽	特別推進、基盤研究　A、B、C 若手 B 挑戦的萌芽	基盤研究　A、B、C 挑戦的萌芽 若手 B 研究活動スタート支援

＜ 2013 年度獲得科研費一覧＞

（金額単位：千円）

No.	研究種目	代表者氏名 研究者番号	区分	研究期間	研究課題名（課題番号）	交付額	間接経費
1	基盤 A	佐藤源之 40178778	一般	2011-2013	最適空間サンプリングによる地雷検知用レーダイメージングの効率化（23246076）	9,000	2,700
2	基盤 A	岡　洋樹 00223991	海外	2011-2014	東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究（23251003）	5,600	1,680
3	基盤 B	上野稔弘 10333907	海外	2009-2013	1920-40 年代の中国・ソ連における民族政策の比較研究（21401006）	1,900	570
4	基盤 B	高倉浩樹 00305400	一般	2010-2013	ミクロ環境史の復元手法による北極圏における温暖化の先住民社会への影響分析（22310148）	1,800	540
5	基盤 B	栗林　均 30153381	一般	2010-2013	中世モンゴル語研究の統合（22320076）	4,000	1,200
6	基盤 B	谷口宏充 70125251	一般	2012-2015	東日本大震災からの復興を支援する科学コミュニケータ養成プログラムの開発と実践（24300262）	3,400	1,020
7	基盤 B	千葉　聡 10236812	一般	2012-2014	過去で未来を守る：保全古生物学の確立に向けて（24340128）	4,000	1,200
8	基盤 C	山田勝芳 20002553	一般	2011-2013	「工藤忠関係資料」による東北アジア近代史研究（23520858）	800	240
9	基盤 C	塩谷昌史 70312684	一般	2011-2013	ユーラシアにおける流通ネットワークの再編―ロシア製綿織物輸出の観点より―（23530402）	1,000	300
10	基盤 C	石渡　明 90184572	一般	2011-2013	日本の古生代オフィオライトの多様性と沈み込み帯プロセス（23540554）	500	150
11	基盤 C	瀬川　昌久 00187832	一般	2012-2014	現代中国社会の変容とその研究視座の変遷―宗族を通した検証（24520907）	300	90
12	基盤 C	李　善姫 30546627	一般	2012-2014	震災後の東北における地域再編と結婚移民女性の社会参画に関する文化人類学的考察（24520908）	800	240
13	基盤 C	高橋一徳 60431475	一般	2012-2014	土壌特性の解析による地雷検知センサ性能評価とその応用（24612001）	2,200	660
14	基盤 C	明日香壽川 90291955	一般	2013-2015	経済モデル分析を中心とした炭素制約が国際競争力に与える影響の学際的分析（25340135）	1,300	390

No.	研究種目	代表者氏名 研究者番号	区分	研究期間	研究課題名（課題番号）	交付額	間接経費
15	基盤 C	石井　敦 30391064	一般	2013-2015	炭素隔離技術のデモンストレーションプロジェクト：マスメディアと意思決定要因分析（25340136）	1,500	450
16	基盤 C	磯部　彰 90143841	一般	2013-2016	明清教派系宝巻盛衰の研究―武神と聖母神信仰をめぐって―（25370040）	1,100	330
17	基盤 C	柳田賢二 90241562	一般	2013-2015	現在の中央アジアにおけるリングァフランカとしてのロシア語の特徴と変容の研究（25370458）	1,400	420
18	基盤 C	鹿野秀一 70154185	一般	2013-2015	浅い湖沼におけるハス群落拡大がメタン食物網へあたえる影響（25440232）	1,600	480
19	挑戦的萌芽	徳田由佳子 00375213		2012-2014	ロシア新聞データベースの構築と日露報道の比較研究（24653112）	500	150
20	挑戦的萌芽	平野直人 00451831		2012-2013	巨大地震後の太平洋プレート応力場改変の実体と火山活動（24654180）	1,300	390
21	挑戦的萌芽	高倉浩樹 00305400		2013-2015	東日本大震災後の民俗文化にかかわる災害民族誌研究の国際的ネットワーク構築(25580179)	600	180
22	若手 B	高橋陽一 40568466		2011-2013	日本近世近代における観光地形成過程の歴史学的研究（23720313）	500	150
23	若手 B	佐藤憲行 50534179		2011-2013	漢人商業地区「買売城」から見る清代モンゴルの経済構造（23720341）	1,100	330
24	若手 B	巽由樹子 90643255		2013-2016	近代ロシアにおける正教系定期刊行物と世論形成との関係についての研究(25770262)	700	210
25	若手 B	稲澤　努 30632228		2013-2015	中国における定住政策とエスニックカテゴリーの変遷―山地民、水上居民を対象として（25770302）	700	210
26	研究活動スタート支援	金　賢貞 20638853		2012-2013	現代韓国のまちづくりにおける負の遺産とガバナンスに関する調査研究(24820006)	1,100	330
27	研究活動スタート支援	佐々木聡 60704963		2013-2014	祥瑞災異思想の六朝以降の展開と社会受容―天文五行占を中心として―(25884003)	700	210
28	特別研究員奨励費	亀田勇一		2011-2013	リソツボ上科貝類とその共生微生物における洞窟・地下水環境への進出と適応過程の解明（23・10645）	800	0
29	特別研究員奨励費	森井悠太		2011-2013	近縁種間における生殖隔離の成立と維持機構の研究（23・6453）	600	0
30	特別研究員奨励費	金本圭一朗		2011-2013	国際制度間の相互連関に関する研究：クリーン開発メカニズムを事例に（23・8456）	400	0
31	特別研究員奨励費	和田慎一郎		2012-2013	微小地域の微小貝における種分化プロセスの解明（24・2801）	1,000	0
32	特別研究員奨励費	鈴木紀之 00724965		2012-2014	繁殖形態の多様性と熱帯における多種共存メカニズム（24・3112）	1,100	0
33	特別研究員奨励費	朝山慎一郎 50726908		2012-2013	日本の気候変動政策の意思決定過程におけるマスメディアの役割とその影響に関する研究（24・9803）	900	0
34	特別研究員奨励費	小林宏至		2013-2015	ポスト近代社会における中間集団としての宗族組織の社会人類学的研究（25・6576）	1,100	0
35	研究成果公開促進費(学術図書)	磯部　彰 90143841		2013-2013	清朝宮廷演劇文化の研究（255050）	2,700	0

No.	研究種目	代表者氏名 研究者番号	区分	研究期間	研究課題名（課題番号）	交付額	間接経費
36	研究成果公開促進費(学術図書)	高倉浩樹 00305400		2013-2014	Arctic Pastoralist Sakha:Ethnography of Evolution and Micro-adaptation in Siberia（256002）	2,500	0
37	研究成果公開促進費（データベース）	磯部　彰 90143841		2013-2014	東アジア出版文化研究資料画像データベース（257001）	2,900	0
研究者代表分　小計						63,400	14,820

No.	研究種目	代表者氏名 研究者番号	区分		研究課題名（課題番号）	交付額	間接経費
	基盤 S	佐藤源之 40178778	一般	分担金	乾燥地災害学の体系化（鳥取大学・篠田教授）(25220201)	8,400	2,520
	基盤 A	石井　敦 30391064	一般	分担金	レジームコンプレックスとしての国際漁業資源管理：意思決定要因と有効性分析(早稲田大学･太田教授)(23243031)	1,930	579
	基盤 A	荒武賢一朗 90581140	一般	分担金	環東シナ海・環日本海沿岸域の文化交渉と歴史生態をめぐる学術的研究（関西大学・野間教授）(22242028)	100	30
	基盤 B	佐藤源之 40178778	一般	分担金	貯水施設および基礎の可視化型健全性監視技術の開発（農業・食品産業技術総合研究機構・黒田主任研究員）(25292147)	700	210
	基盤 B	荒武賢一朗 90581140	一般	分担金	近世・近代移行期における公共財供給と『地域社会』：比較史の視角から（東京大学・谷本教授）(25285104)	600	180
研究分担者分　小計						11,730	3,519
合　　計						75,130	18,339

研究活動

⑴ プロジェクト研究ユニット

東北アジア研究センターは、平成 19 年度の組織改編によって、新たに基礎研究部門とプロジェクト研究部門を設置した。プロジェクト研究部門は、センター専任・兼務教員によって構成されるプロジェクト・ベースの組織であり、これにより大規模研究プロジェクトを立ち上げるとともに、外部資金獲得の受け皿とすることを目的としたものである。

本年度は、以下の 8 研究ユニットが活動した。

Ⓐ 2013 年度センター・プロジェクト部門研究ユニット一覧

〔ユニット名／(研究年度・代表者)〕

- シベリアにおける人類生態と社会技術の相互作用研究ユニット
  ／ (2009 年度～ 2013 年度・高倉浩樹)
- 21 世紀東北アジア地域像の構築に関する研究ユニット
  ／ (2009 年度～ 2015 年度・岡　洋樹)
- 森林火災から発生する二酸化炭素削減研究ユニット
  ／ (2011 年度～ 2013 年度・工藤純一)
- 現代中国社会の変容に関する文化人類学研究ユニット
  ／ (2012 年度～ 2015 年度・瀬川昌久)
- 20 世紀ロシア・中国史再考研究ユニット
  ／ (2012 年度～ 2016 年度・寺山恭輔)
- 減災をめざした電波科学研究ユニット
  ／ (2013 年度～ 2015 年度・佐藤源之)
- 出版文化資料データベース研究ユニット
  ／ (2013 年度～ 2015 年度・磯部　彰)
- 東北アジア言語文化遺産研究ユニット
  ／ (2013 年度～ 2016 年度・栗林　均)

<table>
<tr><td>ユニット名</td><td colspan="4">シベリアにおける人類生態と社会技術の相互作用研究ユニット</td></tr>
<tr><td>認可期間</td><td colspan="4">2009（平成 21）年度 ～ 2013（平成 25）年度（5 年間）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">組　織
(下線が代表者)</td><td>氏　名</td><td>所　　属</td><td>氏　名</td><td>所　　属</td></tr>
<tr><td><u>高倉浩樹</u>
奥村　誠</td><td>東北アジア研究センター教授
災害科学国際研究所教授
(兼務教員)</td><td>石井　敦
滝澤克彦

山田仁史</td><td>東北アジア研究センター准教授
東北アジア研究センター
教育研究支援者
文学研究科(兼務教員)</td></tr>
<tr><td rowspan="3">研　究
モニター</td><td colspan="2">氏　名</td><td colspan="2">所　　属</td></tr>
<tr><td colspan="2">1　岸上信啓
2　吉田睦
3　加藤博文</td><td colspan="2">国立民族学博物館教授
千葉大学文学部教授
北海道大学アイヌ・先住民研究センター教授</td></tr>
<tr><td colspan="2">外部評価会の実施</td><td colspan="2">(最終)：2014 年 2 月 6 日
参加者：岸上伸啓、吉田睦</td></tr>
<tr><td>研究経費</td><td colspan="4">(研究支援者、RA などの配置) 教育研究支援者
(研究スペース配分など) 研究室 1 スパン
(その他の主たる外部資金)
科学研究費補助金ほか政府関係資金〔金額 1,800,000 円〕
センター長裁量経費〔金額 20,000 円〕</td></tr>
<tr><td>ユニットの目標・目的</td><td colspan="4">自然科学の観点からみれば、シベリアは極寒の気候を伴う脆弱な生態系であるとされています。しかし社会科学はむしろそこに、歴史的にも政治的にも独自な多民族的な社会構造と特異な都市—農村インフラを備えた空間を見いだし、研究の対象としてきました。本研究ユニットの目的は、食糧生産、住居、水道設備、輸送システムなど関わる伝統的な文化、および地域に特有な形で近代化された技術システムに着目しながら、ミクロ環境と人間の社会文化的適応との相互作用を明らかにすることにあります。具体的には文化人類学と土木計画学が連携することで新しいシベリア地域像を解明するとともに、その成果を調査地域に対して還元する方法の開発を目指しています。</td></tr>
<tr><td>研究の目的と本年度の成果ならびに研究成果の重要性の概要</td><td colspan="4">本ユニットは、二つの共同研究「氷融洪水とその社会対応から見る極北圏地域社会の比較研究」(A) と「協働による展示実践を通した人類学方法論の探究」(B) を推進しながら、文理融合及び応用的シベリア地域研究を行ってきたが、その取りまとめを行うことが本年度の目的だった。このうち (A) については科研費を共同研究の活動報告書に述べた通り、地球温暖化の影響下にあるレナ川洪水と地域社会との人間＝生態系について人類学・河川工学・リモートセンシングを統合化した知見をえることに成功した。その成果については、総合地球環境学研究所との協力関係（MOU）との下に、Springer 出版社および京都大学学術出版会からの論文集（高倉・奥村・石井が寄稿）として取</td></tr>
</table>

	りまとめる予定である。また兼務教員の山田仁史氏によって、雪氷水に関するシベリアの先住民の神話･フォークロアをまとめた書籍（山田仁史･永山ゆかり･藤原潤子（編）『水・雪・氷のフォークロア：北方の伝承世界』（仮題）勉誠出版）は年度内に刊行予定である。(B) については共同研究としての活動は 2012 年度で終了したが､その成果論文集についての取りまとめを行った。その結果、2013 年度中に完成原稿を取りまとめが終わり、2014 年度中に印刷できる見込みとなった（高倉浩樹編『展示する人類学』昭和堂、予定)。この論集では研究者による論文と展示に関わった実務家によるコラムで構成されるが、その中では 2012 年度の研究交流推進事業でロシアから招聘した I. アモーソフ氏も含まれている。なお、(B) の共同研究の成果からは、応用映像人類学に関わる方法論についての論文も発表され 2014 年度中に刊行予定である（分藤大翼ほか編『フィールド映像術（FENICS シリーズ 15 巻)』古今書院、所収高倉論文）同様に、2012 年度に同事業として支援した日本文化人類学会公開シンポジウム「食と儀礼をめぐる地球の旅―先住民文化からみたシベリアとアメリカ」の成果出版物については、元教育研究支援者の山口未花子の協力の下で原稿を取りまとめた。東北大学出版会での出版物として刊行することを目的としており、現在、同出版会編集委員会での査読を経て採択が決まった。
ユニットの成果を公表する URL	http://www.cneas.tohoku.ac.jp/unit/siberia/html/unit/siberia/mysite1/exchange.html

東北アジア地域研究としての意義

東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕

〈位置づけの内容〉北米極北圏もふくめてシベリアの寒冷地としての自然環境に対して人類学・土木計画学・リモートセンシング・博物館学などの学際アプローチによってシベリア研究を刷新した。

東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕

〈対象とした国・地域など〉ロシア・シベリア／北海道

東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください

シベリア地域を文化人類学と河川工学・環境リモートセンシングの手法をつかって解明することは、国内はもとより国外でも例がなくきわめて独自性が高い。実際に 5 年間の活動を通して、理系分野との学際的シベリア研究組織化のためのネットワークを構築した。また研究成果を現地に還元するという応用地域研究としての側面ももっており、この分野に関しては北海道、北米、東南アジアも含めた形で比較研究を行った。これらを通してシベリア地域研究を学際的にかつ地域比較の分野で新しい機軸を構築できた。

新規性

新規性の有無〔有〕

〈新規性の内容〉シベリア研究を文理連携で行う点。従来の文系的な地域研究に加えて、土木計画という社会的インフラについての研究を行う事。

学際性

文理融合型の研究か〔はい〕

〈参加した専門分野〉文化人類学、生態人類学、神話学、土木計画学、環境リモートセンシング、河川工学、博物館学

文系・理系での学際性・連携性の有無〔有〕
〈参加した専門分野〉文化人類学、生態人類学、神話学、土木計画学、環境リモートセンシング、河川工学、博物館学

専門性
専門分野内部での意義
〈専門分野名〉
〈内容〉＊ユニットの主催した共同研究報告書において記載する

国際性
国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔有〕
〈国名・研究機関名〉ロシア　ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学北方民族問題研究所（ヤクーツク市）
国外の研究者の参加の有無〔無〕
〈参加研究者の所属・参加形態〉
学術交流協定活用の有無〔有〕
〈協定の名称〉ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学北方民族問題研究所と東北アジア研との部局間協定
外国語による成果公表の有無〔有〕
〈言語〉英語

教育上の効果
学生の参加による教育上の効果〔有〕
〈参加学生の所属〉文学部・文学研究科・環境科学研究科
〈学生による成果発表〉なし
ポスドクの活用の有無〔有〕
〈活用形態〉教育研究支援者

教育上の効果についてアピールしてください
公開の研究会をおこなうことで、学生にも参加可能とした。

社会還元
社会への成果還元・啓蒙が目的に含まれていたか〔いいえ〕
〈内容〉
社会への成果還元の有無〔有〕
〈還元の形態〉北海道立北方民族博物館特別展への資料提供

学内連携
学内他部局との組織上の連携はあったか〔有〕
〈連携部局名〉文学研究科（兼務教員）、災害科学国際研究所（兼務教員）
学内他部局教員の研究への参加の有無〔有〕
〈参加教員の所属〉文学研究科、災害科学国際研究所

他組織との連携
国内の研究機関との連携・協力の有無〔有〕
〈連携組織名〉北海道立北方民族博物館（部局間協定）、総合地球環境学研究所（MOU）

〈連携の形態〉特別展示における写真提供（北方民博)、研究会の共同開催（地球研）
国内の研究機関の研究への参加の有無〔有〕
〈参加研究者の所属〉JAMSTEC

成果発表
研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと）
研究会〔　　回〕
公開の会議・シンポジウム〔　　回〕
国際会議〔　　回〕
＊ユニットが主催する共同研究の報告書に記載

論文・著書
〔雑誌論文〕 計（　）件
〔学会発表〕 計（　）件
〔図　　書〕 計（　）件
〔その他の公表〕 計（　）件
＊ユニットが主催する共同研究の報告書に記載

共同研究の全般的成果のアピール
共同研究の報告書で記載

第三者による評価・受賞・報道など
特になし

本年度のユニット活性化のための具体的な取り組み
（科研費申請　（課題名、種目、目的の概要）
（その他資金への申請）
・資金的な体制はすでに充実している
（その他ユニットの機能を展開するための具体的な活動内容）

来年度のユニット活性化のための具体的な取り組みの予定
今年度で終了のため特になし

主要なユニットの研究成果

<table>
<tr><td>ユニット名</td><td colspan="4">21 世紀東北アジア地域像の構築に関する研究ユニット</td></tr>
<tr><td>認可期間</td><td colspan="4">2009（平成 21）年度 ～ 2015（平成 27）年度（7 年間）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">組　織
(下線が代表者)</td><td>氏　名</td><td>所　　属</td><td>氏　名</td><td>所　　属</td></tr>
<tr><td><u>岡　洋樹</u>
佐藤源之
奥村　誠
石渡　明
瀬川昌久</td><td>東北アジア研究センター
東北アジア研究センター
東北アジア研究センター
東北アジア研究センター
東北アジア研究センター</td><td>栗林　均
工藤純一
鹿野秀一
高倉浩樹</td><td>東北アジア研究センター
東北アジア研究センター
東北アジア研究センター
東北アジア研究センター</td></tr>
<tr><td rowspan="3">研　究
モニター</td><td colspan="2">氏　名</td><td colspan="2">所　　属</td></tr>
<tr><td colspan="2">1　林　裕明
2　華　立
3　下倉　渉</td><td colspan="2">島根県立大学総合政策学部
大阪経済法科大学
東北学院大学文学部</td></tr>
<tr><td colspan="2">外部評価会の実施</td><td colspan="2">(中間・最終)：　　年　月　日
参加者：研究組織　名、モニター　名、その他　名</td></tr>
<tr><td>研究経費</td><td colspan="4">(研究支援者、RA などの配置)
(研究スペース配分など)
(その他の主たる外部資金)
科学研究費補助金ほか政府関係資金〔金額　2,260,000 円〕
センター長裁量経費〔金額　500,000 円〕</td></tr>
<tr><td>ユニットが主催したセンター共同研究</td><td colspan="4">東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究</td></tr>
<tr><td>ユニットの目標・目的</td><td colspan="4">本プロジェクトは、東北アジア研究センター及び内外の研究者・機関が展開する個別課題に関わる共同研究やプロジェクトの成果を統合し、「東北アジアとは何か」という問いに対する回答を準備し、当該地域像を研究者コミュニティーや社会に向けて発信することをミッションとする。具体的には、東北アジアを視座として分野横断的に個別研究成果を組み合わせながら、統合的地域像を創出するために一連の研究集会やシンポジウムを企画・運営する。同時に地域研究が不可欠の要素として要求する研究対象地域の研究者コミュニティーとの国際的連携を確保しながら、地域理解・地域像の共有を目指す。</td></tr>
<tr><td>ユニットの活動目的と本年度の成果</td><td colspan="4">本年度は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (A) による共同研究を引き続き運営した。共同研究には、富山大学・島根県立大学・一橋大学・松山大学・早稲田大学・山形大学の研究者が参加し、ロシア・中国・モンゴルでの資料調査・フィールド調査を実施している。同科研費プロジェクトは、来年度を最終年度としているが、本年度は、これまでの成果に基づいて、3 月 8 日に東京の東北大学東京分室で国際シンポジウム「越境する東北アジア　共生のダイナミ</td></tr>
</table>

	ズム」を開催した。このシンポジウムは、本課題に関連する国内外の研究者を招へいし、東北アジアにおける二つの変動期に関して意見交換を行うことを目的としたもので、ロシア極東連邦大学・中国内蒙古大学から各1名の研究者を招へいして報告を得たほか、国内の研究者による報告・コメントを受けた。また研究分担者は、それぞれ論文・著書・学会発表の形で成果を発表している。
ユニットの成果を公表する URL	

東北アジア地域研究としての意義

東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕

〈位置づけの内容〉本研究は、東北アジアを地域概念として構築することを目的として、内外の研究を統合的に結びつけながら実施される。それゆえ、東北アジア地域研究としての位置づけは明確である。また本年度からは、本ユニットが運営する共同研究「東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究」(平成 23 〜 26 年度) を立ち上げ、ロシア、中国、モンゴルを対象とする科学研究費補助金による調査研究を開始している。

東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕

〈対象とした国・地域など〉中国、ロシア、モンゴル、朝鮮半島、日本

東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください

本ユニットでは、東北アジアを視野とする研究枠組を確立するという目的の下に活動を行っている。本年度からは外部資金を得て、共同研究が立ち上げられた。本ユニットが運営する共同研究「東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究」は、ロシア、中国、モンゴルの変動期における動向を東北アジア大の視野を確保しながら研究することによって、地域社会のさまざまな動向を、東北アジア地域の課題として把握しようとする点で、東北アジア地域研究の研究枠組みとしての有効性を導き出そうとしている。共同研究では、19 世紀末〜 20 世紀初頭を第一変動期、20 世紀末〜 21 世紀初頭を第二変動期として捉えているが、これらはいずれも第一変動期では清朝と帝政ロシア、第二変動期では中国・ソ連という広域の巨大国家の統治の変容・解体という特色を共有している。このことは、東北アジア地域を理解する上で、広域国家の変容という視点が不可欠であることを示している。かかる視野を確保した上で、本共同研究は現地地域社会に焦点を当てたミクロな調査研究を実施している。第一変動期に関しては、清朝統治の弛緩によって生じた中国からの人口流出が、流出先のモンゴル高原で発生せしめた流動的状況や、カザフなどの民族移動の様相が取り上げられる。第二変動期では、ソ連社会主義体制の解体と中国の改革・開放政策による市場経済への移行がもたらす人口流動によって、シベリア、極東に生じた経済的諸条件や社会構成の変化を取り上げて調査研究を進めている。このようなアプローチは、地域の現場のミクロな状況を、東北アジア大のマクロな視野のもとに位置づけることを目指すものであり、東北アジア研究に方法的・実証的な基礎を打ち立てるものと言える。

学際性

文理融合型の研究か〔はい〕

〈参加した専門分野〉

文系・理系での学際性・連携性の有無〔有〕

〈参加した専門分野〉ユニットの研究組織は、東北アジア研究センター内の文系・理系の

研究者をとりこんでおり、個別の共同研究成果をより高いレベルで統合しながら、東北アジア地域研究の確立を目指している。ユニットに参加した研究者の研究分野は、歴史学、言語学、リモートセンシング、地質学、文化人類学、社会人類学、生態学である。

学内連携

学内他部局との組織上の連携はあったか〔無〕
〈連携部局名〉
学内他部局教員の研究への参加の有無〔無〕
〈参加教員の所属〉

他組織との連携

国内の研究機関との連携・協力の有無〔有〕
〈連携組織名〉富山大学極東地域研究センター、島根県立大学北東アジア地域研究センター
〈連携の形態〉部局間学術交流協定による共同研究の実施
国内の研究機関の研究への参加の有無〔有〕
〈参加研究者の所属〉富山大学極東地域研究センター、島根県立大学北東アジア地域研究センター、一橋大学経済研究所、松山大学経済学部、早稲田大学文学学術院、山形大学人文学部（以上科研費分担）
大阪大学大学院言語文化研究科、名古屋大学大学院国際開発研究科、立命館大学経済学部、昭和女子大学（以上シンポジウムでの報告・コメント）

国際性

国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔有〕
〈国名・研究機関名〉中国：内蒙古師範大学、内蒙古大学、モンゴル：モンゴル科学アカデミー歴史研究所、ロシア：ロシア科学アカデミー・シベリア支部
国外の研究者の参加の有無〔有〕
〈参加研究者の所属・参加形態〉内蒙古大学蒙古学学院・シンポジウムでの報告、極東連邦大学・シンポジウムでの報告
学術交流協定活用の有無〔有〕
〈協定の名称〉
　大学間学術交流協定：ロシア科学アカデミー・シベリア支部、モンゴル科学アカデミー
　部局間学術交流協定：内蒙古師範大学旅游学院、同蒙古学学院、内蒙古大学蒙古学学院
外国語による成果公表の有無〔有〕
〈言語〉英語、ロシア語、モンゴル語

対外的活動

研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと）
　研究会〔　回〕
　公開の会議・シンポジウム〔　回〕
　国際会議〔1 回〕

第三者による評価・受賞・報道など

特になし

本年度のユニット活性化のための具体的な取り組み

（科研費申請　（課題名、種目、目的の概要）現行の科研費が来年度最終年度を迎えるため、平成 27 年度以後の新たな科研費申請を検討中

（その他資金への申請）

（その他ユニットの機能を展開するための具体的な活動内容）

来年度のユニット活性化のための具体的な取り組みの予定

最終年度の平成 27 年度は東北アジア研究センター創設 20 周年を迎え、シンポジウムなどの記念行事が予定されているが、本ユニットとしてもこれを機会にシンポジウム開催など中核としての役割を果たしていきたい。

主要なユニットの研究成果

共同研究の実施

科学研究費補助金基盤研究 A「東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究」（課題番号 23251003）

本研究は、ロシア・中国という二つの巨大国家の辺境としての特質を持つ東北アジアにおいて人の動きがもたらす地域社会再編を国際情勢が最も激しく変動した二つの時代で比較検討することにより、大国の利害が絡む辺境地域の共生のあり方を考察するプロジェクトである。ふたつの時代とは、19 世紀末から 20 世紀初頭におけるロシアと清の帝国統治崩壊期、20 世紀末から 21 世紀初頭における社会主義体制の崩壊と市場経済化の時期であり、両時期において最も大国の辺境において諸民族の国境を越えた移動が活発になった時期である。国境を越える人の移動に伴い、大国間の国際政治に揺れながら、地域住民の入植者・移民への反発・警戒、そして異質な入植者や移民を受け入れることで形成した新たな地域社会・コミュニティ構築のあり方などが模索された時期である。従来、共時的にしか捉えてこなかった東北アジアという辺境の地域社会・コミュニティ構築のあり方を通時的に捉えなおし、北東アジアの共生社会のあり方を考察する試みを、当該地域の歴史学、社会人類学、経済学を含む学際的体制で取り組む。

初年度の平成 23（2011）年度以後、共同研究分担者はロシア、モンゴル、中国での現地調査・資料調査を進めてきた。第一変動期班では、対象地域をモンゴル及び中国東北部として、20 世紀初頭の変動期におけるモンゴルの状況に関する研究を進めている。岡洋樹（東北大学東北アジア研究センター　研究代表者）は、1900 年の義和団事変前後のモンゴルの情勢について、モンゴル国立中央公文書館及び内蒙古所蔵の文書資料の調査・解読を進めている。柳澤明（早稲田大学文学学術院）は、内モンゴル東部・東北部から中国東北部にかけての地域に形成された八旗の複合的なエスニック集団の状況について、文書資料と現地調査による研究を行った。井上治（島根県立大学総合政策学部）は、モンゴル国立中央公文書館所蔵資料の調査と現地調査によって、モンゴル国東部に居住するカザフ人が、20 世紀初頭にモンゴルに移住した経緯について研究している。中村篤志（山形大学人文学部）は、清末に北京に伺候した外モンゴルの王公が残した在京中の日記を分析し、モンゴル王公の北京での行動について研究した。第二変動期班では、今村弘子（富山大学極東地域研究センター）が中国東北部におけるロシア国境での国境貿易について、現地での聞き取り調査に基づいて研究しており、馬紅梅（松山大学経済学部）も中露国境ブラゴベシチェンスク及びアムール対岸の黒河で国境を越えた中国人商人の経済活動を調査し、その実態に迫りつつある。堀江典夫（富山大学極東地域研究センター）は、ロシアにおける中国人移民（ディアスポラ）の実態解明を目指すとともに、中央ア

ジアからシベリアに流入する労働者の動向について研究している。雲和広（一橋大学経済研究所）は、ロシア・シベリア及び極東における人口動態の解析を行うことを通じて、国境地域の経済状況の展望を得るための調査・研究を進めている。

本年度はこれらの研究を踏まえて、内外の関連研究者との意見交換を目的として、平成 26 年 3 月 8 日（土）に東北大学東京分室において国際シンポジウム「越境する東北アジア　共生のダイナミズム」を開催した。シンポジウムでは、極東連邦大学准教授セルゲイ・トカチェフが 20 世紀前半におけるウスリー川以南における中国人コミュニティーの居住様態に関する報告を行った。これによれば、同地域の中国人コミュニティーは、ロシア人村落の分布と重なる居住様態を示す一方で、もう一つのマイノリティーである朝鮮人村落とは異なる分布を示すことが明らかになった。また大阪大学大学院言語文化研究家の藤原克美准教授は、20 世紀前半にハルビンで活動したチューリン商会の歴史を取り上げ、その事業内容や、1930 年代以後の日本支配期の変遷を報告した。これらの報告は、本研究の第一変動期に関わる時期に関するものであるが、第二変動期の動向にも示唆的な情報を提供するものといえる。内蒙古大学蒙古学学院白拉都格其教授は、20 世紀前半における内モンゴル東部のジレム盟の政治的中心の所在と変遷について論じ、遊牧社会であった同地域では行政組織としての盟には特定の中心がなかったこと、清朝・民国期の軍閥政府は、ジレム盟領域外の都市に政治的中心をおいてモンゴル人社会の管理を行ったことを指摘した。この点は経済的にも同様のことがいえると思われ、モンゴル地域の政治・経済の特質を考察する上で示唆的な指摘であった。東北大学東北アジア研究センター麻田雅文教育研究支援者は、20 世紀初頭のモンゴルでの鉄道敷設をめぐる国際政治を論じた。鉄道敷設も、モンゴルという現地社会とは関わりのないところで列強・中国により決定されるもので、白拉都格其報告同様、モンゴルの辺境的正確を如実に示す事例といえる。昭和女子大学のフフバートル教授は、20 世紀初頭におけるモンゴル語への近代語彙導入の問題を取り上げ、訳語の創出に伴う逐語訳などの問題点を論じた。松山大学経済学部馬紅梅准教授は、ブラゴベシチェンスクの市場での調査に基づき、中国商人の活発な国境を越えた交易活動を報告した。

以上の報告に対しては、サヴェリエフ教授（名古屋大学）、生田美智子（大阪大学）、松野周治教授（立命館大学）、柳澤明（早稲田大学）、井上治（島根県立大学）、岡洋樹（東北大学）からコメントが行われた。

本年度の科研費プロジェクトの運営を通じて、本センターと富山大学極東地域研究センター、島根県立大学北東アジア地域研究センターとの実質的な研究協力を行うことができたことは、本ユニットの目的に照らして成果と言える。三組織連係の態勢は、本センター及び東北アジア研究にとって様々な選択肢を準備することになろう。

論文・著書

〔雑誌論文〕計（　）件
〔学会発表〕計（　）件
〔図　　書〕計（　）件
〔その他の公表〕計（　）件

<table>
<tr><td>ユニット名</td><td colspan="4">森林火災から発生する二酸化炭素削減研究ユニット</td></tr>
<tr><td>認可期間</td><td colspan="4">2011（平成 23）年度 ～ 2013（平成 25）年度（3 年間）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">組　織
(下線が代表者)</td><td>氏　名</td><td>所　　属</td><td>氏　名</td><td>所　　属</td></tr>
<tr><td>工藤純一

明日香寿川

徳田由佳子

伊藤正直</td><td>東北アジア研究センター
教授
東北アジア研究センター
教授
東北アジア研究センター
技術補佐員
東北アジア研究センター
非常勤講師</td><td>柳澤文孝

河野公一

鳩山紀一郎
Kazi A.
Kalpoma</td><td>山形大学理学部教授
東北アジア研究センター
非常勤講師
東北工業大学講師
東北アジア研究センター
非常勤講師
東京大学講師(東北アジア
研究センター非常勤講師)
東北アジア研究センター教
育研究支援者(客員研究員)</td></tr>
<tr><td rowspan="2">研　究
モニター</td><td colspan="2">氏　名</td><td colspan="2">所　　属</td></tr>
<tr><td colspan="2">1 橋本　征二
2 シャミル マクシュートフ
3 菅沼 拓夫</td><td colspan="2">立命館大学理工学部環境システム工学科 教授
独立行政法人国立環境研究所地球環境研究センター 主席研究員
東北大学サイバーサイエンスセンター 教授</td></tr>
<tr><td></td><td>外部評価会の実施</td><td colspan="2">(最終)：2014 年 2 月 10 日
参加者：研究組織 1 名、モニター 0 名、その他 0 名</td></tr>
<tr><td>研究経費</td><td colspan="4">(研究支援者、RA などの配置)
(研究スペース配分など)
センター長裁量経費〔金額　500,000 円〕</td></tr>
<tr><td>ユニットが主催したセンター共同研究</td><td colspan="4">なし</td></tr>
<tr><td>ユニットの目標・目的</td><td colspan="4">地球温暖化の原因となっている二酸化炭素を大幅に削減するために、人為起源の大規模森林火災の抑制を目的としている。主な課題は ⑴火災の出火から 1 時間以内に消火活動を行うための技術開発、⑵森林火災から発生する二酸化炭素量の測定方法の開発、⑶森林火災から発生する二酸化炭素排出量取引構想の開発、⑷ロシアをケーススタディとするスキームの開発、⑸研究過程で得られる衛星データ解析の応用研究とする。</td></tr>
</table>

ユニットの活動目的と本年度の成果	森林火災から発生する二酸化炭素削減研究は、総論の政策面と各論の技術面から成り立っている。昨年度は、総論の政策面として、森林火災を削減することが二酸化炭素削減の有効手段であることの啓蒙活動を文科本省、外務本省へレクチャーした。その結果、本構想についての信頼性を調査するために調査費が来年度予算化される可能性があったが、実際にはつかなかった。本年度の本研究の核心部分はこれ以上進展することができなかった。 しかし、目的⑸研究過程で得られる衛星データ解析の応用研究では、中国からの越境大気汚染を MODIS 衛星画像により定性的に動態解析する方法を確立した。これは、森林火災で発生する煙検出の応用技術である。関連研究は日本リモートセンシング学会に論文として採択された。また、PM2.5 を含む越境大気汚染は年々深刻になっており、中国だけでなく我が国への影響も大きい。産経新聞では本研究での解析画像を 2014 年 2 月 27 日の朝刊一面で大きく取り上げた。
ユニットの成果を公表する URL	http://www.cneas.tohoku.ac.jp/news/2013/unit01.html

東北アジア地域研究としての意義

東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕
〈位置づけの内容〉シベリア、極東、東アジア地域
東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕
〈対象とした国・地域など〉ロシア極東地域、モンゴル、中国、日本

東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください

対象地域がロシア極東地域、および、シベリア、そして、モンゴルから中国にかけての広範囲に亘ること。ならびに、その地域で共通のテーマである大気汚染、黄砂、森林火災を扱っていること。その課題の解決に同地域の専門研究者と共同で取り組んでいること。

学際性

文理融合型の研究か〔はい〕
〈参加した専門分野〉情報分野、環境分野、経済分野、政策分野等
文系・理系での学際性・連携性の有無〔有〕
〈参加した専門分野〉情報分野、環境分野、経済分野、政策分野等

学内連携

学内他部局との組織上の連携はあったか〔有〕
〈連携部局名〉ロシア交流推進室
学内他部局教員の研究への参加の有無〔無〕
〈参加教員の所属〉

他組織との連携

国内の研究機関との連携・協力の有無〔有〕
〈連携組織名〉国立環境研究所
〈連携の形態〉アドバイザー、研究打ち合わせ
国内の研究機関の研究への参加の有無〔無〕
〈参加研究者の所属〉

国際性

国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔有〕
〈国名・研究機関名〉ロシア・ロシア科学アカデミーシベリア支部
国外の研究者の参加の有無〔有〕
〈参加研究者の所属・参加形態〉ロシア科学アカデミーシベリア支部スカチョフ森林研究所・メール討論
学術交流協定活用の有無〔有〕
〈協定の名称〉
大学間学術交流協定　ロシア科学アカデミーシベリア支部
部局間学術交流協定　ロシア科学アカデミーシベリア支部 V.N. スカチョフ森林研究所
外国語による成果公表の有無〔有〕
〈言語〉英語

対外的活動

研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと）
研究会〔0 回〕
公開の会議・シンポジウム〔0 回〕
国際会議〔0 回〕

第三者による評価・受賞・報道など

外部評価会の実施（2014 年 2 月 10 日）
PM2.5 列島黄信号（産経新聞 2014 年 2 月 27 日朝刊一面）
TBS「朝ズバッ」（平成 26 年 3 月 3 日）、雑誌 AERA（平成 26 年 3 月 17 日）

本年度のユニット活性化のための具体的な取り組み

（科研費申請 （課題名、種目、目的の概要）
衛星画像を用いた PM2.5 を含む越境大気汚染の可視化定量解析方法の開発、
挑戦的萌芽研究、
PM2.5 を含む越境大気汚染や黄砂の分布状況ならびに移動推移の実態について、定点観測データと衛星画像を用いて可視化定量解析方法を開発すること。
（その他資金への申請）
（その他ユニットの機能を展開するための具体的な活動内容）

来年度のユニット活性化のための具体的な取り組みの予定

本年度で終了。

主要なユニットの研究成果

（公表論文）
Nagatani, T. Miura, F. Yanagisawa and J. Kudoh：A methodology for detecting transboundary air pollution using MODIS data, Proceedings of the International Symposium on Remote Sensing 2013 (ISRS 2013), Chiba, Japan, pp.552-555, May 2013.

論文・著書

〔雑誌論文〕計（2）件
〔学会発表〕計（2）件

〔図　　書〕計（0）件
〔その他の公表〕計（0）件
1) 永谷泉、柳澤文孝，三浦崇史，工藤純一：大陸からの越境大気汚染飛来把握のための MODIS データ利用法，日本リモートセンシング学会，Vol. 33，No. 4，pp. 298-307，2013
2) Nagatani, T. Miura, F. Yanagisawa and J. Kudoh：A methodology for detecting transboundary air pollution using MODIS data，Proceedings of the International Symposium on Remote Sensing 2013 (ISRS 2013)，Chiba，Japan，pp.552-555，May 2013.
3) 永谷泉，柳澤文孝，三浦崇史，工藤純一：MODIS 画像を利用した越境大気汚染の飛来把握手法の開発，日本写真測量学会平成 25 年度年次学術講演会発表論文集，pp.145-146，2013.
4) 永谷泉，柳澤文孝，工藤純一：Terra/Aqua MODIS データを用いた越境大気汚染モニタリングシステム，情報処理学会第 75 回全国大会，Vol.4，pp.811-812，2013.

<table>
<tr><td>ユニット名</td><td colspan="4">現代中国社会の変容に関する文化人類学研究ユニット</td></tr>
<tr><td>認可期間</td><td colspan="4">2012（平成 24）年度～ 2015（平成 27）年度（4 年間）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">組　織
（下線が代表者）</td><td>氏　名</td><td>所　　属</td><td>氏　名</td><td>所　　属</td></tr>
<tr><td>瀬川昌久
川口幸大
稲澤　努</td><td>東北アジア研究センター
文学研究科
東北アジア研究センター</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="3">研　究
モニター</td><td colspan="2">氏　名</td><td colspan="2">所　　属</td></tr>
<tr><td colspan="2">1 西澤治彦
2 曽士才
3 塚田誠之</td><td colspan="2">武蔵大学人文学部教授
法政大学国際文化学部教授
国立民族学博物館教授</td></tr>
<tr><td colspan="2">外部評価会の実施</td><td colspan="2">（中間・最終）：　　年　　月　　日
参加者：研究組織　名、モニター　名、その他　名</td></tr>
<tr><td>研究経費</td><td colspan="4">（研究支援者、RA などの配置）
（研究スペース配分など）
科学研究費補助金ほか政府関係資金〔金額　300,000 円〕
センター長裁量経費〔金額　500,000 円〕</td></tr>
<tr><td>ユニットの目標・目的</td><td colspan="4">主に日本に在住している文化人類学的観点からの中国研究者たちを組織し、近年の経済発展、グローバル化、文化の資源化などの諸変化を背景に、親族・家族、民族・地方アイデンティティー、信仰・習俗等従来の文化人類学が主要な研究テーマとして扱ってきた対象がどのような変化を経験しつつあるのか、そしてまたそれに連動して、研究者の問題意識や研究手法がどのように変遷しつつあるのかを客観的に捉え直し、今後の中国研究についての新たな展望を開くことを目的としたものである。そのために、主要研究者たちによる研究会を定期的に開催して討論を重ねるとともに、各々の研究成果を持ち寄って一連の論文集を刊行することを目指している。</td></tr>
<tr><td>研究の目的と本年度の成果ならびに研究成果の重要性の概要</td><td colspan="4">科研費（基盤研究 (C)）に基づく 共同研究「現代中国社会の変容とその研究視座の変遷―「宗族」を通した検証」の第 4 回研究会を 2013 年 6 月 1 ～ 2 日、東北大学東京分室において開催した。発表者は聶莉莉、長沼さやか、小林宏至、稲澤努、兼城糸絵の各氏。各々、調査地の事例研究をもとに、宗族とそれを取り巻く地域社会の変化と、現代的な宗族研究の意義について報告し、それをもとにして全員で議論を行った。
続いて、これまで行った 4 回の研究会を踏まえ、参加者全員が研究成果論文の執筆を行い、9 月初旬に原稿を回収した。そして、この原稿に基づいて、10 月には次年度の科研費出版助成への申請を行った。出版元は株式会社風響社が引き受けてくれることとなった。さらにその後、参加者には原稿のブラッシュアップを求め、2014 年 2 月初旬には修正原稿を回収し、これをもとに 3</td></tr>
</table>

	月7～8日には各自の論文内容を発表して相互に評価し合う研究会を実施する予定である。 これと並行して、研究対象地・中国での宗族に関する最新動向の把握ならびに中国国内の研究者との研究情報の交換を目的として、教育研究支援者の稲澤が8月1日より8月23日の間中国に渡航し、貴重な情報を集めて帰国した。 以上、本年度も教育研究支援者の配置と研究スペースの獲得により、目的とする研究の展開のための業務を極めて効率的に遂行することができた。2回の研究会の開催と、研究成果論文の完成はもとより、当初には予定されていなかった科研費の出版助成申請も行ったことにより、本プロジェクトユニットの本年度における目的の達成度は、昨年度に引き続き当初予定を上回るものとなっている。
ユニットの成果を公表する URL	現在作成中だが、内容は既に出来上がっており、今年度末には公開の予定である。

東北アジア地域研究としての意義

東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕
〈位置づけの内容〉東北アジアの一郭をなす中国社会の基底的社会組織について考察する研究である。
東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕
〈対象とした国・地域など〉中国

東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください

文化人類学的な研究トピックとしては古典的なものに属するが、研究史を対象化してとらえなおすことにより、われわれ地域研究に携わる者の立ち位置が相対化できるという意味で、野心的かつ斬新な地域研究である。

新規性

新規性の有無〔有〕
〈新規性の内容〉上記「**東北アジア地域研究としての意義**」参照。

学際性

文理融合型の研究か〔いいえ〕
〈参加した専門分野〉文化人類学
文系・理系での学際性・連携性の有無〔無〕
〈参加した専門分野〉文化人類学

専門性

専門分野内部での意義
〈専門分野名〉
〈内容〉
文化人類学
研究対象としての宗族そのものの変質と研究者の側のパラダイム・シフトという2つの変化をともに対象化することにより、伝統文化の持続性という普遍的な問題について考察し、ひいては今後の文化人類学的な中国社会研究のあるべき方向性を展望することを目指している。

国際性

国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔有〕

〈国名・研究機関名〉中国・中山大学、厦門大学、嘉応学院、広東海洋大学

国外の研究者の参加の有無〔無〕

〈参加研究者の所属・参加形態〉

学術交流協定活用の有無〔無〕

〈協定の名称〉※ただし、企画立案段階で広東省民族研究所との交流協定に基づく現地調査結果が貢献しているという意味では間接的に活用している。

外国語による成果公表の有無〔無〕

〈言語〉

教育上の効果

学生の参加による教育上の効果〔有〕

〈参加学生の所属〉研究会に環境科学研究科の博士課程学生が参加。また第４回研究会には東京女子大学の大学院生がオブザーバー参加した。

〈学生による成果発表〉本年度６月の研究会で兼城糸絵氏が研究発表。（兼城氏は昨年度まで東北大学環境科学研究科学生であったが、本年度より鹿児島大学法文学部准教授として赴任した。）

ポスドクの活用の有無〔有〕

〈活用形態〉小林宏至氏は本年度より学振 PD として東北アジア研究センターに所属している。

教育上の効果についてアピールしてください

フィールドワークの成果をこうした研究会で公表し、専門研究者のコメントを得ることは、非常によいトレーニングである。

社会還元

社会への成果還元・啓蒙が目的に含まれていたか〔いいえ〕

〈内容〉※研究対象の性格から､即効的な意味での還元は考えていない。社会的な効用ベースの発想では抜け落ちる類の知的関心を掘り下げ、未知の事象を解明してゆくこと自体が、究極的な社会貢献であり、それができるのは大学（それも大学の中の研究機関）のみである。

社会への成果還元の有無〔無〕

〈還元の形態〉

学内連携

学内他部局との組織上の連携はあったか〔有〕

〈連携部局名〉文学研究科。（兼務教員派遣）

学内他部局教員の研究への参加の有無〔有〕

〈参加教員の所属〉文学研究科

他組織との連携

国内の研究機関との連携・協力の有無〔有〕

〈連携組織名〉東京女子大学、京都文教大学、神戸外国語大学

〈連携の形態〉研究者個人ベースでの研究会参加（それをサポートしてくれているという意味での協力）

国内の研究機関の研究への参加の有無〔有〕
〈参加研究者の所属〉東京女子大学、京都文教大学、神戸外国語大学、首都大学東京、東京外国語大学

成果発表

研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと）
研究会〔2 回〕
公開の会議・シンポジウム〔0 回〕
国際会議〔0 回〕

論文・著書
〔雑誌論文〕 計（0）件
〔学会発表〕 計（0）件
〔図　　書〕 計（0）件
〔その他の公表〕 計（0）件
※研究成果は個別に発表するのではなく、第 2 年度にとりまとめて第 3 年度に成果論文集として出版することが当初よりの計画となっている。

共同研究の全般的成果のアピール

本研究は、東北アジア研究センターの「現代中国社会の変容に関する文化人類学研究ユニット」が推進する中心的な研究課題である。同名の科研費（基盤研究(C)、平成 24 ～ 26 年度）をもとに、瀬川昌久、川口幸大、稲澤努、聶莉莉、秦兆雄、潘宏立、長沼さやか、小林宏至、兼城糸絵をメンバーとして、本年度は研究会を 3 回実施した。

中国の父系の親族組織である宗族（そうぞく）は、20 世紀初め以来一貫して社会人類学的研究の重要テーマであったが、今日に至るまでに 2 つの大きな「変化」を経験している。第一の変化は、社会環境や文化的背景に大きな変化が生じたことにより、研究対象としての宗族そのものが大きく変質していることであり、第二の変化は研究者の側のパラダイム・シフトにより、研究動機や宗族の存在様態についての基本理解に大きな変化が生じていることである。本研究は、これら 2 つの変化をともに対象化することにより、伝統文化の持続性という普遍的な問題について考察し、ひいては今後の文化人類学的な中国社会研究のあるべき方向性を展望することを目指している。

こうした観点から、まず宗族研究史について総括し、それを参加者の間で共有することを試みた。20 世紀前半の欧米や中国、日本の研究者たちは、宗族の発達や「家族主義」を中国社会の重要な「本質」の一部として理解しようとする傾向が顕著であった。1960 ～ 70 年代を中心に宗族研究の一大パラダイムを形成した英国の社会人類学者 M・Freedman の視点は、宗族を地域的時代的な個別の社会条件の生み出したものとしてより限定的に捉える見方であったが、当時中国本土は文革期で現実の宗族組織はほぼ解体されていたために、宗族の研究は歴史研究的な性格を強めることとなり、過去の地域社会の具体的な諸条件からその生成や変成を説明しようとする地域史的なアプローチが主流となった。

1990 年代以降、中国社会自体の変化により、中国各地で宗族組織が復活または創出されるようになると、従来とは異なる視座での宗族研究が登場し、主流の座を占めてゆく。すなわちそれは、現代社会の文脈の中で、文化的・歴史的アイデンティティーの表象や観光資源化に結びついて形成される宗族の姿に着目する構築主義的な視座である。しかし、宗族の復興現象は地域的にも非常に大きな差異が見られ、福建省南部や広東省のようにそれが盛んな地域もあれば、華中地域や中国東北部などそれとは無縁な地域もある。

その背景を具体的に分析してゆくことは、「伝統の創造」や「文化の客体化」と呼ばれる現象が生じる際に、個々の地域社会内部で意識的になされる選択の過程や、無意識裡に制限的に作用している諸条件を解明することにつながる。すなわちこの宗族という研究対象を通して、伝統文化のもつ規定性と操作性という極めて普遍性の高い問題を解明することが可能となるのであり、そのことは今後の中国社会やその他の諸社会における伝統文化の持続、断絶、あるいは再定義といった動向を理解するためにも重要な示唆を提供できるであろう。

第三者による評価・受賞・報道など

なし

本年度のユニット活性化のための具体的な取り組み

（科研費申請 （課題名、種目、目的の概要）

成果論文集刊行のため、科研費出版助成への申請を行った。

（その他資金への申請）なし

（その他ユニットの機能を展開するための具体的な活動内容）なし

来年度のユニット活性化のための具体的な取り組みの予定

現在のところ予定を上回るペースで順調に経過しており、次年度は研究成果の出版とその合評会（反省会）を行う予定。そして、さらに次の共同研究立ち上げのための準備を行う。

主要なユニットの研究成果

本年度は教育研究支援者の配置と研究スペースの獲得により、目的とする研究の展開のための業務を極めて効率的に遂行することができた。2回にわたる研究会を順調に開催し、また研究成果論文集の執筆と原稿の回収も終了しており、さらに出版のための助成金申請も終わっている。したがって、本プロジェクトユニットの本年度における目的の達成度は、当初の予定を上回るものとなっている。

<table>
<tr><td>ユニット名</td><td colspan="4">20 世紀ロシア・中国史再考研究ユニット</td></tr>
<tr><td>認 可 期 間</td><td colspan="4">2012（平成 24）年度～ 2016（平成 28）年度（5 年間）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">組　織
(下線が代表者)</td><td>氏　名</td><td>所　　属</td><td>氏　名</td><td>所　　属</td></tr>
<tr><td><u>寺山恭輔</u>
上野稔弘</td><td>東北アジア研究センター
東北アジア研究センター</td><td>巽由樹子
(～2013年9月)
麻田雅文
(2013年10月～)</td><td>東北アジア研究センター（現在東京外国語大学外国語学部専任講師）
東北アジア研究センター</td></tr>
<tr><td rowspan="3">研　究
モニター</td><td colspan="2">氏　名</td><td colspan="2">所　　属</td></tr>
<tr><td colspan="2">1　王　柯
2　家近亮子
3　浅岡善治</td><td colspan="2">神戸大学大学院
敬愛大学国際学部
東北大学文学研究科</td></tr>
<tr><td colspan="2">外部評価会の実施</td><td colspan="2">(中間・最終)：　　年　　月　　日
参加者：研究組織　名、モニター　名、その他　名</td></tr>
<tr><td>研 究 経 費</td><td colspan="4">(研究支援者、RA などの配置)
(研究スペース配分など)
科学研究費補助金ほか政府関係資金〔金額　1,900,000 円〕
センター長裁量経費〔金額　300,000 円〕
運営費交付金（個人研究費）</td></tr>
<tr><td>ユニットが主催したセンター共同研究</td><td colspan="4">新疆、満州をめぐる 20 世紀前半のソ連、中国の政策
Soviet’s and China’s policies toward Sinkiang, Manchuria in the first half of 20th century</td></tr>
<tr><td>ユニットの目標・目的</td><td colspan="4">20 世紀初めのロシア革命、辛亥革命によりロシア帝国、清朝が崩壊し、ロシアではソ連が 1992 年の崩壊まで存在し、中国ではその後中華民国が成立したが、第二次大戦後には内戦に勝利した中国共産党の主導する中華人民共和国が成立し現在に至っている。本研究ユニットでは、革命、内戦、対外戦争など動乱の 20 世紀を経過した中露両大国の歴史について、それらとも密接に関係した歴史を有する日本人の視点から、積極的な史料の発掘と、それらの新史料をもとに新たな歴史像を構築することを目標としている。</td></tr>
<tr><td>研究の目的と本年度の成果ならびに研究成果の重要性の概要</td><td colspan="4">本ユニットではロシアと中国を研究対象とするが、センターに所属する寺山、上野がそれぞれロシア、中国史を担当している。それぞれが関心を抱くのが、スターリンが統治した特に戦前の時代（寺山)、蒋介石の統治した中華民国時代（上野）でほぼ重なり、お互いに国境隣接地域に関心を抱いていることから、ここ数年は中国の新疆地域を研究対象としてきた。これによって自国史ばかりでなく、隣接国の状況について、それぞれの知識を提供しあう形で研究を進めるスタイルで研究を進めてきた。また教育研究支援者として今年度前半は、ロシア帝国史を専門とする巽、後半は中東鉄道史の専門家で</td></tr>
</table>

	スターリンの満洲政策に関心を有する麻田が教育研究者として研究を進めた。今年度も寺山はモスクワ、上野は台湾、米国、英国、麻田はモスクワ、バルト三国で史料調査を続けた。センター経費による叢書の刊行（『スターリンの対新疆政策』）の 2014 年度中の出版を目指している。
ユニットの成果を公表する URL	

東北アジア地域研究としての意義

東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕

〈位置づけの内容〉

本共同研究は、東北アジア地域を構成する二大国である中国及びロシア（ソ連）を研究対象としている。研究手法は新たに収集した文献に基づいた歴史研究である。研究関心は両国が国境を接する多民族地域にあり、今日の東北アジア地域における民族問題の淵源を探る研究として位置づけることができる。

東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕

〈対象とした国・地域など〉ロシア（ソ連） 中国

東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください

本プロジェクトユニットは基本的にロシア・中国の民族問題を扱う。両国にまたがる地域、及び両国が接する地域（すなわち満洲、沿海州、モンゴル、新疆、中央アジアなど）を主なターゲットにしている。本共同研究ではこれらの地域に対する両国の政策を比較検証するとともに、両国が共同で対処した問題（対日政策など）に関して、共同でアプローチすることで、一国史研究が陥りがちな限界の打破も目指している。その意味からも本共同研究は各国史の枠組みを越えた東北アジア地域研究としての性格を有しているといえる。

学際性

文理融合型の研究か〔いいえ〕

〈参加した専門分野〉

文系・理系での学際性・連携性の有無〔無〕

〈参加した専門分野〉

学内連携

学内他部局との組織上の連携はあったか〔有〕

〈連携部局名〉東北大学文学研究科

学内他部局教員の研究への参加の有無〔無〕

〈参加教員の所属〉

他組織との連携

国内の研究機関との連携・協力の有無〔有〕

〈連携組織名〉東京外国語大学、東洋大学

〈連携の形態〉研究会における発表

国内の研究機関の研究への参加の有無〔有〕

〈参加研究者の所属〉

国際性

国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔有〕
〈国名・研究機関名〉ロシア科学アカデミー・シベリア支部歴史研究所
国外の研究者の参加の有無〔無〕
〈参加研究者の所属・参加形態〉ロシア語論文集への論文執筆
学術交流協定活用の有無〔有〕
〈協定の名称〉東北大学 ― ロシア科学アカデミー・シベリア支部間の学術交流協定
外国語による成果公表の有無〔有〕
〈言語〉ロシア語

対外的活動

研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと）
研究会〔2 回〕
公開の会議・シンポジウム〔0 回〕
国際会議〔0 回〕

第三者による評価・受賞・報道など

特になし

本年度のユニット活性化のための具体的な取り組み

（科研費申請 （課題名、種目、目的の概要）
1920-40 年代の中国東北・ロシア極東における民族政策の比較研究(平成 26 年度–30 年度)

来年度のユニット活性化のための具体的な取り組みの予定

・ここ数年の懸案事項であった著作『スターリンと中国新疆』『蒋介石と新疆』の出版に向けて鋭意努力する。
・本ユニットに基づいた共同研究「スターリン、蒋介石と新疆、満洲」(平成 25–27 年度)に関して、来年度は満洲にも研究の焦点を移して研究を深化させ、早い時期に研究集会を開催する。
・2014 年度はロシア極東から二人の極東史専門家を客員教授として招聘する予定であり、研究会を開催することにより、本プロジェクトユニットの活性化を図る。

主要なユニットの研究成果

具体的な成果は、本ユニット主催の共同研究「スターリン、蒋介石と新疆、満洲」に記述する。

論文・著書

〔雑誌論文〕 計（ ）件
〔学会発表〕 計（ ）件
〔図　　書〕 計（ ）件
〔その他の公表〕 計（ ）件
【発表した著作その他】
具体的な成果は、本ユニット主催の共同研究「スターリン、蒋介石と新疆、満洲」に記述する。

<table>
<tr><td>ユニット名</td><td colspan="4">減災をめざした電波科学研究ユニット</td></tr>
<tr><td>認可期間</td><td colspan="4">2013（平成 25）年度～ 2015（平成 27）年度（3 年間）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">組　織
（下線が代表者）</td><td>氏　名</td><td>所　　属</td><td>氏　名</td><td>所　　属</td></tr>
<tr><td>佐藤源之
高橋一徳
Christian Koyama
劉　海</td><td>東北アジア研究センター
東北アジア研究センター
東北アジア研究センター
東北アジア研究センター</td><td>藤沢　敦

金田明大

駒木野智寛</td><td>東北大学　埋蔵文化財調査室･特任准教授

奈良文化財研究所･主任研究員

東北アジア研究センター</td></tr>
<tr><td rowspan="3">研　究
モニター</td><td colspan="2">氏　名</td><td colspan="2">所　　属</td></tr>
<tr><td colspan="2">1　金田明大
2　佐久間光平
3　菊地芳朗</td><td colspan="2">奈良文化財研究所・主任研究員
宮城県教育委員会文化財保護課
福島大学行政政策学類教授</td></tr>
<tr><td colspan="2">外部評価会の実施</td><td colspan="2">実施せず</td></tr>
<tr><td>研究経費</td><td colspan="4">（研究支援者、RA などの配置）2 名、賃金 15% のみ
（研究スペース配分など）なし
科学研究費補助金ほか政府関係資金〔金額　3,000,000 円〕
総長裁量経費〔金額　5,000,000 円〕
その他〔資金名：防災科学国際研究所　特別プロジェクト研究「アレイ型地中レーダを用いた高台移転に伴う遺跡調査の効率化」1,300,000 円、国立大学協会 「震災復興・日本再生支援事業」「高台移転に伴う遺跡調査のアレイ型地中レーダによる効率化」800,000 円〕</td></tr>
<tr><td>ユニットが主催したセンター共同研究</td><td colspan="4">地下電磁計測ワークショップ　2013 年 11 月、東北大学
特別講演　2 件
一般講演　16 件</td></tr>
<tr><td>ユニットの目標・目的</td><td colspan="4">東日本大震災に伴う住宅の高台移転に際し、緊急を要する多数の遺跡調査に対し、本プロジェクト研究ユニットではアレイ型地中レーダーなどの先端的な地下計測手法を利用した遺跡調査技術の開発を進めるのと同時に、地方自治体の遺跡探査への実践的な技術協力、技術指導による文化財保護活動を実践する。</td></tr>
</table>

ユニットの活動目的と本年度の成果	地中レーダ装置を用いて平成 25 年 2 月に東松島市野蒜築港跡で実証試験を行い、高いイメージング能力のあることを検証した。また 2013 年 3 月には閖上海岸で遺品捜索を行った。また平成 25 年度は宮城県ならびに福島県の文化財保護課と協力し、南相馬市などでの遺跡調査を実施した。 平成 25 年度は宮城県ならびに福島県の文化財保護課と協力し、南相馬市などでの遺跡調査を実施した。 また平成 25 年 11 月には、宮城県の遺跡調査担当者を対象とした研修会を開催した。 更に平成 25 年 11 月に「遺跡調査」をテーマとした地下電磁計測ワークショップを開催した。
ユニットの成果を公表する URL	http://magnet.cneas.tohoku.ac.jp/satolab/researchunit/

東北アジア地域研究としての意義

東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔いいえ〕
〈位置づけの内容〉地域を特定する必要があるテーマではない。
東北アジア地域を対象とする研究か〔いいえ〕
〈対象とした国・地域など〉今年度は国内の活動に限っている。

学際性

文理融合型の研究か〔はい〕
〈参加した専門分野〉考古学、電磁波工学
文系・理系での学際性・連携性の有無〔有〕
〈参加した専門分野〉上に同じ

学内連携

学内他部局との組織上の連携はあったか〔有〕
〈連携部局名〉埋蔵文化財調査室
学内他部局教員の研究への参加の有無〔無〕
〈参加教員の所属〉

他組織との連携

国内の研究機関との連携・協力の有無〔有〕
〈連携組織名〉奈良文化財研究所
〈連携の形態〉
国内の研究機関の研究への参加の有無〔有〕
〈参加研究者の所属〉同上

国際性

国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔無〕
〈国名・研究機関名〉
国外の研究者の参加の有無〔無〕
〈参加研究者の所属・参加形態〉
学術交流協定活用の有無〔無〕
〈協定の名称〉

外国語による成果公表の有無〔有〕
〈言語〉英語

対外的活動

研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと）
研究会〔　回〕
公開の会議・シンポジウム〔1 回〕
国際会議〔　回〕

第 12 回地下電磁計測ワークショップ「復興・遺跡調査」
　電子情報通信学会　宇宙航行エレクトロニクス研究会
　協賛：IEEE AESS Japan Chapter, IEEE GRSS Japan Chapter, 物理探査学会
2013 年 11 月 22 日（金）10：30 〜 17：10　会場　東北大学 川内キャンパス萩ホール
2013 年 11 月 23 日（土）10：00 〜 12：20　会場　東北大学　東北アジア研究センター
（〒 980-8576 仙台市青葉区川内．JR 仙台駅から 仙台市営バス（9 番のりば）で東北大川内キャンパス・萩ホール前下車（12 分）
http://www.tohoku.ac.jp/japanese /profile/campus/01/kawauchi/index.html.
（一般講演：発表 20 分＋質疑応答 5 分）
11 月 22 日（金）午前（10：30 〜 12：50）
委員長挨拶（JAXA　齋藤 宏文)
趣旨説明（東北大学　佐藤源之）
震災とレーダ技術　（座長：高橋一徳）
⑴ 10:30 - 11:10
［特別講演］震災から 2 年半を経て見えてきた課題〜被災構造物の維持管理と健全度の把握〜
　○久田　真（東北大）
⑵ 11:10 - 11:35
マイクロ波による RC 構造物中の腐食鉄筋探査の一検討
　○三輪空司（群馬大）
⑶ 11:35 - 12:00
地中レーダ探査データを用いた砂浜堆積過程の可視化
　○有働恵子（東北大）
⑷ 12:00 - 12:25
東日本大震災の行方不明者捜索における地中レーダの適用
　○園田　潤（仙台高専）・渡邉　学（JAXA）・米澤 千夏・佐藤源之（東北大）
⑸ 12:25 - 12:50
Fundamental study of observation of landslide by GB-SAR observation; case study at Aratozawa
　○ Lilong Zou・Kazunori Takahashi・Motoyuki Sato（Tohoku Univ.）
11 月 22 日（金）午後（13：30 〜 15：10）
建造物センシング技術 I（座長：三輪空司）
⑹ 13:30 - 13:55
電磁波を用いた建造物非破壊センシング技術の研究開発〜 25 年度中間成果 〜
　○佐藤源之・高橋一徳・劉　海・クリスチャン コヤマ（東北大）
⑺ 13:55 - 14:20
建造物非破壊センサーの研究開発（第一報）〜単一周波数を用いたイメージングレーダ〜
　○弓井孝佳・浅野有美・森　康成・土井恭二（三井造船）

⑻ 14:20 - 14:45
建造物非破壊センサーの研究開発（第二報）～広帯域アンテナの開発～
　○森　康成・浅野有美・弓井孝佳・土井恭二（三井造船）
⑼ 14:45 - 15:10
　建造物非破壊センサーの研究開発（第三報）～ステップ周波数方式イメージングレーダ～
　○土井恭二・浅野有美・弓井孝佳・森　康成（三井造船）
休憩 (15:10-15:30)
11 月 22 日（金）午後（15：30 ～ 17：10）
建造物センシング技術 II（座長：木寺　正平）
⑽ 15:30 - 15:55
建造物非破壊センサーの研究開発（第四報）～ GPR を用いた木材のイメージング～
　○浅野有美・弓井孝佳・森　康成・土井恭二（三井造船）
⑾ 15:55 - 16:20
20GHz 帯 GB-SAR による構造物内部計測の基礎実験
　○高橋一徳・劉　海・クリスチャン小山・佐藤源之（東北大）
⑿ 16:20 - 16:45
掘削時前方探査レーダのためのバケット一体型八木・宇田スロットアンテナの設計
　○茂木優人・三輪空司（群馬大）
⒀ 16:45 - 17:10
GPR survey results of Hunnu dynasty tombs(モンゴルにおける GPR による遺跡調査の事例紹介)
　○ Tseedulam Khuut（モンゴル科学技術大学）
11 月 23 日（土）午前（10：00 ～ 12：20）
震災復興と遺跡調査 (座長：園田　潤)
⒁ 10:00 - 10:25
A compact polarimetric GPR system for detection of linear subsurface targets
　○ Hai Liu・Motoyuki Sato（Tohoku Univ.）
⒂ 10:25 - 11:05
［特別講演］宮城県における震災復興と遺跡調査の現状
　○佐久間光平（宮城県）
⒃ 11:05 - 11:30
震災復興を推進するアレイ型地中レーダによる遺跡計測
　○高橋一徳・リウ ハイ・佐藤源之（東北大）
⒄ 11:30 - 11:55
Investigation on 3D migration of non-gridded GPR data
　○易　利・佐藤源之・高橋一徳（東北大）
⒅ 11:55 - 12:20
墳丘の地中レーダによる遺跡調査
　○佐藤源之・高橋一徳（東北大）
23 日　ワークショップ終了後震災復興のために遺跡調査を行うための地中レーダのデモンストレーションならびに研究施設公開を行います。
デモンストレーション会場は東北アジア研究センター敷地内の実験施設です。

第三者による評価・受賞・報道など

本年度のユニット活性化のための具体的な取り組み
（科研費申請（課題名、種目、目的の概要）
（その他資金への申請）

（その他ユニットの機能を展開するための具体的な活動内容）
概算要求　特別プロジェクト経費要求「復興のための遺跡探査推進」

来年度のユニット活性化のための具体的な取り組みの予定
概算要求　特別プロジェクト経費要求「復興のための遺跡探査推進」の再申請

主要なユニットの研究成果

論文・著書
〔雑誌論文〕計（0）件
〔学会発表〕計（5）件
〔図　　書〕計（0）件
〔その他の公表〕計（　）件
NHK 総合テレビ　2013 年 11 月 13 日全国放送　くらし☆解説「掘らずに調べる考古学」
http://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/700/172824.html
http://tvtopic.goo.ne.jp/kansai/program/info/225516/index.html

<table>
<tr><td>ユニット名</td><td colspan="4">東北アジア言語文化遺産研究ユニット</td></tr>
<tr><td>認可期間</td><td colspan="4">2013（平成 25）年度～ 2016（平成 29）年度（4 年間）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">組　織
(下線が代表者)</td><td>氏　名</td><td>所　　属</td><td>氏　名</td><td>所　　属</td></tr>
<tr><td><u>栗林　均</u>
岡　洋樹
ガンツェツェグ</td><td>東北アジア研究センター 教授
東北アジア研究センター 教授
東北アジア研究センター 教育研究支援者</td><td>アルタンザヤー (2013.4 ～ 2013.7)
ユー・チュアン (2013.10 ～ 2014.10)</td><td>東北アジア研究センター 客員教授
東北アジア研究センター 客員研究員</td></tr>
<tr><td rowspan="3">研　究
モニター</td><td colspan="2">氏　名</td><td colspan="2">所　　属</td></tr>
<tr><td colspan="2">1　橋本　勝
2　二木博史
3　フフバートル</td><td colspan="2">大阪外国語大学（名誉教授）
東京外国語大学教授
昭和女子大学教授</td></tr>
<tr><td colspan="2">外部評価会の実施</td><td colspan="2">(中間・最終)：　　年　　月　　日
参加者：研究組織　名、モニター　名、その他　名</td></tr>
<tr><td>研究経費</td><td colspan="4">(研究支援者、RA などの配置)
(研究スペース配分など)
センター長裁量経費〔金額 500,000 円〕
運営費交付金（個人研究費）〔金額 430,000 円〕
その他〔資金名：東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所　情報資源利用研究センター（IRC）における共同研究費からの充当 500,000 円〕</td></tr>
<tr><td>ユニットが主催したセンター共同研究</td><td colspan="4">なし</td></tr>
<tr><td>ユニットの目標・目的</td><td colspan="4">本ユニットは主にモンゴル高原や興安嶺を発祥の地としてユーラシア大陸に大帝国を建設したモンゴル族と満洲族の文字・言語で記録された多種多様な言語文化 遺産を調査・発掘・整理・研究・再評価・公開・保存する活動を行いながら、国内外の研究者と諸機関・団体の研究ネットワークを形成することを目指す。。本ユニットでは、モンゴル国、中国（内モンゴル）をはじめ、国内・国外の研究者・機関・団体との協力体制を構築して、モンゴル族と満洲族の言語文化遺産 を系統的に調査・研究し、新たに整理された文献資料を紙媒体で公刊し、デジタル化したデータをインターネットで公開する。</td></tr>
</table>

ユニットの活動目的と本年度の成果	海外の研究機関、研究者との連携を深めた。 1. 内蒙古師範大学蒙古学学院との部局間協力協定を 5 年間延長した。 2. 内蒙古大学蒙古学学院との部局間協力協定を 5 年間延長した。 3. 中央民族大学蒙古語言文学系との部局間協力協定を締結した。 4. 栗林は 2013 年 11 月～ 12 月に中央民族大学に 1 ヶ月招聘間滞在して、講義・講演を行った。 モンゴル学セミナーを開催した。 1. 2014 年 3 月 10（月）～ 12 日（水）に東北大学東北アジア研究センターでモンゴル学セミナー「土族語の世界」を開催した。 研究成果として 3 点の著書を公刊した（**論文・著書**の欄に詳述）。
ユニットの成果を公表する URL	http://www.cneas.tohoku.ac.jp/unit/kurib25/

東北アジア地域研究としての意義

東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕

〈位置づけの内容〉「東北アジア民族」は、中国・モンゴル・ロシアをカバーする地域に分布している諸民族を指しており、まさに東北アジア地域そのものを研究の対象としている。

東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕

〈対象とした国･地域など〉現在の国家としては､中国･モンゴル･ロシアの 3 国にまたがる。歴史的にはモンゴル帝国の版図およびそれを継承する地域を研究の対象としている。

東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください

東北アジア地域には歴史的に多くの民族が居住し、自らの言語を様々な文字で記録してきた。それらの文献資料を言語資料あるいは歴史史料として扱う際には、それぞれの言語の特徴・特殊性に合わせた処理の仕方とそれに基づいた研究が必要である。本研究では、民族文字資料を言語資料として利用する際の問題点を明らかにし、それらの解決を図りながら、それによってそれぞれの言語文化遺産を研究し、現在および将来においてそれらを有効に利用する方法を開発する。

学際性

文理融合型の研究か〔はい〕

〈参加した専門分野〉

文系・理系での学際性・連携性の有無〔有〕

〈参加した専門分野〉言語学、歴史学、情報処理学

学内連携

学内他部局との組織上の連携はあったか〔無〕

〈連携部局名〉

学内他部局教員の研究への参加の有無〔無〕

〈参加教員の所属〉

他組織との連携

国内の研究機関との連携・協力の有無〔有〕
〈連携組織名〉東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所情報資源利用研究センター
〈連携の形態〉共同研究
国内の研究機関の研究への参加の有無〔有〕
〈参加研究者の所属〉大阪大学

国際性

国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔有〕
〈国名・研究機関名〉内蒙古師範大学蒙古学研究院、内蒙古大学蒙古学研究院、中央民族大学蒙古語言文学系
国外の研究者の参加の有無〔有〕
〈参加研究者の所属・参加形態〉内蒙古師範大学蒙古学研究院・研究協力、内蒙古大学蒙古学研究院・研究協力、中央民族大学蒙古語言文学系・研究協力
学術交流協定活用の有無〔有〕
〈協定の名称〉
内蒙古師範大学蒙古学研究院との部局間協力協定、内蒙古大学蒙古学研究院との部局間協力協定、中央民族大学蒙古語言文学系との部局間協力協定
外国語による成果公表の有無〔無〕
〈言語〉

対外的活動

研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと）
研究会〔　回〕
公開の会議・シンポジウム〔　回〕
国際会議〔　回〕
モンゴル学セミナー〔1 回〕

第三者による評価・受賞・報道など

無し。

本年度のユニット活性化のための具体的な取り組み

科研費申請　基盤研究（B）中国清朝時代の伝統的モンゴル語辞書の研究
(その他資金への申請)
(その他ユニットの機能を展開するための具体的な活動内容)

来年度のユニット活性化のための具体的な取り組みの予定

1. 外部資金の申請
2. 国際学術会議の開催
3. ホームページの充実

を予定している。

主要なユニットの研究成果

論文・著書

〔雑誌論文〕計（0）件
〔学会発表〕計（0）件

〔図　　書〕計（3）件

1. 栗林均編『「土族語詞彙」蒙古文語索引』東北大学東北アジア研究センター、2013 年 12 月、183 頁。
2. 栗林均編『孝経−モンゴル語古訳本−』東北大学東北アジア研究センター、2014 年 1 月、186 頁。
3. 栗林均・斯欽巴図編『蒙文倒綱−モンゴル語ローマ字転写配列−』東北大学東北アジア研究センター、2014 年 2 月、602 頁。

〔その他の公表〕計（　）件

<table>
<tr><td>ユニット名</td><td colspan="4">出版文化資料データベース研究ユニット</td></tr>
<tr><td>認可期間</td><td colspan="4">2013（平成 25）年度～ 2015（平成 27）年度（3 年間）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">組　織
（下線が代表者）</td><td>氏　名</td><td>所　　属</td><td>氏　名</td><td>所　　属</td></tr>
<tr><td>磯部　彰

佐々木聡</td><td>東北大学東北アジア研究センター教授
東北大学東北アジア研究センター専門研究員</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="3">研　究
モニター</td><td colspan="2">氏　名</td><td colspan="2">所　　属</td></tr>
<tr><td colspan="2">1　小川陽一
2　鍋島稲子
3　曽根原理</td><td colspan="2">東北大学名誉教授
台東区立書道博物館・主任研究員
東北大学学術資源研究公開センター史料館・助教</td></tr>
<tr><td colspan="2">外部評価会の実施</td><td colspan="2">（中間・最終）：　　年　　月　　日
参加者：研究組織　名、モニター　名、その他　名</td></tr>
<tr><td>研究経費</td><td colspan="4">（研究支援者、RA などの配置）技術補佐員 1 名
（研究スペース配分など）332 室
（その他の主たる外部資金）
科学研究費補助金ほか政府関係資金〔金額 6,700,000 円〕
センター長裁量経費〔金額 500,000 円〕
運営費交付金（個人研究費）</td></tr>
<tr><td>ユニットが主催したセンター共同研究</td><td colspan="4">「典籍文化遺産の研究」</td></tr>
<tr><td>ユニットの目標・目的</td><td colspan="4">アジアの文化や歴史環境などを研究する上で、出版文化を主とする典籍資料は重要な役割を果たす。10 世紀に始まった木版印刷による資料は多岐に亘り、研究文献資料であるとともに、それ自体が文化遺産としての性格を持つ。
本研究ユニットでは、特定領域研究、及び日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業による拠点形成、そして、特別推進研究を進める中で蒐集した東アジアの典籍の研究と、その文化財としての性格を明らかにし、その成果に基づいたデータベースを作成して一般に公表する。ユニットを通して、日中韓三国及び欧米諸国の相互研究交流を推進し、東アジアを中心とした出版文化をめぐる教育の共同利用拠点を更に発展させて行く。同時に蒐集した出版資料を共同利用して、近世から近現代の東アジア世界の構造を明らかにするための共同研究を設置する。</td></tr>
</table>

ユニットの活動目的と本年度の成果	・平成 25 年 4 月、科学研究費補助金 研究成果公開促進費「東アジア出版文化研究資料画像データベース」(重点・2 年間)が採択され、「出版文化資料データベース研究ユニット」で目的としていた「東アジア出版文化研究資料画像データベース」の構築を本格的に稼働することが可能となり、宋元版及び図像入りの明刊本データの作成に取りかかった。 ・データベースの構築にあたって、データベース構築にかかるシステム・レイアウト・作業手順・画像データ解像度等の検討、利用規定の作成、掲載資料の選択・保管、資料撮影掲載許可申請手続などを行なった。そして、掲載資料のスキャニング・撮影・画像修正等による掲載資料の画像準備の他、掲載する資料のサイズや仕様等の情報を取りまとめ、データベース情報の追加・更新の作業を継続して続けている。 ・平成 25 年 9 月に「東アジア出版文化研究資料画像データベース」の試験的運用を開始し、11 月にデータベースの構築が完成したことから、WEB 上での一般公開を開始した。(http://eapub.cneas.tohoku.ac.jp/eapub-db/) ・平成 25 年 10 月、海外への研究活動広報の一環として刊行書籍を寄贈発送。 ・平成 25 年 11 月 18 日、共同研究「典籍文化遺産の研究」公開研究会を開催し、北京大学中文系教授 (当時東北アジア研究センター客員教授) 潘建国先生による「新见巴黎藏明刊《新刻全像批评西游记》考」(中国語) の講演の他、「東アジア出版文化研究資料画像データベース」公開開始についての紹介を行なった。 ・平成 25 年 11 月 6 日、東北大学片平キャンパスさくらホールにて開催された「みやぎ県民大学」(大学公開講座) において「戦国大名の書籍蒐集と東北アジア ― 伊達本家を中心に ― 」を講義 (磯部彰)。 ・平成 25 年 12 月、東北アジアセンター報告第 11 号『『開元占経』閣本の資料と解説』(佐々木聡著・東北アジア研究センター・162 頁) 刊行。 ・平成 25 年 12 月、「出版文化資料データベース研究ユニット」の HP を新たに立ち上げた。(http://eapub.cneas.tohoku.ac.jp/ db-unit/) ・平成 26 年 1 月 15 日、「高麗大学校日本研究センター・東北大学東北アジア研究センター 学術交流研究会」を開催し、高麗大学校日本研究センター助教授 (当時東北アジア研究センター客員研究支援者) 金暎根先生による「東日本大震災後日本経済と北東アジア経済協力の進路 ― TPP 政策を中心に ― 」(日本語) の講演会を実施した。 ・平成 26 年 2 月、学術図書『清朝宮廷演劇文化の研究』(磯部彰編著・勉誠出版・656 頁) 刊行。
ユニットの成果を公表する URL	http://eapub.cneas.tohoku.ac.jp/ db-unit/ http://eapub.cneas.tohoku.ac.jp/eapub-db/

東北アジア地域研究としての意義

東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕

〈位置づけの内容〉中国の木版印刷をはじめとした資料のデータベース情報を紹介し、東アジア・北東アジアの諸国に視点を置いてユニットを構成している。

東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕

〈対象とした国・地域など〉中国・韓国・ベトナム・日本

東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください

東北アジア研究の基盤である宋元から明清及び民国期の出版物を経史子集その他に分類し、国際的に利用することを可能としている。

学際性

文理融合型の研究か〔いいえ〕
〈参加した専門分野〉中国文学・東洋史・中国哲学・文献書誌情報学
文系・理系での学際性・連携性の有無〔無〕
〈参加した専門分野〉

学内連携

学内他部局との組織上の連携はあったか〔有〕
〈連携部局名〉東北大学附属図書館
学内他部局教員の研究への参加の有無〔無〕
〈参加教員の所属〉

他組織との連携

国内の研究機関との連携・協力の有無〔無〕
〈連携組織名〉
〈連携の形態〉
国内の研究機関の研究への参加の有無〔有〕
〈参加研究者の所属〉沖縄県教育庁

国際性

国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔有〕
〈国名・研究機関名〉中国・北京大学、韓国・高麗大学校
国外の研究者の参加の有無〔有〕
〈参加研究者の所属・参加形態〉北京大学・客員教授、高麗大学校・教育研究支援者
学術交流協定活用の有無〔有〕
〈協定の名称〉(韓国) 高麗大学校日本研究センターとの部局間交流協定
外国語による成果公表の有無〔有〕
〈言語〉中国語

対外的活動

研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと）
研究会〔2 回〕
・磯部彰 (研究会)「第 1 回共同研究「典籍文化遺産の研究」公開研究会」、仙台市 東北大学東北アジア研究センター 3 階 301 会議室、2013 年 11 月 18 日
・磯部彰 (研究会)「高麗大学校日本研究センター・東北大学東北アジア研究センター学術交流研究会」(第 2 回共同研究「典籍文化遺産の研究」公開研究会)、仙台市 東北大学東北アジア研究センター 3 階 301 会議室、2014 年 1 月 15 日
公開の会議・シンポジウム〔0 回〕
国際会議〔0 回〕

第三者による評価・受賞・報道など

・佐々木聡　2013 年度日本中国学会賞（哲学・思想部門）

本年度のユニット活性化のための具体的な取り組み

（科研費申請（課題名、種目、目的の概要）

・「明清教派系宝巻盛衰の研究 ― 武神と聖母神信仰をめぐって ― 」、基盤研究(C)、教派系宝巻の性格とその盛衰、及び変貌等について、民間故事を取り込んだ主要な古宝巻を中心に焦点をあてて、明代中期から清代前期の民間宗教の教義やその特色を明らかにしつつある。

（その他資金への申請）

総長裁量経費

（その他ユニットの機能を展開するための具体的な活動内容）

東京台東区立書道博物館との共催展覧会等の策定と協議

来年度のユニット活性化のための具体的な取り組みの予定

データベース情報の拡充とアップデート。

台東区立書道博物館と共同で展示会を東京で実施する予定。

主要なユニットの研究成果

（共同研究の報告に記述）

論文・著書

〔雑誌論文〕計（　）件

〔学会発表〕計（　）件

〔図　　書〕計（　）件

〔その他の公表〕計（　）件

（共同研究の報告に記述）

	報告日　2014 年 4 月 2 日

評価委員 氏　名	小嶋　智	所　属	岐阜大学工学部

●対象年度のプロジェクトユニット全体についての概評

東北アジア研究センターは、25 名の教員と数十名の各種研究員を擁しているが、その過半数は文系教員である。一般に文系の学問は、競争資金が得にくい、業績をあげにくいと言われているが、東北アジア研究センターは、毎年 1 億円以上の競争的資金を獲得し、多数の業績（論文・著書）をあげている。この点は、他大学の文系学部・研究センターに比べ高く評価できる。

東北アジア研究センターの大きな特徴は、文系・理系の教員が一つの組織をつくり、「東北アジア」という地域をキーワードに研究活動を行っている点である。平成 25 年度には 8 つのプロジェクト研究が行われたが、そのうち、文理融合型の研究は、半数程度である（「東北アジア言語文化遺産研究ユニット」は文理融合型とされているが、報告書からは文系のプロジェクトユニットのように思われる）。センター所属の教員には高い専門性があり、その専門性に基づいて「基礎研究部門」の研究が行われているが、それとは独立した「プロジェクト研究部門」の研究については、センターの文理融合という特色を生かして、文理融合プロジェクトをもっと採用してもよいのではないかと感じた。

●対象年度プロジェクトユニットの中で特に高く評価できる点

⑴ 森林火災から発生する二酸化炭素削減研究ユニット

日本における喫緊の課題である越境大気汚染の状況把握を、リモートセンシング技術を利用して明らかにする手法の開発は高く評価できる。

⑵ 21 世紀における東北アジア地域像の創出に関する研究ユニット

本研究センターの特徴を生かした有意義なプロジェトである。本研究センターの「東北アジアという地域理解の枠組みを確立する」という抽象的な目的を達成するために、第 1 変動期、第 2 変動期という巨大国家の変容・解体に特徴付けられる時間的枠組みを設定し、その中で具体的な個別の研究を展開している点は、高く評価できる。本センター内の文系・理系教員のみならず、他大学の東アジア研究センターの研究者を巻き込みながら共同研究を実施し、国際会議を開催している点も高く評価できる。

⑶ 現代中国社会の変容に関する文化人類学研究ユニット

中国の「宗族」に関し、研究会を複数回開催するなど、着実に研究を行っている点、および、研究成果を迅速に論文集として印刷出版している（原稿はすでに集約済みとのこと）点は高く評価できる。

⑷ 20 世紀ロシア・中国史再考研究ユニット

東北アジアの 2 大国家である中国・ソ連の境界や共通の問題を、両国を専門とする研究者が共同で研究しようとしている点が評価される。

⑸ シベリアにおける人類生態と社会技術の相互作用研究ユニット

文化人類学・河川工学・リモートセンシングなどの手法を用いた、本研究センターの特徴を生かした学際的なシベリア地域研究で、高く評価できる。平成 24 年度の共同研究を含め、研究成果を論集・書籍などの出版物として着実に公表している点も評価できる。

⑹ 減災をめざした電波科学研究ユニット

考古学的問題解決、特に震災復興の一環である高台移転を効率的に進めるために、電

波科学の手法を用いた研究として高く評価できる。そのためのワークショップも開催しており、さらにマスコミにも取り上げられ社会的関心の高さをうかがい知ることができる。

⑺ 東北アジア言語文化遺産研究ユニット

研究成果をとりまとめた 3 冊の書籍を出版している点は高く評価できる。

⑻ 出版文化資料データベース研究ユニット

データベースの構築が完成し、Web 公開されたことは高く評価できる。

●対象年度のプロジェクトユニット成果の中で改善を要すると思われる点

⑴ 森林火災から発生する二酸化炭素削減研究ユニット

経済･政策分野の研究者がどのような活動をしたのかが、報告書からは読み取れなかった。

⑶ 現代中国社会の変容に関する文化人類学研究ユニット

「社会還元は考えていない」とのことであるが、研究資金は全て税金であることを鑑み、成果がまとまり論文集が印刷された暁には、一般への成果普及も考えてほしい。

⑷ 20 世紀ロシア・中国史再考研究ユニット

⑵ の研究ユニットと統合することにより、より包括的、学際的な研究となるのではないか。

⑹ 減災をめざした電波科学研究ユニット

東アジアの研究ではないが、今後は需要があれば海外でも観測を行うことが期待される。

⑺ 東北アジア言語文化遺産研究ユニット

文系の学問に情報処理学を加えた文理融合型研究であるとされているが、誰がどのように情報処理学の研究を行い、その成果が何であるかが、報告書からは読み取れなかった。

●今後センターが網羅すべき研究内容を踏まえた上で新たに設立が望まれるプロジェクトユニットの研究分野

人の首を切る訳にはいかないので、本研究センターの基礎研究部門はおいそれとは変更できるものではない。それに対して、プロジェクト研究部門の各ユニットは、本研究センターの自由裁量で形成・廃止が可能な研究組織であり、その意味で本研究センターが柔軟に独自性を発揮できる最も重要な組織である。それに対して外部から無責任な発言をするわけにはいかないが、評価者の専門に近い分野で言えば「モンゴル」がターゲットとして浮かび上がる。

モンゴルは魅力的な国でもあり、また様々な問題を抱えている国でもある。1990 年代の民主化および急速な市場経済化以降、諸外国の援助のもと行われている豊富な地下資源開発は、経済発展の原動力となるとともに深刻で多様な環境問題を引き起こしている。また、北のロシアと南の中国に挟まれ、政治的にも難しい立場におかれている。このような中で、モンゴルはもとより中国・ロシアを研究対象とする研究者が多く在籍し、地域生態学・環境情報科学・地域計画科学の専門家が所属する当研究センターは、この国の秩序ある発展とモンゴル国民の幸福のために、大きな役割を果たすことができると思われる。また、地下資源開発に関して言えば、地球化学や資源環境科学研究分野の研究者が発言することができるであろう。

●その他 / 備考

特になし

	報告日　2014 年 6 月 29 日

評価委員 氏　名	村上　信明	所　属	創価大学文学部

●対象年度のプロジェクトユニット全体についての概評

プロジェクトユニットによる研究の特徴は、報告書から読み取る限り最長で 7 年にもわたる研究期間をとり、学際的かつマクロな視点からの研究を試みている点にあると思われる。本研究からは、プロジェクトに参加している研究者の個別研究・共同研究の成果を基礎としながら、これらを総合させて現代的課題を克服するための新たな知見を提示しようというねらいが看取される。また研究所外（その多くは東北大学外）の研究者を「研究モニター」として定期的に外部評価を受ける体制を設けている点も高く評価できる。特に 4～7 年にわたる長期のプロジェクトでは、研究が停滞してしまう危険性があり、それを防止するうえで外部の研究モニターにより評価を受けることは非常に効果的である。

●対象年度プロジェクトユニットの中で特に高く評価できる点

プロジェクトユニット研究の中でも、特に野心的研究であると思われるのが「21 世紀東北アジア地域像の構築に関する研究ユニット」である。「東北アジアとは何か」という問いへの回答を試みるべく、歴史学・言語学・リモートセンシング・地質学・文化人類学・社会人類学・生態学など文系・理系の様々な分野の研究者が参画する本プロジェクトユニット研究は、東北アジア研究センターならではの挑戦的研究であるといえよう。地域研究という点では、中国・ロシア・モンゴル・朝鮮半島の研究はそれぞれの地域ごと（厳密にいえば言語ごと）に細分化されがちであるが、「東北アジア」の地域像を把握するためにはそうした地域・言語の障壁を超える必要がある。また地域理解は必ずしも言語のみで可能なわけではなく、地理的要素や地質などの研究も重要である。越境・跨境に関する研究は近年盛んに行われているが、やはり個別研究だけでは広範な地域の「地域像」を示すことは難しく、このようなプロジェクト研究により様々な個別研究の成果が有機的に結び付けられていくことが、地域研究の進展にとっては重要になってくるであろう。

また、「シベリアにおける人類生態と社会技術の相互作用研究ユニット」も大変に教務深いユニット研究である。人類学･神話学や環境関連の諸分野との連携による研究で、新規性･学際性・国際性に富み、社会貢献・教育効果なども十分に考慮されており、文理融合による研究プロジェクトのモデルケースというべき研究であると思われる。

●対象年度のプロジェクトユニット成果の中で改善を要すると思われる点

⑴ 外部の人間から見る限り、いかなる基準・考え方にもとづいて各ユニットが作られているのか、また相互の関係性がどうなっているのかがわかりにくい。例えば、「「20 世紀ロシア・中国史再考」プロジェクトユニット」や、「東北アジア言語文化遺産研究ユニット」の研究活動は、上述の「21 世紀における東北アジア地域像の創出に関する研究ユニット」の一部とする、あるいは連携をすることで、より多角的な視点から東北アジア地域像を研究でき、かつ諸資料の整理・保存も進めていけるように思われる。各ユニットの開始時期が異なるなどの理由で、一つの研究としてまとめられないのが実情かもしれないが、同じユニット内の研究とせずとも、異なるユニットが有機的に結びつきうる場合にはそのことを何らかの形で示していくことは可能であると思われる。各研究ユニットを並列ではなく，重層的な構成とすることはできないだろうか。

⑵ プロジェクトユニット研究の中には、実質的に共同研究とほぼ同じテーマの研究も見られるが、そうなるとこの 2 つの研究のあり方にどのような違いがあるのか、また敢えてユニットを組むことにどのような意義があるのかが理解しにくい。ユニット研究が行われるのであれば、やはりユニット研究であるがゆえに期待される（共同研究では難しい）研究成果について、もう少し説明がほしい。

⑶ 研究モニターおよび外部評価会の実施状況について、報告書内で簡単な説明がほしい。研究モニターによるフィードバックが、研究プロジェクトの進展にどのような効果を与えたのかが明らかになってこそ、モニターを設置した意義がわかるため。

	報告日　2014 年 7 月 14 日

評価委員 氏　名	本多俊和（スチュアート　ヘンリ）	所　属	放送大学

●対象年度のプロジェクトユニット全体についての概評

緻密な計画に沿った現地調査と多くの査読誌投稿学術論文を発表したことを高く評価したい。

●対象年度プロジェクトユニットの中で特に高く評価できる点

融雪洪水を人類学による文系の視点と、河川工学などの理系の視点を総合する着眼点は意外であり、その着眼点ではそれぞれの分野別では得られない成果につながったことを評価できる。

さらに、博士研究員（ポスドク）を研究計画に含めている点の高く評価する次第である。

●対象年度のプロジェクトユニット成果の中で改善を要すると思われる点

シベリアに関しては、研究調査は充実しており、参考になる成果が発表されているが、比較研究地域のアラスカとカナダの条件を今後整理していくことを期待するものである。南西アラスカのユピックは河川洪水よりも海水面変動に悩まされている点をシベリアの状況にどのように接合するのかについての見解を期待したい。河川洪水をよく起こすユーコン川などはもっと適切な比較研究地域かもしれない。

ちなみに、南西アラスカの住民の居住は 4500 年前までさかのぼるとあるが、それはユピックの歴史であり、当該地域での人類居住歴は一万年以上前までさかのぼることを付け加える。

カスカの研究は、本ユニットとどう関わるのかについても、より詳しい説明がほしいところである。

●今後センターが網羅すべき研究内容を踏まえた上で新たに設立が望まれるプロジェクトユニットの研究分野

ユニット設置というべきなのか、全体的な共同研究のあり方の提言になるのかわからないが、一つのテーマを提案したいと思います。

それは、21 世紀に入って、北極海とその周辺地域をめぐる資源開発（海底ガス・油田、レアアース・メタル）という大きな課題が持ち上がっている。このテーマに関わる、多岐にわたる側面を研究するに当たって、分類融合の共同研究を含めて、上で評価した東北アジア研究センターの研究態勢が理想的だと思う。

具体的に、この研究課題には国際経済学（資源の開発、利用、管理など）、国際政治学・国際法学（領土、領海など）、人類学（先住民族社会的影響など）、憲法学（地域在住の先住民族の法的地位や資源管理権）、地政学などの文系課題と、地質学やリモートセンシングによる資源探索と埋蔵量推定、雪氷学（北東航路の海氷）、生態学（開発による環境的影響）、生物学（鯨などの海棲生物への資源運搬船舶の影響）、海洋学（北東航路の海流など）、この地域の資源開発を可能たらしめている気候変動に関わる気象学というように、学祭・国際共同研究の可能性は無限に広がる。

この研究の中心地域は東北アジアになるが、アラスカとカナダ、グリーンランドの動向を含める比較視点も可能な研究である。

以上のすべてを網羅することは困難かもしれないが、パイロット研究とすれば、センターで管理・運営が可能ではないかと推定する次第である。

●その他 / 備考

とくにない

⑵ 共同研究

プロジェクト研究ユニットとともに、従来型の共同研究も展開されている。本年度は、10 件の共同研究が進行中である。

Ⓐ 2013 年度センター共同研究課題一覧

〔課題名／(研究年度・代表者)〕

＊印、ユニット名を付したものは、プロジェクト研究ユニットを主体とする共同研究です。

- 氷融洪水とその社会的対応からみる極北圏地域社会の比較研究*
  ／(2010 年 ～ 2013 年・高倉浩樹：シベリアにおける人類生態と社会技術の相互研究ユニット)
- 東北アジアにおける辺境地域再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究
  ／(2011 年 ～ 2014 年・岡洋樹：21 世紀における東北アジア地域像の創出に関する研究ユニット)
- 近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究
  ／ (2012 年 ～ 2014 年・岡洋樹)
- 現代中国社会の変容とその研究視座の変遷 ―「宗族」を通した検証
  ／ (2013 年 ～ 2014 年・瀬川昌久)
- 江戸時代から現代に通じる東北の歴史 ／ (2013 年 ～ 2014 年・荒武賢一朗)
- 日本列島の文化交渉史 ― 経済と外交 ／ (2013 年 ～ 2014 年・荒武賢一朗)
- 震災復興のための地中レーダによる遺跡探査推進
  ／ (2013 年 ～ 2015 年・佐藤源之：減災をめざした電波科学研究ユニット)
- 新疆、満州をめぐる 20 世紀前半のソ連、中国の政策
  ／ (2013 年 ～ 2015 年・寺山恭輔・20 世紀ロシア：中国史再考研究ユニット)
- 東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用
  ／ (2013 年 ～ 2015 年・高倉浩樹)
- 典籍文化遺産の研究
  ／ (2013 年 ～ 2015 年・磯部彰：出版文化資料データベース研究ユニット)

<table>
<tr><td>研究題目</td><td colspan="4">氷融洪水とその社会的対応からみる極北圏地域社会の比較研究</td></tr>
<tr><td>研究期間</td><td colspan="4">2010（平成 22）年度 ～ 2013（平成 25）年度（ 4 年間）</td></tr>
<tr><td rowspan="4">研究組織
(下線が代表者)</td><td>氏　名</td><td>所　　属</td><td>氏　名</td><td>所　　属</td></tr>
<tr><td>高倉浩樹</td><td>東北大学東北アジア研究センター准教授</td><td>久保田亮</td><td>立教女学院短期大学講師</td></tr>
<tr><td>奥村　誠</td><td>東北大学東北アジア研究センター教授</td><td>山口未花子</td><td>東北大学東北アジア研究センター教育研究支援者</td></tr>
<tr><td>渡邉　学</td><td>JAXA</td><td>吉川泰弘</td><td>北見工業大学助教</td></tr>
<tr><td>研究経費</td><td colspan="4">（配布金額）300,000 円
（研究支援者、RA などの配置）あり
（研究スペース配分など）あり
（その他の主たる外部資金）科研基盤(B)（1,800,000 円）</td></tr>
<tr><td>研究の目的と本年度の成果ならびに研究成果の重要性の概要</td><td colspan="4">本共同研究の目的は、シベリアと北米の北極圏において融雪期に発生する洪水の地域社会への影響と文化的適応を、文化人類学・河川工学・リモートセンシング・土木計画学による学際的な手法によって解明することである。今年度の目的は、最終年度として取りまとめを行うことである。とくに (1) シベリアのレナ川洪水について、人類学・河川工学・リモートセンシングの学際的分析と (2) 北米大陸側との比較研究をそれぞれ総括することである。
(1) について明らかになったのは、自然科学の知見から、気温上昇と湿潤化が明確な指標となって検出されており、それが川の流水量に影響し , その結果洪水の増加に寄与していることである。ただし、その水の振る舞いは、春の解氷洪水ではなく、雪解け洪水、夏洪水として現れる可能性が高いことがわかった。気温上昇は、氷の融解には寄与するが、それが流氷となって河道に詰まるかどうかは別の現象で、気温とは関係しない。しかし住民の認識ではここ 10 年間で解氷洪水が増加しており、その現象の説明は現時点では困難であるとわかった。さらに人類学調査からは、解氷洪水は行政・住民とも経験を元にして適応可能であることがわかった。解氷洪水は、流量のスケールから一時的なものに留まる傾向が強くそれは牧草地の草生産には好影響を与えることが確認された。これはリモートセンシングによる氾濫原の植生分析からは、森林域より氾濫原の NDVI（植生指数）が高いことからも裏付けられる。一方で雪解け洪水や夏洪水が氾濫原の中長期的な影響をあたえ牛生産に否の影響があること、また従来なかった現象のため、住民の適応としては限界に直面することが示唆された。
(2) については、シベリアの民族誌事例と同様に地域住民の水害に対する適応があることが確認された。その一つアラスカのユピック社会では洪水よりも高潮の水害が問題になるが、この地域での住民の居住は 4500 年前迄遡ると考えられる。そのなかで高地（ヌナピック）と低地（マガック）の二つを使い分ける居住パターンがあり、これは住民が塩水域と淡水域双方を利用する適応をしてきたことを意味している。60 年代の定住化によってどの場所を定住地</td></tr>
</table>

	とするかで洪水は高潮水害として問題となっており、定住化における土地選択が水害への適応の是非に関わっていることがわかった。カナダのカスカ社会では狩猟採集活動の上で水系は移動手段として重要な役割を果たしてきたが、拡散的移動的居住のため洪水が被害になることはなかった。しかし定住化したことで洪水への暴露度合いは高まっており、実際には降水量は減少しているにもかかわらず洪水被害は増加している。これらからシベリアと北米を単純に比較はできないものの、水害・水域を概念として極北地域を比較調査することで、従来の民族誌的研究とは異なる人 — 自然関係を明らかにすることが確認された。
成果を公表する URL	http://www.cneas.tohoku.ac.jp/unit/siberia/html/unit/siberia/flood.html

東北アジア地域研究としての意義

東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕

〈位置づけの内容〉シベリア研究を機軸として、その自然 — 文化の関係を、北米側とも比較して探求すること

東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕

〈対象とした国・地域など〉ロシア連邦、アメリカ合衆国、カナダ

（東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください）

東シベリアのレナ川流域を特徴付ける解氷洪水を文理融合で解明するとともに、気候変動によって生じた先住民社会の適応の可能性と限界を明らかにした。

新規性

新規性の有無〔有〕

〈新規性の内容〉春の氷融洪水という北極圏においてみられる自然現象に、地域社会がどのように対応しているのかを、文化人類学・シベリア民族誌・北米民族誌・土木計画学・環境リモートセンシング・河川工学などの学際的分野が合同でアプローチしている点。

学際性

文理融合型の研究か〔はい〕

〈参加した専門分野〉文化人類学・シベリア民族誌・北米民族誌・土木計画学・環境リモートセンシング・河川工学

文系・理系での学際性・連携性の有無〔有〕

〈参加した専門分野〉文化人類学・シベリア民族誌・北米民族誌・土木計画学・環境リモートセンシング・河川工学

専門性　専門分野内部での意義

文化人類学：これまでは北極圏の人類生態については、主に生業適応つまりどのような物質を食料とみなし、それをどのように獲得し、そのための社会組織はどのように形成されるかというものだった。それが寒冷地の水環境という条件との関係で探求する可能性を明らかにした。特に水環境が食料獲得の点で正と負双方の効果をもっており、それに適応する文化を形成してきたことが明らかになった。

環境リモートセンシング:洪水検出（特に都市域）を効率的に行う手法を確立に寄与した。

河川工学：北方地域における河川の凍結と融解の物理的メカニズムは、日本およびシベリア双方のデータを踏まえて解明した。

国際性

国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔有〕
〈国名・研究機関名〉ロシア　ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学・北方民族問題研究所（ヤクーツク市）
国外の研究者の参加の有無〔無〕
〈参加研究者の所属・参加形態〉
学術交流協定活用の有無〔有〕
〈協定の名称〉ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学・北方民族問題研究所と東北アジア研究センター部局間協定
外国語による成果公表の有無〔有〕
〈言語〉英語

教育上の効果

学生の参加による教育上の効果〔有〕
〈参加学生の所属〉京都大学大学院人間環境学研究科、首都大学東京人文科学研究科
〈学生による成果発表〉なし
ポスドクの活用の有無〔有〕
〈活用形態〉教育研究支援者としての雇用

教育上の効果についてアピールしてください

文理融合型のシベリア調査に関わる研究会を外部に対して開くことで関係する大学院生に対して、学際的研究の可能性をアピールした。

社会還元

社会への成果還元・啓蒙が目的に含まれていたか〔いいえ〕
〈内容〉
社会への成果還元の有無〔無〕
〈還元の形態〉

学内連携

学内他部局との組織上の連携はあったか〔無〕
〈連携部局名〉
部局教員の研究への参加の有無〔有〕
〈参加教員の所属〉災害科学国際研究所

他組織との連携

国内の研究機関との連携・協力の有無〔無〕
〈連携組織名〉総合地球環境学研究所
〈連携の形態〉MOU

国内の研究機関の研究への参加の有無〔有〕
〈参加研究者の所属〉大分大学経済学部・寒地土木研究所・北見工業大学・北九州市立大学、JAXA、JAMSTEC

資金

科学研究費補助金ほか政府関係資金〔1,800,000 円〕
センター長裁量経費〔300,000 円〕

成果発表　研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと）

研究会〔4 回〕

・2013 年度第一回研究会

日時：2013 年 7 月 18 日（木）　14：00 ～ 17：30
会場：東北アジア研究センターさくら棟 1 階セミナー室

趣旨

レナ川の洪水に関わる学際的な研究成果を中心に、現在まで理解可能な北極圏における陸水域環境およびその地域社会への影響について知見を検討する。とりわけ気候変動とレナ川洪水の関係、従来のアイスジャム洪水に加えて、その後に発生する洪水と気象条件との関係、洪水被害の実態についての知見を総合化する。

プログラム

研究報告（各自 20 分報告＋ 15 分質疑）
　朴昊澤「北極増幅による積雪・水文プロセスの変化」
　吉川泰弘「レナ川アイスジャム現象の解明に向けた研究の方向性と検討手法」
　渡邉学「極域洪水の監視と起源解明のための手法開発（２）」
　高倉浩樹「レナ川春洪水の影響と現地地域社会の「被災」の文脈」
コメント（檜山哲哉）

・2013 年度第二回研究会

日時：2013 年 11 月 1 日（金）
会場：北海道大学・地球環境科学院 大講堂
共催：総合地球環境学研究所シベリアプロジェクト
趣旨：本年 7 月の WS に引き続き、気候変動がレナ川の洪水現象にどのように影響し、それが人間社会に何をもたらしているのか、分野横断的にそれぞれの知見をもちいることで総合化する。この総合化を効果的におこなうために、それぞれの研究発表を踏まえ、以下の 3 点について、講演者は自身の意見を述べる。
　（１）温暖化の結果、洪水は増加（減少）する。
　（２）温暖化から人々の生活にどのような影響があると考えられるか。
　（３）レナ川流域における洪水適応策はどのように構築されるべきか。
プログラム
　朴　昊澤（JAMSTEC）「河川流出量への季節積雪変化の影響」
　酒井　徹（地球研）「人工衛星から見た春洪水と夏洪水」
　吉川泰弘（北見工業大）「気温データに基づく氷板厚変動とアイスジャム洪水発生に関する検討」
　高倉浩樹（東北大学）「レナ川洪水への適応をめぐる地域社会の適応限界」
　藤原潤子（地球研）「サハにおける洪水リスクと移住」

・2013 年度第三回研究会

日時：2014 年 1 月 25 日 (土)
会場：総合地球環境学研究所

趣旨：北米北極圏における気候変動と地域社会の応答について最終とりまとめの報告を行う。
プログラム
　久保田亮（大分大学）「アラスカ南西部先住民と洪水の歴史的関係：高地と低地の利用をめぐって」
　山口未花子（北九州市立大学地域共生教育センター）「カナダ・ユーコン準州、リアド川上流域における洪水の増加と先住民カスカの対応」

・2013 年度第四回研究会
日時：2014 年 2 月 25 日
会場：東北大学東北アジア研究センター
趣旨：全体の取りまとめ

http://www.cneas.tohoku.ac.jp/unit/siberia/html/unit/siberia/flood.html

公開の会議・シンポジウム〔2 回〕上記の第二回および第三回研究会
国際会議〔0 回〕

論文・著書
高倉浩樹（2014 予定）「恵みの洪水が災いの水にかわるとき ― レナ川中流域サハ社会における文化生態と適応の限界」檜山哲哉・藤原潤子編『温暖化するシベリア：変化する水環境と社会』京都大学学術出版会
高倉浩樹（2013）「シベリア･レナ川中流域の気候変動と地域社会への影響」『IDE-JETRO アジ研ワールド・トレンド』（214）, 17-18.　査読なし
高倉浩樹（2013）「新聞ヤクーチア紙（2005-2009 年）からみた春期レナ川水系洪水情報」『平成 24 年度 FR4 研究プロジェクト報告　温暖化するシベリアの自然と人』104-116 頁 , 総合地球環境学研究所
吉川泰弘，渡邊康玄，阿部孝章，伊藤丹「結氷河川における晶氷粒径分布と晶氷輸送量の現地観測」『土木学会論文集 B1（水工学）』Vol.69, No.4, pp.I_697-I_702, 2013 年 3 月，査読あり。
吉川泰弘，渡邊康玄，阿部孝章，大久保敦「河川結氷時における河川津波の圧力伝搬速度と圧力減衰特性」『土木学会，河川技術論文集』第 19 巻，pp.375-380，2013 年 6 月，査読あり。
阿部孝章，吉川泰弘，佐藤好茂，伊藤丹「寒冷地の半閉鎖性水域における津波振動と結氷破壊特性に関する研究」『土木学会論文集 B3（海洋開発）』Vol.69，No.2，pp.I_455-I_460，2013 年 9 月，査読あり。
Manabu Watanabe,　Hiroki Takakura, Masanobu Shimada,Detection of ice jam floods using PALSAR full polarimetry data, Proceedings of International Symposium on Remote Sensing 2013,2013, 査読なし
山口未花子　（2014 年 1 月）『ヘラジカの贈り物：北方狩猟民カスカと動物の自然誌』東北アジア研究専書、春風社

東日本大震災を分析する　1. 地震・津波のメカニズムと被害の実態：平川新・今村文彦・東北大学災害科学国際研究所編著（分担), 明石書店, 2013 年、第 3 部第 2 章【交通ネットワークの被害と復旧】，pp.239-249.
途絶する交通・孤立する地域：奥村誠・藤原潤子・植田今日子・神谷大介著（編著），東

北大学出版会，2013 年 10 月，全 193 頁，まえがき（14p)、第 4 章【東日本大震災後のガソリン途絶への対応行動】pp.129-158，あとがき【東日本大震災の経験を活かす文理連携研究】pp.161-168.

久保田亮「アラスカ先住民による漁撈活動と気候変動の関係 : ユーコン＝クスコクウィムデルタの事例検討」

『北方民族文化シンポジウム網走』: 41-46（2013 年 3 月）査読無し

口頭発表

吉川泰弘，高倉浩樹，渡邉学，檜山哲哉，酒井徹「レナ川における気温データに基づく氷板厚変動とアイスジャム災害の予測に関する一検討」『土木学会北海道支部，年次技術研究発表会論文報告集』第 70 号，B-52，2014 年 2 月，査読なし。電子抜き刷添付

伊藤丹，吉川泰弘，黒田保孝，村瀬竜也「2013 年 4 月に A ダムで発生したアイスジャムによる取水障害」『土木学会北海道支部，年次技術研究発表会論文報告集』第 70 号，B-53，2014 年 2 月，査読なし。

Manabu Watanabe, Hiroki Takakura, Masanobu Shimada, Detection of ice jam floods using PALSAR full polarimetry data, International Symposium on Remote Sensing 2013, Makuhari Seminar House, Chiba, Japan ,May 15-17,2013

Okumura Makoto: Adaptation Strategies for Risk and Uncertainty: The Role of an Interdisciplinary Approach including Natural and Human Sciences, 2013.10.24, RIHN 8th International Symposium "Risk Societies, Edge Environments: Ecosystems and Livelihoods in the Balance", 10 pages.

久保田亮「生業権の主張においてユピートは何を守りたいのか」『北太平洋沿岸諸先住民族文化の比較研究 ― 先住権と海洋資源の利用を中心に』 2014 年 1 月 11 日、国立民族学博物館

共同研究の全般的成果のアピール

東シベリアのレナ川流域を特徴付ける解氷洪水を文理融合で解明するとともに、気候変動によって生じた先住民社会の適応の可能性と限界を明らかにした。とくに共著の論文という形で成果を提起しつつあることは、文系が関わる共同研究としては画期的な成果であると考えたい。

第三者による評価・受賞・報道など

特になし

研究題目	東北アジアにおける辺疆地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究			
研究期間	2011（平成 23）年度 ～ 2014（平成 26）年度（ 4 年間）			
研究組織 (下線が代表者)	氏　名	所　　属	氏　名	所　　属
	岡　洋樹	東北大学東北アジア研究センター	井上　治	島根県立大学総合政策学部
	佐藤憲行	東北大学東北アジア研究センター	馬紅梅	松山大学経済学部
	今村弘子	富山大学極東地域研究センター	雲　和広	一橋大学経済研究所
			中村篤志	山形大学人文学部
	堀江典生	富山大学極東地域研究センター	柳澤　明	早稲田大学文学学術院
研究経費	科学研究費補助金基盤研究(A)　5,400,000 円			
研究の目的と本年度の成果ならびに研究成果の重要性の概要	本研究は、ロシア・中国という二つの巨大国家の辺境としての特質を持つ東北アジアにおいて人の動きがもたらす地域社会再編を国際情勢が最も激しく変動した二つの時代で比較検討することにより、大国の利害が絡む辺境地域の共生のあり方を考察するプロジェクトである。ふたつの時代とは、19 世紀末から 20 世紀初頭におけるロシアと清の帝国統治崩壊期、20 世紀末から 21 世紀初頭における社会主義体制の崩壊と市場経済化の時期であり、大国の辺境において諸民族の国境を越えた移動が活発になった時期である。国境を越える人の移動に伴い、大国間の国際政治に揺れながら、地域住民の入植者・移民への反発・警戒、そして異質な入植者や移民を受け入れることで形成された新たな地域社会・コミュニティ構築のあり方などが模索された時期である。従来、共時的にしか捉えてこなかった東北アジアという辺境の地域社会・コミュニティー構築のあり方を通時的に捉え直し、東北アジアにおける社会的共生のあり方を考察する試みを、当該地域の歴史学、社会人類学、経済学を含む学際的態勢で取り組む。 本年度は､科研費による調査･研究を継続実施した。また平成 26 年 3 月 8 日、本研究課題に関して内外の研究者との意見交換を行うことを目的に、国際シンポジウム「越境する東北アジア：共生のダイナミズム」を東京で開催、ロシア極東連邦大学･内蒙古大学及び国内の研究者を招いて討論を行った。本年度は、東北アジア辺境部における交流・共生様態について調査の進展を確保するとともに、関連するテーマについて研究している内外の研究者との討論を通じて、課題に関するより広い知見と研究動向を把握することができた。			
成果を公表する URL				

東北アジア地域研究としての意義

東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕

〈位置づけの内容〉本研究は、19 世紀末～ 20 世紀初頭と、20 世紀末～ 21 世紀初頭の二つの時期を、東北アジア規模における変動期として捉え、歴史的研究と現在的研究を行

うことを目的としている。対象地域は、変動が生じた場によって第一変動期は中国・モンゴルを中心とし､第二変動期はロシアを中心とした組み立てとなっている。このように、本研究は東北アジアという地域枠組を強く意識したものである。
東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕
〈対象とした国・地域など〉ロシア、モンゴル、中国、タジキスタン

東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください

ロシア、中国、モンゴルの変動期における動向を東北アジア大の視野を確保しながら研究することによって、地域社会のさまざまな動向を、東北ジア地域の課題として把握しようとする点で、東北アジア地域研究の研究枠組みとしての有効性を導き出そうとしている。共同研究では、19 世紀末～ 20 世紀初頭を第一変動期、20 世紀末～ 21 世紀初頭を第二変動期として捉えているが、これらはいずれも第一変動期では清朝と帝政ロシア、第二変動期では中国・ソ連という広域の巨大国家の統治の変容・解体という特色を共有している。このことは、東北アジア地域を理解する上で、広域国家の変容という視点が不可欠であることを示している。かかる視野を確保した上で、本共同研究は現地地域社会に焦点を当てたミクロな調査研究を実施している。第一変動期に関しては、清朝統治の弛緩によって生じた中国からの人口流出が、流出先のモンゴル高原で発生せしめた流動的状況や、カザフなどの民族移動の様相が取り上げられる。第二変動期では、ソ連社会主義体制の解体と中国の改革・開放政策による市場経済への移行がもたらす人口流動によって、シベリア、極東に生じた経済的諸条件や社会構成の変化を取り上げて調査研究を進めている。このようなアプローチは、地域の現場のミクロな状況を、東北アジア大のマクロな視野のもとに位置づけることを目指すものであり、東北アジア研究に方法的・実証的な基礎を打ち立てるものと言える。

新規性
新規性の有無〔有〕
〈新規性の内容〉東北アジアの二つの変動期を一つの研究枠組において捉え、かつ変動の様相をミクロな地域において実体的に捉えようとするところに方法的新規性がある。

学際性
文理融合型の研究か〔はい〕
〈参加した専門分野〉歴史学・経済学・社会言語学
文系・理系での学際性・連携性の有無〔無〕
〈参加した専門分野〉

専門性　専門分野内部での意義
〈専門分野名〉経済学
〈内容〉東北アジア辺境部、とくに中露国境に関して、国境貿易、労働移民の動向、人口などについて、現地での調査による知見に基づく具体的な状況の理解を踏まえた研究であり、マクロ・レベルの数値データによる研究のみでなく、現場の実際状況に視点を据えた研究を行ったことで、従来手薄なこの分野に新たな知見と理解を提示することが可能となりつつある。
〈専門分野名〉歴史学
〈内容〉東北アジアの歴史上の変動を、中国・モンゴル所蔵のアーカイヴ資料を用いて研究することにより、現地の人と物の移動の様態と、それが引き起こす社会関係上の問題について、新たな知見を得つつある。従来は国際関係や国家レベルの政策に関わる開発政策研究、民族史的観点からの研究など鳥瞰的視点による研究が多く、対象地域の現実

の社会関係それ自体を現地資料により研究したものは少ない。本研究は、政策研究や民族研究の枠を越えて、多民族が共生する辺境地域の様態を具体的に明らかにする点に意義をもつ。

国際性

国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔有〕
〈国名・研究機関名〉ロシア科学アカデミー、モンゴル科学アカデミー歴史研究所、ロシア極東連邦大学、中国内蒙古師範大学
国外の研究者の参加の有無〔有〕
〈参加研究者の所属・参加形態〉ロシア極東連邦大学・シンポジウムでの報告
内蒙古大学・シンポジウムでの報告
学術交流協定活用の有無〔有〕
〈協定の名称〉
モンゴル科学アカデミーと東北大学の大学間学術交流協定
東北大学東北アジア研究センターと内蒙古大学蒙古学学院との部局間学術交流協定
東北大学東北アジア研究センターと内蒙古師範大学旅游学院との部局間学術交流協定
東北大学東北アジア研究センターと富山大学極東地域研究センターとの部局間学術交流協定
東北大学東北アジア研究センターと島根県立大学北東アジア地域研究センターとの部局間学術交流協定
外国語による成果公表の有無〔有〕
〈言語〉英語

教育上の効果

学生の参加による教育上の効果〔有〕
〈参加学生の所属〉東北大学、京都大学、昭和女子大学、広島大学からの学生がシンポジウムを聴講、研究者との意見交換を行った。また東北大学の学生一名が当日の通訳を行った。
〈学生による成果発表〉なし
ポスドクの活用の有無〔無〕
〈活用形態〉

教育上の効果についてアピールしてください

学生が研究の運営、とくにシンポジウムの準備・実施に参画することで、研究集会運営に経験を積む機会となったほか、国外からの研究者の報告の通訳を行うことで、東北アジアの諸問題に関する知見を広める機会となった。また国内の大学の学生がシンポジウム・懇親会に参加し、報告者と議論を行う機会を得たことは、教育上大きな効果を持ったと考えられる。

社会還元

社会への成果還元・啓蒙が目的に含まれていたか〔はい〕
〈内容〉今年度は、一般公開の国際シンポジウムを開催し、広く参加者を募ったことにより、研究分担者やシンポジウム報告者の研究成果を社会に紹介した。
社会への成果還元の有無〔有〕
〈還元の形態〉シンポジウムの一般公開による社会への還元

学内連携

学内他部局との組織上の連携はあったか〔無〕
〈連携部局名〉
学内他部局教員の研究への参加の有無〔無〕
〈参加教員の所属〉

他組織との連携

国内の研究機関との連携・協力の有無〔有〕
〈連携組織名〉富山大学極東地域研究センター、島根県立大学北東アジア地域研究センター
〈連携の形態〉部局間学術交流協定を締結し、科研費による共同研究を実施し、国際シンポジウムを共催した。
国内の研究機関の研究への参加の有無〔有〕
〈参加研究者の所属〉富山大学極東研究センター、島根県立大学北東アジア地域研究センター、山形大学人文学部、早稲田大学文学学術院、一橋大学経済研究所、松山大学経済学部

資金

科学研究費補助金ほか政府関係資金〔金額　5,400,000 円〕

成果発表

研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと）
研究会〔　回〕
公開の会議・シンポジウム〔　回〕
国際会議〔1 回〕

東北アジア研究センター共同研究「東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究」シンポジウム
越境する東北アジア：共生のダイナミズム
共催：富山大学極東地域研究センター・島根県立大学北東アジア地域研究センター・東北大学東北アジア研究センター
日時：平成 26 年 3 月 8 日（土）13:00-18:00
場所：東北大学東京分室
第 1 セッション　中ロ国境地域交流の過去と現在　　座長：堀江典生 (富山大学)
Session I. The Past and Present of Crossborder Interface between China and Russia
Chair: Norio Horie (Prof., Center for Far Eastern Studies, Toyama University)
報告 1：セルゲイ・トカチェフ（極東連邦大学科学博物館長・准教授）Sergey Tkachev (Associate Prof. Far Eastern Federal University)
"The origins of Russian-Chinese competition in the development of the Ussuri region (late XIX- early XX century)"
「ウスリー川流域開発における露中競合の起源（19 世紀末～ 20 世紀初頭）」
報告 2：/ 藤原克美（大阪大学大学院言語文化研究科准教授）
Katsumi Fujiwara (Associate Prof., Graduate School of Language and Culture, Osaka University)
" Russian Business in Harbin: from the History of the Churin Company "
「ハルビンにおけるロシア・ビジネス：チューリン商会の歴史から」

報告 3：馬紅梅（松山大学経済学部教授）
Hongmei Ma (Prof., Faculty of Economics, Matsuyama University)]
“Transnational interaction in the Russo-Chinese Borderlands: the present situation and future prospects”
「露中国境地域における越境交流：現状と展望」
討論者
イゴリ・サヴェリエフ（名古屋大学大学院国際開発研究科准教授）
Discussant 1: Igor Saveliev (Associate Prof., Graduate School of International Development, Nagoya University)
生田美智子（大阪大学名誉教授）
Discussant 3: Michiko Ikuta (Prof. Emiritus of Osaka University)
松野周治（立命館大学経済学部教授）
Discussant 2: Shuji Matsuno (Prof. at College of Economics, Ritsumeikan University)
第 2 セッション　変容するモンゴル　座長：今村弘子（富山大学）
Session II: Mongolia in Transition
Chair: Hiroko Imamura (Prof., Center for Far Eastern Studies, Toyama University)
報告 1：白拉都格其（内蒙古大学名誉教授）
Bailadugeqi (Professor Emiritus of Inner Mongolian University)
「清末移民潮与哲里木盟政治中心的変迁」（清末の移民とジレム盟の政治的中心の変遷）
“The Surge of Immigration in the Late Qing and The Transition of Political Center of the Jirem League”
討論者：柳澤明（早稲田大学文化構想学部教授）
Discussant: Akira Yanagisawa (Prof., School of Media, Culture and Society, Waseda University)
報告 2：フフバートル（昭和女子大学教授）
Huhbator (Prof., Showa Women’s University)
「非漢字圏のモンゴル語の近代語彙受容」
“The Introduction of Modern Vocabulary into Mongolian as non-Chinese Literal Zone”
討論者：井上治（島根県立大学総合政策学部教授）
Discussant: Osamu Inoue (Prof., Faculty of Policy Studies, The University of Shimane)
報告 3：麻田雅文（東北大学東北アジア研究センター教育研究支援者）
Masafumi Asada (Researcher, CNEAS. TU)
「辛亥革命前後のロシアの「満蒙」政策―錦愛鉄道とモンゴル縦断鉄道の計画を中心に―」
Russian Policy toward Manchuria and Mongolia before and after the Xinhai Revolution: Focusing on the Jinzhou-Aigun and the Trans-Mongolian Railways
討論者：岡洋樹（東北大学東北アジア研究センター）
Discussant: Hiroki Oka (Prof., Center for Northeast Asian Studies, Tohoku University)

論文・著書
以下に分類したうえで、それぞれの項目に該当する具体的な論文等の題目、
著者名、出版年月日などを記載してください。
〔雑誌論文〕計（9）件
〔学会発表〕計（19）件
〔図　　書〕計（2）件
〔その他の公表〕計（　）件

1. 論文
今村弘子
"How Does the Affect the China and North Korean Economic Relationship?
How Does China Affect its Economic Relationship with North Korea?" 掲載雑誌 "East Sea Rim" Vol. 11(2014.1.31) pp.14-18
「北朝鮮と中国との関係」『北東アジア地域研究』（北東アジア学会）20 号（査読中）
堀江典生
「ロシアにおける中国人理解：メタファーとしてのディアスポラ」,『ロシア東欧研究』（ロシア東欧学会）第 42 号，2014 年（近刊）
雲和広
雲和広・M. ブルコヴァ,「ミクロデータを利用したロシア・旧ソ連諸国におけるジェンダー状況把握の可能性」,『ロシア・ユーラシアの 経済と社会』，No.965, 2013 年，pp.37-48. 査読有
五十嵐徳子･雲和広,「タジク女性の声:タジキスタンミクロサーベイより」,『ロシア･ユーラシアの経済と社会』，No, 965, 2013 年，pp.2-25. 査読有
柳澤明
柳澤明「関于清朝遣俄使節的幾個問題」（呉忠良訳）『紀念王鍾翰先生百年誕辰学術文集』中央民族大学出版社，2013 年 8 月，pp.116-126
中村篤志
「フルンボイル遊牧社会における地縁結合―Ya. シャーリーボー氏の口述に現れた“アイマグ”をめぐって」『東北アジア研究』、2014 年 2 月、51-79 頁
「清朝宮廷におけるモンゴル王公―光緒 9-10 年乾清門行走日記の分析から」新宮学編著『近世東アジア比較都城史の諸相』白帝社、2014 年 2 月、
2. 著書
雲和広『ロシア人口の歴史と現在』，岩波書店，2014 年 2 月．査読有
柳澤明（共編）東洋文庫東北アジア研究班編『内国史院☒　天聡五年Ⅱ』東洋文庫，2013 年 3 月，総 462 頁
3. 発表
岡洋樹
The Qing’s Rule over “the Outer Mongols” in Transition―The Legal Process in the Middle of the Seventeenth Century
首屆國際滿文文獻學術研討會、中國人民大學國學院報告廳、2013 年 7 月 12-14 日
堀江典生
Labor Migrants from Tajikistan and Their Home Community，Fifth East Asian Conference on Slavic-Eurasian Studies “1913-2013 for Eurasia: A Great Experiment or a Lost Century?”，大阪経済法科大学，2013 年 8 月 10 日。
「ロシアにおける中国人理解：メタファーとしてのディアスポラ」, ロシア・東欧学会 2013 年度研究大会 , 津田塾大学小平キャンパス，2013 年 10 月 5 日。
Comparative Perspective on Russian Human Resource Management, 全ロシア学術コンファレンス「現代社会と労働」（サンクトペテルブルク大学社会学部，科学アカデミー社会学研究所，ロシア社会学会，サンクトペテルブルク社会学会主催），サンクトペテルブルク大学社会学部，　2013 年 11 月 29 日。
「アムール州にみる中国人農業労働者問題」，キャノングローバル戦略研究所北東アジア研究会，キャノングローバル戦略研究所，2013 年 12 月 19 日。
「アムール州にみるロシア極東農業と外国人労働者問題」，平成 25 年度外務省外交・安全保障調査研究事業公開シンポジウム「ロシア極東・シベリア地域開発と日本の経済安全

保障」，霞が関ビル 35 階東海大学校友会館，2014 年 2 月 18 日。
雲和広
“Tajik Labor Migrants and Their Remittances”, Institute for East and Southeast European Studies Workshop on Migration, Ost-Europa Institut, Regensburg, Germany, Oct 29, 2013.（招待講演）
“Motrality Trends in Russia Revisited: A Systematic Survey”, The Fifth East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies, Osaka University of Law and Economics, Osaka, Japan, August 10, 2013.
“Motrality Trends in Russia Revisited: A Systematic Survey”, Brisith Association for Slavonic and East European Studies, University of Cambridge, Cambridge, United Kingdom, April 5th, 2013.
馬紅梅
“Chinese Migration to the Russian Far East: Regulations on the Chinese Side”. 2013 年 8 月 8-10 日，Fifth East Asian Conference on Slavic-Eurasian Studies “1913-2013 for Eurasia: A Great Experiment or a Lost Century?”（大阪経済法科大学：8 月 9-10 日）Session III・Friday・3:30 pm – 5:15 pm
“RUSSIA-CHINA LABOR COOPERATION: CHALLENGES AND SUGGESTIONS.” 2013 年 10 月 21-24 日，The 5th International Conference “Labour Migration in the Russian Federation: The Prevention of Forced labour, the promotion of Social-economical Development, Improvement Regulation” (Red Hall of Russian Academy of Science, Moscow)
柳澤明
「関于清朝遣俄使節的幾個問題」紀念王鍾翰先生百年誕辰⊠清史民族史国際学術研討会、北京市・蟹島緑色生態度假村（主催：中央民族大学歴史文化学院），2013 年 8 月 28 日
中村篤志
「モンゴル王公の年班・行走　～光緒 9 年乾清門行走日記の分析から」東北アジア研究センター共同研究「近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究」第一回研究会、於：東北大学東北アジア研究センター、平成 25（2013）年 6 月 1 日（土）
4. 調査：調査地、期間、調査内容
今村弘子
①韓国（ソウル）2013 年 9 月 1 日～ 6 日　北朝鮮の経済、中朝辺境貿易に関するヒアリング
②中国（瀋陽、丹東）2013 年 9 月 15 日～ 18 日　中朝経済関係（辺境貿易も含む）に関するヒアリング
堀江典生
モスクワ：平成 25 年 10 月 21 日～ 31 日：ロシア科学アカデミー社会政治研究所およびロシア国際問題評議会にて，資料収集。
雲和広
連合王国・オックスフォード市・2013 年 11 月・ソ連人口動態研究に関わる研究討議、先方：Christopher Mark Davis オックスフォード大学ウルフソンカレッジ reader
馬紅梅
平成 25 年 5 月 25 ～ 27 日東京大学図書館で資料収集
平成 25 年 10 月 25 ～ 27 日　ロシアモスクワの ACT 市場、Matveyevsky 市場、Sadovod 市場と Moskva 市場の見学調査、移民労働者のインタビュー
平成 26 年 1 月 26 日～ 28 日東京（と付属図書館）東京大学図書館、東京大学東洋文化研究所図書室、法学部図書館などで資料収集

平成 26 年 2 月 13 日～ 16 日北海道大学（スラブ研究センターと付属図書館）で資料収集
岡洋樹
中国内モンゴル自治区呼和浩特市、平成 26 年 8 月 12 ～ 17 日、資料収集及び内蒙古師範大学・内蒙古大学の研究者との討議。
柳澤明
①中国・北京（中国第一歴史档案館） 2013 年 12 月 23-28 日　清－ロシア間の人と物の移動に関する文書資料調査
②韓国・釜山（東亞大學校石堂博物館） 2014 年 3 月 13-15 日（予定）『二〇世紀滿洲歷史事典』韓日合同書評国際会議に出席，韓国における研究動向の把握
③中国･四平およびその周辺（吉林師範大学滿族文化研究所等） 2014 年 3 月 15-21 日（予定） 四平市およびその周辺で、清代の旗人・移民の族譜資料等を調査
井上治
東京大学総合研究博物館、2014 年 3 月 10 日～ 12 日、清代乾隆期科布多疆域図の調査
中村篤志
3. 調査：調査地、期間、調査内容
札幌（北海道大)、8/25-29、戦間戦中期の内モンゴルに関する文献調査
東京（東洋文庫)、8/1-8/3、滿洲語宮　廷儀礼文献の調査
台湾（台湾大、故宮博物院など)、9/ 7 ～ 11、清代漢文日記史料の調査

共同研究の全般的成果のアピール

本年度は、第一変動期班及び第二変動期班それぞれが科研費による調査・研究を継続実施した。第一変動期班では、今村弘子は韓国ソウルで北朝鮮の経済、中朝辺境貿易に関するヒアリング、中国瀋陽・丹東で中朝経済関係に関するヒアリングを行った。堀江典生は、モスクワのロシア科学アカデミー社会政治研究所及びロシア国際問題評議会で資料収集を行った。雲和広は､連合王国オックスフォード市でソ連人口動態研究に関わる研究･討議を行った。馬紅梅は、ロシア・モスクワの市場の見学調査及び移民労働者のインタビューを行った他、東京大学図書館･北海道大学で資料収集を行った。第二変動期班では、岡洋樹は中国内蒙古自治区フフホト市で資料収集及び内蒙古師範大学などの研究者との研究交流を実施した。柳澤明は中国第一歴史档案館、佐藤憲行はモンゴル国ウラーンバートルの国立歴史中央アルヒーフで文書史料調査を行った。以上の調査に加え、平成 26 年 3 月 8 日、本研究課題に関して内外の研究者との意見交換を行うことを目的に、国際シンポジウム「越境する東北アジア:共生のダイナミズム」を東京で開催､ロシア極東連邦大学･内蒙古大学及び国内の研究者を招いて討論を行った。本年度は、東北アジア辺境部における交流・共生様態について調査の進展を確保するとともに、関連するテーマについて研究している内外の研究者との討論を通じて、課題に関するより広い知見と研究動向を把握することができた。

第三者による評価・受賞・報道など

とくに無し

<table>
<tr><td>研究題目</td><td colspan="4">近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究</td></tr>
<tr><td>研究期間</td><td colspan="4">2012（平成 24）年度～ 2014（平成 26）年度（3 年間）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">研究組織
（下線が代表者）</td><td>氏　名</td><td>所　　属</td><td>氏　名</td><td>所　　属</td></tr>
<tr><td>岡　洋樹

佐藤憲行
青木雅浩</td><td>東北大学東北アジア研究センター
同
同専門研究員</td><td>小沼孝博
中村篤志

ボルジギン・ブレンサイン</td><td>東北学院大学文学部
山形大学人文学部

滋賀県立大学人間文化学部</td></tr>
<tr><td>研究経費</td><td colspan="4">（配布金額）センター長裁量経費　300,000 円</td></tr>
<tr><td>研究の目的と本年度の成果ならびに研究成果の重要性の概要</td><td colspan="4">東北アジアは、その内陸部において広大な草原ステップを有するが、この地域は歴史上遊牧民の活躍の舞台となった。近年、東洋史分野においては、特にモンゴル帝国など遊牧民の政治・経済的活動の世界史的意義への関心の高まりが見られる。これに対して、大清国支配下にあった近世や、遊牧民の定着化・近代化が進んだ近代については、充分に研究がなされていない。
一方脆弱な自然環境を抱える内陸アジアでは、開墾の進展や、過放牧による自然環境の悪化と、これに伴う沙漠化や黄砂問題など、この地域に淵源する環境面での問題に対する関心も高まっている。これは、近代に入って進行した遊牧民の定着化政策や、開発政策と密接に関わる問題である。そこでは、遊牧が自然に調和的な生産であるとする議論と、粗放な放牧こそが環境悪化の原因とする理解が並び立ち、また歴史的経緯に関する理解が共有されていないために、効果的な議論になっていない。かかる議論に歴史学的な基盤を与えるためには、前近代の遊牧民の社会構造や生産形態、20 世紀を通じた近代化・開発政策の問題点などに対する実証的な研究に基づき、過去と現代を繋ぎうるような知見を提示する必要があると思われる。
そこで本研究では、豊富な史料が利用可能な近世（清代）及び近代（20 世紀前半）に関して、遊牧民の社会構造・牧地利用・環境適応、あるいは 19 世紀以後定着化した旧遊牧社会の構造や農耕地利用などの特質について、モンゴルや中国に所蔵される膨大な数の文書資料や現地調査による実証的研究を行う。研究に当たっての基本的視角としては、遊牧 vs 農耕、あるいは移動 vs 定着といった文化に関わる二元論的構図を避け、遊牧社会自体のほか、その農耕社会への変化のプロセスや、旧遊牧社会が農耕化することによって現れた農耕社会の特質、19 世紀以後本格化した漢人移住民社会とモンゴル人社会の関係と共存の様態などに関する研究を行う。</td></tr>
<tr><td colspan="2">成果を公表する URL</td><td colspan="3"></td></tr>
</table>

東北アジア地域研究としての意義

東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕

〈位置づけの内容〉北アジアのモンゴル遊牧民は、東アジア定着農耕文明とともに、東北アジア史を構成した重要な要素であり、その活動の解明は東北アジア地域史を総体として解明する上で不可欠である。

東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕

〈対象とした国・地域など〉ロシア、モンゴル、中国

東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください

内陸アジアの草原ステップ地帯に居住した遊牧民とその国家の歴史的役割の重要性は、従来からつとに指摘されてきたところであり、とくに我が国では、前世紀初頭より、ユーラシアの歴史を北アジアの遊牧民と東アジアの定着農耕文明の関係を軸として説明しようとする試みがなされてきた。しかし遊牧民は文献資料を残すことが少ないことから、その社会構造の歴史的研究には大きな限界があった。このような状況を克服する大きな可能性を秘めているのが、モンゴルや中国所蔵の清代モンゴル文・満文文書史料である。清朝はモンゴルに文書行政システムを導入・整備したことから、モンゴル現地の基層社会レベルに及ぶ膨大な数の公文書が残された。これらの公文書が、冷戦終了後外国人にも公開され、研究に用いられるようになっている。清代モンゴルの公文書は、清朝中央からモンゴルの盟旗現地に及ぶさまざまなレベルで作成されており、これを用いることによってモンゴルを支配した清朝の統治構造の特色や、その下でのモンゴル社会の様態を詳細に解明することが可能となっている。本共同研究は、このような流れの中で、清代モンゴルの公文書史料を用いることによって、当該時期のモンゴル社会の構造と、これに立脚した行政統治構造の解明を目指す。遊牧民の社会構造を現地レベルで研究することによって、遊牧民が東北アジア史に大きな役割を果たした理由を説明することが可能となるだろう。また本共同研究は、かかる課題を、モンゴル、中国などの東北アジア地域諸国の研究者との協力によって考察していく。

新規性

新規性の有無〔有〕

〈新規性の内容〉本研究は、公文書史料を本格的に用いて遊牧民社会の構造の解明を目指そうとすることを目的とする。20 世紀末からようやく本格化した研究領域であり、多くの未解明の課題を含んでいる。この意味で、新規性のある研究であると考えている。

学際性

文理融合型の研究か〔いいえ〕

〈参加した専門分野〉歴史学（東洋史学）

文系・理系での学際性・連携性の有無〔有〕

〈参加した専門分野〉東洋史、地理学、文化人類学など

専門性　専門分野内部での意義

〈専門分野名〉歴史学

〈内容〉北アジアの遊牧民社会の研究は、とくに我が国において長い歴史と蓄積を有するが、近年の動向として、モンゴルなど現地研究者の研究成果の利用、現地所蔵の文書資料の利用が挙げられる。本研究はかかる動向の中で、モンゴルを中心とする遊牧社会の研究を、現地研究者との交流・討議をも行いながら、現地資料で研究しようとするところに専門分野における意義がある。

国際性

国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔有〕
〈国名・研究機関名〉
モンゴル国・モンゴル科学アカデミー歴史研究所
中国・内モンゴル師範大学旅游学院蒙古歴史文化研究所、同蒙古学学院
中国・内蒙古社会科学院歴史研究所、中国人民大学国学院、
国外の研究者の参加の有無〔有〕
〈参加研究者の所属・参加形態〉
平成 24 年度にモンゴル国ウラーンバートル市で上記協力機関との共催で開催した国際シンポジウム「清朝とモンゴル人」の報告論文集の編集作業を行った。
モンゴル科学アカデミー歴史研究所
モンゴル科学アカデミー国際研究所
モンゴル国立中央アルヒーフ
中国内蒙古師範大学旅游学院蒙古歴史文化研究所
中国内蒙古師範大学地理科学学院
中国内蒙古社会科学院歴史研究所
中国人民大学国学院
中国中央民族大学
学術交流協定活用の有無〔有〕
〈協定の名称〉
大学間学術交流協定：モンゴル科学アカデミー
部局間学術交流協定：内蒙古師範大学旅游学院、同蒙古学学院、内蒙古大学蒙古学学院
外国語による成果公表の有無〔有〕
〈言語〉モンゴル語、英語

教育上の効果

学生の参加による教育上の効果〔有〕
〈参加学生の所属〉東北大学大学院環境科学研究科・大学院文学研究科
〈学生による成果発表〉東北大学大学院環境科学研究科、京都大学大学院法学研究科、神戸大学大学院国際文化学研究科から学生が参加し、研究報告論文を提出した。また国内研究会では、大学院学生による報告が行われた。
ポスドクの活用の有無〔有〕
〈活用形態〉専門研究員 1 名が研究に参加し、報告を行った。

教育上の効果についてアピールしてください

国際的な研究者を交えた議論をウラーンバートル現地で行うことによって、参加した学生に海外での研究報告の機会を与えるとともに、報告論文刊行の場にもなった。また国内研究会でも、学生・ポスドクの報告が行われ、専門研究者との討論・意見交換の場を提供した。

社会還元

社会への成果還元・啓蒙が目的に含まれていたか〔いいえ〕
〈内容〉
社会への成果還元の有無〔無〕
〈還元の形態〉

学内連携
学内他部局との組織上の連携はあったか〔有〕
〈連携部局名〉東北大学大学院環境科学研究科・文学研究科
学内他部局教員の研究への参加の有無〔無〕
〈参加教員の所属〉

他組織との連携
国内の研究機関との連携・協力の有無〔無〕
〈連携組織名〉
〈連携の形態〉組織的な協力はなく、個別研究者が研究会・シンポジウムでの報告を行った。
国内の研究機関の研究への参加の有無〔有〕
〈参加研究者の所属〉
滋賀県立大学
山形大学人文学部
京都大学大学院法学研究科
神戸大学大学院国際文化学研究科
神戸大学異文化研究交流センター

資金
センター長裁量経費〔金額 300,000 円　〕

成果発表
研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと）
研究会〔2 回〕
公開の会議・シンポジウム〔　回〕
国際会議〔　回〕
論文・著書
以下に分類したうえで、それぞれの項目に該当する具体的な論文等の題目、著者名、出版年月日などを記載してください。
〔雑誌論文〕計（　）件
〔学会発表〕計（9）件
〔図　　書〕計（　）件
〔その他の公表〕計（　）件
第一回研究会
日時：平成 25 年 6 月 1 日 (土)　13:00 〜 17:30
会場：東北大学川内南キャンパス・文学部文学研究科棟 3 階・中会議室
内容
1. 講演
ライハンスレン・アルタンザヤ氏（モンゴル国立教育大学）「Богд хаант Монгол Улсын Ноён хутагтын шавь хошуу（ボグド・ハーン制モンゴル国のノヤン・ホトクトのシャビ旗）」
2. 研究発表
⑴　中村篤志氏（山形大学人文学部）
「モンゴル王公の年班・行走－光緒 9 年乾清門行走日記の分析から―」
⑵　佐藤憲行氏（東北大学東北アジア研究センター）
「清代モンゴル・ハルハにおける耕作地について」
⑶　ブレンソド氏（東北大学大学院環境科学研究科）

「清代内モンゴル・ハラチン地域のおけるタブナンとソムの関係について」
3. 活動報告
岡洋樹（東北大学東北アジア研究センター）
「国際シンポジウム『清朝とモンゴル人』開催報告」
第二回研究会
日時：平成 26 年 3 月 11 日（火） 14:00 〜 17:30
会場：東北大学川内北キャンパス川北合同研究棟 3 階会議室 (301)
内容
講演：白拉都格其（内蒙古大学蒙古学学院歴史学部）
「辛亥革命与蒙古民族問題的転変（辛亥革命とモンゴル民族問題の転変)」
報告 1 ：渡辺健哉（東北大学大学院文学研究科）
「遼・金・元代の複都制」
報告 2 ：ナツァグドルジ・ハタンバータル（モンゴル国立科学アカデミー歴史研究所）
“Их Хүрээ байгуулагдсан түүхийн асуудалд（イヘ・フレーの創設について)”
報告 3 ：堀内香里 (東北大学大学院環境科学研究科）
「清代モンゴルにおける社会関係調整様態に関する一考察：清代後期のハルハ・セツェン汗部中前旗内部における牧地変更事案を通して」

共同研究の全般的成果のアピール

昨年度開催したモンゴルでのシンポジウムの報告論文集の編集を進めており、近刊の予定である。

国内研究会では、清代のモンゴル遊牧民社会に関わる 5 件の報告や、近代・元代に関わる報告を得たことによって、新たな知見を得るとともに、有益な討論をすることができた。

第三者による評価・受賞・報道など

特になし

<table>
<tr><td>研究題目</td><td colspan="4">現代中国社会の変容とその研究視座の変遷―「宗族」を通した検証</td></tr>
<tr><td>研究期間</td><td colspan="4">2013（平成 25）年度 ～ 2014（平成 26）年度（ 2 年間）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">研究組織
（下線が代表者）</td><td>氏　名</td><td>所　　属</td><td>氏　名</td><td>所　　属</td></tr>
<tr><td>瀬川昌久

川口幸大
稲澤努

小林宏至
聶莉莉
潘宏立</td><td>東北アジア研究センター
東北大学文学研究科
東北アジア研究センター
学振特別研究員（PD）
東京女子大学
京都文教大学</td><td>秦兆雄
長沼さやか
兼城糸絵</td><td>神戸市外国語大学
静岡大学
鹿児島大学</td></tr>
<tr><td>研究経費</td><td colspan="4">（配布金額）300,000 円
（外部資金）300,000 円　（科研費基盤研究(C)）</td></tr>
<tr><td>研究の目的と本年度の成果ならびに研究成果の重要性の概要</td><td colspan="4">中国の父系親族組織である「宗族」をテーマとし、それが中国の改革開放政策、経済発展等によってどのような変容を経験しているのかを跡づけるとともに、研究する側の視点、すなわち文化人類学的にこの「宗族」を研究しようとしてきた研究者の視点が、近 30 年間の研究者内部の意識的・無意識的なパラダイムシフトにともなって、どのように変遷してきたかを問うことを目的とする。かつて中国人社会の人間関係の基本モデルをなすものとして注目を集めた宗族の組織原理やその倫理規範は、今日復興を遂げた宗族の一部においては、伝統文化の資源化や商品化と連動して再活性化されているように見える。これら研究対象と研究主体のダブルな変化の間の相関について、当該分野における主要な研究者の参加を仰いで討論を重ね、われわれ研究者の現在の立ち位置についての客観的理解と今後の研究展望について、一定の共通認識を確立することを目指す。本年度は、2 回の研究会と成果論文の執筆、ならびに科研費の出版助成申請を行った。成果は、科研費出版助成申請の成否に関わらず、2014 年度中には出版の予定である。とりまとめつつある研究成果は、中国に関する地域研究はもとより、文化人類学の親族研究再興のためにも大きな礎石となることが期待される。なお、本研究は東北アジア研究センター共同研究としては初年度だが、科研のプロジェクトとしては既に過去 3 年間活動しており、前年度までに 5 回の研究会を開催している。</td></tr>
<tr><td colspan="2">成果を公表する URL</td><td colspan="3">プロジェクトユニット「現代中国社会の変容に関する文化人類学研究ユニット」の活動紹介 HP の一部として近日公開予定</td></tr>
</table>

東北アジア地域研究としての意義

東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕

〈位置づけの内容〉現代中国社会を対象とするものであり、また宗族に関連する親族理念や行動規範自体は、中国社会を超えて東アジア全域に広くその基層文化の一部として広がっている。その現代的な位相を考究することは、同地域に関わる地域研究にとって大きな貢献となる性格のものである。このことに、研究立案の当初から自覚的に取り組んでいる。

東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕

〈対象とした国・地域など〉中国

東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください

現代中国社会を対象とするものであり、また宗族に関連する親族理念や行動規範自体は、中国社会を超えて東アジア全域に広くその基層文化の一部として広がっている。その現代的な位相を考究することは、同地域に関わる地域研究にとって大きな貢献となる性格のものである。

新規性

新規性の有無〔有〕

〈新規性の内容〉宗族は文化人類学的中国研究にとって古典的テーマであるが、1990 年代以降の中国本土に於ける宗族再生現象を受け、あらためてその現代的な存在理由と、親族研究再興に対してそれがもつ意義を考察しようという点に著しい独創性があり、これまでの先行研究には見られない視点を有している。

学際性

文理融合型の研究か〔いいえ〕

〈参加した専門分野〉文化人類学

文系・理系での学際性・連携性の有無〔有〕

〈参加した専門分野〉文化人類学

本研究は、文化人類学の専門家のみによって組織されているものの、同テーマ自体が歴史研究との中間領域に存在し、その遂行には歴史学的な一定の知識ならびにスキルを必要とする。その意味においては十分に学際的な研究である。

専門性　専門分野内部での意義

〈専門分野名〉文化人類学

〈内容〉文化人類学的中国研究にとって古典的テーマである宗族の現代的な存在理由と、親族研究再興に対してそれがもつ意義を考察しようという点に著しい独創性があり、同分野内における高度な意義を有する。

国際性

国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔有〕

〈国名・研究機関名〉中国、広東民族宗教研究院

国外の研究者の参加の有無〔無〕

〈参加研究者の所属・参加形態〉

学術交流協定活用の有無〔有〕
〈協定の名称〉広東民族宗教研究院との部局間学術交流協定
外国語による成果公表の有無〔無〕
〈言語〉

教育上の効果
学生の参加による教育上の効果〔無〕
〈参加学生の所属〉
〈学生による成果発表〉
ポスドクの活用の有無〔有〕
〈活用形態〉代表者の瀬川が受け入れ教員となっている学振特別研究員（PD）を研究組織に加え、研究に参加してもらっている。

社会還元
社会への成果還元・啓蒙が目的に含まれていたか〔はい〕
〈内容〉地味なテーマだが、政治経済などの時事的話題のみからの理解では到達し得ない深い次元での中国社会理解に貢献するものであり、研究成果が一般読者に公開されることは､相応の啓蒙効果を有するものと考える。このことは当初の企画目的に含まれている。
社会への成果還元の有無〔有〕
〈還元の形態〉政治経済などの時事的話題のみからの理解では到達し得ない深い次元での中国社会理解に貢献するものであり、その研究成果を市販図書として一般に公開すべく出版の準備を進めている。

学内連携
学内他部局との組織上の連携はあったか〔有〕
〈連携部局名〉文学研究科
学内他部局教員の研究への参加の有無〔有〕
〈参加教員の所属〉文学研究科

他組織との連携
国内の研究機関との連携・協力の有無〔有〕
〈連携組織名〉東京女子大学、京都文教大学、神戸市外国語大学、静岡大学、鹿児島大学
〈連携の形態〉教員の個別的な研究参加
国内の研究機関の研究への参加の有無〔無〕
〈参加研究者の所属〉

資金
科学研究費補助金ほか政府関係資金〔金額　300,000 円〕
センター長裁量経費〔金額　300,000 円〕

成果発表
研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと）
研究会〔2 回〕（共同研究としての登録以前の 2012 年度以来通算 7 回）
公開の会議・シンポジウム〔0 回〕
国際会議〔0 回〕
論文・著書

以下に分類したうえで、それぞれの項目に該当する具体的な論文等の題目、著者名、出版年月日などを記載してください。
〔雑誌論文〕計（1）件
瀬川昌久「現代中国における宗族の再生と文化資源化」東北アジア研究 18：81-97、2014年 2 月
〔学会発表〕計（0）件
〔図　　書〕計（0）件
〔その他の公表〕計（0）件
※学会発表、研究成果の図書としての刊行は、いずれも最終年度である 2014 年度中に実施すべく準備を進めているところである。

共同研究の全般的成果のアピール

本年度は、2 回の研究会と成果論文の執筆、ならびに科研費の出版助成申請を行った。東北アジア研究センター共同研究としては初年度だが、科研のプロジェクトとしては既に過去 3 年間活動しており、本年度研究成果の執筆の年に当たる。研究成果論文は既に 3013 年 9 月に全員から提出を受け、その後輪読による意見交換とブラッシュアップの過程が進行中である。また、これらの原稿を基に、2014 年度の科研費出版助成の申請を行ったが、研究成果は科研費出版助成申請の成否に関わらず、2014 年度中には風響社より出版の予定である。これらの研究成果は、中国に関する地域研究はもとより、文化人類学の親族研究再興のためにも大きな礎石となることが期待される。

第三者による評価・受賞・報道など

研究題目	江戸時代から現代に通じる東北の歴史			
研究期間	2013（平成 25）年度 ～ 2014（平成 26）年度（2 年間）			
研究組織 （下線が代表者）	氏　名	所　　属	氏　名	所　　属
	荒武賢一朗	東北アジア研究センター	杉本寛郎	所沢市生涯学習センター
	加藤諭	東北大学史料館	野本禎司	徳川記念財団
	兼平賢治	東北大学大学院文学研究科	松岡弘之	大阪市史料調査会
			三ツ松誠	東京大学大学院人文社会系研究科
	佐藤和賀子	米沢女子短期大学		
			宮田直樹	米沢市教育委員会
研究経費	（配布金額）300,000 円 （その他）上廣歴史資料学研究部門予算 350,000 円			
研究の目的と本年度の成果ならびに研究成果の重要性の概要	東北地方の歴史研究は、古代から近現代に至る長期的時間軸を視野に多くの成果が生み出されてきた。この共同研究では、とくに 17 世紀から 20 世紀にかけてのおよそ 300 年について、各論による歴史分析を主たる課題とする。目下、震災復興について日夜議論され、未来の地域社会の土台を構築されようとしているが、本研究では歴史研究からの社会貢献を目指している。大きな課題に直面しながらも、まずはここに参加する研究者それぞれが、かつて東北に住み暮らした人々の足跡を追いながら、現代社会に対してその実像を伝えたい。 江戸時代に相当する前半期では、「領主と民間社会」をキーワードにして、幕府領の支配構造、仙台藩における農地開発、盛岡藩内の民衆運動、米沢藩と経済システムなどを分析する。現代風にいえば、行政組織と地域社会の関係にも近似するが、当時の人々は「公」と「民」の関係をどのように切り結んでいたのかを地域資料に基づいて考察する。また、歴史上の重要な画期である明治維新期の秋田や宮城の事例をもとに、学問や経済構造のあり方を探求したい。秋田については稀代の国学者だった平田篤胤の影響を検討し、明治時代の宮城については、百貨店が登場することで劇的な変化を遂げる様相を「大衆社会」の誕生ととらえる。さらに、戦前の軍医とその妻が手掛けた社会事業と、戦後におけるハンセン病元患者の社会復帰など、当地の地域医療や社会事業の実像に迫ることができた。 1 年目である今年度は資料調査やメンバー間の相互理解に重点を置いたため、成果の公表は多いとは言えないが、地域史研究の成果を社会へと還元するため、市民講座など一般向けの講演会を中心に発信をした。また、東北地方在住者とそれ以外の地域から参加する研究者が手を組むことで、資料情報の全国的な共有や、密接な議論をふまえての新しい成果を打ち出す予定である。			
成果を公表する URL	http://uehiro-tohoku.net/			

東北アジア地域研究としての意義

東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕

〈位置づけの内容〉東北アジア地域の一部を担う日本の歴史研究の取り組みであり、とくに日本列島のなかでも東北地方をフィールドに絞っている。ただし、一地域の研究ではあるものの、ここでの分析が日本列島、そして東北アジア地域の歴史分析に大きな貢献をすると考えている。

東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕

〈対象とした国・地域など〉日本

東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください

東北アジア地域を構成する日本列島の現在に至る300年余りの歴史分析を通じて、地域史の詳細分析のモデルを構築したい。この共同研究によって、日本におけるモデルを提示し、歴史学のみならず、隣接諸科学との相互関係、またエリア研究として他の東北アジア地域との比較分析を可能にしたい。

新規性

新規性の有無〔有〕

〈新規性の内容〉「東北地方の歴史」に関しては、多くの研究が蓄積されている。ただし、現在では時期区分も細分化され、また対象となる地域も個別化している傾向がみられる。その点で、本研究では歴史区分の近世・近代・現代を通観し、地域内の「町」・「村」・「面としての地域」を意識しながら、新しい試みをおこなっている。

学際性

文理融合型の研究か〔いいえ〕

〈参加した専門分野〉歴史学

文系・理系での学際性・連携性の有無〔無〕

〈参加した専門分野〉歴史学

専門性　専門分野内部での意義

〈専門分野名〉歴史学

〈内容〉「東北地方の歴史」は、古代から現代に至るまで秀逸な分析が蓄積されている。しかしながら、東北地方一円をフィールドに、また時期区分を超越する研究成果はそれほど多くない。そのなかで､本研究では江戸時代から現代に至る人々の生活実態や人物史、また人々を取り巻く社会環境に重点を置きながら分析を深めようとしている。

国際性

国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔無〕

〈国名・研究機関名〉

国外の研究者の参加の有無〔無〕

〈参加研究者の所属・参加形態〉

学術交流協定活用の有無〔無〕

〈協定の名称〉

外国語による成果公表の有無〔無〕

〈言語〉

教育上の効果

学生の参加による教育上の効果〔無〕
〈参加学生の所属〉
〈学生による成果発表〉
ポスドクの活用の有無〔無〕
〈活用形態〉

社会還元

社会への成果還元・啓蒙が目的に含まれていたか〔はい〕
〈内容〉・市民講座、歴史講演会における積極的な社会還元
社会への成果還元の有無〔有〕
〈還元の形態〉

共同研究のメンバーは、初年度の調査・分析過程において、市民講座などでその成果を紹介している。その数は 10 本に及ぶが、とくに当該研究のフィールドに関しては 7 本の成果がある（下記「その他の公表」を参照のこと)。そのうち、荒武の東北アジア研究センターの主催事業にかかるものが多いが、宮城・山形両県の地域史に関する分析成果を地元住民向けに講演をおこなった。地域史料の内容を地元で話し、そして現在の生活やまちづくりに活用しようとする動きに呼応するもので、今後もその都度研究成果を披露したい。また、松岡のおこなった 11 月 26 日の講演は、自身が共同研究で取り組んでいるテーマの資料を保存する社会福祉法人の依頼によって実現した。資料所蔵機関であるとともに、法人の歩んできた歴史や、地域における役割などをこの講演で改めて職員各位に伝える絶好の機会となった。

学内連携

学内他部局との組織上の連携はあったか〔無〕
〈連携部局名〉
学内他部局教員の研究への参加の有無〔有〕
〈参加教員の所属〉
・加藤諭　　東北大学学術資源研究公開センター・史料館　教育研究支援者
・兼平賢治　東北大学大学院文学研究科日本史研究室　助教

他組織との連携

国内の研究機関との連携・協力の有無〔無〕
〈連携組織名〉
〈連携の形態〉
国内の研究機関の研究への参加の有無〔無〕
〈参加研究者の所属〉

資金

センター長裁量経費〔金額　300,000 円〕
その他〔資金名：上廣歴史資料学研究部門予算　350,000 円〕

成果発表

研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと）
研究会〔2 回〕
公開の会議・シンポジウム〔0 回〕

国際会議〔0 回〕
論文・著書
以下に分類したうえで、それぞれの項目に該当する具体的な論文等の題目、著者名、出版年月日などを記載してください。
〔雑誌論文〕計（1）件
・荒武賢一朗「書評・菊池勇夫著『東北から考える近世史―環境・災害・食料、そして東北史像―』」（東北史学会『歴史』第 121 号、2013 年 10 月）
〔学会発表〕計（1）件
・松岡弘之「ハンセン病回復者・鈴木重雄の社会復帰とその後―1970 年代の宮城県本吉郡唐桑町」（「病いと障害」研究会（研究代表者：蘭由岐子）、追手門学院大学梅田サテライト、2014 年 2 月 27 日）
〔図　　書〕計（3）件
・荒武賢一朗編『東北大学東北アジア研究センター報告 10　地域の歴史を学ぶ―宮城県大崎市の文化遺産―』東北大学東北アジア研究センター、2013 年
・野本禎司「近世後期旗本家用人の就任過程―江戸・周辺地域論の視座から」（大石学編『近世首都論』岩田書院、2013 年）
・佐藤和賀子「東北六県における女性の政治参画」（鈴木岩弓・田中則和編『講座東北の歴史第六巻　生と死』清文堂、2013 年）
〔その他の公表〕計（10）件
講演
・荒武賢一朗「江戸時代における経済流通―年貢米のゆくえ―」（講座「山形の歴史を学ぶ」、於山形県・寒河江市文化センター、2013 年 9 月 7 日）
・荒武賢一朗「江戸時代の鬼首を明らかにする―地域の古文書が伝える歴史―」（講座：地域の歴史を学ぶ◎鬼首、於大崎市鳴子温泉鬼首・洞雲寺、2013 年 10 月 6 日）
・荒武賢一朗「江戸時代の書籍が語る地域文化」（平成 25 年度みやぎ県民大学活用出前講座、於利府町生涯学習センター、2013 年 10 月 24 日）
・荒武賢一朗「幕末維新期の利府と情報・経済」（平成 25 年度みやぎ県民大学活用出前講座、於利府町生涯学習センター、2013 年 10 月 31 日）
・荒武賢一朗「幕末維新期の日記を読む」（山形県立博物館平成 25 年度古文書講座講演会、2013 年 11 月 29 日、於山形県立博物館）
・加藤論「近代利府の社会と経済」（平成 25 年度みやぎ県民大学活用出前講座、於利府町生涯学習センター、2013 年 10 月 10 日）
・野本禎司「本所の旗本・御家人」（すみだ郷土文化資料館講演会、於東京都墨田区・すみだ郷土文化資料館、2013 年 10 月 6 日）
・野本禎司「江戸城大奥と留守居」（2013 秋えどはくカルチャー、於東京都江戸東京博物館、2013 年 11 月 20 日）
・野本禎司「江戸時代の上・下井草村と領主今川氏」（西荻地域の歴史シリーズ、於東京都杉並区・西荻地域区民センター、2013 年 11 月 28 日）
・松岡弘之「洗心会初代理事長・鈴木重雄について」（社会福祉法人洗心会職員研修会、於気仙沼市・知的障害者更生施設第 2 高松園、2013 年 11 月 26 日）

共同研究の全般的成果のアピール
分担者それぞれの具体的な論点が明確になることで、東北地方の歴史研究として大きな成果につながる。また、取り上げるテーマが江戸時代の地域政治、明治時代の商業、社会福祉、文化人の活動などと、「顔の見える人の動き」を全体的テーマとしている。そのことによって、いままで明らかにされてこなかった地域史の重要な史実が浮き彫りに

なるだろうと考えている。

日本史研究における地域史の成果は、おおよそ当該地域（本研究では東北地方）に在住する研究者が手掛けるのが通例となっている。東北地方の歴史研究でも同様の流れが認められるが、本研究では東北地方在住者と、東北以外の研究者（東京・埼玉・大阪在住）が同じテーマに向かい、一緒に議論を重ねることで「閉じられた地域史」からの脱却を模索している。たとえば、地の利を活かした地元研究者、客観的な視座から史実を読み解く地域外の専門家が、お互いの特徴をうまく使い、歴史分析の総合化を目指している。

第三者による評価・受賞・報道など

とくになし

研究題目	日本列島の文化交渉史 ― 経済と外交			
研究期間	2013（平成 25）年度 ～ 2014（平成 26）年度（2 年間）			
研究組織 （下線が代表者）	氏　名	所　　属	氏　名	所　　属
	荒武賢一朗	東北アジア研究センター	中山圭	天草市役所観光文化部
			古川祐貴	長崎県立対馬歴史民俗資料館
	麻生伸一	沖縄県立芸術大学		
	小林延人	日本学術振興会特別研究員	宮坂新	館山市立博物館
			ル・ルー ブレンダン	帝京大学外国語学部
	下向井紀彦	財団法人三井文庫		
	鄭英實	韓国・慶尚大学校慶南文化研究院		
研究経費	（配布金額）300,000 円 （その他）上廣歴史資料学研究部門予算 550,000 円			
研究の目的と本年度の成果ならびに研究成果の重要性の概要	近年の歴史学では、グローバル・ヒストリーをはじめ、一国史的研究を克服し、複数の国・地域にまたがる考察が深められている。また、さまざまな専門家が事例を持ち寄り、学際的に分析を深めていこうとする傾向も増えてきた。私たちの共同研究では、このような研究の潮流に刺激を受けながら、東北アジア地域における日本列島の歴史的位置付けをおこないたい。今回の分析対象として取り上げたのは、経済と外交に関する諸問題である。この二つの問題から、「日本列島の文化交渉史」を明らかにしていく。 日本列島を中心としているが、中国や朝鮮半島との関係史について具体的事例を用いながら明らかにする。また東北アジア地域を軸としながら広く国際関係史の視座を持ち、多角的な文化交渉のあり方を実証したのが今年度の成果といえよう。 経済に関しては、江戸時代の大名（藩）財政、関東地方の肥料（干鰯＝魚肥）生産と流通、経済界をリードした三井越後屋の木綿取引などを、各地域の特性を深めながら考察した。とくに藩財政では支出に関するデータ、肥料流通では通説とは異なる新しい理解、三井の経営史と地域社会の連関といった、これまで注目されなかった成果を得ることができた。 外交分野では、日韓双方の学界、近年では中国の研究者も注目する朝鮮通信使の分析をおこなった。ここでは外交使節と地域文化の接触を取り上げている。また琉球使節の儀礼については 18 世紀の日本と中国、そして琉球の諸関係を詳しく分析した。その他、移民政策や国際的な技術伝播など、ヒト・モノの国際的交流について新たな知識を獲得したといえよう。			
成果を公表する URL	http://uehiro-tohoku.net/			

東北アジア地域研究としての意義

東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕

〈位置づけの内容〉東北アジア地域のなかで日本列島を主要な分析対象とするが、中国や朝鮮半島との文化交渉を含めた地域一帯の歴史研究を目指している。

東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕

〈対象とした国・地域など〉日本、朝鮮半島、中国

東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください

長らく歴史学、とりわけ日本史においては「江戸時代＝鎖国」のイメージで議論が展開されてきた。しかしながら、近年では閉鎖性を帯びながらも近隣諸国との関係を有してきたことが多々指摘されている。その意味では、経済と外交をキーワードに日本列島を軸としながら、中国や朝鮮半島、および諸外国との交流について深く考察することに大きな意義があると考えている。

新規性

新規性の有無〔有〕

〈新規性の内容〉近年の日本史研究においても文化伝播や交流に関する成果は多数出されている。そのなかで本研究の斬新さを主張するならば、江戸時代と明治時代をひとつのまとまった時期として、交流史の流れを想定していることである。開国や明治維新を画期とするのではなく、それらの変革期を含めて一括した文化交流の歴史を探る作業はほとんどなく、また極めて重要な作業であろうと考えている。

学際性

文理融合型の研究か〔いいえ〕

〈参加した専門分野〉歴史学、考古学、文学

文系・理系での学際性・連携性の有無〔無〕

〈参加した専門分野〉歴史学、考古学、文学

専門性　専門分野内部での意義

〈専門分野名〉歴史学

〈内容〉日本列島を取り巻く対外関係史の研究は、これまでも多くの成果が出ている。たとえば、江戸時代の研究では、「四つの口（長崎・琉球・対馬・松前）」を中心とした貿易および外交関係の考察が分厚く提示されている。本研究では、中核地域であった四つの口の分析を深化されることはもちろんのこと、それ以外の地域（大阪、熊本県天草諸島、新潟県佐渡島など）や、日本国内と諸外国をつなぐ存在（商人や朝鮮通信使、琉球使節、移民など）にも目配りをして、地域と人々・集団・組織の包括的研究をおこなおうとしている。また、歴史学を専攻するメンバーが過半を占めているが、考古学や文学など隣接諸科学からの参加者を含め、東北アジア地域史研究の一つのモデルを提示したい。

国際性

国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔無〕

〈国名・研究機関名〉

国外の研究者の参加の有無〔有〕

〈参加研究者の所属・参加形態〉・鄭 英實（チョン・ヨンシル）韓国・慶尚大学校慶南文化研究院特別研究員、毎回の研究報告会に参加

学術交流協定活用の有無〔無〕

〈協定の名称〉
外国語による成果公表の有無〔有〕
〈言語〉中国語：論文　麻生伸一「近世琉球的進献問題与薩摩藩」(『海大日本研究』中国海洋大学出版社（中国)、2013 年 10 月)

教育上の効果
学生の参加による教育上の効果〔無〕
〈参加学生の所属〉
〈学生による成果発表〉
ポスドクの活用の有無〔無〕
〈活用形態〉

社会還元
社会への成果還元・啓蒙が目的に含まれていたか〔はい〕
〈内容〉本研究を通じて、参加メンバーがそれぞれ市民講座や、一般向けの歴史書などで成果を紹介することを目的としている。
社会への成果還元の有無〔有〕
〈還元の形態〉
・歴史講演会
・新聞のコラム

学内連携
学内他部局との組織上の連携はあったか〔無〕
〈連携部局名〉
学内他部局教員の研究への参加の有無〔無〕
〈参加教員の所属〉

他組織との連携
国内の研究機関との連携・協力の有無〔無〕
〈連携組織名〉
〈連携の形態〉
国内の研究機関の研究への参加の有無〔無〕
〈参加研究者の所属〉

資金
センター長裁量経費〔金額 300,000 円〕
その他〔資金名：上廣歴史資料学研究部門予算　金額 550,000 円〕

成果発表
研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと）
研究会〔2 回〕
公開の会議・シンポジウム〔0 回〕
国際会議〔0 回〕
論文・著書
以下に分類したうえで、それぞれの項目に該当する具体的な論文等の題目、著者名、出版年月日などを記載してください。

〔雑誌論文〕 計（6）件
・荒武賢一朗「書評・高槻泰郎著『近世米市場の形成と展開―幕府司法と堂島米会所の発展―』」（大阪歴史学会『ヒストリア』第 237 号、2013 年 4 月）
・麻生伸一「近世琉球的進献問題与薩摩藩」（『海大日本研究』中国海洋大学出版社（中国）、2013 年 10 月）
・下向井紀彦「近世後期港湾都市尾道における諸品会所の成立と展開」（広島史学研究会『史学研究』第 281 号、2013 年 9 月）
・鄭英實「書評・染谷智幸、崔官編『日本近世文学と朝鮮』」（『東北アジア研究』第 18 号、2014 年 2 月）
・ル・ルー　ブレンダン「メルメ・カションと日本（その四）―日本宣教団におけるメルメの位置―パリ外国宣教会脱会の謎を解いて」（日本仏史学会編『仏蘭西学研究』第 39 号、2013 年 7 月）
・古川祐貴「書評・松尾晋一著『江戸幕府と国防』」（『東北アジア研究』第 18 号、2014 年 2 月）
〔学会発表〕計（13）件
・荒武賢一朗「日本列島市場論と地域物流」（近世史フォーラム 2013 年 5 月例会、2013 年 5 月 18 日、於大阪市立浪速区民センター）
・荒武賢一朗「出羽国飛島の海運記録を読む―長井政太郎収集資料を中心に―」（石見銀山研究会、2013 年 10 月 17 日、於島根県大田市・石見銀山資料館）
・荒武賢一朗「出羽国飛島と日本海海運―難船記録と客船帳を中心に―」（仙台近世史フォーラム 2013 年 11 月例会、2013 年 11 月 8 日、於仙台市・東北学院サテライトステーション）
・荒武賢一朗「近世後期大坂商人と大名家―井上市兵衛の記録と情報収集―」（奈良歴史研究会 12 月例会、2013 年 12 月 13 日、於奈良女子大学）
・麻生伸一「琉球王国末期の廟制について―先王祭祀にみる琉球の王権―」（近世史フォーラム 2013 年 12 月例会、2013 年 12 月 14 日、於大阪市立阿倍野市民学習センター）
・小林延人「銭屋佐兵衛家の経営に見る大坂両替商の資本蓄積と近代的資本家への転化」（経済史研究会、2013 年 7 月 22 日、於東京大学大学院経済学研究科 学術交流棟（小島ホール）小島コンファレンスルーム）
・小林延人「明治維新期における貨幣流通」(Serch Theory Workshop、2013 年 11 月 15 日、於大阪大学豊中キャンパス・法学・経済学研究棟（新館）7 階大会議室）
・小林延人「幕末維新期における大坂両替商・銭屋佐兵衛家の経営」（近世史フォーラム 2014 年 1 月例会、2014 年 1 月 10 日、於大阪市中央公会堂　第 1 会議室）
・下向井紀彦「寛政期における三井越後屋の木綿仕入と買宿」（近世史フォーラム 2013 年 5 月例会、2013 年 5 月 18 日、於大阪市立浪速区民センター）
・下向井紀彦「三井越後屋の他店認識と経営見直し―寛政年間を事例に―」（三井文庫研究会、2013 年 7 月 23 日、於財団法人三井文庫）
・中山圭「天草五人衆と鉄砲・キリスト教」（熊本日韓文化交流研究会 10 周年記念「2013 日韓歴史シンポジウム in 天草：日本と韓国のキリスト教受容史」2013 年 11 月 24 日、於天草宝島国際交流会館ポルト（熊本県天草市））
・古川祐貴「宗家文書の中の図書：対馬藩主図書の受給条件」（大韓民国国立釜慶大学校対馬研究センター第 2 回研究会、2013 年 12 月 20 日、於韓国・釜慶大学校大淵キャンパス張保皐館）
・ル・ルー　ブレンダン「幕末に来日した仏人宣教師の伝えた江戸幕府－メルメ・カションの『日本のヒエラルキーに関する研究』を中心に－」（日本仏学史学会第 37 回全国大会、2013 年 6 月 22 日、於青山学院大学）
〔図　書〕 計（8）件

・麻生伸一「近世琉球における災害・災禍と祭祀に関する一考察」(『2011 年度トヨタ財団研究助成採択プログラム報告書　沖縄・奄美島嶼社会における災害・防災の歴史的変遷に関する包括的研究』2013 年 10 月)
・麻生伸一「康熙五十八年　冠船日記　解題」主編：高良倉吉、赤嶺守、豊見山和行『台湾大学典蔵全文刊本 3　国立台湾大学図書館典蔵琉球関係史料集成』第一巻、台湾大学図書館、2013 年 10 月。
・西里喜行、赤嶺守、漢那敬子、豊見山和行、麻生伸一、山田浩世、前田舟子「康熙五十八年　冠船日記」「乾隆元年　親見世日記」「乾隆四年　親見世日記」主編:高良倉吉、赤嶺守、豊見山和行『台湾大学典蔵全文刊本 3　国立台湾大学図書館典蔵琉球関係史料集成』第一巻、台湾大学図書館、2013 年 10 月。
・小林延人「宮内公文書館の佐渡鉱山関係史料から見る宮内省決済」(受託研究『佐渡鉱山の歴史的価値に関する歴史学的・史料学的研究』2013 年度調査報告書、2014 年 3 月)
・古川祐貴（展示図録作品解題)『対馬藩と朝鮮通信使』(長崎歴史文化博物館編集・発行、2013 年 10 月)
・宮坂新（展示図録執筆)『平成 25 年度特別展　安房の干鰯―いわしと暮らす、いわしでつながる―』(館山市立博物館編集・発行、2014 年 2 月 1 日)
・ル・ルー　ブレンダン（分担執筆)「日米和親条約」「下田協約」「日米修好通商条約」(大石学編『徳川歴代将軍事典』吉川弘文館、2013 年 8 月)
・ル・ルー　ブレンダン「幕末期の欧米使節の見た日本の首都―米英仏使節を中心に―」(大石学編『近世首都論―都市江戸の機能と性格―』岩田書院、2013 年 11 月)

〔その他の公表〕計 (3) 件

新聞コラム
・古川祐貴「史談・史論　元禄対馬国絵図」(『長崎新聞（朝刊)』2013 年 7 月 14 日、長崎新聞社)

講演
・荒武賢一朗「古文書からみた日本海海運―庄内・飛島の船舶関係史料から―」(山形県立博物館平成 25 年度古文書講座講演会、2013 年 6 月 14 日、於山形県立博物館)
・荒武賢一朗「19 世紀の海運業と沿岸社会の変化」(日本アジア講座、2013 年 10 月 9 日、於ロシア・ノボシビルスク国立大学)

共同研究の全般的成果のアピール

18 世紀から 19 世紀の日本列島を中心に、ヒトとモノの往来を考察しながら、文化の交渉について検討を深めている。基本的には日本国内と諸外国の関係性を意識しているが、同じ東北アジア地域である中国や朝鮮半島との外交史、また明治時代にフランス領西インド諸島のグアドループ島に移民をした広島県民たちの足跡を追うなど、日本史とアジア史、そして世界史との架橋を目指す取り組みを実施した。

共同研究に取り組む背景として重視すべきは、国際的な研究の意義であろう。麻生伸一の手掛ける琉球と清国、日本の外交史研究では、国内の成果だけではなく、中国や台湾の研究蓄積も参考にしている。また、鄭英實の朝鮮通信使分析は歴史学、文学、あるいは言語学の観点からも重厚な考察があり、日韓双方、および最近では中国の研究者も大きな関心を寄せている。そして、ル・ルーのフランス移民史研究についても、西インド諸島の歴史やフランス国家史、一方の日本における近代移民の分析など、歴史学・社会学などを包摂した日仏の総合研究が求められている。いずれの成果についても、日本以外の研究者にも影響を与える成果を出していきたい。

第三者による評価・受賞・報道など

とくになし

<table>
<tr><td>研究題目</td><td colspan="4">震災復興のための地中レーダによる遺跡探査推進
（GPR Archaeological Survey for Rehabilitation from Disaster ）</td></tr>
<tr><td>研究期間</td><td colspan="4">2013（平成 25）年度 ～ 2015（平成 28）年度（3 年間）</td></tr>
<tr><td rowspan="4">研究組織
（下線が代表者）</td><td>氏　名</td><td>所　　属</td><td>氏　名</td><td>所　　属</td></tr>
<tr><td><u>佐藤源之</u></td><td>東北アジア研究センター</td><td>劉　海</td><td>東北アジア研究センター</td></tr>
<tr><td>高橋一徳</td><td>東北アジア研究センター</td><td>藤沢　敦</td><td>東北大学埋蔵文化財調査室・特任准教授</td></tr>
<tr><td>Christian Koyama</td><td>東北アジア研究センター</td><td>金田明大
駒木野智寛</td><td>奈良文化財研究所・主任研究員
東北アジア研究センター</td></tr>
<tr><td>研究経費</td><td colspan="4">（配布金額）0
（外部資金）東北大学災害科学国際研究所　特定プロジェクト研究「アレイ型地中レーダを用いた高台移転に伴う遺跡調査の効率化」（平成 25 年度 1,275,000 円）
国立大学協会平成 25 年度「震災復興・日本再生支援事業」「高台移転に伴う遺跡調査のアレイ型地中レーダによる効率化」（支援経費額 8,000,000 円）
また、計測装置の改良に関しては　科研費　基盤研究(A)「最適空間サンプリングによる地雷検知用レーダイメージングの効率化」（平成 25 年度 9,000,000 円）を充当。</td></tr>
<tr><td>研究の目的と本年度の成果ならびに研究成果の重要性の概要</td><td colspan="4">我々は「減災をめざした電波科学研究ユニット」の具体的な活動の一つとして、震災復興を促進するための遺跡調査技術について活動を行ってきた。東日本大震災からの復興における住宅の高台移転に伴い、今後 5 年間程度で震災地域において多数の遺跡調査の実施が予想されている。地中レーダー（GPR）は非開削の探査技術であり、遺跡の迅速に判断することができる。また発掘に先立ち、地中レーダーによって遺跡状況を把握することで、効率のよい調査が実現できる。そのため、本研究では東北大学が開発した新しい地中レーダー計測手法（アレイ型 GPR と高精度調査 3DGPR 技術）を利用した遺跡調査技術を、地方自治体の遺跡探査へ実践的な技術協力・技術指導することで震災復興を推進する。2013 年度においては、まだこうした震災復興としての遺跡調査の需要が高いが、今後こうした需要は徐々に減少し、各地方自治体においては、より長期的な遺跡調査とその保護、利用に関する活動が盛んになると考えている。2013 年度においても、こうした要望があった場合には、学術的な価値があると判断した場合、遺跡調査を実際に行ってきた。</td></tr>
<tr><td colspan="2">成果を公表する URL</td><td colspan="3">http://magnet.cneas.tohoku.ac.jp/satolab/researchunit/</td></tr>
</table>

東北アジア地域研究としての意義

東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔　　〕
〈位置づけの内容〉
東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕
〈対象とした国・地域など〉日本・東北地方

東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください
地域復興に関わる課題であるが、目的としては該当しない

新規性

新規性の有無〔無〕
〈新規性の内容〉我々以外のグループでは実行する技術を持たない。

学際性

文理融合型の研究か〔はい〕
〈参加した専門分野〉電気工学、電波工学、考古学
文系・理系での学際性・連携性の有無〔有〕
〈参加した専門分野〉電気工学、電波工学、考古学

専門性　専門分野内部での意義

〈専門分野名〉
〈内容〉計測手法の新規性

国際性

国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔無〕
〈国名・研究機関名〉
国外の研究者の参加の有無〔無〕
〈参加研究者の所属・参加形態〉
学術交流協定活用の有無〔無〕
〈協定の名称〉
外国語による成果公表の有無〔有〕
〈言語〉英語

教育上の効果

学生の参加による教育上の効果〔有〕
〈参加学生の所属〉環境科学研究科工学部より多数参加。
〈学生による成果発表〉2 件
ポスドクの活用の有無〔有〕
〈活用形態〉産学官連携研究員 2 名を教育研究支援者として 15% のエフォートで雇用。自由な研究に当たらせた。

社会還元

社会への成果還元・啓蒙が目的に含まれていたか〔はい〕
〈内容〉
社会への成果還元の有無〔有〕
〈還元の形態〉地方自治体の活動支援

学内連携

学内他部局との組織上の連携はあったか〔有〕
〈連携部局名〉埋蔵文化財調査室
学内他部局教員の研究への参加の有無〔有〕
〈参加教員の所属〉埋蔵文化財調査室

他組織との連携

国内の研究機関との連携・協力の有無〔有〕
〈連携組織名〉奈良文化財研究所
〈連携の形態〉
国内の研究機関の研究への参加の有無〔　有　無　〕
〈参加研究者の所属〉

資金

総長裁量経費〔金額 5,000,000 円〕
運営費交付金（個人研究費）
その他〔資金名：防災科学国際研究所　特別プロジェクト研究「アレイ型地中レーダを用いた高台移転に伴う遺跡調査の効率化」1,300,000 円
国立大学協会「震災復興・日本再生支援事業」「高台移転に伴う遺跡調査のアレイ型地中レーダによる効率化」800,000 円〕

成果発表

研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと）
研究会〔　回〕
公開の会議・シンポジウム〔　回〕
国際会議〔　回〕
論文・著書
以下に分類したうえで、それぞれの項目に該当する具体的な論文等の題目、著者名、出版年月日などを記載してください。
〔雑誌論文〕計（0）件
〔学会発表〕計（5）件
〔図　　書〕計（0）件
〔その他の公表〕計（　）件

NHK 総合テレビ　2013 年 11 月 13 日全国放送　くらし☆解説　「掘らずに調べる考古学」
http://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/700/172824.html
http://tvtopic.goo.ne.jp/kansai/program/info/225516/index.html

共同研究の全般的成果のアピール

活動回数は極めて多く、獲得した外部資金を大幅に超過した。

第三者による評価・受賞・報道など

研究題目	新疆、満州をめぐる 20 世紀前半のソ連、中国の政策			
研究期間	2013（平成 25）年度 ～ 2015（平成 27）年度（3 年間）			
研究組織 (下線が代表者)	氏　名	所　　属	氏　名	所　　属
	寺山恭輔 上野稔弘	東北アジア研究センター 東北アジア研究センター	巽由樹子 (～2013年9月) 麻田雅文	東北アジア研究センター (現在東京外国語大学外国語学部専任講師) 東北アジア研究センター
研究経費	(配布金額) 300,000 円 (その他)「1920-1940 年代の中国・ソ連における民族政策の比較研究」科研費 (2009-2013 年度)			
研究の目的と本年度の成果ならびに研究成果の重要性の概要	2012 年度の 1 年度限定で焦点を絞っていた新疆に関する研究期間を若干延長して叢書の出版を実現すること、それに加えて同じくソ連と中国の二大国が隣接する重要な地域である満州（中国東北部）にも研究範囲を拡大することを目的としている。20 世紀前半に焦点を絞るが、この時期は日本が植民地国家『満州国』を形成した時期で、日本を中心にそれと対峙するソ連、中国の三国間の微妙な国際関係がこの地域に影響を及ぼしたことを念頭に、中露両方面と日本における史料収集と分析を進めることを目指している。 本共同研究は、「20 世紀ロシア・中国史再考」研究ユニットと連動した研究企画だが、本プロジェクトユニットの活動をさらに充実させるべく、前年度に資金的に実現できなかった国内での新疆問題に関するセミナーを外部専門家を交えて 2013 年 12 月に開催することで出版を予定している叢書の内容の質的向上をはかることができた。満州研究の進展についても検討を進めているところである。			
成果を公表する URL				

東北アジア地域研究としての意義

東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕

〈位置づけの内容〉本共同研究は、東北アジア地域を構成する二大国中国、ロシア（ソ連）及びそれと深くかかわった日本を研究対象としている。研究手法は文献収集を主とする歴史研究である。研究関心は中露両国が国境を接する多民族地域にあり、今日の東北アジア地域における民族問題の淵源を探る研究として位置づけることが可能である。

東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕

〈対象とした国・地域など〉中国、ロシア（ソ連)、日本

東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください

本共同研究は新疆・満洲をターゲットとする。特に新疆は昨年も北京天安門広場前、或いは雲南省昆明で「新疆民族（または分離）主義者によるテロ活動」が行われた等の情報が伝えられるように依然として緊張が続いているアクセスが困難な地域である。また満洲には日本が傀儡国家『満洲国』を作り上げ､日本人により馴染みの深い地域である。本研究では、20 世紀前半、スターリンと蒋介石がそれぞれソ連と中華民国を支配していた時期のこれらの地域の状況を歴史的・文献的に研究することを目指している。ロシア、中国研究者が共同でアプローチすることで、個別研究にある限界の打破を目指している。本年度は特に新疆に焦点を絞ったセミナーを開催し、十分その目的を達成することができた。

新規性

新規性の有無〔有〕
〈新規性の内容〉
ロシア、中国のしかもほぼ同じ時代を対象とする歴史研究者が共同研究を行うことに新規性があるといえる。これによって各国史の枠組みにとらわれないアプローチを可能としている。

学際性

文理融合型の研究か〔いいえ〕
〈参加した専門分野〉
文系・理系での学際性・連携性の有無〔無〕
〈参加した専門分野〉

専門性　専門分野内部での意義

〈専門分野名〉歴史学
〈内容〉ロシア史、中国史の分野で新疆をテーマとする研究自体がきわめて少なく、新たな史料、知見を提供することが可能である。

国際性

国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔有〕
〈国名・研究機関名〉
ロシア科学アカデミーロシア史研究所他
国外の研究者の参加の有無〔有〕
〈参加研究者の所属・参加形態〉
刊行物への論文執筆
学術交流協定活用の有無〔有〕
〈協定の名称〉
東北大学とロシア科学アカデミーシベリア支部間の学術協定
外国語による成果公表の有無〔有〕
〈言語〉ロシア語

教育上の効果

学生の参加による教育上の効果〔無〕
〈参加学生の所属〉
〈学生による成果発表〉

ポスドクの活用の有無〔無〕
〈活用形態〉

社会還元
社会への成果還元・啓蒙が目的に含まれていたか〔はい〕
〈内容〉
社会への成果還元の有無〔有〕
〈還元の形態〉図書の出版

学内連携
学内他部局との組織上の連携はあったか〔無〕
〈連携部局名〉
学内他部局教員の研究への参加の有無〔無〕
〈参加教員の所属〉

他組織との連携
国内の研究機関との連携・協力の有無〔無〕
〈連携組織名〉
〈連携の形態〉
国内の研究機関の研究への参加の有無〔有〕
〈参加研究者の所属〉東京外国語大学、東洋大学

資金
センター長裁量経費〔金額 300,000 円〕
運営費交付金（個人研究費）

成果発表
研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと）
研究会〔0 回〕
公開の会議・シンポジウム〔1 回〕
国際会議〔0 回〕
論文・著書
以下に分類したうえで、それぞれの項目に該当する具体的な論文等の題目、著者名、出版年月日などを記載してください。
〔雑誌論文〕計（　）件
〔学会発表〕計（　）件
〔図　　書〕計（　）件
〔その他の公表〕計（　）件

共同研究の全般的成果のアピール

第三者による評価・受賞・報道など
特になし

研究題目	東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用			
研究期間	2013（平成 25）年度 ～ 2015（平成 27）年度（3 年間）			
研究組織 （下線が代表者）	氏　名	所　　属	氏　名	所　　属
	高倉浩樹	東北大学東北アジア研究センター	小谷竜介	東北歴史博物館
			植田今日子	東北学院大学
	金　賢貞	同上	酒井朋子	同上　講師
	滝澤克彦	同上	岡田浩樹	神戸大学
	稲澤努	同上	梅屋潔	同上
	川島秀一	東北大学災害科学国際研究所	山口未花子	北九州市立大学
			兼城糸絵	鹿児島大学
	木村敏明	東北大学文学研究科		
研究経費	（配布金額）300,000 円 （研究支援者、RA などの配置）あり （研究スペース配分など）あり （その他の主たる外部資金）宮城県委託費 5,000,000 円			
研究の目的と本年度の成果ならびに研究成果の重要性の概要	本共同研究は、東日本大震災後の地域社会における復興過程を民族誌的に解明しつつ、それらを比較総合化することで全体像の解明を試みるものである。と同時にそこで収集された民族誌資料の実践的な取り組みをおこなう。このことを通して、人類学・民俗学・宗教学等（以下、「人類学等」）の分野によるフィールドワークにもとづく震災復興過程のデータ蓄積と理論的探求をおこないつつ、民族誌情報を社会にむけて発信していく体制を構築することを目指す。 この目的に照らして、今年度は三つの事業を行った。一つは調査研究活動である。宮城県沿岸部を中心にそれぞれが被災地の地域文化遺産に着目し、復興過程における役割について調査をおこない、その成果は、年度内に行われた二回における研究会で発表された。 二つ目の事業は、2011-12 年度におこなった宮城県受託事業「東日本大震災にともなう無形民俗文化財調査」の成果を被災地地域社会および県外で報告したことである。具体的には、県内に関しては、11 月に山元町、気仙沼市、12 月に七ヶ浜町において、公開講演会・ワークショップという形で、メンバーを中心として報告を行った。この結果、広く社会に成果を周知するためには公開講演会が好ましいが、研究へのフィードバックという点ではワークショップが好ましいことがわかった。特に、民族誌情報の復興過程に貢献は、ワークショップのなかで当事者と協議するということ自体が、人びとの意識や活動の促進に関わることがうかがえた。また、県外については静岡県立大学では特別講義という形で、高知県では文化財行政に関わる関係者と高知県の大学研究者のワークショップという形で実施した。このなかで、文化財行政関係者は大学との連携を模索していることが判明した。また我々自身の活動が媒体となって、大学人が直接地域の文化財行政関係者と協働する体制を作り上げるのに貢献する効果もあることがわかった。			

	三番目の事業は、上記の宮城県受託調査の調査資料をオンラインデータベース化する事業である。これは6月に宮城県外のメンバーも含めて打ち合わせを実施し、方向性を定めた後は、毎月一回のペースでデータベース制作業者および高倉・小谷・滝澤の少人数で会合を設けた。その結果、3月上旬にはオンラインデータベースを公開することができた。この作業を通して、民族誌情報をどのように今後地域社会や教育現場が利用できるかについての知見を深めることができた。データベースの利用法については次年度の課題となる。 以上を通して一年目としては充実した活動をおこなうことができた。ただし調査研究活動については個別の活動の状態であり、それらをどう統合していくかについては今後の課題としてのこった。
成果を公表する URL	http://www.cneas.tohoku.ac.jp/unit/siberia/html/unit/siberia/flood.html

東北アジア地域研究としての意義

東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕
〈位置づけの内容〉東日本大震災の被災地調査研究の成果を、電子データベース化し国内外の日本研究と連動させること
東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕
〈対象とした国・地域など〉日本

東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください
震災の影響からのレジリアンスという観点から日本の東北地方・北関東地方の地域社会を捉えるとともに、これを国内外の日本研究と連動させるようとする点

新規性

新規性の有無〔有〕
〈新規性の内容〉東日本大震災の被災地の地域社会の民俗調査は、これまで個々の研究者によって事例深化的に行われてきたものが、本共同研究は組織的・全体的に行う点。また研究成果を論文という形で提示するだけでなく、電子データベースという形で提示するとともに、被調査地との防災人類学的なワークショップを行おうとする点。

学際性

文理融合型の研究か〔はい〕
〈参加した専門分野〉文化人類学・日本民俗学・博物館学・情報科学
文系・理系での学際性・連携性の有無〔有〕
〈参加した専門分野〉文化人類学・日本民俗学・博物館学・情報科学（2014 年度予定）

専門性　専門分野内部での意義

文化人類学・日本民俗学：文化人類学の立場から組織的な形で被災民俗調査を行い、被災後の人類学的調査の役割を明らかにした点。

国際性

国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔無〕
〈国名・研究機関名〉2014 年予定　ニュージーランド・カンタベリー大学

国外の研究者の参加の有無〔無〕
〈参加研究者の所属・参加形態〉
学術交流協定活用の有無〔有〕
〈協定の名称〉
外国語による成果公表の有無〔有〕
〈言語〉英語

教育上の効果

学生の参加による教育上の効果〔有〕
〈参加学生の所属〉東北大学大学院　東北学院大学大学院
〈学生による成果発表〉1 点
沼田　愛・赤嶺　淳「大漁唄い込み踊にみる閖上のくらし」
島村恭則・沼田　愛「仮設住宅での聞き取りからみえてくる生業・土地利用・被災家屋：名取市北釜地区の調査から」
上記は以下に所収､高倉浩樹･滝澤克彦編（2014）『無形民俗文化財が被災するということ：東日本大震災と宮城県沿岸部地域社会の民俗誌』新泉社。
ポスドクの活用の有無〔有〕
〈活用形態〉教育研究支援者としての雇用

教育上の効果についてアピールしてください

公開の研究会を行うことで、院生がこれに参加した。また成果論文集に寄稿した。また静岡県立大学で学部学生向けの特別講義を行った。

社会還元

社会への成果還元・啓蒙が目的に含まれていたか〔有〕
〈内容〉公開電子データベースの構築、研究成果還元ワークショップの開催
社会への成果還元の有無〔有〕
〈還元の形態〉ワークショップの開催

学内連携

学内他部局との組織上の連携はあったか〔無〕
〈連携部局名〉
学内他部局教員の研究への参加の有無〔有〕
〈参加教員の所属〉文学研究科　災害科学国際研究所

他組織との連携

国内の研究機関との連携・協力の有無〔無〕
国内の研究機関の研究への参加の有無〔有〕
〈参加研究者の所属〉東北学院大学、神戸大学、鹿児島大学、北九州市立大学

資金

科学研究費補助金ほか政府関係資金〔金額　600,000 円〕
センター長裁量経費〔金額　300,000 円〕

成果発表

研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと）

研究会〔2 回〕

第 1 回研究会
2013 年 6 月 20 日（木）18：30 ～ 20：00　会場：仙台市戦災復興記念館 4 階第 3 会議室
「津波碑と津波石」川島秀一（東北大学）
第 2 回研究会
2014 年 3 月 12 日　会場　東北大学東北アジア研究センター
「雄勝法印神楽の震災前と震災後―民俗芸能の再開過程から考える」小谷竜介（東北歴史博物館）
「原発事故の無形民俗への影響調査事始め」高倉浩樹（東北大学）

公開の会議・シンポジウム〔4 回〕
⑴出張講義（静岡県立大学国際行動論Ｂ特別講義）
2013 年 10 月 21 日（月）13：00 ～ 14：30　場所：静岡県立大学国際関係学部
・高倉浩樹「震災サルベージ人類学の可能性とその体制構築にむけて」
・滝澤克彦「被災した民俗芸能・祭礼復興の諸相―事例の比較を通して」
・コメント　松田香代子先生（静岡市文化財保護審議会委員・愛知大学非常勤講師）
⑵民俗芸能のチカラ～調査成果報告会 in 山元町～
2013 年 11 月 2 日（土）10：00 ～ 11：30　会場：山元町中央公民館 2 階　大ホール
・滝澤克彦「被災民俗調査事業の目的と経過」
・稲澤努「＜地区＞の祭りの変遷～八重垣神社お天王さんまつりの調査から」
・高倉浩樹「中浜神楽の被災と復興のかたち～解決可能な課題を見い出すことの意味」
・兼城糸絵「外部からの支援と祭りの再開～七ヶ浜町花渕浜の事例から」
・岡田浩樹「＜被災者のきずな＞を乗り越える民俗文化の新たな力～東松島町大曲浜の事例から」
協力：山元町無形民俗文化財復興協議会
⑶出張成果報告会 in 気仙沼
2013 年 11 月 3 日（日）午後 13:00 ～　会場:気仙沼市中央公民館会議室（旧河北ビル 3 階）
・滝澤克彦「被災民俗調査事業の目的と経過」
・政岡伸洋「震災後の民俗行事の意味を考える―南三陸町戸倉波伝谷の春祈祷の事例から」
・山口未花子「日々の暮らしと祭りをつなぐもの―被災後の石巻市牡鹿半島の集落間の比較より見えてきたこと」
・岡田浩樹「震災後における民俗文化の新たな力―被災者の「きずな」や「被災地」を越えて」
情報交換 司会：小谷竜介　コメンテーター：川島秀一
共催：気仙沼市教育委員会
⑷被災した無形民俗文化財と地域復興における研究の役割―東日本大震災に伴う宮城県委託調査事業の報告
2013 年 12 月 2 日（月）13:00 ～ 17:00　場所:高知県立大学永国寺キャンパス 2 階キャンパス
・滝澤克彦「被災した民俗芸能・祭礼復興の多様性―事例の比較を通して―」
・小谷竜介「東日本大震災で被災した民俗芸能用具の新調の意味」
・高倉浩樹「東日本大震災復興過程における民俗文化財調査体制構築とその社会的意義」
コメント：梅野光興（高知県立歴史民俗資料館）
総合討論司会：飯高伸五（高知県立大学文化学部）

共催：こうちミュージアムネットワーク、高知県立大学文化学部
協賛：高知人文社会科学会

⑸七ヶ浜ワークショップ
2013 年 12 月 16 日（月）13 時～ 15 時　　会場：七ヶ浜町歴史資料館
・川村清志「被災民俗調査事業の目的と経過」
・兼城糸絵「外部からの支援と祭りの再開～七ヶ浜町花渕浜の事例から」

国際会議〔1〕回
国際人類学民族学連合（IUAES）第 17 回世界大会 2013, 2013 August 5th-10th. マンチェスター（イギリス）における分科会組織
＜ PE52 ＞ Observing the disaster and/or participating in the aftermath: Exploring the role of anthropologists and the potential of an anthropological perspective on the Great East Japan Earthquake and Tsunami　座長：高倉浩樹
- 植田今日子「Diversifying the Risk of Tsunami by Utilising the Varied Characters of the Local Sea: Reasoning the Victims' Return to the Coast after the Great East Japan Earthquake and Tsunami」.
- 山口未花子「Subsistence and religion in the Oshika Peninsula after the March 11 East Japan Earthquake and Tsunami disaster」
- 木村敏明「To Continue or Not? : Dispersed Community and Ritual Revival after Great East Japan Earthquake and Tsunami」
- 高倉浩樹「Lessons from anthropological projects related to the Great East Japan Earthquake and Tsunami: Reviewing what we did from afar, and some thoughts on social engagement」
- 岡田浩樹「"Public" in stricken area?: Differences between the Great Eastern Japan Earthquake and Tsunami(GEJET),and the Great Hanshin Earthquake(GHE)」

論文・著書
以下に分類したうえで、それぞれの項目に該当する具体的な論文等の題目、著者名、出版年月日などを記載してください。

高倉浩樹・滝澤克彦編（2014）『無形民俗文化財が被災するということ：東日本大震災と宮城県沿岸部地域社会の民俗誌』新泉社。
＊以下は上記所収の論文
- 梅屋 潔「その年も、「お年とり」は行われた：気仙沼市鹿折地区浪板および小々汐の年越し行事にみる「祈り」」
- 小谷竜介「雄勝法印神楽の再開過程と民俗性：文化財の保存と活用の観点から」
- 金賢貞「東日本大震災と離島の民俗文化：女川町出島の獅子振りを中心に」
- 山口未花子「牡鹿半島の集落における祭り復興の三つの型」
- 木村敏明「二年遅れで復活した二〇年周期の祭礼から見えてくる現実：東松島市浜市お潮垢離行事」
- 兼城糸絵・川村清志「アニメ聖地巡礼者たちの被災地支援：七ヶ浜町花渕浜の事例から」
- 川島秀一「「情けのイナサ」をふたたび：仙台市若林区荒浜の漁業の再興」
- 滝澤克彦「祭礼を無理に復活させないという選択：岩沼寺島地区の事例から」
- 稲澤 努「「地区」と祭りの変遷：山元町八重垣神社お天王さま祭りの調査から」
- 高倉浩樹「残されたご神体と奉納できぬ神楽：被災した山元町中浜神楽の再開に向けた活動の連鎖」

高倉浩樹･滝澤克彦(2013)『東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査 2012 年度報告集』(東北アジア研究センターシリーズ 9 号) . 東北大学東北アジア研究センター。

高倉浩樹 (2013)「「無形」の民俗文化財を調査することからみえてくること」『文化芸術による復興振興コンソーシアム平成 24 年度調査報告書参考資料 (2)』文化芸術による復興推進コンソーシアム・社団法人全国公立文化施設協会。

口頭発表
日本文化人類学会第 47 回研究大会で以下の分科会を組織
「東日本大震災に対する人類学者の社会的関与とその可能性：2011-2012 年度宮城県震災無形民俗文化財調査事業より」
(代表：高倉浩樹)
・政岡伸洋 (東北学院大学)「復興の名の下で何が起こっているのか ―宮城県本吉郡南三陸町戸倉波伝谷の 場合」
・兼城糸絵「震災復興とアニメ聖地巡礼者たち ―宮城県七ヶ浜町花渕浜を例として」
・岡田浩樹「民俗芸能復活と震災復興のパラドクス ―宮城県東松島町大曲浜獅子舞の「伝統」と近代性」
・滝澤克彦「震災後の社会空間再編過程における祭礼の意味について」
・高倉浩樹「震災サルベージ人類学の可能性とその体制構築にむけて」

共同研究の全般的成果のアピール

今年度は、2011−12 年度におこなってきた被災地民俗調査事業の研究成果を、国内外の学会で発表するとともに、社会に向けてのワークショップも行った。具体的には日本文化人類学会の研究大会、国際人類学民族学連合の世界大会において、本共同研究のメンバーによって報告をおこなった。また研究成果に関わる宮城県内の地域社会へのワークショップを３回、宮城県外への調査事業報告会を２回実施した。これらによって本共同研究の目的の一つである民族誌情報の応用という点で大きな成果があったとまとめることができる。

第三者による評価・受賞・報道など

高知新聞　2013 年 11 月 26 日「宮城県の無形民俗文化財調査」
中外日報　2014 年 1 月 28 日「被災地復興へ祭礼・芸能の意義」

研究題目	典籍文化遺産の研究			
研究期間	2013（平成 25）年度 ～ 2015（平成 27）年度（3 年間）			
研究組織 (下線が代表者)	氏　名	所　　属	氏　名	所　　属
	磯部彰	東北大学東北アジア研究センター	崔 溶澈	(韓国)高麗大学校中語中文学科
	佐々木 聡	東北大学東北アジア研究センター専門研究員	潘 建国	(中国)北京大学中文系
	羅 莞翎	東北大学大学院文学研究科大学院生	陳 正宏	(中国)復旦大学古籍整理研究所
			石 昌渝	(中国)中国社会科学院文学研究所
			石 雷	(中国)中国社会科学院文学研究所
			王 三慶	(台湾)国立成功大学中国文学系
研究経費	(配布金額) 300,000 円 (外部資金) 運営費交付金､センター長裁量経費（プロジェクト研究ユニット)、基盤研究(C)、研究成果公開促進費（データベース）(研究成果データベース・重点)、研究成果公開促進費（学術図書）			
研究の目的と本年度の成果ならびに研究成果の重要性の概要	中国を中心とした東アジア社会・歴史環境を研究する際、木版・活字の印刷及び鈔本類の資料は最も重要なものである。しかし、時代や地域、その伝授の方法によって資料の位置づけも異なった扱いをされる傾向にある。 出版文化資料データベース研究ユニットでは、東アジア出版文化を中心としたデータベース作成を開始することに伴い、データベースのもととなる古典籍の研究、それより導かれるテキスト批判、系統化が必要となってくる。そのため、共同研究を構築し、中国の宋元明清各刊本、朝鮮本、ベトナム本、和刻本及び日本写本、ヨーロッパ活字本・古文書類について書誌・文献学の立場から印刷物・写本の年代や生産過程について検討を加える。 本研究を通し、東アジア諸国の様々な出版資料が、データベースとして使用が出来るようにし、東アジア出版文化学の基盤形成に寄与することを目指す。 2 回の研究会及び日常の研究活動を通して、明刊本小説の多様性、或いは、文化遺産を含めた文化交流とその経済的役割などについての情報が獲得された。 また、データベース用の資料・文献について、基礎的なデータが整理されたが、とりわけ、民国初期を中心とする石印説唱鼓詞コレクションの整理と公開に向けた検討が完了した。			

成果を公表する URL	http://eapub.cneas.tohoku.ac.jp/top.html

東北アジア地域研究としての意義

東北アジア地域研究としての位置づけが自覚的か〔はい〕

〈位置づけの内容〉本共同研究では、中国の宋元明清各刊本、朝鮮本、ベトナム本、和刻本及び日本写本等の東北アジア諸国の典籍を主とした研究対象としており、それにヨーロッパ活字本・古文書類を加えて、書誌・文献学の立場から多角的に印刷物・写本の年代や生産過程について検討を加える。

東北アジア地域を対象とする研究か〔はい〕

〈対象とした国・地域など〉中国・韓国・ベトナム・日本・モンゴル

東北アジア地域研究としての意義・特徴をアピールしてください

東北アジア研究の基盤である宋元から明清及び民国期の出版物は多様に富む一方、その十分な基礎的研究がなされず、資料的価値が半減している。本研究では、個々の文献・典籍について、正しく経史子集その他に分類し、国際的に利用することが可能となるように検証して行く。

新規性

新規性の有無〔有〕

〈新規性の内容〉従来のデータベースにはない宋元版仏典類、明代西洋技術書、或いは、石印本コレクションなどが持つ特色を鮮明にしてその書誌解題を加え、東アジア近世出版における東北アジア各国の文化的特色を提示する点に新規性がある。

学際性

文理融合型の研究か〔いいえ〕

〈参加した専門分野〉中国文学・東洋史・中国哲学・文献書誌情報学

文系・理系での学際性・連携性の有無〔無〕

〈参加した専門分野〉

専門性　専門分野内部での意義

〈専門分野名〉東アジア文化史

〈内容〉東アジア及び東北アジアの歴史研究においては､中国･朝鮮･日本･ベトナムの木版･金属活字本・石印本及び排印本による出版物の持つ意義は大きいが、多くは秘蔵されて直接使うことはむずかしい。そのため、文献学的に問題が発生することも多い。本共同研究では、その書誌をめぐる諸問題の解決のために取り組み、資料を文献批判を受けた研究資料として利用できるようにする。

国際性

国外の研究機関との研究協力・交流の有無〔有〕

〈国名・研究機関名〉中国・北京大学、韓国・高麗大学校

国外の研究者の参加の有無〔有〕

〈参加研究者の所属・参加形態〉北京大学・客員教授、高麗大学校・客員研究支援者

学術交流協定活用の有無〔有〕

〈協定の名称〉(韓国) 高麗大学校日本研究センターとの部局間交流協定

外国語による成果公表の有無〔有〕
〈言語〉中国語

教育上の効果
学生の参加による教育上の効果〔有〕
〈参加学生の所属〉東北大学大学院文学研究科・経済学研究科
〈学生による成果発表〉
羅 莞翎「明清小説における和尚像の変遷 —『灯草和尚伝』を中心に —」、中国古典小説研究会 2013 年度大会、2013 年 9 月 4 日、於ホテル京都エミナース
ポスドクの活用の有無〔有〕
〈活用形態〉専門研究員

教育上の効果についてアピールしてください
日常眼にふれることのない宋元版などの稀覯本、明刊本の挿入図など、多様な印刷文献を手に取ることによって、文献書誌学及び博物館学の実習を兼ねた文化財の取り扱い方を修得することが出来る。

社会還元
社会への成果還元・啓蒙が目的に含まれていたか〔はい〕
〈内容〉宋元明清代、及び東北アジアの貴重書をインターネットを通して一般公開し、義務教育やリカレント教育等にも利用できるようにしている。
社会への成果還元の有無〔有〕
〈還元の形態〉「東アジア出版文化研究資料画像データベース」に研究資料を掲載し、広く社会へ成果を公開するための基礎研究として、間接的に成果を還元することとしている。

学内連携
学内他部局との組織上の連携はあったか〔有〕
〈連携部局名〉東北大学附属図書館
学内他部局教員の研究への参加の有無〔有〕
〈参加教員の所属〉東北大学大学院文学研究科、東北大学大学院経済学研究科

他組織との連携
国内の研究機関との連携・協力の有無〔無〕
〈連携組織名〉
〈連携の形態〉
国内の研究機関の研究への参加の有無〔有〕
〈参加研究者の所属〉沖縄県教育庁、沖縄県公文書館、琉球大学法文学部

資金
科学研究費補助金ほか政府関係資金〔金額　6,700,000〕
センター長裁量経費〔金額　300,000〕
運営費交付金（個人研究費）

成果発表
研究会議開催回数（プログラム・メール連絡など添付のこと）

研究会〔2 回〕
・磯部彰（研究会）「第 1 回共同研究「典籍文化遺産の研究」公開研究会」、仙台市 東北大学東北アジア研究センター 3 階 301 会議室、2013 年 11 月 18 日
・磯部彰（研究会）「高麗大学校日本研究センター・東北大学東北アジア研究センター学術交流研究会」（第 2 回共同研究「典籍文化遺産の研究」公開研究会）、仙台市 東北大学東北アジア研究センター 3 階 301 会議室、2014 年 1 月 15 日
公開の会議・シンポジウム〔0 回〕
国際会議〔0 回〕

論文・著書
以下に分類したうえで、それぞれの項目に該当する具体的な論文等の題目、著者名、出版年月日などを記載してください。
〔雑誌論文〕 計（1）件
・佐々木聡「『天元玉暦祥異賦』の成立過程とその意義について」、『東方宗教』第 122 号、日本道教学会、2013 年 11 月
〔学会発表〕計（3）件
・佐々木聡「祥瑞災異思想の中世以降の展開について」、術数学国際ワークショップ 2013-7「術数学と宗教文化」、2013 年 7 月 19 日 -21 日、於京都大学人文科学研究所分館
・佐々木聡「術数文献をめぐるテキスト問題 ― 天文五行占書を中心に ―」、日本中国学会・第 2 回次世代シンポジウム、2014 年 10 月 14 日、於秋田大学
・羅莞翎「明清小説における和尚像の変遷 ―『灯草和尚伝』を中心に ―」、中国古典小説研究会 2013 年度大会、2013 年 9 月 4 日、於ホテル京都エミナース
〔図　書〕 計（2）件
・磯部彰（編著）『清朝宮廷演劇文化の研究』、勉誠出版、656 頁、2014 年 2 月 10 日
・佐々木聡（編著）『『開元占経』閣本の資料と解説』、東北アジアセンター報告第 11 号、東北アジア研究センター発行、P162、2013 年 12 月
〔その他の公表〕計（1）件
・磯部彰（講座）「戦国大名の書籍蒐集と東北アジア―伊達本家を中心に―」、みやぎ県民大学（大学公開講座）、東北大学片平キャンパスさくらホール、2013 年 11 月 6 日

共同研究の全般的成果のアピール
本共同研究での成果は、まず、民国初期に上海方面で印刷された説唱鼓詞と呼ばれる民間芸能の石印本コレクション 300 点弱の整理を完了し、その一部の公開を始めたことにある。印刷物として台湾中央研究院が台湾所蔵本を影印しているが、日本国内では初めての公開であり、かつデジタルデータとして利用することが出来るのは、本研究活動のバックアップがあったからである。この他、明刊本の仏典や技術書は、そのさし絵が版画研究でも有用であり、初公開となっている。
一方、沖縄県教育庁との共同調査では、琉球関係の新資料も見いだし、その中には「尚家」旧蔵本らいきものもあった。これらの研究活動をもとに、研究ユニットのデータベースは更に充実して行くと考えられる。

第三者による評価・受賞・報道など
・佐々木聡　2013 年度日本中国学会賞（哲学・思想部門）

	報告日　2014 年 4 月 1 日

評価委員 氏　名	小嶋　智	所　属	岐阜大学工学部

●対象年度のプロジェクトユニット全体についての概評

東北アジア研究センター（教員数 25 名）は、文系・理系、様々な研究分野を網羅したアジア地域をターゲットとする研究センターとしては、国内最大規模であり、他には富山大学極東地域研究センター（教員数 8 名）がある程度である。従って、東北アジア研究センターがこの分野の日本の研究のリーダーシップをとることが期待される。外部資金獲得状況、研究業績（論文･著書）の生産力、「東北アジア研究」、「東北アジア研究センター叢書」、「東北アジア研究センター報告」、「東北アジア読本」、「東北アジア専書」という多種多様で多くの出版物、ロシアに設置されたラボ、東アジア各国との人事・研究交流、公開プログラムなど､どれをとっても国内トップクラスの成果をあげている。この点は高く評価できる。

その意味で共同研究の代表者が当該センターの専任教員であることは理にかなっているが、共同研究では、当該センターの専任教員だけで行うプロジェクトユニット研究とは異なり、当該センターの目的を達成するために必要ではあるがセンター専任教員ではカバーしきれないテーマについて、センター外の研究者の力を借りながら研究を行うべきであろう。しかし、共同研究の中には、センター外教員を組織に加えたプロジェクトユニット研究とほぼ同じ内容のものが散見される。そのようなものはわざわざ共同研究とはせず、プロジェクトユニット研究の枠組みで実施すれば十分なのではないか？　評価者は組織外の人間であり、中身がよくわかっていない部分もあるので、的外れな指摘であればご容赦いただきたい。

●対象年度共同研究成果の中で特に高く評価できる点

⑴ 震災復興のための地中レーダによる遺跡探査推進

代表者のグループが開発した手法により精度の高い地下構造可視化ができるだけではなく、そのシステムを利用してひじょうに多くの遺跡調査を行い成果を上げている点が高く評価される。

⑵ 新疆、満州をめぐる 20 世紀前半のソ連、中国の政策

充実した資料調査を行い、その結果を研究集会で発表・議論し、ひじょうに多くの論文を論文集・書籍などの形で公表している点は高く評価できる。

⑶ 現代中国社会の変容とその研究視座の変遷―「宗族」を通した検証

研究会を 2 回開催するなど着実に研究を行っている点、および、研究成果を論文集として印刷出版する目処が既にたっている点は高く評価できる。

⑷ 日本列島の文化交渉史 ― 経済と外交

日本の文化交渉史を江戸・明治と区切ることなく連続して解析しようとする視点は斬新で評価できる。また、研究成果を様々な学会で発表し、ひじょうに多くの雑誌論文・著書として公開し、さらに独自の研究会を開催するなど、活発な共同研究を行っている点は高く評価できる。

⑸ 江戸時代から現代に通じる東北の歴史

これまで多くの災害に見舞われながらも、その都度復興を繰り返してきた東北地方の江戸時代以降の歴史、特に江戸時代以降の人の営みに焦点を当てて研究し、今後の東北地方の復興に貢献しようとする研究目的は高く評価される。

⑹ 東日本大震災の復興過程に関わる地域社会比較と民俗誌情報の応用

無形民俗文化財が被災するという、形としては見えにくい現象を取り上げ、タイムリーに調査している点は、ユニークで独創的であり、高く評価される。さらにその成果を 2 回の研究会、4 回のシンポジウム、ワークショップ、国際会議で報告・議論し、書籍・報告書として、あるいはデータベース化して公開している点も高く評価される。

⑺ 典籍文化遺産の研究

韓国・中国・台湾の専門家を共同研究者に加え、宋元、明清の出版物を研究するものであり、研究会の開催や書籍の出版などを積極的に行っていることは評価される。また、貴重な出版物がデータベース化されており、この点も高く評価される。

⑻ 近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究

文献資料の乏しいモンゴルの遊牧民社会の構造を、清代の文献から解き明かそうとする研究で独創的である。研究会、国際シンポジウムなども開催しており評価できる。

⑼ 東北アジアにおける辺境地域再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究

東北アジアという地域をキーワードに、国内の大学に所属する幅広い分野の研究者を組織した学際的な研究である点、ロシア、モンゴルからの研究者を交えたシンポジウムを開催している点、多くの論文・著書および学会発表により研究成果を幅広く公開している点が高く評価される。

⑽ 氷融洪水とその社会的対応からみる極北圏地域社会の比較研究

文化人類学、民族学、リモートセンシング、土木工学などの研究分野が協力して北極圏地域の洪水の特徴、環境変化を明らかにした学際的研究で、高く評価される。4 回におよぶ研究会・シンポジウムを開催し、多くの論文・著書を発表している点も評価できる。

●対象年度共同研究成果の中で改善を要すると思われる点および期待する点

⑷ 日本列島の文化交渉史 ― 経済と外交

藩財政、干鰯、三井越後屋、朝鮮通信使、琉球使節、移民といったキーワードで特徴付けられる個別的な研究群を取りまとめて、一つのストーリー・研究成果としてとりまとめる必要がある。下記 ⑸ とのインタラクション、コラボレーションが期待される。

⑸ 江戸時代から現代に通じる東北の歴史

上記 ⑷ および下記 ⑹ とのインタラクション、コラボレーションが期待される。

⑹ 東日本大震災の復興過程に関わる地域社会比較と民俗誌情報の応用

上記⑸ とのインタラクション、コラボレーションが期待される。

⑼ 東北アジアにおける辺境地域再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究

文理融合型の研究であるとしているが、理系分野からの貢献が、報告書からは読み取れない。

●その他／備考

特になし

	報告日　2014 年 6 月 29 日

評価委員 氏　名	村上　信明	所　属	創価大学文学部

●対象年度のプロジェクトユニット全体についての概評

昨今、いわゆる「学際的研究」の意義が盛んに唱えられているが、筆者の見聞や自身の経験の限りでは、異なる分野の個別研究の成果を積み上げて最後にそれらを強引につなぎあわせ、それらしいストーリーをつくり上げて形を整えるのが精一杯というのが実態であると思われる。そのような状況の中で、東北アジア研究センターの共同研究は、文系と理系、あるいは文系の中でも歴史学と文化人類学など異なる専門分野の研究者が、比較的少人数で、ある程度絞られた研究テーマに取り組むことで、斬新な研究の視点・方法論の提示や資料の収集・公開等を進めており、より実際的な「学際的研究」のあり方を追究する試みとして高く評価できる。

また、一つの分野の研究者だけによる共同研究も存在するが、筆者はこの点についても肯定的に評価すべきであると考える。研究の価値は学際的であるか否かによって決まるものではなく、社会的ニーズや時代を超えた普遍的問題に対する問題意識および実際の研究成果の質によって決まる。全体としては学際性を追求していこうという姿勢をとりながら、一つの分野の研究者による共同研究についても柔軟に認めていく東北アジア研究センターの方針は、斬新かつ専門性の高い研究成果を生み出していくうえで有効なものであるといえる。

●対象年度共同研究成果の中で特に高く評価できる点

⑴ 平成 25 年度の研究成果報告を見る限り、全体として現代的課題への深い関心と、それに対して何らかの知見を提示しようとうする実学的な研究姿勢が見受けられる。2011 年の東日本大震災を受けての研究「震災復興のための地中レーダによる遺跡探査推進」（代表者:佐藤源之氏）、「東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用」（代表者：高倉浩樹氏）をはじめ、日本・中国・モンゴル・ロシア等に関する政治・社会・国際関係の現代的課題について、異なる専門分野の研究者が問題意識を共有しあいながら研究を進めることは、従来とは異なる研究の枠組みや手法の発見にもつながる可能性がある。現段階では、考古学と電子工学･地質学など連携が進んでいる一部分野を除けば、学際的手法、とりわけ文理融合型の研究手法がどれほどの成果を上げうるのかは未知数なところが多いが、それを知るためには実際に文理融合型研究を大胆に進めてその成果を評価する必要があり、この度の共同研究はまさにはそのための重要な挑戦になっている。

⑵ 全体を通じて、シンポジウムの一般公開や公開講座、講演、図書出版などを通じた研究成果の社会還元が強く意識されている点も高く評価できる。個別論文の発表や研究報告集の刊行だけでは、専門家以外が研究成果を知ることは極めて難しい。社会還元への意識の高さは、東北アジア研究センターの実学を重んじる姿勢に由来するのであろう。今後もこのような取り組みを積み重ね、学界と社会をつなぐ上でのよき事例が作られることを期待したい。

●対象年度共同研究成果の中で改善を要すると思われる点

⑴ 全体として外部資金を活用しての研究が多いが、そうであるがゆえに外部資金による研究テーマと内容が重複し、その結果として大胆な発想・組み合わせによる研究が推し進められない状況にあるように見受けられた。外部資金獲得のためには、一般的には専門性が高く、あらかじめある程度の成果の見通しがたつ研究を実行しなければならないが、その枠組みに縛られるようなら学際性・新規性に富んだ研究を行うことは難しいだろう。研究予算の限りもあるだろうが、外部資金ではなかなか行えないような斬新なテーマを設定し、そこに予算を傾斜配分して、新たな知の枠組みを創造するような取り組みを期待したい。

⑵ 同じ「共同研究」という枠組みでの研究ではあるが、各課題によって外部資金の導入状況により予算額・研究規模が大きく異なっており、これらの評価基準・方法を一つに統一することには無理を感じる。「共同研究」という枠組みを予算規模・参加人数・学際性等によってさらに細分化し、報告書の記入事項にも変化をつければ、より研究の実態にあった形で報告書を作成でき、外部の人間にも「共同研究」の状況が理解しやすくなるのではなかろうか。

	報告日　2014 年 7 月 14 日

評価委員 氏　名	本多俊和（スチュアート　ヘンリ）	所　属	放送大学

●対象年度の共同研究成果全体についての概

多様なテーマを文系と理系をバランスよく追究されている行動研究の構想が高い評価に値するものである。小回りがきいて、科研などの外部資金を申請しづらい萌芽的なテーマ、試論実証を目指す研究が可能とする東北アジア研究センターの構想が引き続き維持されることが望まれる。

専門外の成果について正確に評価できるの問題はさておき、報告を聞いて、成果は概して良好であると感じた。

●対象年度共同研究成果の中で特に高く評価できる点

全体的な感想では、従来、文系と理系の研究者同士のコミュニケーションが不足（あるいは不在）であると痛感しているが、東北アジア研究センターでは文理融合を理念とする姿勢と方針に感心する次第である。文理融合に適さない研究課題もあろうが、文理融合の精神は可能な限り推進すべきであろう。

もう一点は、学内外にとどまらず、国内外から広く研究協力者を募っていることが高く評価されることである。理系の諸分野では国際的な共同研究は当然視されているが、文系では（私を含めて）国際的に組織される研究はまだ少ないようであるように感じている。国内外の研究者によって組織される東北アジア研究センターの態勢と精神が維持され拡大され、外部へと普及することを期待する次第である。

●対象年度共同研究成果の中で改善を要すると思われる点

上述したように、成果は高い水準を保っていると評価するが、次の点を今後の活動に留意されるよう、提案する。

第一点は、研究の目的は明確に記されているが、研究の意義については読み取りにくいユニットもある。何を目的に追求する課題に加えて、追求する意義を明示すれば、「部外者」でも研究に対する理解が深化するはずである。

第二点は、成果発表に際してレジメなど、会場で配布する資料を必ず用意することである。文理融合という異なる分野同士の発表では、そうしたい資料は不可欠である。とりわけ、特殊な専門用語に関する簡潔な解釈を配布資料に加えると、発表内容はより効果的に伝わるに違いない。

パワーポイントのスライドを印刷することは、スクリーンに映っている情報と同じであるので、ほとんど無意味であろう。また、発表に関わる内容を長い文章にまとめるのも、発表を真剣に聞こうとしながら、その文章を読むことは、集中力が散漫になる原因となる。配布資料の一工夫を希望するものである。

最後の一点は、報告書の書式には、「社会還元」(13) という項目の〔有　無〕に丸をつけることになっているが、還元する目的と意義の説明および還元の効果に関する自己評価を加えてもよいではないだろうか。

●その他／備考　とくにない

⑻ 過去に実施した共同研究・プロジェクト一覧

・中国・モンゴルにおける精神文化と環境の相互作用に関する研究
（1996 年度～ 1997 年度、代表者：瀬川昌久）

・近代化過程における東北アジア諸地域の変容の諸問題
（1996 年度～ 1998 年度、代表者：吉田忠）

・東北アジア地域における歴史・文化的背景および経済・技術的変遷からみた環境問題
（1996 年度～ 1999 年度、代表者：宮本和明）

・日本における北方交流史料の調査と分析
（1996 年度～ 1999 年度、代表者：入間田宣夫）

・東北アジアにおける交易拠点の比較研究
（1997 年度～ 1999 年度、代表者：山田勝芳）

・東北アジア研究のためのデータベース構築とシベリア・東北大学衛星ネットワーク利用についての研究
（1997 年度～ 2001 年度、代表者：佐藤源之）

・東北アジアにおける関帝信仰の歴史的現在的研究
（1997 年度～ 1999 年度、代表者：山田勝芳）

・東アジア出版文化史を通して見る社会変容の研究
（1997 年度～ 1999 年度、代表者：磯部彰）

・東アジアの儀礼・芸能における身体と社会の表象
（1997 年度～ 1999 年度、代表者：成澤勝）

・モンゴルの草原に関する総合研究
（1999 年度～ 2000 年度、代表者：岡洋樹）

・文化のディスプレイと伝統の再編
（1999 年度～ 2000 年度、代表者：瀬川昌久）

・古ツングースの生産文化に関する自然科学的再検証
（1999 年度～ 2001 年度、代表者：成澤勝）

・ノア・データの利用による東北アジアの環境変動解析とデータベース作成に関する学際的研究
（2000 年度～ 2005 年度、代表者：山田勝芳）

・中国東北部白頭山の 10 世紀巨大噴火とその歴史効果
（2000 年度～ 2002 年度、代表者：谷口宏充）

・東北アジアにおける民族移動と文化の変遷
（2000 年度～ 2001 年度、代表者：徳田昌則）

・東アジア出版文化の研究
（2000 年度～ 2004 年度、代表者：磯部 彰）

・日露・日ソ関係に関する史的研究
（2000 年度～ 2002 年度、代表者：平川新）

・東北アジアにおける計量地域研究のための基盤整備
（2001 年度～ 2003 年度、代表者：宮本和明）
・東北アジアにおける民族の跨境生態史の研究
（2001 年度～ 2002 年度、代表者：柳田賢二）
・北アジアの環境・文化・歴史に関する総合的研究
（2001 年度～ 2005 年度、代表者：岡洋樹）
・西シベリア塩性湖チャーニー湖沼群の環境と生物群集に関する研究
（2001 年度～ 2003 年度、代表者：菊地永佑）
・ポスト社会主義圏における民族・地域社会の構造変動に関する人類学的研究
（2001 年度～ 2002 年度、代表者：高倉浩樹 ）
・図們江沿流居民生活誌の通時的共時的研究
（2002 年度～ 2004 年度、代表者：上野稔弘）
・海南島の地方文化に関する文化人類学的研究
（2002 年度～ 2004 年度、代表者：瀬川昌久）
・現代韓国及び周辺同胞社会に見る伝統構造・社会動態と民族自我
（2002 年度～ 2004 年度、代表者：成澤勝）
・図們江沿流域居民生活誌の通時的共時的研究
（2002 年度～ 2005 年度、代表者：上野稔弘）
・モンゴル語資料の文献学的研究
（2003 年度～ 2005 年度、代表者：栗林均）
・白頭山東部における 10 世紀巨大噴火と遼・高麗王朝への歴史的影響
（2004 年度～ 2005 年度、代表者：谷口宏充）
・江戸東京博物館における東アジア文化展企画研究
（2005 年度～ 2006 年度、代表者：磯部彰）
・西シベリア塩性湖チャーニー湖沼群の環境と生物群集に関する研究
（2001 年度～ 2006 年度、代表者：菊地永祐）
・前近代における日露交流資料の研究
（2000 年度～ 2006 年度、代表者：平川新）
・東北アジア地域史におけるモンゴルの歴史的位相に関する研究
（2005 年度～ 2007 年度、代表：岡洋樹）
・東アジア出版文化の総合研究
（2005 年度～ 2007 年度、代表：磯部彰）
・近未来の宮城県沖地震に備えた歴史資料保存のための調査研究事業
（2005 年度～ 2007 年度、代表：平川新）

・東北アジアにおけるユートピア思想と地域の在り方
（2005 年度～ 2007 年度、代表：山田勝芳）
・東北アジア地域ノア画像データベース構築と文系分野への利用研究
（2005 年度～ 2007 年度、代表：工藤純一）
・東北アジア地域史におけるモンゴルの歴史的位相に関する研究
（2005 年度～ 2007 年度、代表：岡洋樹）
・旧ソ連を中心とするポスト社会主義世界におけるマイノリティ・ビジネスの展開と私的所有観生成についての学際的研究
（2006 年度～ 2008 年度・高倉浩樹）
・数理地理モデルによる東北アジア地域の土地利用形態の比較分析
（2006 年度～ 2008 年度・奥村誠）
・白頭山の火山危機に関する日中韓 3 ヶ国共同研究
（2007 年度～ 2009 年度・谷口宏充）
・湖沼沿岸生態系植物網の解析的研究
（2008 年度～ 2010 年度・鹿野秀一）
・西シベリア塩性湖チャニー湖における高次消費者を中心とした生態系解析
（2007 年度～ 2009 年度・鹿野秀一）
・旧ソ連圏アジア地域の学術・教育におけるアイデンティティ再構築に関する研究
（2007 年度～ 2009 年度・岡洋樹）
・二十世紀の東北アジアをめぐる中国、ロシア史の課題と展望
（2007 年度～ 2010 年度・寺山恭輔）
・北アジアにおける帝国統治とその遺産に関する研究
（2007 ～ 2011 年度・岡洋樹）
・客家研究の総括と展望
（2010 ～ 2011 年度・瀬川昌久）
・地域社会の人材としての「外国人花嫁」の共同調査
（2010 ～ 2011 年度・瀬川昌久：移民ユニット）
・仙台藩重臣遠藤家文書の調査研究
（2010 ～ 2011 年度・平川新：歴史資料ユニット）
・大籠村首藤家文書の調査研究
（2010 ～ 2011 年度・平川新：歴史資料ユニット）
・東アジア近世社会における出版文化の意義
（2010 ～ 2012 年度・磯部彰：東アジア出版文化ユニット）
・展示実践を通した北方人類学における社会還元の可能性の探求
（2010 ～ 2011 年度・高倉浩樹：シベリア生態ユニット）

・氷融洪水とその社会的反応からみる極北圏地域社会の比較研究
（2010 ～ 2012 年度・高倉浩樹：シベリア生態ユニット）
・北アジアにおける帝国統治とその遺産に関する研究
（2007 ～ 2011 年度・岡洋樹）
・客家研究の総括と展望
（2010 ～ 2011 年度・瀬川昌久）
・地域社会の人材としての「外国人花嫁」の共同調査
（2010 ～ 2011 年度・瀬川昌久：移民ユニット）
・展示実践を通した北方人類学における社会還元の可能性の探求
（2010 ～ 2011 年度・高倉浩樹：シベリア生態ユニット）
・東日本大震災で被災した三陸沿岸被災資料の保全と研究
（2011 ～ 2012 年度・平川新：歴史資料ユニット）
・仙台市沿岸津波被災地の歴史・文化・景観の記録化
（2011 ～ 2012 年度・平川新：歴史資料ユニット）
・東北アジア民族文字・言語情報処理研究
（2011 年度・栗林均・東北アジア民族文字：言語情報処理研究ユニット）
・東アジア近世社会における出版文化の意義
（2010 年度～ 2012 年度・磯部　彰）
・東日本大震災の被災地における民俗文化の復興をめぐる地方行政とその支援にかかわる方法論の探求　（2011 年度～ 2012 年度・高倉浩樹）
・協働による展示実践を通した人類学方法論の探求
（2012 年度・高倉浩樹）
・スターリン、蒋介石と中国新疆
（2012 年度・寺山恭輔）

⑶ 公募共同研究

本センターでは、共同利用・共同研究拠点としての機能を充実させるため、平成 21 年度より外部からの公募による共同研究制度を設け、学外研究者からの提案による東北アジア研究についても支援・協働する体制を整えました。

対象となる研究は、東北アジア地域の複数の国にまたがる課題、あるいは既存の学問研究分野の枠組みを越えた分野横断型の研究です。本センターの設備･資料を利用して、あるいは本センター教員との共同研究を通して東北アジア研究のすそ野を広げる試みでもあります。

Ⓐ 2013 年度センター共同研究課題一覧

〔課題名／(研究年度･ 代表者)〕

- 社会的行為としての〈食〉をめぐる文化人類学的研究　／ (2013 年度・櫻田涼子)
- モンゴルにおけるキリスト教宣教と聖書翻訳の過去と現在　／ (2013 年度・芝山 豊)
- 福島原発事故による環境汚染に対する集落単位の除染活動と台湾離島の核廃棄物貯蔵場の完全管理　／ (2013 年度・中生 勝美)
- 近世化社会との対話：東北アジア地域における「成熟社会」モデル構築のための萌芽的研究　／ (2013 年度・飯島 渉)

平成 25 年度 「東北アジア地域」に関する共同研究 成果報告書

研究課題名	社会的行為としての〈食〉をめぐる文化人類学的研究 （英文）An Anthropological Study of “Food” as a social action		
	フィールド適用型研究		
配 分 額	300（千円）	研 究 期 間	平成 25 年 7 月～平成 26 年 3 月
代 表 者	櫻田 涼子／育英短期大学・専任講師 ･30586714		

研究構成員 ※単独で実施する場合も記入してください

氏 名	所属機関・職	専門分野	役割分担
櫻田涼子	育英短期大学・専任講師	文化人類学	**研究総括（申請者）** マレーシア華人社会
瀬川昌久	東北大学 東北アジア研究センター・教授	文化人類学	**研究アドバイザー** 中国華南地域
稲澤努	東北大学 東北アジア研究センター・教育研究支援者	文化人類学	**センター内連絡係** 中国広東
阿良田麻里子	東京工業大学 ぐるなび食の未来創成寄附講座・特任講師	文化人類学 言語人類学	インドネシア スンダ社会
伊藤まり子	国立民族学博物館・外来研究員	文化人類学	ベトナム カオダイ教コミュニティ
神谷智昭	琉球大学・専任講師	社会人類学	社会人類学
深川宏樹	筑波大学人文社会科学研究科 博士後期課程	文化人類学	ニューギニア高地における親族関係と食物交換
三浦哲也	育英短期大学 現代コミュニケーション学科・准教授	生態人類学	東マレーシア・ドゥスン族の飲酒文化
山崎寿美子	筑波大学人文社会科学研究科 博士後期課程	文化人類学	カンボジア・ラオの発酵食品からいたエスニック・ダイナミズム
吉本康子	国立民族学博物館・外来研究員	文化人類学	ベトナム・チャム族

研究成果の概要

※研究の目的、方法、得られた成果の概要について、具体的に記入してください。

本共同研究は、東南アジア、東北アジア、オセアニアの地域社会において、食をめぐる諸実践により構築される関係性の比較考察を行うことを目的として組織された。〈食べる〉あるいは〈調理する〉といった人間の社会生活において最も基本的な行為が、いかにしてそれぞれの社会における「つながり」や断絶をもたらすかという点に着目し、その解明を試みた。

本共同研究は、平成 24 年度に実施した東北大学東北アジア研究センター共同研究「食からみる『つながり』の文化人類学的研究」（代表：櫻田涼子）における議論を後継しつつ、発展的に深化させることを目的とした研究課題であった。昨年度の研究を踏まえ、〈食べる〉、

〈調理する〉といった行為が、いかにして社会関係を構築し、さらには断絶を生み出すのか、その社会文化的側面を通文化的研究により明らかにした。具体的には、日常のあるいは非日常の食事は誰とどのように準備、調理され、どのような場面で誰と食べるのかといった食をめぐる行為そのものが、内部の連帯を強める一方で、その他の集団を排除する根拠となりうる。このような食をめぐる一連の社会的行為は、親族、近隣、友人、宗教コミュニティといった諸関係を絶え間なく構築 / 断絶するが、本共同研究では、食に焦点をあてることにより、関係が流動的に変容するプロセスの解明を試みた。食をめぐる様々な社会的行為が、いかにして当該社会の集団内部の連帯、断絶、分節、差異化をもたらすかをよりダイナミックに描出することを目指し、出来る限り広い地域の事例を扱うよう努めた。研究地域とテーマは以下の通りである。

東南アジア:カンボジア・ラオ社会(山崎)、ベトナムカオダイ教コミュニティ(伊藤)、マレーシア華人社会（櫻田)、東マレーシア・ドゥスン社会（三浦)、インドネシア・スンダ社会（阿良田)

東北アジア：中国の父系出自集団と祖先祭祀（瀬川)、中国広東省の福佬人地域（稲澤)、韓国都市社会における犬肉食と社会関係(神谷)、日本におけるベトナム移民コミュニティ(吉本)。

オセアニア：ニューギニア高地の親族関係と食物交換（深川)

新たに調査に行くことは困難であったため、それぞれの手持ちの民族誌的データに基づき議論を進め枠組みの精緻化を図った。第 1 回研究会は 2013 年 12 月に東京工業大学田町キャンパスで実施し、食という社会的行為によって創出される関係の動態的側面を検討した。研究会終了後は、それぞれが再調査あるいは手持ちのフィールドデータと照合し論点の再検討を行った。その成果は、2014 年 3 月 18 日に東北大学で開催するシンポジウムで議論する予定である。

当初本共同研究は単年度の共同研究のため議論を深化することが難しいと思われたが、平成 24 年度のテーマを発展的に継承し、さらに多様な地域を専門とする研究者との協同作業によって、〈食〉の持つ動態的な関係構築の局面を通文化的に明らかにすることが可能となった。

東北アジア研究センターの活用状況

※東北アジア研究センターの設備・資料などの活用，研究者との共同関係について、具体的に記入してください。

本共同研究では、東北大学東北アジア研究センターの研究教育支援者（稲澤努研究員）と教員（瀬川昌久教授）と密に連携を取りながら研究会を実施した上で研究成果の公開の一環として、外部からコメンテーターとして河合利光教授（神戸女学院大学）を招聘し、3 月 18 日に東北大学においてワークショップを実施する予定である。

一方で、センターの設備・資料については、充分に活用することができなかった。それは、本共同研究を構成する研究員が東北アジア地域のみならず、東南アジア、オセアニアなどの地域を専門とする者が多数を占めたことも一つの理由である。しかしながら、本共同研究は既存の親族研究を乗り越えようとするジャネット・カーステンらの東南アジア研究者によって展開された「つながり（relatedness)」の議論を端緒として、理論適用のフィールド拡大を目指して東北アジアとオセアニア研究者を加えて構成された。元来、親族研究の蓄積は特にオセアニアや東北アジア地域を中心になされたが、東南アジア諸地域の事例と議論をクロスオーバさせることにより、よりダイナミックな地域間の対話が可能となる。今後の研究成果とりまとめの段には、他地域の事例を交えた人類学的議論を東北アジア研究センターに還元できるよう研究成果に結実させたい。

本共同研究に関わる業績（発表予定含む）

櫻田涼子 2014 研究発表「甘いかおりと美しい記憶：マレーシア華人のコピティアムをめぐるノスタルジアについて」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究課題「多元的想像･動態的現実としての「華人」をめぐる研究」研究会、於:東京外国語大学（2月8日）.

櫻田涼子 2014「家庭内祭祀から公共領域へマレーシア華人社会における「盂蘭勝会」の都市的構造」黄蘊（編）『往還する親密圏と公共圏』京都：京都大学学術出版会、59-88 頁.

櫻田涼子 2013 研究発表「語られ、共有される〈美しい過去〉：南洋華人とそのふるさと」2013 年度日本華僑華人学会第 2 回研究会「新たな僑郷研究の展開:国内･国外からの視点」、於：立教大学、(12 月 14 日).

櫻田涼子 2013 研究発表「読み替えられる儀礼：盂蘭勝会から立ち上がる華人公共圏」日本文化人類学会第 47 回研究大会、於：慶応義塾大学、(6 月 8 日).

稲澤努 2014「『地区』の祭りの変遷―山元町八重垣神社お天王さま祭りの調査から」『無形民俗文化財が被災するということ―東日本大震災と宮城県沿岸部地域社会の民俗誌』新泉社、177-187 頁.

稲澤努 2013 研究発表「現代中国における地方文化の資源化と使用―広東省汕尾における地方政府主催民俗イベントを事例に」日本文化人類学会研究大会、於：慶應義塾大学、(6月９日).

稲澤努 2013 研究発表「現代の僑郷と人の移動―広東省東部の地方都市の事例から」2013 年度日本華僑華人学会第２回研究会「新たな僑郷研究の展開：国内・国外からの視点」、於：立教大学、(12 月 14 日).

稲澤努 2013「新たな他者とエスニシティ―広東省汕尾

ITO, Mariko 2013 'Livin g in Intimacy: A Case Study of Women's Community at Caodaist Temple in Hanoi', Atsufumi Kato (ed.) "Weaving Women's Sphere: Living in between the public and private in Vietnamese societies", Brill, Leiden, (近刊予定).

神谷智昭 2014 研究発表「長寿に関する沖縄の通過儀礼」国際学術シンポジウム「地域伝統文化の現在と未来」、於：慶南学研究院、(2 月 13 日).

神谷智昭　2013「死者と環境：韓国における墓地と環境の関係を中心に」『地理歴史人類学論集』琉球大学法文学部地理歴史人類学専攻、4: 61-66.

深川宏樹　2013 研究発表「身体に発現する呪い：ニューギニア高地エンガ州における人格と感情」日本文化人類学会第3回次世代育成セミナー　於:国立民族学博物館、(11月16日).

深川宏樹　2013 研究発表「ニューギア高地における紛争の社会性：人格論の観点から」太平洋島嶼部におけるマイノリティと主流社会の共存に関する人類学的研究　於:京都大学、(12 月 14 日).

深川宏樹　2013「ニューギニア高地における部族間抗争の変容」丹羽典生･石森大知（編）『現代オセアニアの〈紛争〉―脱植民地期以降のフィールドから』昭和堂、53-72 頁.

三浦哲也 2014「ドゥスン族の焼畑用地の利用パターンの変化」『育英短期大学紀要』31、印刷中.

山崎寿美子 2012「エスニックマーカーとしての魚類の発酵食品―カンボジアの少数民族ラオ人によるクメール人との差異化をめぐって」嗜好品文化研究会第 5 回研究奨励事業研究報告書.

吉本康子・今田ひとみ 2014『キクタン ベトナム語〈入門編〉』アルク.

吉本康子 2014「チャムの伝統文書にみるイスラーム的宗教知識：ベトナム中南部のチャムが継承する写本及び目録の分析を通した予備的考察」『アジア文化研究所研究年報 -2013-』、東洋大学アジア文化研究所、印刷中.

平成 25 年度 「東北アジア地域」に関する共同研究 成果報告書

研究課題名	モンゴルにおけるキリスト教宣教と聖書翻訳の過去と現在 （英文）History of Christian mission and Bible translation in past and present Mongolia.		
	学術深化型研究		
配 分 額	300（千円）	研 究 期 間	平成 25 年 7 月～平成 26 年 3 月
代 表 者	芝山 豊／清泉女学院大学人間学部・教授・20320947		

研究構成員 ※単独で実施する場合も記入してください

氏 名	所属機関・職	専門分野	役割分担
芝山豊	清泉女学院大学人間学部・教授／清泉女学院教育文化研究所・所長	モンゴル文学	研究総括（申請者）カトリックを中心に調査・史料収集
バイカル	桜美林大学人文学系・専任准教授	東洋史、宗教学	内モンゴルを中心に調査・史料収集
ライハンスレン・アルタンザヤ	モンゴル国立教育大学歴史社会学部・教授／東北大学東北アジア研究センター・外国人研究員（客員教授）	モンゴル宗教史	モンゴル国を中心に調査・史料収集
滝澤克彦	東北大学東北アジア研究センター・教育研究支援者	宗教学	プロテスタントを中心に調査・史料収集
岡洋樹	東北大学東北アジア研究センター・教授	モンゴル史	センターにおけるモンゴル研究の蓄積との接続

研究成果の概要

※研究の目的、方法、得られた成果の概要について、具体的に記入してください。

本共同研究の研究分担者は、各専門領域における資料収集とその分析を通じ、モンゴルにおけるキリスト教宣教と聖書翻訳の過去と現在についての概要を明らかにすることを目的とした。また、各自の情報を取り纏めることによって、モンゴル語聖書翻訳の情報データベース化へ向けた準備を行った。

特に、芝山は、主にカトリック関係の宣教及びカテキズムと典礼の翻訳に関する史料調査を実施した。また、バイカルは、主にモンゴル国および中国内モンゴル自治区においてキリスト教関係史料についての現地調査を実施した。アルザンザヤは、モンゴル国において、社会主義以前のモンゴル宣教に関するモンゴル側の記録について資料調査を行った。滝澤は、主にプロテスタント関係の宣教および聖書翻訳に関する史料調査および情報整理とデータベース化を行った。

また各自による資料調査、分析と合わせて計 3 回の研究会および公開シンポジウムを実施した。

第 1 回研究会では、各メンバーの専門研究について紹介するとともに、担当領域の先行研究、資料の所在、研究の現状などに関する情報交換を行った。

第 2 回研究会では、バイカルと滝澤が研究発表を行ったのち、資料収集と分析についての進捗状況を確認した。それによって約 80 にのぼるモンゴル語訳聖書とその分冊版の概要を明らかにすることができた。

第3回研究会では、資料収集と分析の状況について各メンバーが報告し、情報交換を行った。また、研究会前には日本聖書図書館において、共同で資料収集を行った。その結果、第2回研究会でまとめたモンゴル語訳聖書の一覧に現物を対応させることができた。それによって、各版の同一箇所を比較調査することが可能となった。

年度末に行われた公開シンポジウムにおいては、芝山、バイカル、滝澤の各メンバーが2013年度の資料収集と分析を通して得られた成果を発表した。岡氏のコメントを受けて行われた総合討論では、ナショナリズムの問題やモンゴル国および内モンゴル自治区の比較・関係などについて議論が交わされ、改めて現代のモンゴル人をめぐる民族と宗教の問題にモンゴルにおけるキリスト教宣教と聖書翻訳の歴史が重要な意味をもっていることがあきらかとなった。

東北アジア研究センターの活用状況

※東北アジア研究センターの設備・資料などの活用，研究者との共同関係について、具体的に記入してください。

東北アジア研究センター教授の岡洋樹氏は第1回研究会および公開シンポジウムに参加し、情報交換を行うとともに、シンポジウムではコメンテータを務めた。また、センター教育研究支援者の滝澤克彦氏は、毎回の研究会と公開シンポジウムに参加し、発表も行った。両氏のセンターにおける研究の成果を活用し、本共同研究においても重要な議論を行うことができた。

本共同研究に関わる業績（発表予定含む）

【論文】

・バイカル、「モンゴル帝国の寛容性〜ウィリアム・ルブルクの『東方諸地域への旅行』に見る異宗教観」、植民地文化学会編『植民地文化研究』、2013年7月、164-166頁

・バイカル、「報告　モンゴル国のキリスト教の過去と現在」、古橋昌尚編『今日のアジアの教会におけるインカルチュレーション』、教文館、2014年2月28日、123-139頁

・芝山豊、「キリスト教と民族的アイデンティティー：モンゴルの場合」、『清泉女学院大学人間学部研究紀要』第12号、清泉女学院大学人間学部、（掲載予定）

【口頭発表】

・滝澤克彦、「プロテスタント諸教派によるモンゴル宣教資料について」、東北アジア研究センター共同研究「モンゴルにおけるキリスト教宣教と聖書翻訳の過去と現在」第2回研究会、2013年9月27日、清泉女学院

・バイカル、「プロテスタント諸教派による内モンゴル宣教資料について」、東北アジア研究センター共同研究「モンゴルにおけるキリスト教宣教と聖書翻訳の過去と現在」第2回研究会、2013年9月27日、清泉女学院大学

・芝山豊、「資料紹介」、東北アジア研究センター共同研究「モンゴルにおけるキリスト教宣教と聖書翻訳の過去と現在」第2回研究会、2013年9月27日、清泉女学院

・バイカル、「20世紀におけるスウェーデン宣教団と聖書翻訳」、東北アジア研究センター共同研究「モンゴルにおけるキリスト教宣教と聖書翻訳の過去と現在」公開シンポジウム「聖書翻訳を通して見るモンゴル世界」、2014年3月2日、東北大学

・滝澤克彦、「聖書翻訳における神観念をめぐる諸問題」、東北アジア研究センター共同研究「モンゴルにおけるキリスト教宣教と聖書翻訳の過去と現在」公開シンポジウム「聖書翻訳を通して見るモンゴル世界」、2014年3月2日、東北大学

・芝山豊、「キリスト教と民族的アイデンティティー」、東北アジア研究センター共同研究「モンゴルにおけるキリスト教宣教と聖書翻訳の過去と現在」公開シンポジウム「聖書翻訳を通して見るモンゴル世界」、2014年3月2日、東北大学

平成 25 年度 「東北アジア地域」に関する共同研究 成果報告書

研究課題名	福島原発事故による環境汚染に対する集落単位の除染活動と台湾離島の核廃棄物貯蔵場の完全管理 (英文) The community activation of radioactive contamination for environmental pollution at Fukushima and safety management of radiation waste factory at Taiwan Orchid Island		
	地域課題解決型研究		
配 分 額	300（千円）	研 究 期 間	平成 25 年 7 月～平成 26 年 3 月
代 表 者	中生 勝美／桜美林大学・教授・00222159		

研究構成員 ※単独で実施する場合も記入してください			
氏 名	所属機関・職	専門 分野	役割 分担
中生勝美	桜美林大学人文学系・教授	文化人類学	研究総括（代表者）
加藤洋	首都大学東京健康福祉学部・准教授	放射線防護学	環境放射線
高倉浩樹	東北大学東北アジア研究センター	社会人類学	現地情報

研究成果の概要

※研究の目的、方法、得られた成果の概要について、具体的に記入してください。

研究計画の骨子は、次の 2 点である。①福島での線量が高い地域での生態系の実態と、除染や復興に向けた地域共同体の取り組みを把握することで、放射線量が高い地域の状態を調べるモデルとすること。②福島モデルと念頭に、核廃棄物貯蔵場のある、台湾蘭嶼島の生態系と健康調査から、住民が不安を感じている低レベル放射性物質の環境への影響を調べること。

①に関しては、平成 25 年 7 月 31 日から 8 月 2 日まで、中生と加藤が福島県白河郡西郷村の除染対策課での聞き取り、ため池での線量測定、飯館村での線量測定、東北大学図書館での資料調査を行った。また 11 月に中生・加藤・高倉で福島・飯館・南相馬で線量測定と地方自治体での除染の取り組みについてヒヤリングを行った。また 11 月 17 日に福島で開催された「原発災害と生物・人・地域社会への影響と克服の途を探る」に中生が参加した。その後、飯館に入り、松の木を採取して、加藤に渡し、年輪に付着したセシウムを測定した。

②に関しては、平成 25 年 8 月 26 日から 9 月 8 日まで、台湾で調査を行った。この時は、福島でのため池の経験を踏まえ、森林を汚染した放射性物質が湖底の泥にたまる生態系の特徴を応用し、蘭嶼島の山上にある湖の泥を採取して測定した。

福島での線量が高い地域での生態系分析から、徐々に台湾蘭嶼島での調査方法の輪郭がつかめてきたので、平成 26 年 2 月 23 日から 3 月 7 日まで、中生が私費で台湾に渡航し、核廃棄物貯蔵場近隣と山頂の樹木のサンプルを採取、また山頂の別の湖の湖底から泥を採取して、現在加藤が分析を始めている。また加藤の発案で、住民の食物に放射性物質が混入していた場合、頭髪にセシウムが残留している可能性があるので、現地の老人介護をしている NGO に協力を求め、介護をする高齢女性の頭髪を櫛でとかして採取する調査をしている。蘭嶼島のタウ族は、結婚すると、女性は髪の毛を切らない習慣があり、その頭髪から長年にわたる内部被ばくの有無を判明できる可能性が出てきた。加藤は調査を、福島でも比較のため行い

たいと計画している。
平成 23 年 11 月には、蘭嶼島の核廃棄物貯蔵場付近で放射性物質が漏れていることが報道され、台湾電力もそれを認めている。台湾衛生局は、平成 25 年 6 月に、台湾での地方別による発がん比率を公表し、台湾の中で最も発がん率が高いのが台東であり、その中でも蘭嶼島が最も高いことを認めている。それも甲状腺がんが 3000 人の住民にもかかわらず、すでに 4 人発病している。また低レベル放射性物質が、どのように生態系を汚染し、それがどのように生物や人体に影響を及ぼすのかという問題は、福島にかぎらず、蘭嶼島でも火急の問題として関心が高いけれど、一朝一夕には回答が出ない。福島と蘭嶼を結ぶ比較研究は、基礎研究の積み重ねが求められている。

東北アジア研究センターの活用状況

※東北アジア研究センターの設備・資料などの活用，研究者との共同関係について、具体的に記入してください。

平成 25 年 10 月の福島調査の時に、高倉が東北アジア研究センターの自動車で中生と加藤を飯館、南相馬へと連れて行ってもらい、調査の便宜を図ってもらった。中生と高倉は専門が人類学であり、人文学系の専門で、地域社会の取り組みや地方自治体の除染などの聞き取りを行ったが、加藤は放射線防疫が専門なので、具体的な測定や除染作業の有効性、サンプル測定など、放射線の専門的な分析を担当し、共同研究として大変うまくいっている。

本共同研究に関わる業績（発表予定含む）

中生勝美

「Radiation Active Waste in Taiwan and Kuroshio Currents」第 9 回琉球・沖縄研究国際シンポジウム、ソウル大学招待講演、平成 26 年 5 月 19 日

「蘭嶼島の環境放射線調査に見る台湾の問題点」平成 26 年 5 月 24 日、日本台湾学会研究大会（口頭発表、事前原稿提出、発表に査読あり）

平成 25 年度 「東北アジア地域」に関する共同研究 成果報告書

研究課題名	近世化社会との対話：東北アジア地域における「成熟社会」モデル構築のための萌芽的研究 （英文）Discussion with the Early Modern Societies：In Search for Sustainability Models in North East Asia		
	学術深化型研究		
配 分 額	300（千円）	研 究 期 間	平成 25 年 7 月～平成 26 年 3 月
代 表 者	飯島 渉／青山学院大学文学部・教授 ･70221744		

研究構成員 ※単独で実施する場合も記入してください			
氏 名	所属機関・職	専門 分野	役割 分担
飯島渉	青山学院大学文学部・教授	歴史学 (医療社会史)	研究総括（代表者）
門司和彦	総合地球環境学研究所研究部・教授	人類生態学、熱帯公衆衛生学	研究分担
大村哲夫	東北大学大学院文学研究科・専門研究員	臨床死生学、宗教心理学	研究分担
荒武賢一朗	東北大学東北アジア研究センター・准教授	歴史学 （日本近世・近代史）	研究分担、連絡教員

研究成果の概要

※研究の目的、方法、得られた成果の概要について、具体的に記入してください。

本研究の目的は、東北アジアの近世社会が蓄積してきた多様な歴史的経験を 21 世紀における「成熟社会」のモデルの構築のために活用することにある。ここで述べる「成熟社会」とは、グローバル化や少子高齢化、そして過疎化のなかで、持続可能な社会を構築するためのモデルである。我々の共同研究では、近世社会の実態と、現代における地域社会の比較分析を通して、成熟社会のモデルをどのように創出できるのかを考えていきたい。

本研究が日本の近世社会に注目するのは、経済・社会情勢が極めて現代に近似していること、また現代的な課題を克服するためのカギが近世社会にあるのだという仮説である。たとえば､17 世紀から 19 世紀の東北アジアの社会は､ヨーロッパ勢力の登場､また日本銀がグローバル化することで近世化という社会変動を経験した。こうした状況の中で、近世日本は、人口停滞の局面を迎えつつも、労働集約型社会（勤勉革命）を構築し、重層的な経済発展と安定的社会を構築した。

以上のような歴史的経験に関する、東北アジアの共通認識を確立することが我々の最終目標である。その第一歩として、今回組織した共同研究では、東北地方を中心とした日本の事例抽出をおこない、課題の整理を実施した。

フィールド調査は、岩手県陸前高田市、宮城県白石市を中心とした。8 月の陸前高田調査では、高橋宗康、石木幹人両氏（岩手県立高田病院医師）の協力により、東日本大震災の被災地に焦点をあてた。甚大な被害を受けた陸前高田の現状調査、とくに医療機関の活動につ

いて多くの教示を得た。具体的には高橋、石木両氏が取り組む地域医療の充実プラン、そして医療機関と地域社会の関係について、詳細な調査を進めた。その後も飯島は11月にも当地に出張し、継続的調査を行った。

11月の白石市では、「まちおこし」をキーワードとして、関係者・関係機関の聞き取りを実施した。協力者は、櫻井和人氏（白石市教育委員会主事)、大野恒雄氏（公立刈田綜合病院事務部長）など5名である。当地では近年注目を集めているイベント「鬼小十郎祭り」があり、その企画立案と今後の見通し、さらに歴史を通したまちづくりの取り組みについて具体的な内容を聴取した。また、地域活性については、市内でもっとも過疎化がすすむ小原地区を訪問し、行政と自治会が連携しながら「まちおこし」を積極的に推進していることが理解できた。大野氏へのインタビューでは、医療における地域格差の問題や医療機関の果たすべき役割などが述べられた。観光・歴史・文化財・経済・医療、といったように多様なテーマを結びつけることで「成熟社会」モデルが明確化できるのではないか、という指針を立てておきたい。

陸前高田、白石のほか、研究構成員それぞれが自らのフィールドについて個別調査をおこなっている。飯島は関連として中国や石垣島、国内では長崎で調査をしており、また門司、大村、荒武も地域社会に関するデータを収集し、関連学会において周囲の研究者との対話に努めている。

今年度の研究段階と総括を意図して、平成26年3月9日にゲストスピーカーを交えて研究報告会を開催した。

【東北大学東北アジア研究センター　平成25年度公募型共同研究】
「近世化社会との対話 ― 東北アジア地域における「成熟社会」モデル構築のための萌芽的研究 ―」研究報告会（日時：2014年3月9日、川北合同棟3階301会議室）報告：荒武「大名家財政と近世社会 ― 領主はどこにお金を使ったのか？ ―」／張基善（芦東山記念館)「仙台藩の浪人統制と「浪人改帳」」／竹原万雄（東北芸術工科大学)「1882年、宮城県のコレラ予防」／青木健（慶應義塾大学)「日本林野史における「民林自治」の伝統と林政」／大村「癒しと慰霊の文化と学校－震災死と卒業証書」

本年の総括として、近世から現代につながる地域社会の様相を人文社会科学分野の研究者(経済学･宗教学･歴史学）が報告し合うことで一定の結論を得たと考えている。医療、宗教、環境とさまざまな分野について、萌芽的研究からより広く、深く学際的研究を展開していきたい。

東北アジア研究センターの活用状況

※東北アジア研究センターの設備・資料などの活用，研究者との共同関係について、具体的に記入してください。

東北大学における研究会･会議は､平成25年8月､11月､平成26年3月の合計3回実施した。最初の会議は川北合同棟改修工事中のため、大村の所属する文学研究科棟で会場を確保したが､残り2回は東北アジア研究センターの会議室を活用させていただいた。会議では､パワーポイントやスクリーンも利用し、円滑に議事を進めることができた。

調査に際しては、センターの公用車を2回利用させていただいた。とりわけ、岩手県陸前高田市の現地調査は、この公用車なくしては実施が困難で、我々にとっては大変効率的に作業を進めることが可能となった。ただし、センター図書室が改修工事などのため使用できなかったことは大変残念である。

連絡教員の荒武准教授とは、調査・会議で一緒に作業を進め、またセンターとのパイプ役についても貢献をいただいた。3月9日の研究報告会では、東北大学および周辺の研究者と

の日程調整にも尽力され、本研究メンバーとセンター内部、そしてゲストとの連絡を緊密にすることができた。

本共同研究に関わる業績（発表予定含む）

【論文】

・大村哲夫「死者が卒業するということ ― 東日本大震災における慰霊と癒し ―」（東北大学文学会『文化』第 77 巻第 1・2 号、2013 年 9 月）

⑷ 研究紹介発表

東北アジア研究センターでは、センター教員の研究を相互に理解し関連情報を交換するために、「東北アジア研究談話会」と題する毎月一回一人ずつ（持ち時間 25 分）、センター全体会議の直後に、センター教員（外国人研究員［客員教授含む］および各種研究員）による個人研究紹介を行っている。2013 年度は 10 件の報告があった。

また 3 月 28 日には、2013 年度の共同研究および個人研究の研究成果報告会を開催した。今年度の場合、テーマ毎にセッション方式でまとめたほか、数多くの研究発表希望に対応するために口頭発表とポスター発表双方を可能としたほか、公募型共同研究の代表者の発表も加えることとした。その結果口頭発表 15 件、ポスター発表 12 件の合計 27 件の報告があった。これらによって、センター内外の研究交流の活性化が達成するとともに、センターの新しい研究領域を議論するための研究者ネットワークが拡張したと考えられる。

東北アジア研究談話会

2013 年 4 月 27 日　岡 洋樹　教授　清代モンゴル史の研究

2013 年 5 月 24 日　滝澤 克彦　教育研究支援者
モンゴルにおけるキリスト教福音派の展開とその諸条件

2013 年 6 月 24 日　巽 由樹子　教育研究支援者
19 世紀後半シベリアの出版－研究史と展望について

2013 年 7 月 29 日　Laikhansuren Altanzaya　客員教授・モンゴル国立教育大学・歴史・社会科学部・教授　The Shabi (disciple) in the society of Kharkha Mongolia during the Qing period

2013 年 9 月 30 日　塩谷 昌史　助教　自然環境と人間 - 工業化の観点から

2013 年 10 月 28 日　千葉 聡　教授　東北アジア生物多様性研究

2013 年 11 月 25 日　潘 建国　客員教授・北京市北京大学・中文系・教授　日本に所蔵される中国小説版本の研究（日本所藏中国小説版本研究）

2014 年 1 月 27 日　石井 敦　准教授　マグロ資源の国際的管理と今後の行方

2014 年 2 月 24 日　Lighart　Leonardus　Petrus 客員教授・デルフト工科大学・名誉教授　Netherlands-Russian cooperation in the field of radar

2014 年 3 月 24 日　寺山 恭輔　教授　スターリンの対新疆政策

東北アジア研究センター平成 25 年度研究成果発表会

2014 年 3 月 28 日 13 時から 18 時　会場：東北大学片平さくらホール

歴史セッション　座長 : 高倉浩樹

報告 1 麻田 雅文　教育研究支援者　ソ連側から見た奉ソ紛争、1929 年 ― ソ連

邦初の対外戦争
報告 2 石渡 明　教授　サハリンの油田開発史における日本の関与
報告 3 友田 昌宏 助教　敗者の明治維新
報告 4 加藤 論（東北大学史料館・教育研究支援者）江戸時代から現代に通じる東北の歴史
報告 5 飯島 渉（青山学院大学・教授） 近世化社会との対話 : 東北アジア地域における「成熟社会」モデル構築のための萌芽的研究

環境・災害セッション 座長 : 石渡明
報告 6 鹿野 秀一　准教授　西シベリアの河口域生態系における食物網内の寄生虫のリンク
報告 7 中生 勝美 (桜美林大学・教授)　福島原発事故による環境汚染に対する集落単位の除染活動と台湾離島の核廃棄物貯蔵場の完全管理
報告 8 佐藤 源之　教授　減災をめざした電波科学研究

言語・文化セッション　座長 : 瀬川昌久
報告 9 栗林 均　教授　伝統的モンゴル文字の電子化利用について
報告 10 芝山 豊　(清泉女学院大学・教授)　モンゴルにおけるキリスト教宣教と聖書翻訳の過去と現在
報告 11 柳田 賢二　准教授　中央アジアロシア人のディアスポラ化の進行とそのロシア語の特徴について
報告 12 磯部 彰　教授　戦国大名の東北アジア関係書籍蒐集

社会・民族セッション　座長 : 柳田賢二
報告 13 瀬川 昌久教授　現代中国社会の変容とその研究視座の変遷 ―「宗族」を通した検証
報告 14 岡 洋樹　教授　東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究
報告 15 櫻田 涼子　育英短期大学・講師　社会的行為としての〈食〉をめぐる文化人類学的研究

ポスターセッション 1
P1 金 賢貞　助教　高齢者は災害弱者？― ローカルな文化伝承とソーシャル・エンゲージメント
P2 平野 直人　准教授、山本順司　北海道大学博物館　根室半島～北方領土歯舞

群島の特異な地質と、その岩石試料・野外データー・文献検索
P3 高橋 一徳　助教）地雷探知機性能と土壌特性
P4 稲澤 努　教育研究支援者　中国におけるエスニックカテゴリー ― 広東省の山地民と水上居民を事例として
P5 荒武 賢一朗　准教授　日本列島の文化交渉史 ― 経済と外交
P6 滝澤 克彦　教育研究支援者　東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用
P7 髙橋 陽一　助教　江戸時代の東北旅行
P8 ツォグバドラフ ガンツェツェグ　教育研究支援者　モンゴル語の使役文に関する研究
P9 高倉 浩樹　教授　レナ川洪水をめぐる地域社会の適応の限界
P10 岡 洋樹　教授　近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究
P11 上野 稔弘　准教授　新疆、満州をめぐる 20 世紀前半のソ連、中国の政策
P12 宮本 毅　助教南　九州・霧島火山群新燃岳のマグマ系 ― 最新の噴火 (2011 年噴火) から分かること

⑸ 学術協定

⒜ 学術協定による海外の学術機関等との連携強化

本学中期目標は、「2. 研究に関する目標、(1) 研究水準及び研究の成果等に関する目標、③国際共同研究を推進する」との目標を掲げ、そのための措置として「国際的ネットワークの構築による国際共同研究の推進」を唱っている。本センターは、主として東北アジア諸国の研究教育機関との研究交流を行うためのネットワーク構築を進めてきた。このためセンターは、大学間学術交流協定や部局間学術協定を国内外の研究教育機関と締結し、東北アジア地域研究を遂行するための国際的な環境づくりを行っている。これまでの締結機関及び締結年月日は表に記した通りである。

締結年月日	相手国機関名
1992. 8.10	★ロシア連邦　ロシア科学アカデミー・シベリア支部
1999. 1.12	☆アメリカ　アラスカ大学
2000. 8.21	★モンゴル　モンゴル科学アカデミー
2000.10. 2	◆モンゴル　モンゴル科学技術大学ジオサイエンスセンター
2001. 3. 1	★中国 吉林大学
2001. 6.25	◆中国 広東省民族宗教研究院
2001.11.16	★モンゴル　モンゴル科学技術大学
2002.10. 1	◆ロシア連邦　ロシア科学アカデミーシベリア支部 V.N. スカチョフ森林研究所
2003. 7. 4	★ロシア連邦　ノボシビルスク国立大学
2005. 9. 1	◆ロシア連邦　ロシア科学アカデミー極東支部経済研究所
2008. 4. 1	◆中国　内蒙古師範大学蒙古学学院
2008. 4.25	◆韓国　高麗大学校中国学研究所
2008. 4.25	◆韓国　高麗大学校日本研究センター
2008. 9.22	◆中国　内蒙古大学蒙古学学院
2009. 8.21	★イタリア　フィレンツェ大学
2009. 8.25	☆イラン　テヘラン大学
2009. 9.30	◆ロシア連邦　ロシア科学アカデミーシベリア支部人文学・北方民族問題研究所
2011. 9.28	◆中国　内蒙古師範大学旅游学院
2013. 3. 1	☆ドイツ　ドイツ航空宇宙センター
2014. 2.25	◆中国　中央民族大学蒙古語言文学系

◆部局間協定　★センターが世話部局となった大学間協定　☆センターが協力部局となった大学間協定

⒝ 共同ラボによる国際的研究支援

SB RAS エキシビションセンター内に設置された共同ラボは、東北アジア研究センター海外連携室及び東北大学ロシア交流推進室と連携して機能している。同オフィス内には東北大学ロシア代表事務所シベリア支部が設置された。

共同ラボを通じた活動としては、訪問講座「日本とアジア」などが挙げられる。これはセンターが主体となり、ノボシビルスク国立大学人文学部との合意のもと、平成20年度から五年間実施されたもので、昨年からは、ロシア交流推進室の企画として、

東北アジア研究センターで実施している。平成 25 年度には、東北アジア研究センターの荒武賢一朗准教授を講師とした講演が実施された。今回の講座は、東北大学の大学説明会と同時に実施された。

共同ラボについては、ロシア側の事情で維持が困難になっており、東北大学の代表事務所との統合にむけた調整が進められている。

⑹ 研究成果公開

⒜ 既刊の刊行物

・『東北アジア研究』

東北アジア研究センターが主催する東北アジア地域研究のための学術雑誌。

第 1 号（1997）～ 第 18 号（2013）

＜第 18 号＞目次

〔論文〕

● The political status and ethnic identity of Siberian nomadic “aliens” in the first half of the 19 century

ADRAIN Borisov

●清末の内モンゴル・ハラチン地域における巡警局創設について

包呼和木其尔（ボルジギン　フフムチル）

●辛亥革命前後のモンゴル独立運動と内モンゴル王公 ― アマルリングイ（博王）の動向に着目して

布日額（ボルジギン　ブレン）

●フルンボイル遊牧社会における地縁結合 ― Ya. シャーリーボー氏の口述に現れた“アイマグ”をめぐって

中村篤志

●現代中国における宗族の再生と文化資源化

瀬川昌久

●墓の変化から見る韓国の家族

澤野美智子

〔史料紹介〕

●「シンバルガ左翼総管衙門文書」三種（1945 年 9-10 月）について

田淵陽子

〔研究動向〕

●人のふるまいを手がかりにした屋台文化考察

妻木宣嗣

〔書評〕

● Н.И.Дубинина, Дальний Восток Яна Гамарника , Хабаровск, 2011

寺山恭輔

●染谷智幸、崔官編『日本近世文学と朝鮮』

鄭英實

●松尾晋一『江戸幕府と国防』

古川祐貴

●伊藤徳也『「生活の芸術」と周作人 ― 中国のデカダンス＝モダニティ』

鄒双双

・『東北アジア研究シリーズ』(和文)

1. 平川新編「シンポジウム　変動するアジアと地域研究の課題」(2001)
2. 成澤勝編「公開シンポジウム　21 世紀東北アジアの安定と繁栄に果たす日韓の役割」(2001)
3. 朝　克著、丸山宏／上野稔弘編訳「共同研究　ツングースの生産文化に関する自然科学的再検証　研究集会発表再構成　ツングースの民族と言語」(2002)
4. 岡洋樹／高倉浩樹編「東北アジア地域論の可能性　歴史学・言語学・人類学・政治経済学からの視座（東北アジア地域研究シンポジウム報告集)」(2002)
5. 岡洋樹／高倉浩樹／上野稔弘編「東北アジアにおける民族と政治（東北アジア地域研究シンポジウム報告集)」(2003)
6. 瀬川昌久編「『中国研究』の可能性と課題（東北アジア地域研究シンポジウム報告集)」(2005)
7. 寺山恭輔編「開国以前の日露関係（東北アジア地域研究シンポジウム報告集)」(2006)
8. 明日香壽川編「地域協力から見えてくる地球温暖化」(2007)
9. 高倉浩樹編　地域分析と技術移転の接点：「はまる」「みる」「うごかす」視点と地域理解（2007)
10. 岡洋樹編「内なる他者＝周辺民族の自己認識のなかの「中国」― モンゴルと華南の視座から ― 」(2009)
11. 塩谷昌史編「帝国の貿易　18 ～ 19 世紀におけるユーラシアの流通とキャフタ」(2009)

・『東北アジア研究シリーズ』(英文)

1. 吉田忠／岡洋樹編「東北アジア諸国の変容の諸相」(1998)
2. 寺山恭輔編「ロシアと日本 ― 歴史研究 ― 」(1998)
3. 岡洋樹編「東北アジア諸国の変容の諸相 II」(1998)
4. 寺山恭輔「高温超伝導：新たな物質とその物性」(1999)
5. 工藤純一／山田勝芳編「地球変化に関する国際ワークショップ：ノアから見たシベリア」(2001)
6. 高倉浩樹編「ヤクーチアにおける民俗生態学的実践と文化の伝統」(2003)
7. 岡洋樹編「モンゴル　歴史と民族の諸問題」(2004)
8. 宮本和明編「東北アジアにおける計量地域研究のための基盤整備」(2005)
9. 岡洋樹／オーホノイ・バトサイハン編「1911 年モンゴル民族革命の前提条件と国際情勢（モンゴル語)」(2006)
10. Ch. ダシダワー／岡洋樹編「モンゴル史研究の新動向、当面する課題（17 ～ 20 世紀初頭）(モンゴル語)」(2009)
11. フロリアン・ステムラー／高倉浩樹編「食べるだけでなく、共に暮らすに適するもの ― 北方ユーラシアとアフリカにおける遊動民と動物」(2010)

・『東北アジア研究センター叢書』

1. 山田勝芳編「東北アジアにおける交易拠点の比較研究」(2001)
2. 田中継根編訳「レザーノフ編『露日辞書・露日会話帳』」(2001)
3. 成澤勝編「環中華の儀礼と芸能 ― 朝鮮を軸に ― 」(2001)
4. 栗林均／精扎布編「『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引」(2001)
5. K. Litasov, H. Taniguchi, Mantle Evolution beneath the Baikal Rift (2002)
6. 岡洋樹編「モンゴル研究論集　東北大学東北アジア研究センター・モンゴル研究成果報告 I」(2002)
7. 宮本和明「東アジア 3 国における自動車保有・利用の実態と社会意識の調査研究 ― 経済成長・自動車利用と環境の調和をめざして ― 」(2002)
8. 瀬川昌久編「文化のディスプレイ」(2003)
9. 磯部彰編「東北大学所蔵　豊後佐伯藩『以呂波分書目』の研究」(2003)
10. 栗林均編「『華夷訳語』(甲種本）モンゴル語全単語・語尾索引」(2003)
11. 鄭永振著 , 成澤勝編「古ツングース諸族墳墓の比較研究」(2003)
12. A.A キリチェンコ編「シベリア抑留死亡者名簿」(2003)
13. 黒田卓／高倉浩樹／塩谷昌史編「中央ユーラシアにおける民族文化と歴史像」(2003)
14. 磯部彰編「明治・大正期における根岸町子規庵の風景」(2003)

15. 平川新監修「『ロシア史料にみる 18~19 世紀の日露関係』第一集」(2004)
16. 谷口宏充編「中国東北部白頭山 10 世紀巨大噴火とその歴史効果」(2004)
17. ニコライ・ツェレンピロフ編、ツィムジト・ワンチコワ監修「ロシア科学アカデミーシベリア支部モンゴル学・チベット学・仏教学研究所モンゴル語写本・版本 MI コレクション注釈付目録」(2004)
18. S. G. Catane, H. Taniguchi, A. Goto, A. P. Givero and A. A. Mandanas, Explosive Volcanism in the Philippines.(2005)
19. 磯部彰編「慶應義塾図書館所蔵閩斎堂刊『新刻増補批評全像西遊記』の研究と資料(上)」(2006)
20. 栗林均／呼日勒巴特爾編「『御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑』モンゴル語配列対照語彙」(2006)
21. S. V. Rasskazov and H. Taniguchi, Magmatic Response to the Late Phanerozoic Plate Subduction beneath East Asia(2006)
22. 山田勝芳／工藤純一編「ノア・データの利用による東北アジアの環境変動解析とデータベース作成に関する学際的研究」(2006)
23. 磯部彰編「慶應義塾図書館所蔵閩斎堂刊『新刻増補批評全像西遊記』の研究と資料(下)」(2006)
24 N. Tserempilov, “ANOTATED CATALOGUE of the collection of Mongolian manuscripts and xylographs MII of the Institute of Mongolian, Tibetan and Buddhist studies of Siberian Branch of Russian Academy of Sciences”, (2006)
25. 瀬川昌久編「海南島の地方文化に関する文化人類学的研究」(2007)
26. 平川新監修「ロシア史料にみる 18 〜 19 世紀の日露関係　第 2 集」(2007)
27. 岡洋樹編「モンゴルの環境と変容する社会」(2007)
28. L. Kondrashov and J.Kudoh, “Monitoring of Vegetation Fires in Northeast Asia”(2008)
29. 磯部彰編「費守斎刊『新刻京本全像演義三国志伝』の研究と資料」(2008)
30. 栗林均／呼日勒巴特尔編「『御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑』満洲語配列対照語彙」(2008)
31. 平川新監修「ロシア史料にみる 18 〜 19 世紀の日露関係　第 3 集」(2008)
32. 寺山恭輔「1930 年代ソ連の対モンゴル政策 ― 満洲事変からノモンハンへ ― 」(2009)
33. 栗林均編「『元朝秘史」モンゴル語漢字音訳・傍訳漢語対照語彙」(2009)
34. 李仁子／金谷美和編「自己言及的民族誌の可能性」(2009)
35. 工藤純一「東北アジア地域ノア画像データベース構築と文系分野への利用研究

報告書」(2009)

36. 平川新監修、寺山恭輔／畠山禎／小野寺歌子編「ロシア史料にみる 18 〜 19 世紀の日露関係　第 4 集」(2009)
37. 栗林均編「『蒙文総彙』— モンゴル語ローマ字転写配列 — 」(2010)
38. 佐藤大介編「18 〜 19 世紀仙台藩の災害と社会　別所万右衛門記録」(2010)
39. 平川新監修、寺山恭輔／畠山禎／小野寺歌子編「ロシア史料にみる 18 〜 19 世紀の日露関係　第 5 集」(2010)
40. 磯部彰編「清初刊教派系宝巻二種の原典と解題 —『普覆週流五十三参宝巻』と『姚秦三蔵西天取清解論』— 」(2010)
41. 谷口宏充編「白頭山火山とその周辺地域の地球科学」(2010)
42. 磯部彰編「高岡市立中央図書館蔵鄭雲林刊『全像三国志伝』原典と解題（上)」(2011)
43. 瀧澤克彦編「ノマド化する宗教　浮遊する共同性　現代東北アジアにおける『救い』の位相」(2011)
44. 磯部彰編「高岡市立中央図書館蔵鄭雲林刊『全像三国志伝』原典と解題（下)」(2011)
45. 岡洋樹編「歴史の再定義 — 旧ソ連圏アジア諸国における歴史認識と学術・教育 — 」(2011)
46. 栗林均編「『達斡爾語詞彙』蒙古文語索引（附満洲文語索引)」(2011)
47. 栗林均編「『元朝秘史』漢語傍訳索引」(2011)
48. 栗林均編「『保安語詞彙』蒙古文語索引」(2012)
49. 磯部彰編著「清朝宮廷演劇文化の世界」(2012)
50. 高橋陽一編著「江戸時代の温泉と交流 — 陸奥国柴田郡前川村佐藤仁右衛門家文書の世界 —」(2013)
51. 栗林 均編「『土族語詞彙』蒙古文語索引」(2013)
52. 栗林 均・斯欽巴図編「蒙文倒綱 — モンゴル語ローマ字転写配列 —」(2014)

・『東北アジア　アラカルト』

第 1 号　徳永昌弘／徳田昌則編「ノヴォシビルスクは今」(1999)
第 2 号　寺山恭輔編訳「シベリアの過去と未来」(1999)
第 3 号　徳永昌弘／徳田昌則編「エリツィン時代のロシアとその後：日露関係の展望」(2000)
第 4 号　伊賀上菜穂編「新世紀の東北アジア — 日中露三国をめぐる国際関係の歴史と将来 — 」(2001)
第 5 号　キム・レチュン講演、柳田賢二編「老子とトルストイ」(2001)

第 6 号　寺山恭輔・塩谷昌史編「東北アジアの共生とユートピア」(2002)
第 7 号　東北アジア研究センター開設 5 周年記念特刊「新しい地域研究を求めて ― 東北アジア研究センターの現在と明日への展望 ― 」(2002)
第 8 号　平川新／ A. A. キリチェンコ「日本とロシア ― その歴史を振り返る ― 」(2003)
第 9 号　吉田忠／磯部彰「東アジアの本とさし絵」(2004)
第 10 号　山田勝芳編「『東北アジア』“Northeast Asia” の現在・未来を考える ― 日本における『東北アジア』関係機関の集い ― 」(2004)
第 11 号　磯部彰編「市民フォーラム 2003 明治大正期の根岸町子規庵界隈とその後」(2004)
第 12 号　徳田由佳子編「シベリア通信 2000 年 ― 2004 年」(2004)
第 13 号　山田勝芳編「人口・労働問題から見た東北アジアと東南アジア ― ASEAN+3 の行方を人口・労働問題から見る ― 」(2004)
第 14 号　徳田由佳子編「新技術開発ダイジェスト 2001 年 ― 2004 年」(2005)
第 15 号　磯部彰編「東北アジア研究センター共同研究『東アジア出版文化の総合研究』研究成果報告『東アジア出版文化の研究』に係る研究成果等の社会公表」(2006)
第 16 号　セルゲイ・パプコフ／寺山恭輔／畠山禎「三人の大統領とソ連・ロシア：ペレストロイカ、ソ連崩壊、再興」(2006)
第 17 号　磯部彰編「東シナ海近世現代出版文化研究（「東アジア出版文化の総合研究」報告書Ⅱ）」(2007)
第 18 号　山田勝芳編「松本健一「アジア主義と大東亜戦争 ― 北一輝・大川周明・石原莞爾・中野正剛 ― (東北アジアにおけるユートピア思想と地域の在り方研究会　講演会記録)」(2007)
第 19 号　工藤純一編「東北大学・ロシア科学アカデミーシベリア支部学術交流協定締結 15 周年記念シンポジウム報告書」(2008)
第 20 号　斎藤由佳／前田ひろみ翻訳、寺山恭輔編集「ロシアの北太平洋進出と日本 ―『ロシア領アメリカの歴史』より ― 」(2009)
第 21 号　徳田由佳子編「シベリア通信 2　2004 年～ 2008 年」(2009)
第 22 号　徳田由佳子編「新技術開発ダイジェスト 2　2004 年～ 2008 年」(2009)
第 23 号　寺山恭輔編「ロシア極東の形成 ― N.I. ドゥビーニナ著『プリアムール総督』三部作より ― 」(2010)
第 24 号　千葉真弓／徳田由佳子／高倉浩樹編「トナカイ！トナカイ !! トナカイ !!! 研究成果を市民に還元する自主展示の試み」(2010)

・『東北アジア研究センター報告』

第 1 号　高倉浩樹「日本人のみたトナカイ遊牧民　シベリア民俗写真を現地に戻して展示する試み」(2011)

第 2 号　チョローン・ダシダワー、チンゲルト、岡洋樹編「モンゴル史研究と史料」(モンゴル文) (2011)

第 3 号　平川新／佐藤大介編「歴史遺産を未来へ」(2011)

第 4 号　平川新編「よみがえる町の記憶 ― 通町・堤町・北山界隈の歴史 ― 」(2011)

第 5 号　高倉浩樹編「東日本大震災で被災した宮城県沿岸部における民俗文化財調査（2011 年度報告集)」(2012)

第 6 号　栗林均編「蒙文倒綱 ― 資料編・原本影印 ―」(2012)

第 7 号　佐藤源之／高倉浩樹編「連携する研究所」(2012)

第 8 号　岡洋樹編「身体的実践としてのシャマニズム」(2012)

第 9 号　高倉浩樹・滝澤克彦編「『東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査(2012 年度報告集)』」(2013)

第 10 号　荒武賢一朗「地域の歴史を学ぶ ― 宮城県大崎市の文化遺産 ―」(2013)

第 11 号　佐々木聡「『開元占經』閣本の資料と解説」(2013)

第 12 号　栗林均「孝経 ― モンゴル語古訳本 ―」(2014)

・『東北アジア研究センター　ニューズレター』

第 1 号（1999）～ 第 60 号（2013）

年 4 回、本研究センターの活動状況や諸情報を採録した「東北アジア研究センターニューズレター CNEAS」を出版している。学内外の機関等に配布のほか、本センターの活動に協力いただく個人に配布している。2012 年度は以下のとおり発行した。

『東北アジア ニューズレター 第 57 号』 2013 年 6 月 27 日発行

目次

巻頭言：モンゴルで開催したシンポジウム

最近の研究会・シンポジウム等

　東北アジア研究センターシンポジウム　民俗芸能と祭礼からみた地域復興

　日露歴史研究セミナーの開催

　江戸時代の漂流民によるシベリア民族学

　国際シンポジウム第 16 回特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」研究会

人事異動

新任教員紹介

客員教授紹介

新任紹介
著書紹介
活動風景
編集後記

『東北アジア ニューズレター 第 58 号』 2013 年 10 月 31 日発行
目次
巻頭言：課題群としての東北アジア
最近の研究会・シンポジウム等
　東北アジア学術交流懇話会 定期公開講演会　すぐそこのロシア“ 隣人の今 ”
　公開講演会　よみがえる村田の歴史〜江戸時代からのメッセージ〜
　共同研究「東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用」第 1 回研究会
　共同研究「近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究」平成 25 年度第 1 回研究会
人事異動
新任教員紹介・新任スタッフ
客員教授紹介
受賞関連
センター関連出版物紹介
活動風景
編集後記

『東北アジア ニューズレター 第 59 号』 2013 年 12 月 24 日発行
目次
巻頭言：韓国の地質学会を訪問して
最近の研究会・シンポジウム等
　東北大学片平まつり 2013 の開催
　講演会　地球深部探査船「ちきゅう」が解き明かす東北沖地震の謎
　講演会　中国の大気汚染問題と日中協力
　日本地質学会（東北アジア研究センター共催）の開催（9 月 14 〜 16 日）について
　日露ワークショップ　日本文化を教える：ロシアと日本の日本語教育の現場から（9 月 25 日）
　日本研究の国際化を目指す〜ハイデルベルク大学「古文書ワークショップ」〜

学問を通じた地域連携「講座：地域の歴史を学ぶ◎鬼首」の開催
表彰
著書紹介
新任紹介
活動風景
編集後記

『東北アジア ニューズレター 第 60 号』 2014 年 3 月 24 日発行
目次
巻頭言「東北アジア地域概念と日本人の世界観」
みやぎ県民大学開講「東北アジアの人間と環境」
最近の講演会・研究会等
公開講演会　世界遺産からのメッセージ－平泉・石見銀山の歴史力
伊達市噴火湾文化研究所との第 5 回学術交流連携講演会
プロジェクト研究ユニット「20 世紀ロシア・中国史再考研究」研究会
共同研究「典籍文化遺産の研究」公開研究会
共同研究「20 世紀前半のサハリンの歴史的記憶」研究会
共同研究「東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用」出張報告会
客員教授紹介
センター関連出版物
活動風景
編集後記

・『英文ニューズレター『The Bulletin CNEAS vol.1』 2014 年 3 月発行
Contents
Director
Focus
Recent Events
Awards
New Colleagues from 2012
Publications
Letters
Editorial

・東北アジア学術読本（東北大学出版会刊）

1. 高倉浩樹・曽我亨『シベリアとアフリカの遊牧民 ── 極北と砂漠で家畜とともに暮らす ── 』(2011 年)
2. 石渡明・磯崎行雄『東北アジア　大地のつながり』(2011 年)
3. 奥村誠･藤原潤子･植田今日子･神谷大介『途絶する交通､孤立する地域』(2013 年)

・東北アジア研究専書

1. 瀬川昌久『近現代中国における民族認識の人類学』昭和堂刊、2011 年
2. 高倉浩樹『極北の牧畜民サハ：進化とミクロ適応をめぐるシベリア民族誌』昭和堂刊、2011 年
3. 川口幸大､瀬川昌久『現代中国の宗教 ― 信仰と社会をめぐる民族誌』昭和堂刊、2013 年
4. 金賢貞『「創られた伝統」と生きる ― 地方社会のアイデンティティー ―』青弓社、2013 年
5. 山口未花子『ヘラジカの贈り物：北方狩猟民カスカと動物の自然誌』春風社、2014 年
6. 塩谷昌史『ロシア綿業発展の契機 ― ロシア更紗とアジア商人 ―』知泉書館、2014 年

・科学研究費補助金特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」研究成果集

Ⅰ：磯部祐子『東北大学附属図書館蔵「如是観等四種」原典と研究』(2009)
Ⅱ：高橋智編、金文京著『慶應義塾図書館蔵「四郎探母等四種」原典と解題』(2009)
Ⅲ：磯部彰『上海図書館所蔵『江流記』原典と解題』(2010)
Ⅳ：磯部彰編著『上海図書館蔵『進瓜記』原典と解題』(2011)
Ⅴ：磯部彰編著『『西遊記』画三種の原典と解題』(2012)
Ⅵ：磯部彰編著『清朝宮廷演劇文化の世界』(2012)
Ⅶ：大阪府立中之島図書館蔵『昇平宝筏』(全 10 冊) (2013)

・特定領域研究「東アジア出版文化の研究」等 研究成果集

磯部彰編『東アジア出版文化研究　にわたずみ』(2004)
磯部彰編『東アジア出版文化研究　こはく』(2004)
磯部彰編『東アジア出版文化研究　ほしづくよ』(2010)

・展覧会図録

磯部彰編『第 1 回東アジア出版文化に関する国際学術会議　古典籍史展示会解説図

録 ― はなしが違う！！絵も違う！ ―』(2001)
磯部彰編『第 2 回東アジア出版文化に関する国際学術会議　アジアむかしの本のものがたり　富山展覧会図録解説 ― 同じ本なのに、はなしがちがう！絵もちがう！ ―』(2002)
磯部彰編『国宝「史記」から漱石原稿まで ― 東北大学附属図書館の名品 ―』(2003)
磯部彰編『東アジアのむかしの本のものがたり　シンポジウム　東アジアの出版と地域文化』(2006)

・『ナオ・デ・ラ・チーナ Nao de la China』
第 1 号：2000 年 10 月 10 日発行
第 2 号：2002 年 2 月 22 日発行
第 3 号：2002 年 3 月 25 日発行
第 4 号：2003 年 4 月 5 日発行
第 5 号：2004 年 1 月 31 日発行
第 6 号：2004 年 8 月 15 日発行
第 7 号：2004 年 12 月 25 日発行
第 8 号：2005 年 1 月 15 日発行
第 9 号：2005 年 1 月 30 日発行
第 10 号：2009 年 4 月 30 日発行
第 11 号：2011 年 3 月 10 日発行

・その他
斎藤秀一・高倉浩樹編『デジタル写真と人類学　東北アジア研究センター写真ワークショップの記録　2008-2009』(2009)

・東北アジア学術交流懇話会ニューズレター「うしとら」
第 57 号　2013 年 6 月 25 日発行
モンゴルから東北アジアをみる　岡洋樹
モンゴル社会における仏教の歴史的影響について　ライハンスレン・アルタンザヤ
モンゴル地質調査こぼれ話　石渡明

第 58 号　2013 年 9 月 25 日発行
19 世紀の北前船と経済交流　荒武　賢一朗
平成 25 年度　東北アジア学術交流懇話会　総会・定期公開講演会報告　文責：金　賢貞

講演会「すぐそこのロシア　隣人の今」 文責：巽由樹子
温泉に残る古文書　高橋陽一

第 59 号　2013 年 12 月 25 日発行
中国 ― 北朝鮮国境と里山　千葉聡
「危機に瀕する太平洋クロマグロ」「クロマグロ激減」 石井敦
身近な活火山、蔵王　後藤章夫

第 60 号　2014 年 3 月 20 日発行
気候変動に関わる文理融合研究の経験　高倉浩樹
講演会：世界遺産からのメッセージ ― 平泉・石見銀山の歴史力 ―　荒武賢一朗
敗者の明治維新　友田昌宏

⑻ 2013 年度に実施された公開講演、共同研究会等

2013 年 5 月 24 日

東北アジア学術交流懇話会 定期公開講演会
「すぐそこのロシア “ 隣人の今 ” Neighboring Russia」

日時：2013 年 5 月 24 日（金）
◆講演会　15：00 ～ 17：00
◆総　会　17：10 ～ 17：40
会場：東北大学 東京分室
講演「ロシアの異質性と世界」
　講師：横手慎二氏（慶応義塾大学）
「変容する北東アジアのエネルギーフロー」
　講師：本村眞澄氏（石油天然ガス・金属鉱物資源機構）

2013 年 6 月 1 日

東北アジア研究センター共同研究
「近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究」平成 25 年度第 1 回研究会

日時：平成 25 年 6 月 1 日（土）　13:00 ～ 17:30
会場：東北大学川内南キャンパス・文学部文学研究科棟 3 階・中会議室
内容
1.　講演

ライハンスレン・アルタンザヤ氏（モンゴル国立教育大学）「Богд хаант Монгол Улсын Ноён хутагтын шавь хошуу（ボグド・ハーン制モンゴル国のノヤン・ホトクトのシャビ旗）」

2. 研究発表

⑴ 中村篤志氏（山形大学人文学部）

「モンゴル王公の年班・行走－光緒 9 年乾清門行走日記の分析から―」

⑵ 佐藤憲行氏（東北大学東北アジア研究センター）

「清代モンゴル・ハルハにおける耕作地について」

⑶ ブレンソド氏（東北大学大学院環境科学研究科）

「清代内モンゴル・ハラチン地域のおけるタブナンとソムの関係について」

3. 活動報告

岡洋樹（東北大学東北アジア研究センター）

「国際シンポジウム『清朝とモンゴル人』開催報告」

2013 年 6 月 29 日

公開講演会「よみがえる村田の歴史～江戸時代からのメッセージ～」

日時：2013 年 6 月 29 日（土）13 時 30 分～ 16 時 30 分

会場：道の駅「村田」歴史と蔵のふれあいの里

講演：「村田町、生い立ちの頃―山田家文書の概観から―」

佐藤大介（東北大学災害科学国際研究所）

「山田家蔵書の世界―地域歴史資料としての価値―」

小関悠一郎（千葉大学教育学部）

主催：東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門、東北大学災害科学国際研究所、NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク、村田町教育委員会

2013 年 6 月 20 日

東北アジア研究センター共同研究

「東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用」第 1 回月例研究会

話題提供者：川島秀一（東北大学）

発表題目：「津波碑・津波石再考」

日時：6 月 20 日（木）18：30 ～ 20：00

会場：仙台市戦災復興記念館 4 階第 3 会議室

2013 年 7 月 18 日

地球研シベリアプロジェクト＋東北アジア共同研究合同企画

北極圏における気候変動と洪水災害に関わるワークショップ開催

日時：2013/7/18　午後 14 時から 17 時半

場所：東北アジア研究センターさくら棟一階セミナー室

趣旨：レナ川の洪水に関わる学際的な研究成果を中心に、現在まで理解可能な北極圏における陸水域環境およびその地域社会への影響について知見を検討する。とりわけ気候変動とレナ川洪水の関係､従来のアイスジャム洪水に加えて、その後に発生する洪水と気象条件との関係、洪水被害の実態についての知見を総合化する。

朴昊澤「積雪・融雪の変化が河川流出に及ぼす影響」

吉川泰弘「レナ川アイスジャム現象の解明に向けた研究の方向性と検討手法」

渡邉学「極域洪水の監視と起源解明のための手法開発(2)」

高倉浩樹「レナ川春洪水の影響と現地地域社会の「被災」の文脈」

各自 20 分報告＋ 15 分質疑

檜山哲哉　コメント

2013 年 9 月 5 日

東北アジア研究センター共同研究

「東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用」第 2 回研究会

話題提供者：小谷竜介（東北歴史博物館）

発表題目：雄勝法印神楽の震災前と震災後―民俗芸能の再開過程から考える―

日時：9 月 5 日（木）18：00 〜 20：00

会場：エル・パーク仙台（三越となり 141 ビル 5 階）セミナー室

2013 年 9 月 25 日

日露ワークショップ

「日本文化を教える：ロシアと日本の日本語教育の現場から」

日時：2013 年 9 月 25 日（水）13:00 〜 17:00

場所：東北大学さくらホール 2 階会議室

主催：東北大学ロシア交流推進室

共催：東北大学大学院文学研究科・高等教育開発推進センター・東北アジア研究センター、シベリア日本語教育協会、ノボシビルスク国立大学

趣旨：日本語教育は、異文化としての日本理解を実現する上で不可欠のプロセ

スである。しかし言葉の教育は、文化の翻訳という困難なプロセスでもある。ロシアは、世界でも日本文化・日本語への関心が高い国の一つであり、このワークショップでは、ロシアと日本の日本語教育の専門家の討論を通じて、日本語教育の課題・方法について議論を行う。

【アジェンダ】

オープニングセッション（13:00-13:10）

開会あいさつ：木島明博ロシア交流推進室長（13:00-13:05）

趣旨説明：岡洋樹東北アジア研究センター長（13:05-13:10）

第一セッション「ロシアの現場から」(13:10-14:30)

報告１：プーリク・イリーナ氏（シベリア日本語教育協会会長、ノボシビルスク市立「シベリア・北海道」文化センター副館長)「NT と NNT の協同：シベリア日本語教育協会の場合」(13:10-13:30)

報告２:フロロワ･エフゲニヤ氏 (ノボシビルスク国立大学人文学部准教授)「シベリアの大学における日本語教育:U 字曲線をうまく乗り越える」(13:30-13:50)

報告３：宿利由希子氏（ノボシビルスク国立大学人文学部日本語教師)「シベリアにおける役割語と発話キャラクタ」(13:50-14:10)

報告４：ビワキナ・マリア氏（ノボシビルスク国立大学卒、東北大学ロシア代表事務所職員)「シベリアにおける日本語教育～学習者の立場から」(14:10-14:30)

第二セッション「日本の現場から」(14:50-16:10)

報告５:才田いずみ氏 (東北大学大学院文学研究科教授)「学習環境と日本文化:日本語学習リソース再考」(14:50-15:10)

報告６：佐藤勢紀子氏（東北大学高等教育開発推進センター教授)「東北大学における日本語・日本文化教育―「国際共修ゼミ」を中心に―」(15:10-15:30)

報告７：押谷祐子氏（財団法人東北多文化アカデミー代表、東北大学非常勤講師)「産学連携短期研修における日本語・日本事情プログラム」(15:30-15:50)

報告８：大泉貴広氏（宮城県国際化協会企画事業課)「宮城県国際化協会における地域日本語教育推進の取り組み」(15:50-16:10)

討論「日本語･日本文化教育を通じたロシアと日本の教育･文化交流の可能性」(16:10-16:55)

ファシリテーター：岡洋樹氏（東北大学東北アジア研究センター長）

閉会の辞（16:55-17:00）

2013 年 9 月 16 日～ 20 日

「古文書ワークショップ（Heidelberg-Tohoku Manuscript Workshop）」

東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門は、9 月 16 ～ 20 日にドイツ・ハイデルベルク大学で「古文書ワークショップ（Heidelberg-Tohoku Manuscript Workshop）」を開催します。

◇ Heidelberg-Tohoku Manuscript Workshop

Reading Late Edo Period Media and Society: Kawaraban from the Collection of Tohoku University and Handwritten Manuscripts

September 16th – 20th, 2013

Ruprecht-Karls-Universität Heidelberg / Heidelberg University

136　Akademiestr. 4-8　D-69117 Heidelberg

ORGANISERS

Japanology Department, Heidelberg University

Department of Uehiro Historical Materials Research Center for Northeast Asia Studies, Tohoku University

東北大学東北アジア研究センター 上廣歴史資料学研究部門

2013 年 10 月 12 日

東北大学片平まつり 2013　東北アジア研究センター・IODP 共催講演会

「地球深部探査船「ちきゅう」が解き明かす東北沖地震の謎」

日時：2013 年 10 月 12 日（土）14 時～ 15 時 30 分

会場：東北大学 片平キャンパス さくらホール（2 階）

講演：「地球深部探査船「ちきゅう」が解き明かす東北沖地震の謎」

講師：斎藤 実篤（海洋研究開発機構地球内部ダイナミクス領域）

東北地方太平洋沖地震を引き起こしたプレート境界断層。地球深部探査船「ちきゅう」によって昨年設置された観測装置が、観測データとともにこの春無事回収されました。この講演会では、観測データの解析によって明らかになりつつある東北地方太平洋沖地震発生の“現場”をお伝えします。

主催：東北大学東北アジア研究センター

共催：「日本地球掘削科学コンソーシアム IODP（統合国際深海掘削計画）普及キャンペーン」

2013 年 10 月 6 日

地域連携事業「講座：地域の歴史を学ぶ◎鬼首」

日時：2013 年 10 月 6 日（日曜）13 時 30 分～ 16 時 00 分

会場：曹洞宗 洞雲寺 本堂（宮城県大崎市鳴子温泉鬼首字百目木 49）

開会挨拶:平川新（東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門・教授（兼務）、東北大学災害科学国際研究所長）

講演⑴：永井康雄（山形大学地域教育文化学部・教授）

「大崎地区の歴史的建築」

⑵：荒武賢一朗（東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門・准教授）

「江戸時代の鬼首を明らかにする―地域の古文書が伝える歴史―」

閉会挨拶：菊地優子（岩出山古文書を読む会・会長）

主催　東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門

岩出山古文書を読む会

後援　大崎市教育委員会　大崎市鳴子温泉鬼首地区公民館　大崎タイムス

2013 年 10 月 26 日

伊達市噴火湾文化研究所・東北大学東北アジア研究センター

第５回学術交流連携講演会

「地域を見つめる多様な視点「清代モンゴルの世界」と「有珠山噴火の活動予測」

北海道の伊達市噴火湾文化研究所と東北大学東北アジア研究センターとは、学術交流協定を締結して以来、連携講演会を相互に実施しています。

今回は伊達市での開催となります。

日時：2013 年 10 月 26 日（土）14：30 ～ 17：00（開場 14：00）

会場：だて歴史の杜カルチャーセンターあけぼの視聴覚室

主催／伊達市噴火湾文化研究所、東北大学東北アジア研究センター

共催／かけはしの会

講演：「東北アジアの中の遊牧民―清代モンゴル人の日常世界」

講師：岡 洋樹（東北大学東北アジア研究センター長）

「放熱率測定に基づいた有珠 2000 年噴火の活動推移の長期予測」

講師：後藤 章夫（東北大学東北アジア研究センター）

2013 年 11 月 2 日

宮城県被災文化財調査成果公開事業民俗芸能のチカラ

～調査成果報告会 in 山元町～

日時：11 月 2 日（土）10：00 ～ 11：30
会場：山元町中央公民館 2 階　大ホール
被災民俗調査事業の目的と経過　滝澤克彦（東北大学）
＜地区＞の祭りの変遷～八重垣神社お天王さんまつりの調査から～　稲澤努（東北大学）
中浜神楽の被災と復興のかたち～解決可能な課題を見い出すことの意味～　高倉浩樹（東北大学）
外部からの支援と祭りの再開～七ヶ浜町花渕浜の事例から～　兼城糸絵（鹿児島大学）
＜被災者のきずな＞を乗り越える民俗文化の新たな力～東松島町大曲浜の事例から～　岡田浩樹（神戸大学）
主催　東北大学東北アジア研究センター共同研究「東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用」
協力　山元町無形民俗文化財復興協議会
神楽や甚句など、永年各地域で受け継がれてきた民俗芸能や各地域に古くから伝わる祭礼行事は、東日本大震災によって甚大な被害を受けました。山元町でも８つの民俗芸能・民俗文化財のうち５つが大きな被害を受けました。しかしながら､その多くは保存団体や地域の方々の努力によって復活するまでに至り、その復活した姿は人々の心を励まし、勇気づけ、地域社会の復興に大きな力を発揮しました。
今回の報告会では、震災後、民俗芸能や祭礼行事がどのような過程で復活し、どのような形で地域社会と関わったのかについて報告します。また、山元町の民俗芸能・民俗文化財の調査報告と県内の他地域の現状との比較を通して、これからとその可能性について考えていきます。

2013 年 11 月 3 日

「出張成果報告会 in 気仙沼」開催のお知らせ

日時：11 月 3 日（日）午後 13：00 ～
会場：気仙沼市中央公民館会議室（旧河北ビル 3 階）
調査事業説明 被災民俗調査事業の目的と経過　滝澤克彦（東北大学）
事例報告１　震災後の民俗行事の意味を考える―南三陸町戸倉波伝谷の春祈祷の事例から―　政岡伸洋（東北学院大学）
事例報告２　日々の暮らしと祭りをつなぐもの―被災後の石巻市牡鹿半島の集落間の比較より見えてきたこと　山口未花子（北九州市立大学）
事例報告３　震災後における民俗文化の新たな力―被災者の「きずな」や「被

災地」を越えて　岡田浩樹（神戸大学）

情報交換　司会　小谷竜介（東北歴史博物館）

コメンテーター　川島秀一（東北大学）

主催　東北大学東北アジア研究センター共同研究「東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用」

共催　気仙沼市教育委員会

東日本大震災後、東北大学東北アジア研究センターでは、宮城県地域文化遺産復興プロジェクトの委託を受けて、宮城県被災無形民俗文化財調査事業を実施してきました。この報告会では、調査の成果を報告するとともに、その成果として見えてきた、震災後の地域社会において祭礼行事や民俗芸能の継続が、地域社会の再生に大きな力となることを報告いたします。

2013 年 10 月 23 日、30 日、11 月 6 日、13 日

みやぎ県民大学（大学開放講座）「東北アジアの人間と環境」

対　　象：一般市民・高校生・大学生

会　　場：東北大学片平キャンパス　片平さくらホール 2 階会議室

募集人数：50 名（応募者多数の場合、抽選）

開講日時：平成 25 年 10 月 23 日（水）、30 日（水）、11 月 6 日（水）、13 日（水）
いずれも 18:00-20:00

講座内容

「東北アジアの人間と環境」（趣味・教養コース　No.20）

日本人は、歴史上東北アジアと深く関わってきました。中国の文化が日本に多大な影響を与えたことはよく知られていますが、それは、中国で出版された書籍を通じてでしたが、開国後の日本人は、実際に中国を訪れ、その多様な文化に接しました。日本は常に東北アジアに近くあったのです。日本と東北アジアの近さは、自然環境の面からもいうことができます。日本列島と東北アジアは、同じ地質の構造を共有します。私達は、物言わぬ大地の構造からも、その近さを実感するでしょう。そしてまた現在、日本の技術は、東北アジアと日本をつなぐ大きな可能性を秘めています。

このように東北アジアが、わが国にとって「一衣帯水」の地域であるにもかかわらず、その近さがなかなか実感されにくいのも確かです。この講義では、東北アジアと日本の「近さ」をキーワードとして、歴史・文化・自然・技術という四つの側面から、東北アジアと日本のつながりを考えてみたいと思います。

10 月 23 日（水）18:00-20:00
岡洋樹講師（東北大学東北アジア研究センター教授）
「歴史の中の東北アジアと日本」
20 世紀、日本は東北アジアと深い関わりをもちました。日本人たちは、東北アジアを「大陸」とか「満蒙」などと呼びましたが、「満蒙」とは「満洲」（マンジュ）と「蒙古」（モンゴル）のことです。20 世紀初頭に日本人が出会ったマンジュとモンゴルとは何だったのでしょうか。この講義では、この問題を 17 世紀から 20 世紀初めまで、三百年にわたって中国に君臨した清朝の歴史にさかのぼりつつ考えてみます。

10 月 30 日（水）18:00-20:00
佐藤源之講師（東北大学東北アジア研究センター教授）
「電波で見る東北アジアの自然と環境」
この講義では、衛星や、航空機を利用する広域リモートセンシングから地中レーダーを利用する精密な地下計測まで、電波を利用した環境、地下計測の手法と、これを東北アジアや日本に適用した実例を紹介します。特に東日本大震災の被災地が宇宙からどのように観測されたのか、また被災地での住宅高台移転を推進するための遺跡調査や被災者捜索活動等、最近の話題についてもお話します。

11 月 6 日（水）18:00-20:00
磯部彰講師（東北大学東北アジア研究センター教授）
「戦国大名家の書籍蒐集と東北アジア」
戦国末期の大名家が江戸幕府下の外様大名として生き残るために、東北アジア、とりわけ明や朝鮮王朝の出版物を購入し、学僧に師事して学問を重視したことについて、伊達家の蔵書を中心にして解説します。そして、江戸中期と後期とは書籍の蒐集の性格が違うこと、大名家の家門維持の上で、宋元版や朝鮮本が重要であったことを紹介します。

11 月 13 日（水）18:00-20:00
石渡明講師（東北大学東北アジア研究センター教授）
「東北アジア　大地のつながり」
日本と大陸の地質のつながりについて解説します。日本列島の地質と地震・火山、大陸移動説と日本海の形成、大陸の地質と日本へのつながり、そして資源・環境・災害など我々が直面する問題との関連について述べます。講義の内

容については、石渡　明・磯崎行雄著「東北アジア　大地のつながり」（東北アジア学術読本）東北大学出版会（2011 年）を参照してください。

2013 年 11 月 18 日

共同研究「典籍文化遺産の研究」公開研究会

日時：2013 年 11 月 18 日 (月) 14:00 ～ 16:00 (13:40 開場)

会場：東北大学東北アジア研究センター 3 階会議室 (301 室)

＜発表＞

「新见巴黎藏明刊《新刻全像批评西游记》考」（中国語）

北京大学中文系 教授 潘建国（東北大学東北アジア研究センター 客員教授）

＜紹介＞

「東アジア出版文化研究資料画像データベース」公開開始について

「出版文化資料データベース研究ユニット」代表 磯部彰

主催：東北大学東北アジア研究センタープロジェクト研究ユニット

「出版文化資料データベース研究ユニット」

・共同研究「典籍文化遺産の研究」

共催：科学研究費補助金 研究成果公開促進費（データベース）

「東アジア出版文化研究資料画像データベース」

（JSPS KAKENHI Grant Number 257001）

2013 年 12 月 1 日

地域連携事業「講座：地域の歴史を学ぶ◎岩出山 II　戦乱と地域史」

東北大学東北アジア研究センターと岩出山古文書を読む会が連携して、地域の歴史について学ぶ講座を開催します。岩出山では昨年に続き 2 回目となりますが、今回はテーマを「戦乱と地域史」に設定しました。佐藤健治先生には慶長 5 年（1600 年）に起こった慶長出羽合戦から、山形（最上）と宮城（伊達）の関係についてお話しをいただきます。また、明治維新史を専攻される友田昌宏先生からは戊辰戦争と岩出山伊達家の動向に注目した講演がおこなわれます。江戸時代の最初と最後に起こる戦乱をもとに地域の歴史を学ぶ企画です。

日時：2013（平成 25）年 12 月 1 日（日）13:30 ～ 16:00

講演⑴　佐藤 健治（東北芸術工科大学芸術学部歴史遺産学科准教授）

「慶長出羽合戦と伊達政宗」

講演⑵　友田 昌宏（東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門助教）

「戊辰戦争とその影響―岩出山伊達家の場合―」

会 場：岩出山地域福祉センター　ホール
主催：東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門
　　岩出山古文書を読む会
共催：大崎市岩出山公民館

2013 年 12 月 2 日

公開研究報告
「被災した無形民俗文化財と地域復興における研究の役割
ー東日本大震災に伴う宮城県委託調査事業の報告」の高知県開催について

共同研究「東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用」の主催で、公開研究報告「被災した無形民俗文化財と地域復興における研究の役割－東日本大震災に伴う宮城県委託調査事業の報告」を高知市内で開催いたします。

日時：2013 年 12 月 2 日（月）13:00 ～ 17:00
場所：高知県立大学永国寺キャンパス 2 階会議室
プログラム
趣旨説明
報告１　被災した民俗芸能・祭礼復興の多様性―事例の比較を通して―
　　…滝澤克彦（東北大学東北アジア研究センター教育研究支援者）
報告２　東日本大震災で被災した民俗芸能用具の新調の意味
　　…小谷竜介（東北歴史博物館学芸員）
報告３　東日本大震災復興過程における民俗文化財調査体制構築とその社会的意義…高倉浩樹（東北大学東北アジア研究センター教授）
コメント　梅野光興（高知県立歴史民俗資料館学芸員）
総合討論
共催…こうちミュージアムネットワーク、高知県立大学文化学部
協賛…高知人文社会科学会

2013 年 12 月 3 日～ 26 日

【利府町郷土資料館ミニ企画展　利府の古文書が伝える江戸時代―小野家文書の紹介】

小野家は宮城郡加瀬村（現利府町加瀬）に本拠を置いた塩竈神社の有力な神官でした。今回のミニ企画展は荒武賢一朗（東北アジア研究センター）が展示を監修し、利府町郷土資料館が所蔵する 1000 点以上に及ぶ小野家文書から、江戸時代の地域資料や書籍を紹介します。

開催期間：平成 25（2013）年 12 月 3 日（火曜）～ 12 月 26 日（木曜）

＊開館時間：午前 9 時～午後 5 時

＊休館日：12 月 16 日（月曜）

会場：利府町郷土資料館（利府町生涯学習センター 2 階）

主催：利府町教育委員会　展示協力：東北大学東北アジア研究センター

監修：荒武 賢一朗（東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門准教授）

2013 年 12 月 7 日

東北大学東北アジア研究センター公開講演会

世界遺産からのメッセージ　― 平泉・石見銀山の歴史力

日時：2013 年 12 月 7 日（土）14:30 ～ 17:00（開場 14:00）

会場：仙台市戦災復興記念館 5 階会議室

講師：入間田宣夫（東北大学名誉教授、一関市博物館館長）

仲野義文（島根・石見銀山資料館館長））

今回の東北大学東北アジア研究センター公開講演会は「世界遺産」をテーマとして開催いたします。

世界遺産にはメディアをはじめ多くの注目が集まり、今年は富士山が大きな話題となりました。

しかし、私たちはその重要な意味を十分に理解しているでしょうか。登録された遺跡や周辺地域がどのような歴史を歩み、伝統を育んできたのか。今回の企画では、講師の先生方が進めておられる研究から「世界遺産とは何か」を考えてみたいと思います。

仲野先生は「石見銀山遺跡とその文化的景観」(2007 年)、入間田先生は「平泉―仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群―」(2011 年）の世界文化遺産の登録に尽力されました。世界遺産を肌で知り、第一線で活躍される両先生から多くを学びましょう。

主催：東北大学東北アジア研究センター

共催：東北アジア学術交流懇話会

2013 年 12 月 26 日

20 世紀ロシア・中国史再考研究ユニット 2013 年度第 1 回研究会

日時：2013 年 12 月 26 日（木）14:00 ～ 17:45

会場：東北アジア研究センター 301 号室

プログラム：

上野稔弘（東北大学東北アジア研究センター）
　第二次大戦終結前後の新疆と中ソ関係
菅原純（東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所）
「新疆社会歴史調査」における宗教的寄進財（ワクフ）
安藤潤一郎（東洋大学アジア文化研究所）
　西北「回民軍閥」と中国国家――国民革命期以降の「寧馬」の事例から
寺山恭輔（東北大学東北アジア研究センター）
　ソ連の対新疆政策

2014 年 1 月 11 日

研究会「日本の北サハリン油田開発を振り返る」
共同研究「20 世紀前半のサハリンの歴史的記憶」2013 年度第 1 回研究会

日時：2014 年 1 月 11 日 (土) 14:00 - 17:00
会場：仙台市戦災復興記念館 5F 第 3 和室（会議室）
プログラム：平林憲次（元サハリン石油開発協力）
　戦前から現在までの北樺太の石油開発（仮）
土屋範芳（東北大学)
　石油会社の資料に見る北樺太石油開発史（仮）
石渡明（東北大学）
　地質学の学会誌に表れたサハリン研究史とその問題点（仮）
共催：科研費基盤研究（A)「サハリン（樺太）島における戦争と境界変動の現代史」(代表：原暉之)、東北アジア研究センター
研究代表者：兎内勇津流（とない　ゆづる）　北海道大学スラブ研究センター
東北アジア研究センター世話人：石渡　明

2014 年 1 月 15 日

高麗大学校日本研究センター・東北大学東北アジア研究センター
学術交流研究会 開催のお知らせ

東北大学東北アジア研究センターは、韓国・高麗大学校日本研究センターと部局間学術交流協定を締結しています。このたび、学術交流の一環として研究会を開催することとなりました。
【高麗大学校日本研究センター・東北大学東北アジア研究センター学術交流研究会】
日時：2014 年 1 月 15 日 (水) 14:00 ～ 15:00（予定）
会場：東北大学東北アジア研究センター 3 階 301 会議室

＜講演＞

「東日本大震災後日本経済と北東アジア経済協力の進路 ―TPP 政策を中心に―」

韓国・高麗大学校日本研究センター　金暎根 先生

主催：東北大学東北アジア研究センタープロジェクト研究ユニット「出版文化資料データベース研究ユニット」・共同研究「典籍文化遺産の研究」東北大学大学院文学研究科比較文化史学（アジア）

2014 年 2 月 9 日

上廣歴史文化フォーラム「旅　人はなぜ行くのか―東北を見つめた人々―」

日時：2014 年 2 月 9 日（日）13 時 30 分～ 16 時 00 分

会場：仙台市博物館ホール

講演：「世界・日本・奥羽をかけめぐった仙台藩士・玉蟲左太夫」

栗原伸一郎（仙台市博物館市史編さん室）

「江戸時代の東北旅行―紀行文・道中日記にみえる松島―」

高橋陽一（東北大学東北アジア研究センター）

主催：公益財団法人上廣倫理財団

共催：東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門、仙台市博物館

後援：文化庁

2014 年 2 月 15 日

東北大学東北アジア研究センターシンポジウム

「ヴェールの向こう側から―北朝鮮民衆の文化人類学的分析」

日時：2014 年 2 月 15 日（土曜）13:30 ～ 17:30

場所：東北大学片平さくらホール２階

発表者：

伊藤亜人（東京大学名誉教授、文化人類学）

李仁子（東北大学教育学研究科准教授、文化人類学）

安鍾秀（フリーライター、人口動態学）

コメンテーター：

聶莉莉（東京女子大学現代教養学部教授、文化人類学）

三村光弘（環日本海経済研究所調査研究部長・主任研究員、経済学・法学）

司会：瀬川昌久（東北大学東北アジア研究センター教授、文化人類学）

シンポジウムの趣旨　北朝鮮について一般に知られていることと言えば、しばしばメディアに取り上げられる軍事外交的な動きや為政者トップの動静、あるいは食糧危機をはじめとする国の困窮ぶりであろう。いっぽう、北朝鮮で日々

暮らしている市井の人々については、情報が少ないせいもあってか、関心さえ持たれていないようだ。このシンポジウムでは、脱北者への聞き取りやその手記などをもとに、農場、鉱山、副業といったモチーフを中心にして、北朝鮮民衆の日常生活の実態に迫っていく。ヴェールから垣間見える民衆たちの懸命に生きる姿を通して、彼らを取り巻く社会・経済的環境や人権的状況について、可能な限り客観的な理解を目指す。

2014 年 3 月 2 日

東北アジア研究センター公募型共同研究

「モンゴルにおけるキリスト教宣教と聖書翻訳の過去と現在」

公開シンポジウム　聖書翻訳を通して見るモンゴル世界

日程：3 月 2 日（日）14:00 〜 17:00

場所：東北大学東北アジア研究センター 4 階大会議室

プログラム：

1　研究史概観と趣旨説明　芝山豊

2　研究発表

・20 世紀におけるスウェーデン宣教団と聖書翻訳
バイカル（桜美林大学）

・聖書翻訳における神観念をめぐる諸問題
滝澤克彦（東北大学）

・キリスト教と民族的アイデンティティー
芝山豊（清泉女学院大学）

3　コメント　岡洋樹

4　総合討論

2014 年 3 月 8 日

東北アジア研究センター共同研究

「東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究」

シンポジウム「越境する東北アジア：共生のダイナミズム」

“Cross bordering Northeast Asia : the Dynamism of Cohesive Borderlands-”

日時：平成 26 年 3 月 8 日 (土)13:00-18:00

場所：東北大学東京分室

●第 1 セッション　中ロ国境地域交流の過去と現在

Session I. The Past and Present of Cross-border Interface between China

and Russia
座長：堀江典生 (富山大学)
Chair: Norio Horie (Prof., Center for Far Eastern Studies, Toyama University)
報告 1：
セルゲイ・トカチェフ（極東連邦大学ポリテクニク博物館長・准教授）
Sergey Tkachev (Associate Prof., Far Eastern Federal University)
"The origins of Russian-Chinese competition in the development of the Ussuri region (late XIX- early XX century)”
「ウスリー川流域開発における露中競合の起源（19 世紀末～ 20 世紀初頭）」
報告 2：
藤原克美（大阪大学大学院言語文化研究科准教授）
Katsumi Fujiwara (Associate Prof., Graduate School of Language and Culture, Osaka University)
" Russian Business in Harbin: from the History of the Churin Company"
「ハルビンにおけるロシア・ビジネス：チュリン商会の歴史から」
報告 3：
馬紅梅（松山大学経済学部教授）
Hongmei Ma (Prof., Faculty of Economics, Matsuyama University)
“Transnational interaction in the Russo-Chinese Borderlands: the present situation and future prospects
「露中国境地域における越境交流：現状と展望」

討論者　Discussants :
・イゴリ・サヴェリエフ（名古屋大学大学院国際開発研究科准教授）
Igor Saveliev (Associate Prof., Graduate School of International Development, Nagoya University)
・生田美智子（大阪大学名誉教授）
Michiko Ikuta (Prof. Emiritus of Osaka University)
・松野周治（立命館大学経済学部教授）
Shuji Matsuno (Prof. at College of Economics, Ritsumeikan University)

●第 2 セッション　変容するモンゴル
Session II: Mongolia in Transition
座長：今村弘子（富山大学）

Chair: Hiroko Imamura (Prof., Center for Far Eastern Studies, Toyama University)

報告 1：
白拉都格其（内蒙古大学蒙古学学院歴史学部教授）
Bailadugeqi (Professor Emiritus of Inner Mongolian University)
「清末移民潮与哲里木盟政治中心的変迁」（清末の移民とジレム盟の政治的中心の変遷）
“The Surge of Immigration in the Late Qing and The Transition of Political Center of the Jirem League”
報告 2：
フフバートル（昭和女子大学教授）
Huhbator (Prof., Showa Women’s University)
「非漢字圏のモンゴル語の近代語彙受容」
“The Introduction of Modern Vocabulary into Mongolian as non-Chinese Literal Zone”
報告 3：
麻田雅文（東北大学東北アジア研究センター教育研究支援者）
Masafumi Asada (Researcher, CNEAS. TU)
「辛亥革命前後のロシアの「満蒙」政策―錦愛鉄道とモンゴル縦断鉄道の計画を中心に―」
“Russian Policy toward Manchuria and Mongolia before and after the Xinhai Revolution: Focusing on the Jinzhou-Aigun and the Trans-Mongolian Railways”

討論者　Discussants :
・柳澤明（早稲田大学文化構想学部教授）
Akira Yanagisawa (Prof., School of Media, Culture and Society, Waseda University)
・井上治（島根県立大学総合政策学部教授）
Osamu Inoue (Prof., Faculty of Policy Studies, The University of Shimane)
・岡洋樹（東北大学東北アジア研究センター教授）
Hiroki Oka (Prof., Center for Northeast Asian Studies, Tohoku University)

共催：富山大学極東地域研究センター

Center for Far Eastern Studies, University of Toyama
島根県立大学北東アジア地域研究センター
Institute for Northeast Asian Research, University of Shimane

2014 年 3 月 18 日

東北アジア研究センター公募型共同研究

「社会的行為としての〈食〉をめぐる文化人類学的研究」ワークショップ

日時：2014 年 3 月 18 日（火）13:00 ～ 17:30

場所：東北大学東北アジア研究センター（川北合同棟）3 階 301 会議室

プログラム：

１趣旨説明　櫻田涼子（育英短期大学）

２研究発表

・吉本康子（国立民族学博物館）
「食行動にみる宗教カテゴリーの流動性:ベトナム､チャムの事例を通して」

・神谷智昭（琉球大学）
「韓国の犬肉食について：食と人間関係に関する一考察」

・伊藤まり子（国立民族学博物館）
「関係をつむぎ､再編するための菜食:ベトナム･ハノイの宗教コミュニティに集う女性信者たちの事例から」

３コメント　河合利光（園田学園女子大学）

４総合討論

2014 年 3 月 11 日

東北アジア研究センター共同研究

「近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究」

平成 25 年度第２回研究会

日時：平成 26 年 3 月 11 日（火）　14:00 ～ 17:30

会場：東北大学川内北キャンパス

川北合同研究棟３階会議室（301）

内容

講演：白拉都格其（内蒙古大学蒙古学学院歴史学部）

「辛亥革命与蒙古民族問題的転変（辛亥革命とモンゴル民族問題の転変)」

報告１：渡辺健哉 (東北大学大学院文学研究科)

「遼・金・元代の複都制」

報告２：ナツァグドルジ・ハタンバータル（モンゴル国立科学アカデミー歴史

研究所）

“Их Хүрээ байгуулагдсан түүхийн асуудалд（イヘ・フレーの創設について）”

報告３：堀内香里 (東北大学大学院環境科学研究科）

「清代モンゴルにおける社会関係調整様態に関する一考察：清代後期のハルハ・セツェン汗部中前旗内部における牧地変更事案を通して」

⑹ センターが作成し公開中または公開予定のデータベース

データベース名	公開方法
＊東北大学ノア画像データベース ・シベリア画像データベース ・モンゴル画像データベース ・日本画像データベース ・東アジア出版文化研究資料画像データベース ・みやしんぶんデータベース	東北大学東北アジア研究センター HP （http://asiadb.cneas.tohoku.ac.jp/）

教員の研究活動

(2013)

寺山　恭輔　　TERAYAMA Kyosuke　　准教授

生年月日 ／ 1963 年 07 月 18 日

東北アジア研究センター基礎研究部門ロシア・シベリア研究分野

出身学校

京都大学・文学部・現代史学科 1987 年卒業

出身大学院

京都大学・文学研究科・西洋史（現代史学）博士課程 1993 年単位取得満期退学

取得学位

博士（文学）京都大学 1996 年

略歴

1992 年〜 1995 年　サンクトペテルブルグ大学歴史学部　研究員
1995 年〜 1996 年　九州大学大学院比較社会文化研究科　助手
1996 年〜 2007 年　東北大学東北アジア研究センター　助教授
1999 年〜 1999 年　英国バーミンガム大学ロシア東欧研究センター　客員研究員
2007 年〜 2013 年　東北大学東北アジア研究センター　准教授（職階名変更による）

研究経歴

1992 年〜現在　　スターリン体制下のソ連
2000 年〜 2010 年　18 〜 19 世紀の日本人漂流民と日露関係
2002 年〜 2004 年　ロシアにおける中国学、モンゴル学の歩みと史料収集
2002 年〜 2006 年　ソ連における日本人抑留者問題
2003 年〜現在　　プーチン体制下の新生ロシア
2008 年〜現在　　ソ連における検閲
2009 年〜現在　　ソ連における民族問題

所属学会

ロシア史研究会　1992 年〜現在
西洋史学会　1996 年〜現在

専門分野

ロシア・ソ連史、日露・日ソ関係史、地域研究

研究課題

スターリンの対新疆政策 1931-1949

スターリン時代の動員政策
スターリン時代の対極東政策
1930 年代のソ連
日露・日ソ関係史
ソ連時代の検閲

研究キーワード

スターリン体制、日ソ関係、ソ連政治史、動員、極東

学外の社会活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

宮城大学事業構想学部講演会（講演会 セミナー） 2013 年 2 月

学内活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

ロシア交流推進室委員 2009 年 12 月～ 2013 年 3 月

担当授業科目（2013 年 4 月～ 2013 年 3 月）

（全学教育）
歴史学 2005 年～現在
（大学院文学研究科）
ユーラシア文化史特論 2000 年～現在
ユーラシア文化史研究演習 2000 年～現在

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

基盤研究(B) 1920-1940 年代の中国・ソ連における民族政策の比較研究：課題番号 21401006（分担 2009 年 04 月～ 2014 年 03 月 基盤(B)海外、代表上野稔弘）

著書（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1） Азиатская Россия и сопредельные государства. [Параллель, (2013)8 月] С.Папков, К. Тэраяма ред.

研究論文（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1） Советская политика в Монголии в 1930-е годы, Маньчжурский инцидент и усиление вмешательства СССР. [Азиатская Россия и сопредельные государства, (2013), 138-198] Тэраяма Киосукэ （査読無）
2） Советская политика в отношения Синьцзяня в 1930-е годы и японский фактор. [Азиатская Россия и сопредельные государства, (2013), 222-251] Тэраяма Киосукэ （査読無）

総説・解説記事（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1） 書評：О.Б.Мозохин, Противоборство: спецслужбы СССР и Японии (1918-1945), Москва,

2012. [ロシア史研究 , (93), (2013),83-87] 寺山恭輔 （査読無）

2） 書評 E. A. Rees, Iron Lazar: a political biography of Lazar Kaganovich, London, 2012.. [西洋史研究 , (新輯第 42), (2013), 157-168] 寺山恭輔 （査読有）

3） 書評：Н.И.Дубинина, Дальний Восток Яна Гамарника, Хабаровск, 2011.[東北アジア研究 , (18), (2014), 175-185] 寺山恭輔 （査読無）

4） 書評：富田武『シベリア抑留者たちの戦後　冷戦下の世論と運動　1945-56 年』人文書院、2013 年 . [週刊読書人 , (2014), 4-4] 寺山恭輔 （査読無）

5） スターリンの倍返し。一白系ロシア人の見た新疆 ― 書評：Ю.Понькин, Путь Отца, Сидней,1999.. [セーヴェル , (30), (2014), 181-188] 寺山恭輔 （査読有）

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

プロジェクト研究部門『20 世紀ロシア・中国史再考』プロジェクトユニットが主催した 2013 年 3 月のロシア・ノヴォシビルスクにおけるシンポジウムの論文集が 2013 年 8 月にロシアで刊行され、その中でモンゴル、新疆に関する論文を 1 本ずつ掲載した。内容については、『活動報告 2012』に述べたのでここでは繰り返さない。2013 年度後半は、2014 年度にセンター専書として刊行を予定している『スターリンと新疆：1931-1949』の原稿執筆に専念し、とりあえず 2014 年 4 月初旬期限の原稿提出には間に合った。2014 年度中の出版を目指して修正作業を進めている最中である。

今年度はこの他に、書評を五点発表した。その内容について簡単に紹介することにする。モゾーヒンの著書（1 ＝上記総説・解説記事の番号、以下同じ）は、戦前期のソ連極東地域を舞台に日本に対抗して活動していたソ連の諜報機関、防諜機関の活動を描いたものである。公開情報ばかりでなく、外国人研究者にとってはアクセスがほぼ不可能なロシア大統領アルヒーフ（公文書館）、FSB アルヒーフ等、治安機関の情報も多数利用されている点に特徴がある。ただし史料批判が十分でなく、史料に記載されていることがすべて事実であるような引用のされかたをしており、その点では問題が多いと指摘した。

リーズによる著書（2）は、特に 1930 年代にスターリンの右腕、党のナンバーツーとして活躍したラザーリ・カガノーヴィチの本格的評伝である。スターリン体制研究にとってスターリン本人だけでなく、その体制を支えたスタッフの研究は欠かせないが、この評伝は改めてスターリン体制成立に果たしたカガノーヴィチの役割を明らかにしてくれた。これだけの役割を果たしたナンバーツーでありながら、研究の蓄積が少ないことを痛感させられた。筆者としては現在準備している、スターリン体制の動員態勢に関するモノグラフにおいて、特に 1930 年代後半に交通人民委員として鉄道輸送の整備に尽力したカガノーヴィチの活動に最も関心があった。その点についてはさらなる究明が必要だが、スターリンとの個人的な関係、テロル時代における役割な

ど斬新な視点で参考になった。

ドゥビーニナによる新著『ヤン・ガマルニクの極東』(3) は、1920 年代には極東のトップとしてその開発に貢献したガマルニクについての評伝である。かつて同じ著者によるプリアムール総督三部作を『極東ロシアの形成』（東北アジアアラカルト）として紹介したことがあったが、本書はこれを受け継いでソ連時代の 1920 － 30 年代に極東で活躍した人物に焦点をあてたもので、著者が東北アジア研究センター客員教授として仙台に滞在した時の研究成果をまとめたものである。ガマルニクは 1930 年代以降モスクワに移り、軍のナンバーツーとしてスターリンの体制を支えたが、とりわけソ連極東における国防力増強、近代化に誠実に尽力した人物として好意的に描かれている。この本の紹介もソ連極東を描くモノグラフのための準備作業としての意味を持っていた。

富田の著書（4）はここ数年、第二次大戦後のシベリア抑留問題について研究会を組織し民間、行政を巻き込んで中心的に取り組んできた著者が、ロシア、米国、日本で発掘した新史料をもとに戦後の抑留者帰還運動、抑留問題全般を総括したものである。

シドニーで 1999 年にロシア語で刊行されたパニキンの著書（5）は、中国の新疆への白系ロシア人亡命者の手になるもので、現在出版作業を進めているソ連の新疆政策を執筆する上で鍵となる材料を提供してくれた。パニキンの家族は 1920 年代末の集団化を逃れて新疆に亡命したが、ムスリムの反乱鎮圧のため新疆省当局がその軍事力を頼みにして利用され、その後は弾圧されるなど異国の地で運命に翻弄された白系ロシア人の内情を伝えてくれる。

教育面では、協力講座として大学院文学研究科比較文化史学科に所属する院生 2 名が修士論文を提出し、今春後期博士課程に進学した。

高倉　浩樹　　TAKAKURA Hiroki　　教授

生年月日 ／ 1968 年 07 月 20 日

東北アジア研究センター基礎研究部門ロシア・シベリア研究分野

出身学校

上智大学・文学部・史学科 1992 年卒業

出身大学院

東京都立大学・社会科学研究科修士課程 1994 年修了

東京都立大学・社会科学研究科・社会人類学博士課程 1998 年単位取得満期退学

取得学位

学士（史学）上智大学 1992 年

修士（社会人類学）東京都立大学 1994 年

博士（社会人類学）東京都立大学 1999 年

略歴

1997 年〜 1998 年　日本学術振興会　特別研究員（DC2）

1998 年〜 2000 年　東京都立大学人文学部　助手

2000 年〜 2012 年　東北大学東北アジア研究センター　助教授／准教授

2002 年〜現在　　東北大学文学部　非常勤講師

2002 年〜 2003 年　東北大学大学院文学研究科　非常勤講師

2003 年〜 2012 年　東北大学大学院環境科学研究科（協力講座）　助教授／准教授

2003 年〜 2004 年　ケンブリッジ大学スコット極地研究所　客員研究員

2004 年〜 2008 年　国立民族学博物館先端人類科学研究部　客員助教授／客員准教授

2004 年〜 2006 年　国立民族学博物館先端人類科学研究部　客員助教授

2006 年〜 2008 年　国立民族学博物館　特別客員教員（助教授／准教授）

2009 年〜現在　　北海道立北方民族博物館　研究協力員

2012 年〜 2013 年　東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所　フェロー

2013 年〜現在　　東北大学東北アジア研究センター　教授

2013 年〜現在　　東北大学大学院環境科学研究科（協力講座）　教授

研究経歴

2003 年〜 2006 年　ロシア民族学史と民族誌知識人：ネイティブ人類学概念をめぐって

2006 年〜 2008 年　シベリア先住民のマイノリティ　ビジネスと社会経済分析

2007 年〜 2010 年　シベリア先住民の歴史認識と文化的アイデンティティの位相

2007 年〜 2013 年　地球気候変動と北極圏大河川流域住民の生態適応

2008 年～現在　　民族誌映像の展示実践と地域社会との連携
2010 年～ 2013 年　応用映像人類学と人類学写真史の探求
2011 年～現在　　東日本大震災に関わる災害人類学研究とその応用実践

所属学会

日本文化人類学会、国際極北社会科学学会、日本民俗学会、生態人類学会

学会活動

日本文化人類学会　第 24 期理事　評議員　2010 年～ 2012 年
日本文化人類学会　第 25 期理事　評議員　2012 年～ 2014 年
日本文化人類学会　第 25 期学会誌「文化人類学」編集委員　2012 年～ 2014 年
International Arctic Science Committee　国際北極科学委員会社会人間作業部会日本委員　2013 年～現在

専門分野

文化人類学（含民族学・民俗学)、地域研究

研究課題

シベリアの環境変動と住民の生態適応
人類学調査方法と映像媒体
東日本大震災に関わる被災した無形の民俗文化財に関わる人類学的研究

研究キーワード

シベリア、ロシア、生態人類学、先住民と国家関係論、災害人類学、応用映像人類学

学外の社会活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

「SSH 総合の時間（JST)」に基づく研究訪問受け入れ（小中高との連携）　2013 年 4 月～ 2013 年 4 月
Verlag der Kulturstiftung Sibirien | SEC Publications Member of Editorial Board of Studies in Social and Cultural Anthropology　2011 年 4 月～現在
大同生命地域研究賞選考委員会大同生命地域研究賞推薦委員　2013 年 4 月～現在

学内活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

ロシア交流推進室室員　2009 年 12 月～現在

担当授業科目（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

(学部教育)
文化人類学各論　2002 年～現在
文化人類学各論　2013 年～ 2014 年

文化人類学各論　2013 年～現在
(大学院教育)
文化人類学特論（東北大学文学研究科）　2002 年～現在
地域環境 社会システム学セミナー　2003 年～現在
地域環境 社会システム学修士研修　2003 年～現在
博士インターンシップ研修　2003 年～現在
地域環境 社会システム学研修　2003 年～現在
地域環境 社会システム学博士研修　2003 年～現在
東北アジア歴史人類学　2005 年～現在
文化人類学特論　2010 年～現在
東北アジア社会人類学　2013 年～ 2013 年
宗教学実習　2013 年～現在
文化人類学特論　2013 年～ 2014 年

国際会議　発表・講演（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

Lessons from anthropological projects related to the Great East Japan Earthquake and Tsunami: Reviewing what we did from afar, and some thoughts on social engagement [17th Congress of International Union of Anthropologists and Ethnologists]（2013 年 8 月 5 日～ 2013 年 8 月 10 日，イギリス，Manchester）口頭（一般）

その他研究活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

北極科学サミット週間 2013 への参加（その他）

受賞・その他特記事項（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

科学の泉「シベリアの自然と民族」(1) 極寒極「乾」激しい温度差（出演執筆　新聞　河北新報）2013 年 9 月
科学の泉「シベリアの自然と民族」(2) 2 万年前寒冷に適応した顔（出演執筆　新聞　河北新報）2013 年 9 月
科学の泉「シベリアの自然と民族」(3) 紀元前からトナカイ家畜化（出演執筆　新聞　河北新報）2013 年 9 月
科学の泉「シベリアの自然と民族」(4) 先住民は 45 民族 153 万人（出演執筆　新聞　河北新報）2013 年 9 月
科学の泉「シベリアの自然と民族」(5) 温暖化の影響、国際的関心（出演執筆　新聞　河北新報）2013 年 9 月
科学の泉「シベリアの自然と民族」(6) 漂流民による記録、先住民へ（出演執筆　新聞　河北新報）2013 年 9 月

社会の資源、長期的活用を：宮城県の無形民俗文化財調査（出演執筆　新聞　高知新聞）2013 年 11 月

土曜訪問：記憶の土台、次世代へ、被災の無形民俗文化財を調査　高倉浩樹さん（東北大教授）（出演・執筆　東京新聞・中日新聞・北陵中日新聞）2014 年 3 月

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

基盤研究(B)　2010 年 4 月～ 2014 年 3 月

［ミクロ環境史の復元手法による北極圏における温暖化の先住民社会への影響分析］

(挑戦的）萌芽研究　2013 年 4 月～ 2016 年 3 月

［東日本大震災後の民俗文化にかかわる災害民族誌研究の国際的ネットワーク構築］

研究成果公開促進費「学術図書」 2013 年 4 月～ 2015 年 3 月

［Arctic Pastoralist Sakha: Ethnography of Evolution and Micro-adaptation in Siberia］

著書（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1)　東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査 2012 年度報告集（東北アジア研究センターシリーズ 9 号）.［東北大学東北アジア研究センター,（2013)9 月］高倉浩樹, 滝澤克彦　査読無

2)　無形民俗文化財が被災するということ ― 東日本大震災と宮城県沿岸部地域社会の民俗誌.［新泉社,（2014）1 月］高倉浩樹, 滝澤克彦（編）　査読無

研究論文（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1)　東日本大震災に対する無形民俗文化財調査事業と人類学における関与の意義.［高倉浩樹, 滝澤克彦編「無形民俗文化財が被災するということ」(新泉社), (2014), 290-311］高倉浩樹　査読無

2)　残されたご神体と奉納できぬ神楽：被災した山元町中浜神楽の再開に向けた活動の連鎖.［高倉浩樹, 滝澤克彦編「無形民俗文化財が被災するということ」(新泉社), (2014), 188-198］高倉浩樹　査読無

総説・解説記事（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1)　シベリア レナ川中流域の気候変動と地域社会への影響。［IDE-JETRO アジ研ワールド トレンド,（214),（2013), 17-18］高倉浩樹　招待・査読無

2)　宮城県における民俗文化財現況調査について。［東京文化財研究所無形文化遺産部 311 復興支援　無形文化遺産情報ネットワーク報告書 2013 東日本大震災被災地域における無形文化遺産とその復興,（2014)］高倉浩樹　招待・査読無

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

2013 年度の研究は、大きく二つある。一つは、シベリア人類学の領域における気候変動と地域住民の適応にかかわる研究であり、もう一方は東日本大震災によって被災した無形民俗文化財に対する災害人類学的研究である。いずれも、ここ数年継続して実施してきた研究であるが、前者は 2013 年度が取りまとめの年であり、従来の人類学的研究成果と水文学や気象学の知見を合同した文理融合の成果を出せるように試みた。後者については震災直後の現地調査の成果を取りまとめるとともに、これまで得てきた知見を地域文化復興や防災文化行政に向けて発信する応用人類学的な取り組みを行った点に特徴がある。

シベリアの温暖化とレナ川中流域住民の適応については、とりわけ生態水文学の知見から湿潤化が地域環境で進行していることがわかり、このことは現地における春洪水の頻出化や夏洪水の発生に寄与していることが判明した。春の融氷洪水は地域社会の生産活動にとって肯定的な影響を与えており、それは温暖化で頻出化・拡大化しても基本的には変わらない。しかし融氷洪水後の融雪洪水や夏の降雨洪水は住民の生産活動に深刻な影響を与えていることがわかった。地域住民の在来知は洪水に関わる自然現象を詳細に弁別することが可能だが、降雨洪水はこれまでにない現象であり、在来知による適応の限界がそこに認められ、この点で行政のよる介入が必要であることが判明した。これらの成果は英語による論文及び和文論文にまとめられ、現在、査読中である。また概要については一般紙『IDE-JETRO　アジ研ワールド・トレンド』214 号について報告した。

災害人類学については、2012 年度までに行ってきた現地調査の成果を踏まえて 6 月に日本文化人類学会第 47 回研究大会及び 8 月にイギリスで開催された国際人類学民族学連合第 17 回世界大会において、分科会を組織し、発表をおこなうことで、国内外の人類学者にむけて被災無形民族文化財に対する人類学の取り組みを照会するとともにその可能性を議論した。また成果を調査地社会に還元するために、県内の複数の調査地での出張ワークショップを行った他、災害人類学と文化行政の連携の必要性を検討するために、静岡および高知でのワークショップを開催した。こうした成果は、書籍『無形民俗文化財が被災するということ』（新泉社、2014 年）として刊行した。

なお、2013 年度に獲得した出版助成プロジェクトに基づき、2012 年に出版した『極北の牧畜民サハ』（昭和堂）の英訳及び校閲作業をおこなった。2014 年度に刊行予定である。2012 年度までに行った展示と応用映像人類学に関わる共同研究についてはその成果を論文集という形でとりまとめることができ、現在、出版のための準備過程にある。

塩谷　昌史　　SHIOTANI Masachika　　助教

生年月日 ／ 1968 年 07 月 03 日

東北アジア研究センター基礎研究部門ロシア・シベリア研究分野

出身学校

滋賀大学・経済学部・経済学科 1993 年卒業

出身大学院

大阪市立大学・経済学研究科・経済政策博士課程 1999 年単位取得満期退学

取得学位

経済学博士（大阪市立大学、2013 年 3 月）

略歴

1999 年～ 2006 年　東北大学助手

2007 年～現在　　東北大学助教

所属学会

社会経済史学会、土地制度史学会、American Association for the Advancement of Slavic Studies、比較経済体制学会、経営史学会

学会活動

社会経済史学会 NTW 実行委員会委員

専門分野

経済史

研究課題

ユーラシアにおける流通ネットワークの再編

研究キーワード

ロシア経済

国際会議　発表・講演（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

The role of Asian Merchants in the Trade of Russia in the 19th century[The International Seminar - Demographic Process in Asia :History, Modern Times, Future Hypotheses]（2013 年 9 月 1 日～ 2013 年 9 月 2 日，ロシア，ノヴォシビルスク）口頭（招待　特別）

国際会議主催・運営（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

第 2 回　日露人文社会フォーラム

（2013 年 10 月 11 日～ 2013 年 10 月 11 日，ロシア，モスクワ）［主催］フォーラム全体のコーディネーター

国内会議主催・運営（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

JCAS 年次集会シンポジウム：日中関係の質的変容をどう理解するか ― 他地域の視点から捉えなおす（2013 年 11 月 9 日～ 2013 年 11 月 9 日，名古屋）［運営］シンポジウム全体のコーディネーター

その他研究活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

JCAS 公開シンポジウム報告書、『日中関係の質的変容をどう理解するか、他地域の視点から捉え直す』（校訂版テクスト編集）2013 年～ 2014 年

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

基盤研究(C) 2011 年 4 月～ 2014 年 3 月

［ユーラシアにおける流通ネットワークの再編 ― ロシア製綿織物輸出の観点より ―］

著書（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1）『ロシア綿業発展の契機 ― ロシア更紗とアジア商人 ―』。［知泉書館, (2014)2 月］塩谷昌史

研究論文（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1）「サンクト・ペテルブルクとロシア系ユダヤ商人」。［大阪市立大学経済学会　経済学雑誌，114（3），(2013)，76-93］塩谷昌史　「査読無」（招待論文）

総説・解説記事（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1）JCAS 公開シンポジウム報告書：日中関係の質的変容をどう理解するか ― 他地域の視点から捉えなおす。［京都大学地域研究統合情報センター JCAS Collaboration Series，(8)，(2014)，1-76］塩谷昌史　高橋五郎　貴志俊彦

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

本年度、従来の自分の研究を統合し、センターの専書として単著『ロシア綿業発展の契機―ロシア更紗とアジア商人』を知泉書館から出版した。この研究書で重要な特徴として、以下の 3 点が挙げられる。

1）ロシア経済史研究に「モノ研究」を応用したこと

地域研究の方法として、「モノ研究」が存在する。この研究の方法は、鶴見良行により完成された。拙著では、このアプローチを応用し、ロシア更紗の生産～流通～消費を一つの連関と考え、経済循環を考察の対象とした。このアプローチがロシ

ア史研究で試みられたことはなく、今回が初めてである。そもそも「モノ研究」は、日本の民俗学の成果を基に発展させた、日本オリジナルの手法である。

日本人で外国研究に従事する研究者は、対象国の研究手法や発想を取り入れることに長けているが、日本オリジナルの研究に学ぶのを怠ることが多いように思われる。外国で培われた手法を外国研究に応用しても、斬新な成果は生まれない。外国研究に従事する日本の人々は、「メイド・イン・ジャパン」の研究手法をもっと学ぶべきである。

2) 従来の発展段階論及び西欧近代の成果に対し疑問を提示したこと

これまでの工業化は、ウォーラーステインの世界システム論を除けば、英国あるいは西ヨーロッパの国々を先発国と考え、後発国がどのように先発国にキャッチアップするか、という枠組みの中での議論が行われてきた。この議論の中で、ロシアは後発国に位置づけられ、西ヨーロッパ先進諸国にどう追いつくのかが議論の中心であった。しかし本書では、工業化を考察する期間を 300 年に拡張し、自然環境の観点から工業化、とりわけ綿業を考察した。

ヨーロッパの綿業の発展は、インド更紗の輸入代替から始まった。したがって、ヨーロッパがインドに追いつこうとしたのが、工業化の端緒であったと結論づけられる。ロシアの場合、ブハラ更紗が、ヨーロッパにおけるインド更紗のような役割を果たした。ヨーロッパはインドに、ロシアは中央アジアに長期にわたり憧れを抱いたが、工業化を経たヨーロッパとロシアにとって、以前の憧れの対象が見下しの対象に変わる。

3) 連続説の観点からロシア綿業史を再考したことで、ロシア革命の意義を相対化させたこと

これまでのロシア史研究は、唯物史観に基づいて行われてきた。それは生産関係から歴史を研究する視座であり、社会主義を正当化する際に、効果的な役割を果たしてきた。この唯物史観では、人類の歴史は階級闘争の歴史と考えられ、封建時代には領主と農奴の間で、資本主義時代には資本家と労働者の間で、闘争が行われ、その中から弁証法的に次世代の生産関係が現れると説いた。

本書は唯物史観と決別し、時代区分に捉われず、ロシア綿業の発展を検討した。従来、ロシア史で封建時代と見られる 1860 年以前に、ロシア綿業は世界的水準にまで発展する。この点を経済統計により実証した。この見解は従来の唯物史観を揺るがせ、最終的には、ロシア革命の意義を相対化させる。この点に本書の意義がある。

栗林　均　　KURIBAYASHI Hitoshi　　教授

生年月日 ／ 1951 年 05 月 16 日

東北アジア研究センター基礎研究モンゴル・中央アジア研究分野

出身学校

東京外国語大学・外国語学部・モンゴル語学 1975 年卒業

出身大学院

一橋大学・社会学研究科・社会学博士課程 1982 年単位取得満期退学

取得学位

文学修士東京外国語大学

略歴

1982 年～ 1983 年　一橋大学助手
1984 年～ 1987 年　日本学術振興会奨励研究員
1990 年～ 1993 年　日本大学講師
1993 年～ 1999 年　日本大学助教授
1999 年～　　東北大学教授

所属学会

日本言語学会、日本音声学会、日本モンゴル学会、満族史研究会

専門分野

モンゴル語学、モンゴル文献学

研究課題

モンゴル系諸言語の研究
モンゴル語文献学の研究

学外の社会活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

日本モンゴル学会副会長、（社）日本モンゴル協会理事

学位授与数（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

東北大学大学院環境科学研究科修士 1 名

担当授業科目（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

内陸アジア文献研究（大学院）

国内会議　発表・講演（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

「伝統的モンゴル文字の電子化利用の現状と課題」情報処理学会 ― 第 90 回デジタルドキュメント研究会、2013 年 7 月 25 日、岩手県立大学。招待講演。

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

基盤研究(B)　2010 年 4 月～ 2014 年 3 月

［中世モンゴル語研究の統合］

著書（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1）「土族語詞彙」蒙古文語索引。［東北大学東北アジア研究センター,（2013）12 月］栗林均

2）　孝経 ― モンゴル語古訳本 ―。［東北大学東北アジア研究センター,（2014）1 月］栗林均

3）「蒙文倒綱」― モンゴル語ローマ字転写配列 ―。［東北大学東北アジア研究センター,（2014）2 月］栗林均、斯欽巴図（スチンバト）

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

1.　著書『「土族語詞彙」蒙古文語索引』（東北アジア研究センター叢書第 51 号）について：

「土族語」は中国青海省に居住する土族によって話されるモンゴル系の言語で、モングォル語とも呼ばれる。本書は、哈斯巴特尔（ハスバートル）等编『土族语词汇』（内蒙古人民出版社、1985 年）に収録されている土族語（モングォル語）の語彙約 6 千項目の中から、モンゴル語と共通の起源を有する単語を抽出して、それらに対応するモンゴル文語のローマ字転写形を見出し語として配列したものである。

見出し語のモンゴル文語形はローマ字転写表記でアルファベット順に配列し、それにモンゴル文字によるモンゴル文語形と簡単な日本語訳が付されている。見出し語に対応する土族語の形は音声記号表記により、それに原本に付されている漢語訳、原本の出現位置（記載頁）を示した。

数百年にわたって独自の発展を遂げてきたと考えられる土族語においてモンゴル系の単語がどのように保持されあるいは変化を蒙ったのか、土族語の歴史とモンゴル系言語の歴史を研究する資料とした。

本書は東北アジア研究センターのプロジェクト研究「東北アジア民族文字・言語情報処理研究ユニット」の活動の成果として刊行された。

2.　著書（斯欽巴図との共著）『蒙文倒綱 ― モンゴル語ローマ字転写配列 ― 』（東北アジア研究センター叢書第 52 号）

『蒙文倒綱』は賽尚阿（サイシャンガ）による 1851 年の序をもつモンゴル語･漢語･

満洲語の 3 言語対照辞典で、全 16 巻からなる写本である。同書は、字母順配列のモンゴル語辞書の嚆矢として清朝の後期に通行し、近代モンゴル語辞典の発展に大きな影響を与えた。原写本の影印は『蒙文倒綱 — 資料編・原本影印 — 』（東北アジア研究センター報告第 6 号、A4 判 590 頁）として公刊された、）。

本書は、『蒙文倒綱』（全 16 巻）の全項目についてモンゴル語と満洲語をローマ字転写し、漢語を翻刻し、モンゴル語のローマ字転写のアルファベット順に配列したものである。見出し語のモンゴル語にはモンゴル文字表記を付し、それぞれの項目が記載されている原本の位置を巻数と丁数で示した。

3.　著書『孝経 — モンゴル語古訳本 — 』（東北アジア研究センター報告第 12 号）について：

『孝経』は孔子が弟子の曽子に孝の道を説いたと伝えられる儒教の経典として名高い。本書は、13 世紀の元朝の時代にモンゴル語に翻訳・開版されたと考えられる漢語とモンゴル語の対訳木版本「孝経」の影印と本文のローマ字転写、モンゴル語の全単語と語尾の索引である。

影印の原本は中国故宮博物院図書館に所蔵される孤本であり、これまで何回か公刊された影印はいずれもモノクロの縮小印刷であった。本書は、原本の体裁に合わせて、全 74 頁を原寸大のカラーで再現している。

ここに記されるモンゴル語は、元朝の時代にまでさかのぼるウイグル式モンゴル文字の資料としてモンゴル語文献学、モンゴル語史の研究にとって貴重な資料である。

岡　洋樹　　OKA Hiroki　　教授

生年月日 ／ 1959 年 07 月 21 日

東北アジア研究センター基礎研究部門モンゴル・中央アジア研究分野

出身学校

早稲田大学・文学部・東洋史学科 1984 年卒業

出身大学院

早稲田大学・文学研究科・史学（東洋史）博士課程 1991 年単位取得満期退学

取得学位

修士（文学）早稲田大学 1986 年

博士（文学）早稲田大学 2005 年

略歴

1990 年〜 1992 年　早稲田大学文学部　助手

1992 年〜 1993 年　群馬大学教育学部　非常勤講師

1992 年〜 1996 年　早稲田大学第二文学部　非常勤講師

1993 年〜 1996 年　日本学術振興会　特別研究員（PD）

1996 年〜 1996 年　日本国外務省研修所　講師

1996 年〜 1996 年　日本大学法学部　非常勤講師

1996 年〜 1996 年　東京外国語大学　非常勤講師

1996 年〜 2006 年　東北大学東北アジア研究センター　助教授

1997 年〜現在　　東北大学大学院国際文化研究科　助教授

2000 年〜 2001 年　東北学院大学文学部　非常勤講師

2005 年〜 2008 年　尚絅学院大学総合人間科学部　非常勤講師

2006 年〜現在　　東北大学東北アジア研究センター　教授

研究経歴

1997 年〜 1999 年　「比丁冊」をつうじて見た清代モンゴルの盟旗制度の実態に関する研究

1997 年〜 2000 年　モンゴルにおける交易拠点の研究

1997 年〜 2000 年　モンゴルにおける関帝信仰の研究

1999 年〜 2001 年　清代公文書史料による内モンゴル旗社会の研究

2001 年〜 2002 年　戦間期モンゴルの政治・社会システムの研究

2002 年〜現在　　モンゴルにおける環境変動と遊牧社会の研究

2007 年～ 2009 年　モンゴルにおける歴史記述に関する研究
2011 年～現在　東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的現在的研究

所属学会

史学会、内陸アジア史学会、東方学会、日本モンゴル学会、早稲田大学東洋史懇話会、東北大学国際文化学会、満族史研究会

学会活動

内陸アジア史学会理事、日本モンゴル学会理事、早稲田大学東洋史懇話会理事

専門分野

東洋史・モンゴル史

研究課題

清代モンゴルの行政制度
前近代モンゴルの社会構造の研究
古ツングースの生産文化に関する自然科学的再検証
モンゴルにおける歴史的環境変動と遊牧社会の研究
モンゴルにおける歴史認識と学術・教育動向の研究
戦間期モンゴルの政治・社会システムの改編
東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的現在的研究

研究キーワード

モンゴル、清朝、社会構造

学外の社会活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

日本モンゴル協会評議員

オープンキャンパス・研究所公開等（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

東北大学片平まつり 2013 におけるモンゴル・ゲル及び研究成果展示（2013 年 10 月 7 ～ 8 日）
みやぎ県民大学東北アジアの人間と環境(趣味･教養コース No.20)(2013 年 10 月 23 日)

学内活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

東北アジア研究センター長、教育研究評議会評議員、部局長連絡会議、研究所センター長会議、入学試験審議会、文系部局長連絡協議会、基金企画推進室員、キャンパス将来計画委員会、片平まつり実行委員会委員、国際高等研究教育機構運営審議会委員、東北大学出版会評議員、川内キャンパス整備委員会、川内北キャンパス協議会、川北

合同研究棟管理委員会委員、「東北大学サイエンスカフェ」WG 委員、リーディングプログラム推進機構運営会議委員、コラボレーション・オフィス運営委員会委員長

学位授与数（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

修士 1 人（主査・環境科学研究科）

担当授業科目（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

（全学教育）

歴史学　2010 年～現在

モンゴル語 I　2002 年～現在

（大学院教育：環境科学研究科）

内陸アジア地域史論　2003 年～現在

内陸アジア文献研究　2003 年～現在

地域環境・社会システム学修士研修　2003 年～現在

博士インターンシップ研修　2003 年～現在

地域環境・社会システム学セミナー　2003 年～現在

地域環境・社会システム学博士セミナー　2003 年～現在

地域環境・社会システム学博士研修　2003 年～現在

国際会議　発表・講演（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

The Qing's Rule over "the Outer Mongols" in Transition: The Legal Process in the Middle of the Seventeenth Century.［首届国際満文文献学術研討会］（2013 年 7 月 13 日～ 2013 年 7 月 14 日，北京）口頭（招待　特別）

国内会議　発表・講演（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

清代外藩考 ― 北アジア遊牧民史におけるその歴史的文脈［2013 年度東北史学会大会］（2013 年 10 月 12 日～ 2013 年 10 月 12 日，仙台）口頭（招待・特別）

東北アジアの中の遊牧民 ― 清代モンゴル人の日常世界［伊達市噴火湾文化研究所・東北大学東北アジア研究センター第 5 回学術交流連携講演会「地域を見つめる多様な視点「清代モンゴルの世界」と「有珠山噴火の活動予測」」］（2013 年 10 月 26 日～ 2013 年 10 月 26 日，伊達）口頭（招待 特別）

国際会議主催・運営（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

東北アジア研究センター共同研究「東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究」シンポジウム「越境する東北アジア：共生のダイナミズム」平成 26 年 3 月 8 日㈯　13:00-18:00

国内会議主催・運営（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

東北アジア研究センター共同研究「近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造

的特質とその変容に関する研究」平成 25 年度第 2 回研究会、平成 26 年 3 月 11 日㈫ 14:00 ～ 17:30、川北合同研究棟 3 階会議室（301）

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

基盤研究(A)　2011 年 4 月～ 2015 年 3 月

［東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的現在的研究］

研究論文（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1)　清入関前対外藩蒙古所制殺害逃亡者処罰規定雑考。［紀念王鍾翰先生百年誕辰学術文集，(2013)，353-366］岡洋樹

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

2013 年度は、プロジェクト研究ユニットで運営する科研費基盤(A)による共同研究「東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現在的研究」に関わる調査を中国内モンゴル自治区フフホト市で行い、現地での資料の刊行状況及びアーカイヴの状況について情報を集めた。また年度末に国際シンポジウムを開催し、共同研究分担者及び外部研究者との研究交流を行っている。本研究は、富山大学極東地域研究センター及び島根県立大学北東アジア地域研究センターとの部局間協定に基づき実施しているもので、本年度が最終年度となる。現在来年度以降の研究協力の在り方について、検討しているところである。

一方清代モンゴル史に関して、清朝統治下のモンゴルと清朝への服属前の北元末期のモンゴル史との連続性に着目した講演を、北京及び仙台で行った。従来清朝の「外藩」と呼ばれるモンゴル統治システムは、清朝の創出に係るものと一般には考えられてきたが、盟旗制度や王公制度といった「外藩」の制度的諸要件と清代に先立つ北元期モンゴルの支配・統治制度との間には、濃厚な連続性が看取される。それゆえ、両者の間の継承関係の解明は、清代モンゴル史理解に新しい視角を提示するものと期待される。同様の問題意識から、清初、モンゴルに発布された国外からの逃亡者の扱いに関する法令の内容を検討し、先行研究の誤りを指摘するとともに、規定内容が同時期のモンゴル法中の該当条文と内容的に近いものであることを論じることによって、清初のモンゴル法制と北元末期モンゴルの法制の連続性の存在を主張した。また共同研究「近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究」では、研究代表者として二回の研究会を主催し、元代から近代に関わる学生・ポスドクの研究発表、モンゴルから招聘した研究者の報告を得た。

また北海道伊達市で開催された講演会では、現在進めている『清代前期理藩院満蒙文題本』所収の満洲文文書に見える窃盗事案の分析を通じて、18 世紀末のモンゴルにおけるモンゴル人の生活について論じた。同『題本』には、清代前期のモンゴルに

おけるモンゴル人の活動を現地の実情に即して解明することのできる多くの史料が収録されており、現在までに全 23 冊中第 19 ～ 23 冊を読み、内容の分析を進めているところである。特にこれらの文書からは、中国東北部でモンゴル地域と八旗支配下の東北三省の境界をなしていた柳条辺牆を跨ぐ人の動きが窺われる。とくに従来から指摘されてきた漢人のモンゴルへの進入のみならず、モンゴル人による辺牆を越えた活動が見いだされる点が注目される。その成果は、今後順次発表していく所存である。

柳田　賢二　　YANAGIDA Kenji　　准教授

生年月日 ／ 1960 年 08 月 15 日

東北アジア研究センター基礎研究部門モンゴル・中央アジア研究分野

出身学校

東京外国語大学・外国語学部・ロシヤ語学科 1983 年卒業

出身大学院

東京大学・人文科学研究科・露語露文学専攻博士課程 1989 年単位取得満期退学

取得学位

文学修士東京大学 1986 年

略歴

1989 年〜 1992 年　東海大学文学部非常勤講師
1990 年〜 1992 年　静岡大学教養部非常勤講師
1992 年〜 1993 年　東北大学教養部講師
1993 年〜 1995 年　東北大学言語文化部講師
1995 年〜 1997 年　東北大学言語文化部助教授
1997 年〜 2007 年　東北大学東北アジア研究センター助教授
2007 年〜現在　東北大学東北アジア研究センター准教授（注：法改正による職名変更）

研究経歴

2001 年〜 2002 年　科研費（基盤研究(C)(2)）「旧ソ連高麗人の民族文化の継承と変遷に関する研究」研究代表者
2005 年〜 2006 年　科研費（基盤研究(C)）「現代中央アジア少数民族における言語接触に関する研究」研究代表者
2007 年〜 2009 年　科研費補助金（基盤研究(C)）「現代中央アジア諸国における民族間共通語としてのロシア語の地位に関する比較研究」研究代表者
2013 年〜現在　科研費補助金（基盤研究(C)）「現在の中央アジアにおけるリングァフランカとしてのロシア語の特徴と変容の研究」

所属学会

日本ロシア文学会、朝鮮学会

学会活動

日本ロシア文学会　東北支部事務局 2003 年〜現在

日本ロシア文学会　日本ロシア文学会 2014 年（第 64 回）大会実行委員 2013 年～現在

専門分野

言語学、社会言語学、ロシア語学

研究課題

現代ロシア語の音韻論的研究

中央アジア多言語社会における言語接触に関する研究

研究キーワード

言語接触、中央アジア、ロシア語、クレオール、音韻論、音声学、朝鮮語

学内活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

総務委員　2013 年 4 月～現在

広報情報委員長　2013 年 4 月～現在

評価データ委員長　2013 年 4 月～現在

全学広報連絡員　2013 年 4 月～現在

全学ロシア交流推進室員　2014 年 3 月～現在

学務審議会外国語委員会　ロシア語教科部会長

学位授与数（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

博士 1 名（副査）

担当授業科目（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

（全学教育）

基礎ロシア語 I　2013 年～ 2014 年

基礎ロシア語 II　2013 年～ 2014 年

展開ロシア語 I　2013 年

展開ロシア語 II　2013 年～ 2014 年

展開ロシア語 III　2013 年

展開ロシア語 IV　2013 年～ 2014 年

（大学院教育）

地域環境 社会システム学セミナー 2003 年～現在

国際会議　発表・講演（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

その他研究活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

現代中央アジア諸国における民族間共通語としてのロシア語に関するフィールドワーク（フィールドワーク）2007 年～現在

現代中央アジア諸国におけるロシア語単一話者のロシア語に関するフィールドワーク（フィールドワーク）2013 年～現在

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

基盤研究(C)　2013 年 4 月～現在

［現在の中央アジアにおけるリングァフランカとしてのロシア語の特徴と変容の研究］

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

柳田は 2001 年、2002 年の両年のほか 2005 年以降の毎年中央アジアのウズベキスタンを訪問し、また 2007 ～ 2009 年にはキルギスとカザフスタンをも訪問して現地で民族間共用語（リングァフランカ）として用いられているロシア語の特徴とそのありようを観察してきたが、この過程において中央アジアのロシア語には明らかに話者の母語にかかわらず広い地域で共通して見られる非規範ロシア語的特徴があり、ロシアのロシア語とは異なる「中央アジアロシア語」というべきものが存在することを知ることとなった。2012 年 10 月、この問題に関してそれまでの研究活動で得た知見を盛り込んで平成 25 年度～平成 27 年度科研費補助金（基盤研究(C)）「現在の中央アジアにおけるリングァフランカとしてのロシア語の特徴と変容の研究」の研究計画調書を作成して応募したところ、採択を得たので、2013 年度はこの科研費補助金を中心的経費とした研究活動に従事した。

2013 年の 9 月と 12 月に上記科研費を使って中央アジアを訪問したが、キルギスへの航空機の座席予約を取ることがどうしてもできなかったので、ウズベキスタンだけで現地調査を行った。しかしその結果、極めて興味深い事実が判明した。

ウズベキスタンではカザフスタンと異なり経済苦が独立以来続いており、また、典型的な多民族国家であるにもかかわらずウズベク民族中心主義を採っているため、ロシア人ほかのいわゆる「ヨーロッパ系」住民の多くがロシアへ去り、ロシア語の勢力も明らかに弱まっている。ところが、このような状況下でもロシア人をはじめとするロシア語単一話者は依然として存在する。現在なおウズベキスタンに残っているのは「そもそもロシアへ行きたいと思わない者」か、さもなければ（ロシアに縁者がいないか、あるいは経済的理由などで）「ロシアへ行きたくても行くことができない者」に限られてしまったと言っても過言ではない。2013 年の調査はこうしたロシア人を主対象にしたインタビューを中心とすることになった。

現在のウズベキスタンでは同国籍のロシア語単一話者と知り合いになること自体が難しく、現在までにインタビューを行うことができた人々のうち、純粋な「ロシア人」と言える人々は３名に過ぎない。しかし、その全員に共通して言えることは、「もはやロシアを『いずれ帰るべき自分の国』とは考えていない」ということである。現在の同国ではロシアの衛星放送を見ることができ、ロシアのロシア語雑誌を買うことも

できる。それゆえ、同国のロシア人は情報面においてはソ連時代の中央アジア朝鮮人のように民族の故地から「隔絶された」とまでは言えない。また、同国のロシア人のほとんどが今もなおロシア語単一言語話者である。しかし、たとえ同国に残ったロシア人たちのコミュニケーションが今後ともロシア語でなされたとしても、その話し相手は多くの場合現地民族の人々であらざるを得ない。このような状況で中央アジアロシア人に文化変容が起こったとしても、またロシア語に変容が起こったとしても何も不思議はない。これはもはや「ディアスポラ化」である。

2013 年の訪問時には今後のための予備調査としてウズベク人、タジク人、キルギス人、朝鮮人、ドゥンガン人等のロシア語に共通して見られる「時の従属接続詞（英語 when に相当）が従属節の最初ではなく 2 語目に来る」というシンタクスにかかわる非規範ロシア語的特徴を含む例文を作ってこうした状況下にあるロシア人たちに聞かせたところ、そうした文に対して「本国人」がするような拒否反応を示すことがないのみならず、「私もそう言う」と答えるという反応を示すことさえあった。またさらには、Yes ないし Good の意味を持ちサマルカンド・ブハラ両州のウズベク語とタジク語にまたがる広域方言語彙である Хаǐ「ハイ」がロシアでは通じないことに指摘されなければ気付かないほど同地のロシア語方言に入り込んでいるという事実を確認することができた。

他方、日本人である柳田の感覚で上記シンタクス上の非規範ロシア語的特徴から類推してあり得そうに見える文を作って聞かせたところ、時の従属接続詞の前に置かれるのが主格だけでなく対格であっても名詞であれば許容されるが、それと同じ位置に「ここへ」の意味を表す副詞を置いた場合にはロシア人、ウズベク人バイリンガルの両者が強い拒否反応を示すという事実があった。ここでその具体例を示すことは避けるが、このことは、ロシアのロシア語には全く存在しないシンタクス上の規則が中央アジアロシア人のロシア語に発生していることを示す事実であり、今後、こうした文法規則に関する精密な研究が必要であることを強く感じた。

磯部　彰　　ISOBE Akira　　教授

生年月日 ／ 1950 年 08 月 07 日

東北アジア研究センター基礎研究部門中国研究分野

出身学校

東京学芸大学・教育学部・中等教員養成課程社会科 1973 年卒業

出身大学院

東北大学・文学研究科・中国学博士課程 1981 年単位取得退学

取得学位

文学博士東北大学 1995 年

文学修士東北大学

略歴

1981 年～ 1984 年　富山大学人文学部専任講師
1982 年～ 1983 年　福井大学教育学部（非常勤）
1984 年～ 1993 年　富山大学人文学部助教授
1987 年　東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター（非常勤）
1993 年～ 1996 年　富山大学人文学部教授
1994 年　東北大学文学部（非常勤）
1995 年　福井大学教育学部（非常勤）
1996 年　信州大学人文学部（非常勤）
1996 年～現在　東北大学東北アジア研究センター教授
2001 年～ 2001 年　琉球大学法文学部（非常勤）
2010 年～現在　早稲田大学演劇博物館招聘研究員

研究経歴

1975 年～現在　西遊記の成立とその東アジアにおける展開の研究
1977 年～ 1978 年　三春藩秋田家文書の研究
1981 年～ 1986 年　大聖寺藩の漢学と漢籍の研究
1985 年～現在　中国の宗教文学と地域文化に関する研究
1987 年～ 1990 年　中国地方劇の成立と現況についての研究
1993 年～現在　富山藩の漢学の研究
1996 年～ 2014 年　上山藩藩校明新館の研究
1997 年～ 2003 年　朝鮮版文選の版本研究

1998 年～ 2007 年　東アジア出版文化の研究
2000 年～現在　　明代宝巻に関する研究
2002 年～ 2005 年　明治大正文学者芸術家関係資料の研究・編集
2007 年～ 2010 年　東アジア出版文化国際研究拠点形成
2008 年～ 2013 年　清朝宮廷演劇文化の研究
2013 年～現在　　東アジア出版文化研究資料画像データベース
2013 年～現在　　出版文化資料データベース研究
2013 年～現在　　典籍文化遺産の研究

所属学会

日本中国学会、東方学会、日本道教学会、密教図像学会、東北中国学会

学会活動

日本道教学会　理事 2003 年～現在
東方学会　評議員 2005 年～ 2011 年、学術委員 2012 年～現在

専門分野

近世中国の演劇と小説、東アジアの出版文化、日本伝存漢籍及び漢学研究

研究課題

西遊記の東アジア展開研究
富山藩及び上山藩、広島藩旧蔵漢籍漢学の研究
東アジア出版文化の研究
明代教派系宝巻の物語摂取の研究
明代閩南の出版と日本慶長元和の文化形成
東アジア出版文化国際研究拠点形成事業
清朝宮廷演劇文化の研究
東アジア出版文化研究資料画像データベース
出版文化資料データベース研究
典籍文化遺産の研究

研究キーワード

東アジア、出版文化、中国小説、藩学、儒仏道三教、西遊記、清朝内府演劇、戦国大名蔵書、明刊本

学外の社会活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

東アジア出版文化の展示会（その他）2000 年 12 月～現在
東北アジア研究センター・伊達市噴火湾文化研究所連携講演会（講演会・セミナー）

2007 年 6 月～現在

「戦国大名の書籍蒐集と東北アジア ― 伊達本家を中心に ―」みやぎ県民大学（大学公開講座、東北大学片平キャンパスさくらホール）2013 年 11 月 6 日

行政機関・企業・NPO 等参加（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

中国社会科学院中国古代小説研究編集委員会　編委　2004 年 9 月～現在

高麗大学校中国学研究所編集委員　2008 年 5 月～現在

中国・東北師範大学文学院古籍整理研究所　編委　2012 年 12 月～現在

早稲田大学演劇博物館　招聘研究員　2010 年 6 月～現在

学内活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

附属図書館商議会商議員　2012 年 4 月～ 2014 年 3 月

担当授業科目（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

(大学院教育)

比較文化史学課題研究

ユーラシア文化史特論Ⅲ・Ⅳ

ユーラシア文化史研究演習Ⅲ・Ⅳ

国内会議主催・運営（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

第 1 回共同研究「典籍文化遺産の研究」公開研究会（2013 年 11 月 18 日、仙台市東北大学東北アジア研究センター）［主催］

第 2 回共同研究「典籍文化遺産の研究」公開研究会「高麗大学校日本研究センター・東北大学東北アジア研究センター　学術交流研究会」(2014 年 1 月 15 日、仙台市東北大学東北アジア研究センター）［主催］

その他研究活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

富山藩・上山藩・広島藩漢字・漢籍及び藩学校の資料調査と研究（その他）　1982 年～現在

東アジア出版文化の調査研究（その他）　1999 年～現在

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）(2013 年 4 月～ 2014 年 3 月)

基盤研究(C)　2013 年 4 月～現在

［明清教派系宝巻盛衰の研究 ― 武神と母神信仰をめぐって ―］

研究成果公開促進費(データベース)(研究成果データベース)(重点)　2013 年 4 月～現在

［東アジア出版文化研究資料画像データベース］

研究成果公開促進費（学術図書）　2013 年 4 月～ 2014 年 2 月

［清朝宮廷演劇文化の研究］

その他の競争的資金獲得実績（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

東北アジア研究センター・プロジェクト研究部門・研究ユニット　2013 年 4 月～現在
［出版文化資料データベース研究ユニット］

東北アジア研究センター・共同研究　2014 年～現在
［典籍文化遺産の研究］

著書（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1)　清朝宮廷演劇文化の研究。［勉誠出版、2014 年 2 月、P672、査読有］磯部彰（編著）

研究論文（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1)　大阪府立中之島図書館本『昇平宝筏』の特色について。［『清朝宮廷演劇文化の研究』、2014 年 2 月、P 165-184、査読有］磯部彰

2)　北京故宮博物院本『昇平宝筏』の研究。［『清朝宮廷演劇文化の研究』、2014 年 2 月、P185-205、査読有］磯部彰

3)　旧北平図書館本『昇平宝筏』の研究。［『清朝宮廷演劇文化の研究』、2014 年 2 月、P207-236、査読有］磯部彰

4)　清廷の『西遊記』単折戯と『昇平宝筏』との関係。［『清朝宮廷演劇文化の研究』、2014 年 2 月、P237-263、査読有］磯部彰

5)　（資料紹介）南巡盛典図と新出『迎鑾図』について。［『清朝宮廷演劇文化の研究』、2014 年 2 月、P643-646、査読有］磯部彰

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」の研究終了を受けて、連台大戯（長編戯曲作品）及び節戯類の個別作品の研究論文をまとめ、研究成果として、平成 25 年度科研費研究成果公開促進費（学術図書）の補助金により、『清朝宮廷演劇文化の研究』という書名で勉誠出版から出版した。その内容（目次）は次の通りである。

序言　清朝宮廷演劇文化とアジア社会（磯部彰）

Ⅰ　大戯の研究

『楚漢春秋』について（大塚秀高）

『鼎峙春秋』について ― 清朝宮廷における三国志劇 ―（小松謙）

『鼎峙春秋』古本戯曲叢刊九集本と北平図書館本の関係について（小松謙）

大阪府立中之島図書館本『昇平宝筏』の特色について（磯部彰）

北京故宮博物院本『昇平宝筏』の研究（磯部彰）

旧北平図書館本『昇平宝筏』の研究（磯部彰）

清廷の『西遊記』単折戯と『昇平宝筏』との関係（磯部彰）

『勧善金科』について ― 清朝宮廷の目連戯 ―（小松謙）

『鉄旗陣』と『昭代簫韶』（大塚秀高）

『如意宝冊』について（小松謙）

Ⅱ　節戯・小戯の研究

「節戯 ― 月令承応戯 ―」について（磯部祐子）

東北大学所蔵乾隆内府劇「如是観」等四種と乾隆帝の戯曲観（磯部祐子）

Ⅲ　宮廷本及び資料研究

明清内府本看過録（髙橋智）

『中国地方戯曲集成』の編集出版について（陳仲奇）

Ⅳ　清朝と東アジア文化

北京への途 ― 外藩モンゴル王侯による「年班」と清朝宮廷文化の受容 ―（中見立夫）

朝鮮燕行使が見た清朝の演劇 ― 東アジアの視点から ―（金文京）

大清グルンの支配秩序と宮廷演劇 ― マンジュ王朝の祝祭と王権 ―（杉山清彦）

Ⅴ　資料紹介

南巡盛典図と新出『迎鑾図』について（磯部彰）

東アジア出版文化方面の研究では、研究ユニットに設けた共同研究を進め、戦国大名家の典籍蒐集のバックグラウンドについて、武家政治の源流として、平清盛の漢籍輸入から鎌倉幕府御家人の漢籍研究が、平安朝の古代律令体制を基軸とした法治体制の中世的適用と再編成にあったことに着目し、とりわけ金沢北条氏とともに幕政に参与した大江長井氏の漢籍蒐集と紀伝道家としての役割に眼を向けつつある。現在、足利義満と対明外交、足利義政の文治を考慮しつつ、戦国大名家における宋版蒐集の意義、五山版や古活字本、朝鮮本を等しく所有する意味について分析し、典籍文化と武断政治との関係をめぐるプロジェクト発足の準備に入っている。

一方、典籍文化形成の基本である漢籍や絵巻、絵画などの原本を広く公開する取り組みは、センター研究ユニットを拠点として科研費研究成果公開促進費データベース（研究成果データベース・重点）平成 25 年度「出版文化資料データベース研究ユニット」によって、データベース作成を中心に進めた。平成 25 年度科研費研究成果公開促進費データベース（研究成果データベース・重点・2 年間）「東アジア出版文化研究資料画像データベース」の補助金により、東アジア出版文化に関連する典籍文化財を資料画像の形で広く公開し、東アジア出版文化の研究拠点としての位置づけを着実なものとしつつある。公開データは宋版経（思渓版）から元刊『詩集伝』、明刊本『遠西奇器図説』、『納書楹曲譜』など多彩なジャンルを含む。

個人研究では、平成 25 年度科研費基盤研究(C)により、教派系宝巻、とりわけ西大乗教と北京・山東省方面の地域文化形成の関係についての研究を進め、民間故事と宗教文化との関係を明らかにしつつある。

瀬川　昌久　　SEGAWA Masahisa　　教授

生年月日 ／ 1957 年 09 月 10 日

東北アジア研究センター基礎研究部門中国研究分野

出身学校

東京大学・教養学部・教養学科・文化人類学 1981 年卒業

出身大学院

東京大学・社会学研究科・文化人類学修士課程 1983 年修了

東京大学・社会学研究科・文化人類学博士課程 1986 年中退

取得学位

教養学士東京大学 1981 年

社会学修士東京大学 1983 年

学術博士東京大学 1989 年

略歴

1986 年〜 1989 年　国立民族学博物館助手

1989 年〜 1993 年　東北大学教養部助教授

1993 年〜 1996 年　東北大学文学部助教授

1993 年〜 1996 年　東北大学大学院国際文化研究科助教授

1996 年〜現在　　東北大学東北アジア研究センター教授

1996 年〜 2003 年　東北大学大学院国際文化研究科教授

2007 年〜 2009 年　東北大学東北アジア研究センター長

研究経歴

1983 年以来、香港、中国広東省、福建省、海南省を中心としたフィールドワーク調査を行い、文化人類学的な中国社会研究に関する多数の学術論文・著書を発表してきた。現在は、東北アジア研究センタープロジェクト研究部門「現代中国社会の変容に関する文化人類学研究ユニット」を代表者として立ち上げ、共同研究等を実施している。

所属学会

日本文化人類学会（日本民族学会より 2004 年 4 月に名称変更）

学会活動

日本文化人類学会（日本民族学会より 2004 年 4 月に名称変更）評議員（1994 〜 1995、2002 〜 2003、2006 〜 2010、20012 〜現在）

日本文化人類学会（日本民族学会より 2004 年 4 月に名称変更）理事（1994 ～ 1995、2002 ～ 2003、2006 ～ 2009、2014 ～現在）

専門分野

文化人類学

研究課題

宗族組織の人類学的研究

華南漢族のエスニシティー

中国の「民族」の文化人類学的研究

研究キーワード

親族、エスニシティー、華南、地方文化

行政機関・企業・NPO 等参加（2012 年 4 月～ 2013 年 3 月）

2013 年度の分（継続中を含む）をご記入ください。

オープンキャンパス・研究所公開等（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

片平まつり 2013 展示「祖先の栄光のもとに」（2013 年 10 月 12 ～ 13 日）

学内活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

コラボレーションオフィス運営委員会（文系所部局連携） 2009 年 4 月～現在

東北大学リベラルアーツサロン企画運営　2009 年 10 月～現在

東北アジア研究センター総務委員　2013 年 4 月～現在

東北アジア研究センター編集出版委員長、同図書資料委員長、同公開講演会シンポジウム企画委員長　2013 年 4 月～現在

学術情報基盤整備専門委員会委員　2013 年 4 月～現在

学位授与数（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

博士 2 人

担当授業科目（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

（全学教育）

文化人類学　2013 年～ 2013 年

（大学院教育）

東北アジア地域社会論 環境社会人類学セミナー　2013 年～

（他大学）

東北文化学園大学（文化人類学） 2013 年～ 2013 年

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

基盤研究(C)　2012 年 4 月～ 2016 年 3 月

［現代中国社会の変容とその研究視座の変遷 ― 宗族を通した検証］

著書（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1)　客家:華南漢族的族群性及其辺界(全文)原語(日本語)執筆.［社会科学文献出版社,（2013）10 月］瀬川昌久著、河合洋尚　姜娜訳。

研究論文（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1)　現代中国における宗族の再生と文化資源化.［東北アジア研究,（18),（2014),81-98］瀬川昌久（査読有り）

2)　客家エスニシティーの動態と文化資源.［武内房司　塚田誠之編『中国の民族文化資源―南部地域の分析から』,（2014),119-158］（査読有り）

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

2013 年度は、代表者を務める科研費基盤研究(C)「現代中国社会の変容とその研究視座の変遷 ― 宗族を通した検証」ならびに東北アジア研究センター共同研究「現代中国社会の変容とその研究視座の変遷 ― 宗族を通した検証」により、国内居住の主要な宗族研究者の参加を求め、研究会を 2 回実施した。また、その成果をもとにした研究成果論文の執筆を行った。さらに、その出版のための科研費出版助成の申請も行った。成果論文の内容は以下の通りである。序（瀬川昌久)、第 1 章・宗族研究史展望 ― 20 世紀初頭の「家族主義」から 21 世紀初頭の「宗族再生」まで（瀬川昌久)、第 2 章・閩南地域における宗族復興の展開と今後の宗族研究（潘宏立)、第 3 章・「中国人研究者」の中国社会文化研究における宗族（聶莉莉)、第 4 章・宗族制度と宗族組織 ― 湖北省の事例（秦兆雄)、第 5 章・宗族が作られているとき ― 福建省客家社会における人物呼称の事例から（小林宏至)、第 6 章・現代中国に息づく親族組織：水上居民の祖先祭祀からの分析（長沼さやか)、第 7 章・現代中国の「漁民」と宗族 ― 広東省東部汕尾の事例から（稲澤努)、第 8 章・現代中国の移民と宗族に関する 一 考察 ― 福建省福州市の事例から（兼城糸絵)、第 9 章・宗族の形成、変遷そして現在 ― 広東省珠江デルタの 一 宗族の事例から（川口幸大)、あとがき（瀬川昌久)。主要な論点は、宗族の存在様態を日常的・非組織的次元と儀礼的・組織的次元に分けて考えるべきこと、および宗族再生の事例はその歴史的正統性生成ツールとしての性格を地域社会が広く共有し実践していることを示しており、人々の「親密圏」には限定されないその潜在的機能の多様性や、そこに仮託される文化的意味の多様性についてあらためて確認されること、等である。これにより、宗族研究の最先端的な議論を総括する画期的な研究成果が得られた。同出版助成は残念ながら採択には至らなかったが、出版社には助成金なしでも出版することの同意を既に得ており、2014 年度中には出

版の見通しである。また、これら研究成果の一端については、2014 年 5 月 17 日開催の日本文化人類学会第 48 回研究大会において、分科会「宗族研究展望 ― 古典的研究対象の現在を再考する」を組織し、発表を行った。

これら一連の研究により得られた新たな知見の主要な部分は以下の通りである。中国の親族組織として知られる宗族は、文化人類学的な中国研究の成立当初から研究され続けてきた古典的な研究トピックであり、初期の人類学者たちはそこに中国社会の本質的要素を見ようとしていた。その後、文化大革命を頂点とする急進的な社会改革により中国本土では姿を消したが、1990 年代以降の社会変化の中で、宗族は中国の東南部を中心に目覚ましい再生を遂げている。今日、宗族の再生が行われていることは、主に経済的次元における成功によってもたらされた富を威信に変換しようとする際に、宗族という形式が社会的正統性の生成において依然として主要な役割を果たしていることを示している。それはまた、古代中国文明からの系譜の連続性と中華民族の一体性を措定するものであることから、伝統文化の喧伝やナショナリズムの喚起とも親和性が高く、各地の地方政府が追求する文化の資源化の動向とも結びつきやすい。近代社会の支配的パラダイムは、親族関係を私的で社会的に局所的な関係であるとし、公共的な社会領域からは排除されるべきものとみなしてきた。その結果人類学の内部でも、親族関係の研究は人々の「親密圏」へと退縮する歴史をたどってきたと言えよう。しかし、現代中国における宗族再生の事例は、宗族のもつ国家社会や地域社会の公共的領域と個人とをつなぐ重要な鎖としての役割を示唆しており、ともすると今日、個人の私的領域や「親密圏」の中で完結する事象とされがちな親族関係が、それを超出する性格を有し得ることを示している。このように、宗族は社会的・歴史的正統性の主張とリンクした存在であり、それゆえ私的個人間の人間関係の領域を超え、より広範な社会領域へと結びついてゆく潜在力を帯びている。このような宗族のもつ私的な領域から公共的な領域への「浸出」現象を、初期の人類学者や社会学者たちは上述のパラダイムに則って中国社会の前近代性、後進性の証と考えたが、親族関係というものを「親密圏」の呪縛から解き放って今一度再考する上で、中国の宗族という事例のもつ重要性は非常に大きいと考えられる。また、それは「儒教思想」の称揚、家族倫理の復権など最近の社会現象とも連動しており、現代中国社会を理解する上でも欠かすことのできない重要な鍵のひとつである。

明日香　壽川（張　壽川） ASUKA Jusen（CHO Jusen） 教授

生年月日 ／ 1959 年 10 月 26 日

東北アジア研究センター基礎研究部門中国研究分野

出身学校

東京大学・農学部・農芸化学 1984 年その他

出身大学院

東京大学・工学系研究科・先端学際工学博士課程 1996 年単位取得満期退学

取得学位

農学修士東京大学 1986 年

経営学修士欧州経営大学院 1990 年

学術博士東京大学 2000 年

略歴

1987 年〜 1988 年　スイス実験外科医学研究所　研究員

1990 年〜 1992 年　ファルマシア・バイオシステムズ㈱日本支社　企画管理部経営企画課プロジェクトマネージャー

1996 年〜 1997 年　電力中央研究所　経済社会研究所　研究員

1997 年〜 2004 年　東北大学東北アジア研究センター　助教授

2000 年〜 2004 年　東北大学文学研究科　助教授

2002 年〜 2003 年　京都大学経済研究所　客員助教授

2003 年〜 2004 年　東北大学環境科学研究科　助教授

2004 年〜現在　東北大学東北アジア研究センター　教授

2004 年〜現在　東北大学文学研究科　教授

2004 年〜現在　東北大学環境科学研究科　教授

2011 年〜 2013 年　（財）地球環境戦略研究機関　気候変動グループ　ディレクター

所属学会

環境経済政策学会、環境社会学会、国際アジア共同体学会、計画行政学会、国際開発学会、アジア政経学会

学会活動

環境経済・政策学会　理事　2005 年〜 2013 年

中国環境問題研究会　共同代表　2006 年〜現在

国際アジア共同体学会　理事　2010 年〜現在

研究課題

エネルギー・環境問題における様々な制度設計の政治経済的分析

研究キーワード

国際エネルギー環境協力、地球温暖化問題、排出量取引、クリーン開発メカニズム、環境 ODA、中国の環境エネルギー問題

学外の社会活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

Climate Policy　学術誌査読

Energy Policy　学術誌査読

エネルギー・資源学会誌　学術誌査読

Environmental Economics and Policy Studies　学術誌査読

行政機関・企業・NPO 等参加（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

環境省中央環境審議会専門委員

地球環境戦略研究機関（IGES）フェロー（2013 年～ 2014 年）

地球環境センター　JCM 支援委員会　委員

学位授与数（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

博士 1 人

担当授業科目（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

科学技術とエネルギー（学部）

地球温暖化論（大学院）

環境科学政策論（大学院）

国際会議　発表・講演（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

“Green Growth in Japan”, 5th ADI Conference: Growth Critical Perspective from Asia, Copenhagen, June 11, 2013, Copenhagen, Denmark

“Air Pollution in China and Possible coopperation by Japan: Rediscovering the CDM and Co-benefit”, JSPS CASS フォーラム , Oct. 11, 2013, Beijing, China.

“The Way Forward”, Policy Conference: Europe-Asia Cooperation on Climate Change Negotiations, Konrad Foundation, Oct. 21, 2013, Beijing, China.

“Possibility of the Cooperation on ERI and IGES: the air pollution mitigation through the climate change mitigation action”, ERI-IGES Policy Research Workshop, Dec. 11, 2013, Beijing, China.

“Japan’s New Climate Policy”, Technical Preparatory Meeting and Talk4Action on Energy-safe Cities, ICLEI East Asia, Dec. 23, 2013, Seoul, Korea

“Emission trading and international competitiveness: Case for Japan”, 中国対外貿易大学 , Jan 27, 2014, Beijing, China.

“Sectoral approaches on Energy”, Konrad Foundation Seminar: LowCarbon Development in Asia, Jan 27, Beijing, China.

国内会議　発表・講演（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

「中国大気汚染問題に関する考察」中国環境問題研究会、2013/6/9、東京

「中国の大気汚染問題と日本の協力」片平祭り講演会、2013/10/13、東北大学、仙台

「国際合意という幻想」気候ネットワーク全国シンポジウム“ 市民が進める温暖化防止 2013　科学と市民のチカラで危機を乗り越える ”、2013/10/27、京都

「中国のエネルギー政策と日中協力スキーム」岡倉天心生誕 150 周年・没後 100 年記念　国際アジア共同体学会第 7 回学術研究大会、2013/11/2、金沢

国内会議主催・運営（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

「中国大気汚染問題に関する考察」中国環境問題研究会 , 2013/6/9, 東京

受賞・その他特記事項（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

2013 年 2 月 16 日

NHK ニュース深読み「PM2.5 問題」出演　8 時 00 分～

2013 年 10 月 21 日

日本時間 22：00　ワールド Wave トゥナイト「PM2.5 問題」出演

2014 年 2 月 3 日

今週の名言、日経ビジネス 2014 年 2 月 3 日号第 1727 号　P.31

2014 年 1 月 21 日～ 26 日連載

河北新報コラム「科学の泉」

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

基盤研究(C)　2013 年 4 月～ 2015 年 3 月

［経済モデル分析を中心とした炭素制約が国際競争力に与える影響の学際的分析］

研究論文（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1)　“Energy and CO2 intensity reduction policies in China: Targets and Implementation”. [Global Environmental Research, 17 (1), (2013)] Z. Jin, T. Kuramochi, J. Asuka （査読あり）

2)　Transboundary Air Pollution from China: Possibilities for Cooperation with Japan. [Japan for Sustainability Newsletter, (133), (2013)] Jusen ASUKA （査読無し）（招待論文）

3)　中国の大気汚染問題と日本の協力のあり方．［環境と公害，43（1），(2013)］明

日香壽川（査読無し）（招待論文）

4) 地球温暖化問題「復活」の条件.［世界,(12 月),(2013)］明日香壽川（査読無し）（招待論文）

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

本年度は、中国の環境問題、特に大気汚染問題が社会的にクローズ・アップされ、関連してテレビや新聞での取材を受けた。また、地元の河北新報社に 6 回連続で温暖化問題に関するコラムを連載した。さらに、地球温暖化問題を巡る現状と課題に関して『世界』（岩波書店）に論文を寄稿した。

上野　稔弘　　UENO Toshihiro　　准教授

生年月日 ／ 1965 年 09 月 11 日

東北アジア研究センター基礎研究部門中国研究分野

出身学校

筑波大学・比較文化学類・比較・地域文化学 1988 年卒業

出身大学院

筑波大学・歴史・人類学研究科・東洋史博士課程 1997 年単位取得満期退学

取得学位

文学士筑波大学 1988 年

文学修士筑波大学 1990 年

略歴

1997 年～ 1998 年　千葉大学非常勤講師

1997 年～ 2001 年　文部省初等中等教育局　教科書調査官心得

1998 年～ 2001 年　東京女学館短期大学非常勤講師

2001 年～ 2007 年　東北大学東北アジア研究センター　助教授

2007 年～現在　　東北大学東北アジア研究センター　准教授（職階名変更による）

所属学会

日本現代中国学会、歴史人類学会、アジア政経学会、社会文化史学会、東アジア地域研究学会

学会活動

地域研究コンソーシアム運営委員会　運営委員（研究企画部会）2010 年～現在

専門分野

中国現代史、地域研究、文化人類学（含民族学・民俗学）

研究課題

・中国現代史における民族問題

・公文書活用による中国民族問題研究

研究キーワード

中国、民族、民族問題、少数民族、民族政策、民族関係、民族史

学外の社会活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

地域研究コンソーシアム運営委委員会運営委員 2008 年 4 月－現在。

学内活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

外国語委員会中国語・朝鮮語部会委員　2001 年 4 月～現在

外国語委員会学習環境専門部会委員　2001 年 4 月～現在

外国語委員会中国語・朝鮮語部会長　2006 年 4 月～現在

学位授与数（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

修士（副査）1 名

博士（副査）2 名

担当授業科目（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

（全学教育）

基礎中国語Ⅰ　2002 年～現在

基礎中国語Ⅱ　2002 年～現在

展開中国語Ⅰ　2003 年～現在

展開中国語Ⅱ　2003 年～現在

（大学院教育）

地域環境　社会システム学セミナー　2003 年～現在

東北アジア比較社会組織論　2004 年～現在

東北アジア歴史人類学　2013 年～ 2014 年

地域環境・社会システム学概論　2013 年～ 2013 年

国内会議　発表・講演（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

第二次大戦終結前後の新疆と中ソ関係〔20 世紀ロシア・中国史再考ユニット 2013 年度第 1 回研究会〕（2013 年 12 月 26 日～ 2013 年 12 月 26 日、仙台）口頭（一般）

その他研究活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

台湾における民国期民族政策文献の検索・収集（フィールドワーク）2003 年～現在

米国研究機関等所蔵の中国民国期民族政策文献の検索・収集（フィールドワーク）2008 年～現在

英国諸機関所蔵の中国辺疆民族問題関係資料の検索・収集（フィールドワーク）2010 年～現在

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

基盤研究(B)　2009 年 4 月～ 2014 年 3 月

［1920-40 年代の中国・ソ連における民族政策の比較研究］

総説・解説記事（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1)　書評：柴田哲雄著『中国の民主化・民族運動の現在 —— 海外諸団体の動向』、集

広舎、2011 年.［東方書店中国 21,（39),（2014)］上野稔弘，査読無し

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

2013 年度は主として科研費による海外文献調査を継続した。具体的には英国においては英国立公文書館と大英図書館アジア・アフリカ資料室を訪問し、台湾においては国史館や中央研究院中国近代史研究所檔案館および国家図書館を訪問し、米国ではスタンフォード大学アジア図書館などを訪問した。これら訪問先では 20 世紀前半の中国辺疆民族問題に関する一次史料を検索・収集した。訪問した各機関では一次史料の整備・公開が順次進行中であり、昨年度まで非公開だったり検索できなかったりした史料の一部が閲覧できた。特に新疆をめぐる辺疆民族問題に関しては英国側史料に見られる 1930 年代末から 1940 年代にかけての新疆や英領インド駐在の領事機関から本国への報告、および英国政府の対新疆政策策定過程をかなり具体的に把握することができた。また台湾では蔣介石文書を順次読み進み、これまでに収集した蔣介石日記の記述の裏付けや国民党および国民政府関係文書の内容を補足する情報を得ることができた。また 2014 年 1 月から国史館では国民政府文書のカラースキャン画像データの Web 公開を開始したため、直ちに申請手続きを行い、国史館でのマイクロフィルムでの閲覧・複写時に判別困難であったいくつかの重要文書の内容を再度確認することができた。これらの調査・収集活動を通じて史料情報の整理・収集は現在継続的に進行中である。こうした作業を通じて得た新たな知見の公開について、今年度は寺山教授との共同研究プロジェクト「20 世紀ロシア・中国史再考ユニット」の活動の一環として 2013 年 12 月 26 日に研究会を開催し、学外の関連分野研究者を交えて研究報告および学術交流を行った。ここで行った報告「第二次大戦終結前後の新疆と中ソ関係」では特に 1944 年から 45 年にかけての新疆の状況を取り上げ、盛世才に代わり新疆省主席に就任した呉忠信がソ連側の支援を受けたイリ勢力の叛乱に翻弄される中、新疆省の分割による叛乱拡大の防止を検討し、蔣介石もまたこれをソ連による新疆の「第二モンゴル化」の動きと見なし、第二次大戦終結による国家の再興が実現しないうちは新疆西部の喪失もやむなしと考えていたこと、英国側もまた新疆の分裂と周辺各国への編入の可能性を見ていたことなどを明らかにした。2014 年度以降においてはこの報告をも含めた史料分析の成果の論文化を進めてゆく予定である。

石井　敦　　ISHII Atsushi　　准教授

生年月日 ／ 1974 年 09 月 25 日

東北アジア研究センター基礎研究部門日本・朝鮮半島研究分野

出身学校

東京工業大学・工学部・機械科学科 1997 年卒業

出身大学院

筑波大学・社会工学研究科・都市・環境システム専攻博士課程 2001 年中退

取得学位

経済学修士（経済学）筑波大学 1999 年

略歴

2001 年〜 2004 年　独立行政法人国立環境研究所　アシスタントフェロー
2004 年〜現在　　東北大学東北アジア研究センター　准教授

研究経歴

1997 年〜現在　　地球温暖化対策のための国際交渉についての研究に従事
1997 年〜 2001 年　温室効果ガス削減のための国際協力プロジェクトについての研究に従事
2000 年〜現在　　国際環境レジームの科学アセスメントについての研究に従事
2003 年〜現在　　捕鯨の国際管理の問題に関する研究に従事
2004 年〜現在　　炭素隔離技術に関する政策研究に従事
2005 年〜現在　　地球温暖化に関連する政策的相互連関に関する研究に従事
2008 年〜現在　　地球温暖化の科学に関するマスメディアの研究に従事
2011 年〜現在　　国際漁業資源ガバナンスについての研究に従事
2013 年〜現在　　東アジアの越境大気汚染についての研究に従事

所属学会

国際環境問題、科学アセスメント、科学社会学、外交科学、越境大気汚染、炭素隔離技術、国際漁業資源ガバナンス

学会活動

環境経済・政策学会　理事　2012 年〜現在
日本国際政治学会環境分科会責任者　分科会責任者　2013 年〜現在

専門分野

政治学、国際関係論、科学社会学・科学技術史、環境影響評価・環境政策

研究課題

日本と北朝鮮との国際環境協力のあり方に関する研究
国際環境レジームの科学アセスメントに関する研究
日本の捕鯨外交と国際捕鯨管理の問題に関する研究
地球温暖化の科学を報道するマスメディアに関する社会構築主義的研究
素隔離技術に関する技術アセスメントと関連政策に関する研究
地球温暖化に関連する政策的相互連関に関する研究に従事

研究キーワード

国際環境問題、科学アセスメント、科学技術社会学、外交科学、北朝鮮の環境問題、炭素隔離技術、マスメディア、国際漁業資源ガバナンス

学内活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

東北アジア研究センター編集出版委員会　2004 年 10 月～現在
東北大学東北アジア研究センター　ハラスメント等相談員　2005 年 4 月～現在
北東アジア研究交流ネットワーク委員会　2006 年 4 月～現在

担当授業科目（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

（大学院教育）
地域環境・社会システム学修士セミナー　2005 年～現在
地域環境・社会システム学修士研修　2005 年～現在
地域環境・社会システム学博士セミナー　2006 年～現在
地域環境・社会システム学博士研修　2013 年～ 2014 年
環境科学・政策論　2013 年～ 2014 年
科学技術社会論特論 II　2013 年～ 2014 年

国内会議　発表・講演（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

Framing climate negotiations: Comparing the Japanese news media discourses of the Kyoto and Copenhagen conferences [The 2013 Conference on Communication and Environment in Uppsala]（2013 年 6 月 6 日～ 2013 年 6 月 10 日，ウプサラ）口頭（一般）
マスメディア報道と排出取引をめぐる意味の政治学［環境経済　政策学会 2013 年大会］（2013 年 9 月 21 日～ 2013 年 9 月 22 日，神戸）口頭（一般）
日本の新聞報道による CCS の社会構築 ― フレーミングとテクノクラート言説の再生産［科学社会学会第 2 回年次大会］（2013 年 9 月 28 日～ 2013 年 9 月 29 日, 東京）口頭（一般）
国際漁業資源をめぐる交渉理論の検証：クロマグロ資源の管理を事例として［日本国

際政治学会 2013 年度研究大会］(2013 年 10 月 25 日～ 2013 年 10 月 27 日，新潟) 口頭（一般）

国際会議主催・運営（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

ISA Annual Convention, San Francisco, 2013（2013 年 4 月 3 日 ～ 2013 年 4 月 6 日，アメリカ合衆国，サンフランシスコ）［運営］"Global fisheries management: resource politics, network diffusion, and governance reform" セッションコメンテーター

ISA Annual Convention, San Francisco, 2013（2013 年 4 月 3 日～ 2013 年 4 月 6 日，アメリカ合衆国，サンフランシスコ）［運営］"Riding the Waves: Stabilty and Change in Ocean Politics" セッション座長

ISA Annual Convention, San Francisco, 2013（2013 年 4 月 3 日 ～ 2013 年 4 月 6 日，アメリカ合衆国，サンフランシスコ）［運営］"Stakeholders and Fisheries Management: Theory, Methodology and Practice" セッション座長

国内会議主催・運営（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

環境経済　政策学会 2013 年大会 (2013 年 9 月 21 日～ 2013 年 9 月 22 日, 神戸) [運営]「水産資源」セッション討論者

環境経済　政策学会 2013 年大会 (2013 年 9 月 21 日～ 2013 年 9 月 22 日, 神戸) [運営]「気候変動～緩和（2)」セッション座長

環境経済　政策学会 2013 年大会 (2013 年 9 月 21 日～ 2013 年 9 月 22 日, 神戸) [運営]「環境ガバナンス（2)」セッション討論者

科学社会学会第 2 回年次大会（2013 年 9 月 28 日～ 2013 年 9 月 29 日，東京）［運営］「セッション 4：治水　保全　生態系」セッション司会

その他研究活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

第 85 回全米熱帯マグロ類委員会（フィールドワーク）2013 年

第 9 回中西部太平洋漁業委員会 北委員会（フィールドワーク）2013 年

第 20 回みなみまぐろ保存委員会（フィールドワーク）2013 年

第 23 回大西洋クロマグロ保存国際委員会（フィールドワーク）2013 年

オラフ シュラム シュトッケ著『国際レジームを分解する ― 評価と比較のための新たなアプローチ』(書評) 2014 年

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）(2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

基盤研究(A)　2011 年 4 月～現在

［レジームコンプレックスとしての国際漁業資源管理：意思決定要因と有効性分析］

基盤研究(C)　2013 年 4 月～ 2016 年 3 月

［炭素隔離技術のデモンストレーションプロジェクト：マスメディアと意思決定要因分析］

その他の競争的資金獲得実績（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

その他寄附金　2012 年 11 月～ 2013 年 10 月

［北東アジアの越境環境協力を再考する ― 協力促進の阻害要因に関する比較分析 ―］

研究論文（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

l）　Insights from Global Environmental Governance. [International Studies Review, 15 (4), (2013), 562-589] Hélène Trudeau, Isabelle Duplessis, Suzanne Lalonde, Thijs Van de Graaf, Ferdi De Ville, Kate O'Neill, Charles Roger, Peter Dauvergne, Jean-Frédéric Morin, Sebastian Oberthür, Amandine Orsini, Frank Biermann, Hiroshi Ohta, Atsushi Ishii「査読有」

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

研究論文として、環境レジーム研究における効果性の議論のレビューと、環境問題以外の研究において効果性の概念がどのように用いられているのか、についての論考をインパクトファクター 1.063（2012 年）の論文誌に掲載することが出来た。環境問題の研究はとかく、環境問題だけに閉じこもっている傾向が強いが、環境問題以外の研究分野と環境問題との接点に焦点を当てることで、環境問題の学術研究がより広い視野を持つことができるようにする貢献を同論文が行ったと思われる。

千葉　聡　　CHIBA Satoshi　　教授

生年月日 ／ 1960 年 09 月 24 日

東北アジア研究センター基礎研究部門地域生態系研究分野

出身学校

東京大学・理学部・地学科 1986 年卒業

出身大学院

東京大学・理学研究科・地質学博士課程 1991 年その他。

略歴

1991 年～ 1999 年　静岡大学理学部

1999 年～ 2013 年　東北大学大学院生命科学研究科

研究経歴

1985 年～ 2013 年　小笠原諸島陸産貝類の進化生物学的研究

1990 年～ 2013 年　種多様性の長期的変動に関する理論的研究

1991 年～ 2013 年　陸産貝類の遺伝学的、生態学的研究

1991 年～ 2013 年　軟体動物の進化プロセス、適応放散

2000 年～ 2013 年　東北アジア地域の生物進化史・生物地理研究

2006 年～ 2013 年　生物多様性保全手法の開発に関わる研究

所属学会

日本生態学会、日本古生物学会、個体群生態学会、Society for the study of evolution、American Society of Nauralist、日本進化学会

学会活動

日本生態学会東北地区会地区委員

Population Ecology（個体群生態学会）編集委員

Paleontological Research（日本古生物学会）編集委員

専門分野

進化生態学、集団遺伝学、古生物学

研究課題

東北アジア地域の生物進化史・生物地理学

生物多様性保全手法の開発

貝類をモデルとした進化研究

種多様性の時空間パターンの形成機構
島の生物群集の進化と保全に関する研究
外来種の侵入と定着機構の解明
ホストーパラサイト系の動態

研究キーワード

進化、多様性、種分化、軟体動物、外来種

学外の社会活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

特別講義（小中高との連携） 2013 年 11 月～ 2013 年 11 月

行政機関・企業・NPO 等参加（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

環境省（国） 小笠原世界遺産候補地科学委員会委員
(国) 環境省 プラナリア対策陸産貝類保全検討会委員
(国) 小笠原諸島ネズミ類対策検討会委員
(国) 小笠原諸島修復事業検討委員会委員
(地方公共団体) 父島ノヤギ排除検討委員会委員
(国) 小笠原諸島森林生態系保護地域保全管理委員会アドバイザ
(地方公共団体) 父島外来植物対策委員会委員
(国) 小笠原諸島科学委員会委員
(国) 小笠原諸島生態系保全アクションプラン改定 WG 委員
(国) 新たな外来種の侵入拡散防止 WG 委員
(国) グリーンアノール対策 WG 委員
(国) 東平ノヤギ・ノネコ排除区に関わる検討委員会委員

オープンキャンパス・研究所公開等（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

オープンキャンパス時の研究室公開（生命科学研究科）

学内活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

生命科学研究科入試委員会委員
理学部生物学科就職担当委員
理学部生物学科予算委員会委員

学位授与数（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1

担当授業科目（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

(学部教育)
群集生態学

動物生態学実習
生物学演習
短期留学生受入プログラム講義
生物学へのアプローチ（講義）
(大学院教育)
保全生物学特論
生態学合同講義
生態システム生命科学特論

国際会議　発表・講演（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）
World Congress of Malacology（2013 年 7 月 21 日）口頭（招待）

国内会議　発表・講演（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）
日本生態学会（2014 年 3 月 14 日～ 2014 年 3 月 18 日，広島）口頭（招待）

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）
基盤研究(B)　2012 年 4 月～現在
［過去で未来を守る］

研究論文（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1) Quantitative genetic analysis of subspecific differences in body shape in the snail-feeding carabid beetle Damaster blaptoides. [Heredity, 110, (2013), 86-93] Konuma, J., Sota, T., Chiba, S.（査読有）
2) Adaptation from restricted geometries: The shell inclination of terrestrial gastropods. [Evolution, 67, (2013), 429-437] Okajima, R., Chiba, S.（査読有）
3) Delayed spermatophore removal from the mate's genitalia in the land snail Euhadra peliomphala.. [Biological Journal of the Linnean Society, 108, (2013), 806-811] Kimura, K., Chiba, S.（査読有）
4) A maladaptive intermediate form: A strong trade-off revealed by hybrids between two forms of a snail feeding beetles.. [Ecology, 94, (2013), 2638-2644] Konuma, J., Sota, T., Chiba, S.（査読有）
5) The dual protection of a micro land snail against a micro predatory snail.. [PLoS ONE, 8, (2013), e54123] Wada, S., Chiba, S.（査読有）
6) Long-term stasis and short-term divergence in the phenotypes of microsnails on oceanic islands. [Molecular Ecology, 22, (2013), 4801-4810] Wada, S., Kameda, Y., Chiba, S.（査読有）
7) The mucus of a land snail love-dart suppresses subsequent matings in darted

individuals.. [Animal Behaviour, 85, (2013), 631-635] Kimura, K., Shibuya, K., Chiba, S. （査読有）

8） Strategic ejaculation in simultaneously hermaphroditic land snails: more sperm into virgin mates.. [BMC Evolutionary Biology, 13, (2013), 264] Kimura, K., Chiba, S. （査読有）

9） Substantial incongruence among the morphology, taxonomy, and molecular phylogeny of the land snails Aegista, Landouria, Trishoplita, and Pseudobuliminus (Pulmonata: Bradybaenidae) occurring in East Asia. [Molecular Phylogenetics and Evolution, 70, (2014), 171-181] Hirano, T., Kameda, Y., Kimura, K., Chiba, S. （査読有）

10） Phylogeny of the land snails Bradybaena and Phaeohelix (Pulmonata: Bradybaenidae) in Japan. [Journal of Molluscan Studies, in press, (2014)] Hirano, T., Kameda, Y., Chiba, S. （査読有）

11） Common effect of the mucus transferred during mating in two dart-shooting snail species from different families.. [Journal of Experimental Biology, in press, (2014)] Kimura, K., Chiba, S. Koene, J. （査読有）

総説・解説記事（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

千葉聡（2013）影の支配者、二生吸虫．日本生態学会誌 63:299-300.（査読有）

千葉聡（2014）愛の矢．科学 84（印刷中）。 （査読無）

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

1. 東アジア地域の生物相の形成過程解明することを目的として研究を進めた。本年度は、陸産貝類をモデル系として用い、東アジア地域各地のフィールド調査と分子系統解析によって、その進化史の解明に成功した。従来単一のグループとされていた、中国、韓国、台湾、ベトナムおよび日本のオナジマイマイ科陸産貝類は、大きく大陸と島嶼の２つのグループに分けられ、それぞれアジア大陸南部から沿海部と内陸部を独立に北上しつつ多様化を遂げたことが示された。東アジアの広域にわたる生物相の形成過程を詳細に示した研究は少なく、特にアジア大陸沿海部と内陸部の生物相の関係を示したのは本研究が初めてである。日本の生物相は生物地理的にアジア大陸由来とされ、その一部とみなされてきたが、この結果は、現在の大陸の主要メンバーとは異なる履歴をもつ構成要素を含むことを意味する。これは東アジアの生物相の地域性を把握するうえで重要であるとともに、アジア地域における日本の生物相の位置づけ、およびその独自性を理解するうえでも極めて重要な知見である。この研究成果は、分子系統学の最も重要な雑誌である Mol. Phyl. Evol 誌などに公表した。なお本成果にかかる論文は、いずれも千葉がプロジェクトリーダー

(発表論文におけるラストオーサー）として企画、推進してきた共同研究の成果である。

2. 捕食者と被食者の共進化によって種分化と形態の多様化が駆動されるという仮説を検証するため、中国系ヨロイオサムシ群と陸貝をモデル系として用いたフィールド調査、操作実験および遺伝子解析により研究を進めた。その結果、捕食成功に関係するオサムシ頭部の形状を決定する遺伝子発現機構を明らかにするとともに、捕食に関わるトレードオフが、形態の分化を引き起こしていることを示した。以上から中国系ヨロイオサムシ群の形態の多様化は、餌生物との捕食－被食の共進化によって生じたことが示された。また捕食成功に効果を発揮しうる多様な戦略があることを反映していることが示唆された。この成果は、攻撃―防御の共進化が形態の多様化を引き起こすこと、およびトレードオフがその過程で重要な役割を果たすことを遺伝子レベルで実証した数少ない事例のひとつであり、進化生物学における重要な成果となった。本研究も千葉がプロジェクトリーダーとして企画、推進してきたものであり、上記の成果をラストオーサーとして生態学の最も権威ある雑誌である Ecology などに発表した。

3. 小笠原諸島の陸産貝類の生態学的、進化生物学的研究を行った結果、形態的に区別ができないため従来認識されていなかった多数の種を、遺伝学手に識別することができた。このような種群の存在は、従来の分類では種の多様性を著しく過小評価していることを意味する。この種はこれまで環境省のレッドリストの対象とはされていなかったが、実際には分布域が著しく狭い多数の種の集合体であることが判明したことから、それぞれの種は絶滅危惧種として保全対象とすべきであると考えられた。以上の成果は、従来の貝類のレッドリストに基づいた生態リスク評価や、地域評価には問題があり、遺伝子解析の情報に基づいてレッドリストの再検討が必要であることを示している。この成果をプロジェクトリーダーとして海外の主要学術誌に発表した（すべてラストオーサー)。さらにこれらの希少種の保全対策を環境省に対して提案し、地域住民や地元 NPO とも協同の上、人工繁殖による増殖事業を立案、実施し、地域の自然保護対策に貢献した。

4. 貝類の生息状況を指標として、日本各地の湿地および湖沼の現況を調査した。また中国北部の湿地においても同様の調査を行い、日本の状況との比較を行った。その結果、特に東北地方は比較的良好に維持されている湿地が比較的多く存在する一方、東北大震災の津波により、特に北上川周辺の良好な湿地が消失し、希少種を多く含む貝類群集が失われたことが明らかになった。一方、東京西部連光寺に局所的に多くの希少淡水貝類を多く含む良好な湿地が残存していることを見出し、上記他地域との比較からその重要性を確認した。これら一連の成果について、研究室の指導学生が日本貝類学会で公表した。また上記の成果にもとづいて、東京都に対し連

光寺湿地の貴重性と価値を指摘し、保全策を提案した結果、都指定の保護区として整備のうえ保全が図られることとなり、地域の環境保全政策への貢献を果たすことができた。

鹿野　秀一　　SHIKANO Shuichi　　准教授

生年月日 ／ 1954 年 01 月 01 日

東北アジア研究センター基礎研究部門地域生態系研究分野

出身学校

東北大学・理学部・生物学 1977 年卒業

出身大学院

東北大学・理学研究科・生物学博士課程 1982 年修了

取得学位

理学博士東北大学 1982 年

略歴

1982 年～ 1986 年　東北大学理学部　教務系技官
1986 年～ 1995 年　東北大学理学部　助手
1995 年～ 1997 年　東北大学大学院理学研究科　助手
1997 年～現在　　東北大学東北アジア研究センター　助教授
2007 年～現在　　東北大学東北アジア研究センター　准教授

所属学会

日本生態学会、日本微生物生態学会、日本陸水学会

専門分野

微生物生態、環境動態解析、分子系統解析

研究課題

マイクロコズムにおける環境変化に対する相互作用の影響
細菌群集の系統的多様性
湖沼の環境と食物網

研究キーワード

群集、生態系、環境、湖沼、湿地

行政機関・企業・NPO 等参加（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

（地方公共団体）　宮城県　伊豆沼　内沼自然再生協議会　委員　2008 年 4 月～現在

学内活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

学生生活協議会　2013 年 4 月～ 2014 年 3 月

担当授業科目（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

(学部教育)

生物学演習 I　2004 年～現在

環境生物学　2005 年～現在

(大学院教育)

生態学合同講義　2008 年～現在

国内会議　発表・講演（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

The evaluation of snail host-trematode parasite trophic relationships using stable isotope analysis [Russian Society of Parasitology meeting]（2013 年 9 月 23 日～ 2013 年 9 月 26 日，Novosibirsk）口頭（一般）

伊豆沼におけるハス群落内外のメタン酸化細菌群集解析［第 8 回伊豆沼・内沼研究集会］(2014 年 2 月 08 日，栗原）口頭（一般）

底生動物群集から見た伊豆沼の湖底環境［第 8 回伊豆沼・内沼研究集会］(2014 年 2 月 08 日，栗原）口頭（一般）

吸虫類寄生虫のセルカリア幼生が湿原食物網内で果たす役割：水生動物による摂食量の評価［第 61 回日本生態学会大会］(2014 年 3 月 14 日～ 2014 年 3 月 17 日，広島）口頭（一般）

炭素・窒素安定同位体比からみた宮城県伊豆沼のブルーギルの食性［第 61 回日本生態学会大会］(2014 年 3 月 14 日～ 2014 年 3 月 17 日，広島）ポスター（一般）

その他研究活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

西シベリア塩性湖チャニー湖沼群の環境と生物群集の調査（フィールドワーク）2001 年～現在

宮城県　伊豆沼における環境と食物網解析（フィールドワーク）2006 年～現在

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

基盤研究(C)　2013 年 4 月～ 2016 年 3 月

［浅い湖沼におけるハス群落拡大がメタン食物網へあたえる影響］

その他の競争資金獲得実績（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

二国間交流事業　共同研究　2012 年 4 月～ 2014 年 3 月

［西シベリアの河口域生態系における食物網内の吸虫類寄生虫の摂食リンク］

研究論文（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1)　Comparison of the exploitation of methane-derived carbon by tubicolous and non-tubicolous chironomid larvae in a temperate eutrophic lake. [Limnology, 14,

(2013), 239-246] Yasuno N, Shikano S, Shimada T, Shindo K, Kikuchi E （査読有り）

2） Isotopic evidence for the spatial heterogeneity of the planktonic food webs in the transition zone between river and lake ecosystems. [PeerJ, (2013)] Doi H, Zuykova E I, Shikano S, Kikuchi E, Ota H, Yurlova N I, Yadrenkina E （査読有り）

総説・解説記事（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

食物網解析、[湖沼復元を目指すための外来魚防除･魚類相復元マニュアル、(2013)]、鹿野秀一

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

本年度も昨年度に引き続き、日本学術振興会・二国間交流事業（ロシアとの共同研究）「西シベリア河口域生態系における食物網内の寄生虫類の摂食リンク」の経費を用いて、西シベリア・チャニー湖において、巻き貝に寄生する吸虫類幼生の食物網における寄与に関する共同研究を行った。本年度の共同研究のメンバーは、ロシア科学アカデミーシベリア支部動物分類学生態学研究所の Yurlova Natalya 主任研究員、Yurlov Alexander 主任研究員とロシア側大学院生および日本側メンバーとして鹿野秀一ほか、滋賀県立大学浦部美佐子教授、国立環境研究所金谷弦研究員と東北大学大学院生命科学研究科の大学院生からなる。本年度は、チャニー湖の実験施設において、昨年度とは別種の Plagiorchis 属の吸虫類を用いて、巻き貝に寄生する吸虫類からセルカリア幼生が放出される速度を、温度条件や光条件を変えて実験的に測定し、更に放出されたセルカリア幼生が動物プランクトン、水生動物、貧毛類などによってどのくらい捕食されるか摂食速度を実験的に求めた。これらの実験結果より、Plagiorchis 属セルカリア幼生が潜在的な餌資源となるか炭素量換算をすることができた。昨年度実験した Echinoparaphium aconiatum のセルカリア放出速度と捕食者による摂食速度と比較すると、小型の Plagiorchis 属吸虫のセルカリア放出個体数や摂食された個体数は多かったが、放出速度と摂食速度は炭素量換算では同程度であった。だたし、セルカリアを捕食できる動物は、セルカリアの大きさが異なることから、セルカリアの種類によって異なることが分かり、吸虫類の種類組成や環境中の捕食者候補の種類組成が、吸虫類の餌資源としての重要性に影響することが明らかになった。

宮城県北部平地に位置する伊豆沼は、動物プランクトンや魚類の炭素安定同位体比の値が経年的に低下の傾向があり、炭素安定同位体比の低いメタンを起源とする食物連鎖や食物網の重要性が指摘されている。このことは、伊豆沼に生育するユスリカ幼虫においても、巣穴の形状によりメタン起源の餌としてのメタン酸化細菌の寄与が異なることを飼育実験により確かめることができ、その内容は Limnology, 14: 239-246 (2013) に掲載された。

また、近年伊豆沼においては夏期にハス群落で湖面が約 70％も覆い尽くされるようになり､ハス群落内での水中の酸素濃度の低下が観察されるようになってきている。そこで、本年度から科学研究費補助金・基盤研究(C)「浅い湖沼におけるハス群落拡大がメタン食物網へあたえる影響」（平成 25 年度～ 27 年度）の経費を用いて、伊豆沼におけるハス群落内外のメタン濃度測定の定期的な調査を始めた。堆積物中のメタン濃度は、ハス群落内の方が群落外より高い傾向があった。さらに、湖水中のメタン濃度の垂直分布も調べたところ、湖水中においてもメタンが検出され、メタン濃度はハス群落内の方が群落外より有意に高かった。ハス群落内でメタン濃度が高くなることは、ハスの生育により風による湖水の攪拌が弱まり、低酸素状態になりやくメタンが蓄積しやすいことと、ハスの枯死体が大量に蓄積することによりメタン生成速度が高まることに起因すると考えられる。これらのことより、ハス群落の拡大は、伊豆沼全体をメタンが起点となる食物連鎖を強めていることが示唆された。

石渡　明　　ISHIWATARI Akira　　教授

生年月日 ／ 1953 年 04 月 01 日

東北アジア研究センター基礎研究部門地球化学研究分野

出身学校

横浜国立大学教育学部地学科 1975 年卒業

出身大学院

金沢大学大学院理学研究科地学専攻修士課程 1978 年修了

東京大学大学院理学系研究科地質学専攻博士課程 1981 年修了

取得学位

理学博士東京大学 1981 年

略歴

1981 年～ 1982 年　東京都立明正高等学校教諭

1982 年～ 1985 年　キュリー夫妻（パリ第 6）大学構造地質学会客員主任助手

1986 年～ 1988 年　金沢大学理学部助手

1988 年～ 1992 年　金沢大学理学部講師

1992 年～ 2003 年　金沢大学理学部助教授

2003 年～ 2008 年　金沢大学理学部教授

2008 年～現在　　東北大学東北アジア研究センター教授

研究経歴

1973 年～現在　　日本、アルプス、ロシア極東のオフィオライトの地質学と岩石学

所属学会

日本地質学会、日本鉱物科学会、日本地球惑星科学連合、日本火山学会、東京地学協会、地学団体研究会、地学教育学会、米国地質学会、米国地球物理連合

学会活動

日本鉱物科学会 1986 年～現在、学会誌「岩石鉱物科学」編集委員 1995 年～現在、評議員 1995 年～現在、「Journal of Mineralogical and Petrological Sciences」編集委員 2009 年～現在

日本地質学会 1975 年～現在、地質学雑誌編集委員 1999 年～ 2003 年、評議員 2002 年～ 2008 年、執行理事 2009 年～ 2014 年、評議員会議長 2004 年～ 2006 年、英文学術誌「Island Arc」編集委員長 2004 年～ 2007 年、同誌編集顧問 2008 年～現在、会長

2012 年～ 2014 年、地学団体研究会 1978 年～現在、全国運営委員 1989 年～ 1992、北陸支部長 2006 年～ 2008 年、Geological Society of America 2001 年～現在、「GSA Bulletin」編集委員 2006 年～ 2008 年

日本地球惑星科学連合　理事・代議員　2009 年～現在、2013 年大会実行委員長

専門分野

岩石・鉱物・鉱床学、地質学、地球宇宙化学

研究課題

造山帯のオフィオライトの地質学的研究

中部・東北日本の第三紀島弧火山岩によるマントル・プローブ

アジア北東端のオフィオライトと随伴岩類：北極圏東部の岩石、構造、広域地質対比

研究キーワード

地質学、岩石学、地球化学、火山岩、深成岩、変成岩、オフィオライト、造山帯、緑色岩

学外の社会活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

Integrated Ocean Drilling Program 理事　2011 年 06 月～ 2014 年 3 月

日本地球掘削科学コンソーシアム IODP 部会長　2012 年 5 月～現在

行政機関・企業・NPO 等参加（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

独立行政法人大学評価・学位授与機構大学機関別認証評価委員会専門委員

（2014 年 5 月～現在）

文部科学省科学技術・学術審議会専門委員（海洋開発分科会）　（2013 年 4 月～現在）

オープンキャンパス・研究所公開等（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

・片平まつり 2013 で石渡研究室・IODP 共催展示
「東日本大震災の震源断層を掘る　日本の調査船「ちきゅう」が世界初の水深 7,000m の断層掘削に成功！」を開催。

・片平まつり 2013 で東北アジア研究センター・IODP 共催講演会
「地球探査船「ちきゅう」が解き明かす東北沖地震の謎（講演者：斎藤実篤氏（海洋研究開発機構））」を開催。

・理学部オープンキャンパスで石渡研究室の展示、演示実験を実施 題名：「石の不思議を調べよう」

・川北合同研究棟玄関に東北アジア地域の貴重な岩石標本を展示。

学内活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

総長特別補佐として里見ビジョンの策定に貢献。副センター長として本センターの運

営に貢献した。

学位授与数（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

博士 1 人

修士 5 人

担当授業科目（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

（全学教育）

セミナーII　2008 年～現在

地球物質科学　2008 年～現在

（学部教育）

地球の科学　2008 年～現在

セミナーI　2008 年～現在

火山物理化学　2008 年～現在

岩石学実習II　2010 年～現在

（大学院教育）

変成岩特論I　2008 年～現在

セミナー　2008 年～現在

課題研究　2008 年～現在

変成岩特論 II　2008 年～現在

国際会議　発表・講演（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

Plume-type ophiolites in Japan, East Russia and Mongolia: Peculiarity of the Late Jurassic examples. [European Geosciences Union General Assembly 2013 (TS6.9/GMPV25, EGU2013-13609)]（2013 年 04 月 11 日、オーストリア、ウィーン）口頭（招待）

Plume-type ophiolites in Japan, Russia and Mongolia: Peculiarity and global importance. [The 120th Annual Meeting of the Geological Society of Japan, International Symposium]（2013 年 9 月 16 日、日本、仙台市）口頭（世話人）

A comparative petrological study of the Siberian and Ethiopian Large Igneous Provinces (LIPs) and a case study on Triassic mafic rocks in Chukotka, NE Russia [American Geophysical Union 2013 Fall Meeting]（2013 年 12 月 9 日 ～ 2013 年 12 月 13 日、アメリカ合衆国、San Francisco）ポスター（一般）

国内会議　発表・講演（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

花崗岩体の上側で形成される直閃石を産しない蛇紋岩の超低圧接触変成帯.［日本地球惑星科学連合 2010 年大会］（2010 年 5 月 23 日～ 2013 年 5 月 28 日, 幕張メッセ）口頭（一般）

宮城県岩沼地域に見られる安山岩溶岩の柱状節理と石基結晶の不随事実［日本地球惑星科学連合 2013 年大会］(2013 年 5 月 22 日, 千葉市美浜区幕張メッセ) ポスター (一般)

High-Ti picrite from the Lalibela area, Ethiopian LIP［日本地球惑星科学連合 2013 年大会］(2013 年 5 月 22 日, 千葉市美浜区幕張メッセ) 口頭 (一般)

モンゴル・ハンガイ山地のデボン紀付加体から鉄ピクライトと高 Mg 安山岩の発見[日本鉱物科学会 2013 年年会](2013 年 9 月 12 日, 茨城県つくば市筑波大学)口頭(一般)

Plume-type ophiolites in Japan, Russia and Mongolia: peculiarity and global importance[日本地質学会第 120 年学術大会](2013 年 9 月 14 日～ 2013 年 9 月 16 日, 仙台) 口頭 (一般)

北部北上帯の緑色岩の岩石学的特徴とその起源［日本地質学会第 120 年学術大会］(2013 年 9 月 14 日～ 2013 年 9 月 16 日, 仙台) ポスター (一般)

東北日本・北部北上帯付加体砂岩における長石の曹長石化［日本地質学会第 120 年学術大会］(2013 年 9 月 14 日～ 2013 年 9 月 16 日, 仙台) ポスター (一般)

岐阜県谷汲地域に産する美濃帯緑色岩の産状、地球化学的性質及びその起源：舟伏山久瀬両ユニットでの違い［日本地質学会第 120 年学術大会］(2013 年 9 月 14 日～ 2013 年 9 月 16 日, 仙台) ポスター (一般)

阿武隈高原に分布する小規模超苦鉄質岩体の岩石学[日本地質学会第 120 年学術大会](2013 年 9 月 14 日～ 2013 年 9 月 16 日, 仙台) ポスター (一般)

板状節理の形成メカニズム［日本地質学会第 120 年学術大会］(2013 年 9 月 14 日～ 2013 年 9 月 16 日, 仙台) 口頭 (一般)

国際会議主催・運営（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

Circum-Pacific Ophiolites: subduction, accretion and mantle processes（日本地質学会国際シンポジウム）(2013 年 9 月 16 日, 日本国, 仙台)［主催］セッションオーガナイザー

国内会議主催・運営（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

日本の北サハリン油田開発を振り返る（2014 年 1 月 11 日, 仙台)［運営］世話人

受賞・その他特記事項（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

アイランドアーク誌最多ダウンロード賞 2013 年 [Wiley]

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

日本の古生代オフィオライトの多様性と沈み込み帯プロセス。

科学研究費補助金基盤研究(C)　代表者

著書（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1） 東日本大震災を分析する（執筆担当部分）第 3 部第 3 節第 4 章 263-276 頁　仙台付近の墓石転倒率調査結果.［明石書店,（2013）6 月］平川新，今村文彦，東北大学災害科学国際研究所

研究論文（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1） High-pressure ultramafics in the lower crustal rocks of the Pekul'ney complex, central Chukchi Peninsula. 1. Petrography and mineralogy. [PETROLOGY, 21 (3), (2013), 221-248] Bazylev, B. A. Ledneva, G. V. Kononkova, N. N. Ishiwatari, A.　査読有

2） High-pressure ultramafics in the lower crustal rocks of the Pekul'ney complex, central Chukchi Peninsula. 2. Internal structure of blocks and ultramafic bodies, geologic and geodynamic setting of rock formation. [PETROLOGY, 21 (4), (2013), 336-350] Bazylev, B. A. Ledneva, G. V. Ishiwatari, A.　査読有

3） High-Mg Adakite and Low-Ca Boninite from a Bonin Fore-arc Seamount: Implications for the Reaction between Slab Melts and Depleted Mantle. [JOURNAL OF PETROLOGY, 54 (6), (2013), 1149-1175] Li, Yi-Bing Kimura, Jun-Ichi Machida, Shiki Ishii, Teruaki Ishiwatari, Akira Maruyama, Shigenori Qiu, Hua-Ning Ishikawa, Tsuyoshi Kato, Yasuhiro Haraguchi, Satoru Takahata, Naoto Hirahara, Yuka Miyazaki, Takashi　査読有

4） 仙台の大地の成り立ちを知る.［地質学雑誌 , 119（補遺）, (2013), 27-46］宮本毅 , 蟹澤聰史 , 石渡明 , 根本潤　査読有

5） オルドビス紀 ― デボン紀島弧系の復元と発達過程：岩手県早池峰宮守オフィオライトと母体高圧変成岩類.［地質学雑誌 , 119（補遺）, (2013), 134-153］小澤一仁 , 前川寛和 , 石渡明　査読有

6） Middle Paleozoic greenstones of the Hangay region, central Mongolia: Remnants of an accreted oceanic plateau and forearc magmatism. [JOURNAL OF MINERALOGICAL AND PETROLOGICAL SCIENCES, 108 (6),(2013), 303-325]Erdenesaihan, Ganbat Ishiwatari, Akira Orolmaa, Demberel Arai, Shoji Tamura, Akihiro　査読有

総説・解説記事（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1） 欧州地球科学連合（EGU）2013 年総会参加見聞記.［日本地質学会日本地質学会 News, 16 (5), (2013), 15-16］石渡明 , 荒井章司 . 川幡穂高 . 宮下純夫 . 安間了 , 山路敦 , 石塚治

2) 地球深部探査船「ちきゅう」プラモデル（紹介）.［日本地質学会日本地質学会 News, 16 (6), (2013), 7-7］石渡明
3) 東海道五十三次と地震　津波　噴火.［日本地質学会 News, 16 (8), (2013), 6-7］石渡明
4) 明治時代の地学普及書を読む：「日本風景論」と「地人論」(本の紹介).［日本地質学会日本地質学会 News, 16 (10), (2013), 8-9］石渡明
5) 第 2 回 G-EVER 国際シンポジウム　第 1 回 IUGS　日本学術会議国際ワークショップ（仙台、2013.10.19-20）参加報告.［日本地質学会日本地質学会 News, 16(11), 47-48., 16 (11), (2013), 47-48］石渡明
6) 大韓地質学会 2013 年大会（済州島，2013.10.23-25）公式訪問の報告.［日本地質学会日本地質学会 News, 16 (12), (2013), 5-6］石渡明
7) 日本地質学会会長 2014 年年頭あいさつ.［日本地質学会日本地質学会 News, 17 (1), (2014), 2-3］石渡明
8) 福井県大島半島北部、台場浜の蛇紋岩について.［日本地質学会日本地質学会 News, 17 (1), (2014), 10-11］石渡明
9) 日本地質学会の 60, 75, 100 周年記念誌を読む：125 周年に向けて。［日本地質学会日本地質学会 News, 17 (3), (2014), 4-5］石渡明

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

本年度は科学研究費補助金基盤研究(C)の研究課題「日本の古生代オフィオライトの多様性と沈み込み帯プロセス」の 3 年間の最終年度として、東北地方の北部北上帯の緑色岩ならびに砂岩、福島県の阿武隈帯の超苦鉄質岩、岐阜県美濃帯の緑色岩の地質学的、岩石学的、地球化学的研究を行い、それらの比較対象としてモンゴルの付加体緑色岩、エチオピアやロシアの巨大火成岩区の火山岩、宮城県内の新生代火山岩（岩沼､石越)の研究も行って､多くの学会講演および数編の論文発表を行うことができた。また､私が会長を務める日本地質学会(会員約 4000 人)の学術大会が東北大学川内キャンパスで 9 月 14 ～ 16 日に行われ､16 日に国際シンポジウム「環太平洋オフィオライト：沈み込み、付加作用とマントルプロセス」を組織し、米国とロシアからの 3 人の外国人研究者と私を含む 7 人の第 1 線の研究者によるシンポジウムを成功させた。そしてこの会期中及び直後の 17 ～ 18 日には地質巡検（調査旅行）が行われ、私は仙台市内のアウトリーチ巡検および北上山地のオフィオライト巡検を立案するとともに、案内書の共同執筆を行い、共同案内者としてそれらに参加した。今年度の研究活動の中で明らかになったこととして、地球内部の大規模な運動やマグマ活動を明らかにする上でプルーム型オフィオライトの重要性が一層強まったことがある。2013 年 12 月に印刷された我々のモンゴルのプルーム型オフィオライト（緑色岩）に関する論文に記述

されているように、日本に限らず地球上のどの造山帯においても、付加体緑色岩は海洋底の通常の海洋地殻や小規模な海山（海底火山）が沈み込み帯で付加したものではなく、現在のシャツキー海台やオントンジャワ海台のような大規模なマグマ活動の産物つまり巨大火成岩区 (LIP) の破片である可能性が高くなった。同様の岩石は北部北上帯からも見出されており、これについては今後論文化するつもりである。また、火山岩については、これまで成因がよく研究されていなかった板状節理について、宮城県岩沼市の安山岩の採石場における節理や分結脈の研究から、溶岩の冷却過程でまだ全体が固結していない高温の段階で板状節理が形成され、その中に残りのマグマが入り込んで分血脈が形成され、その後で柱状節理が形成されるということがわかった。これについては英語論文を投稿中である。

今年度の受賞としては、日本地質学会の公式英文誌 Island Arc に 2011 年に印刷されたエチオピアの Dereje Ayalew 氏との共著論文が、同誌の最多ダウンロード賞（同誌の論文中で 2012 年に最も多くダウンロードされた論文に贈られる）を受賞した。

この他、日本地質学会会長、日本地球惑星科学連合 2013 年大会委員長、日本鉱物科学会評議員、日本地球掘削科学コンソーシアム IODP 部会長、文部科学省の科学技術・学術審議会専門委員などとして学会の運営や関連分野の学術の発展に貢献したほか、原子力規制委員会の原子力発電所敷地内破砕帯調査の報告書のピアレビュー会合の座長を務めた。

学内では総長特別補佐として「里見ビジョン」の策定に貢献し、副センター長として本センターの運営に貢献した。2013 年 10 月の片平まつりでは海洋研究開発機構と当研究室が協力して IODP 関係の展示と講演会を行い、好評を博した。

平野　直人　　HIRANO Naoto　　准教授

生年月日 ／ 1973 年 08 月 28 日

東北アジア研究センター基礎研究部門地球化学研究分野

出身学校

山形大学理学部地球科学科 1996 年卒業

出身大学院

筑波大学大学院博士課程地球科学研究科 2001 年修了

取得学位

博士（理学）

略歴

2001 年〜 2002 年　東京大学海洋研究所
2002 年〜 2004 年　東京大学地震研究所
2002 年〜 2006 年　東京工業大学理学部・理工学研究科
2006 年〜 2007 年　カリフォルニア大学スクリプス海洋研究所
2007 年〜 2008 年　東京大学理学部地殻化学実験施設
2008 年〜 2008 年　金沢大学フロンティアサイエンス機構
2008 年〜現在　東北大学東北アジア研究センター

研究経歴

1995 年〜 2002 年　マリアナ海溝に沈み込む海山の年代層序
1996 年〜 2003 年　房総半島南部嶺岡帯の玄武岩類による第三紀プレート配置の復元
2000 年〜現在　環伊豆衝突帯のオフィオライト岩類によるプレート配置の復元
2001 年〜現在　新種の火山・プチスポットの成因
2002 年〜現在　西太平洋プレート上の海山群の年代学

所属学会

日本鉱物科学会、日本地球化学会、日本地質学会

学会活動

日本地球化学会　評議員　2010 年〜 2011 年
日本地球化学会　広報委員　2012 年〜現在

専門分野

地球宇宙化学、岩石・鉱物・鉱床学、地質学、固体地球惑星物理学

研究課題

太平洋プレート上の新種の火山・プチスポット海底火山
新種の火山から放出される地球の炭素循環
沈み込むプレートの変形と火山発生

研究キーワード

火山・プレート・玄武岩・海山・太平洋

学外の社会活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

清滝小学校 6 年生依頼授業（小中高との連携） 2013 年 10 月

外部機関における活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

日本掘削科学コンソーシアム IODP 部会執行部執行委員　2013 年 04 月～現在

オープンキャンパス・研究所公開等（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

講演会：地球深部探査船「ちきゅう」が解き明かす東北沖地震の謎（企画）2013 年 10 月

担当授業科目（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

（全学教育）
地球物質科学 2013 年－ 2013 年
（学部教育）
フィールドセミナー I
地球と物質のダイナミックス
同位体地球科学
地球の科学

国際会議　発表・講演（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

Mantle structure below the petit-spot[Goldschmidt2013]（2013 年 8 月 25 日～ 2013 年 8 月 30 日，イタリア，Florence）口頭（一般）

国内会議　発表・講演（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

フレンチポリネシア海域の海底火山探索［日本地球惑星科学連合 2013 年大会］（2013 年 5 月 19 日～ 2013 年 5 月 24 日，Chiba）口頭（一般）

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

（挑戦的）萌芽研究　2012 年 4 月～ 2014 年 3 月
［巨大地震後の太平洋プレート応力場改変の実体と火山活動］

その他の競争的資金獲得実績（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

東レ科学技術研究助成　2012 年 4 月～ 2015 年 3 月
［新種の火山から放出される二酸化炭素と地球の炭素循環］

研究論文（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1） Petit-spot lava fields off the central Chile trench induced by plate flexure. [Geochemical Journal, 47 (2), (2013), 249-257] Naoto Hirano, Shiki Machida, Natsue Abe, Tomoaki Morishita, Akihiro Tamura, Shoji Arai　査読有

2） 仙台付近の墓石転倒率調査結果.［東日本大震災を分析する，第 1 巻，地震　津波のメカニズムと被害の実態（明石書店），(2013)，263-276］石渡明，宮本毅，平野直人　査読無

3） Mantle structure below the petit-spot. [Mineralogical Magazine, 77 (5), (2013), 1302-1302] Naoto Hirano, Junji Yamamoto, Satoshi Okumura　査読無

4） Carbon dioxide emission to Earth's surface by deep-sea volcanism. [Geology, 41 (11), (2013), 1167-1170] Satoshi Okumura, Naoto Hirano　査読有

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

地球上の新型火山・プチスポット海底火山（Hirano et al., 2006, *Science*）が海底で放出する二酸化炭素（CO_2）量を見積もるために、昨年度溶岩中の CO_2 濃度の分析と脱ガス前の濃度の見積もりを行った。CO_2 含有量は、深海玄武岩溶岩の急冷ガラス部を測定した。測定は 2013 年度購入・設置した LECO 社製の炭素硫黄分析装置も使用した。それらデータと溶岩全体の発泡度から予想されるアルカリ玄武岩マグマ中の CO_2・水の多成分脱ガス過程（Papale et al., 2006）と照らし合わせ、マグマ発生時の CO_2 量を見積もった。その結果、CO_2 および H_2O の重量でそれぞれ、5 ～ 10％および 1 ～ 1.1％含有されていることが判明した。この値は地球上の火山の様々なマグマと比べても異常な CO_2 量であり、プチスポット火山の存在量からは、現在の世界の全火山の CO_2 放出量の 10％にも達することが見積もられる。本成果は Geology に掲載された（Okumura & Hirano, 2013, *Geology*）。この研究成果が掲載された学術誌は、専門誌にもかかわらずインパクトファクターが 4 を超えており、本研究内容がそれだけ注目すべき内容であることを物語っている。更に、8 月にイタリアのフィレンツェで行われた国際学会 Goldschmidt 2013 において口頭発表を行った（Hirano et al., 2013, *Mineral. Mag.*）。口頭発表終了後、米国スミソニアン博物館の Cottrell, Elizabeth 博士が興味を示し、プチスポット溶岩の化学測定に関する共同研究を開始した。また、プチスポット火山はその特性から世界の海洋底に存在している可能性があるが、2013 年度報告したチリ海溝沖のプチスポット火山に関する研究は、新種の火山・プチスポットが世界的に普遍である事を証明する重要な報告となった（Hirano et al., 2013, *Geochem. J.*）。

これらすでにプチスポット火山が発見されている三陸沖太平洋とチリ海溝沖以外の他の海域および陸上でもその存在を探査し、その発生機構を確認する必要がある。これ

に伴い、根室半島や房総半島、静岡県中部など野外調査もあわせて進めているが、同様にコスタリカ付加体（Buchs et al., 2013）やジャワ海溝（Taneja et al., 2014）、モンゴル付加体（Ruppen et al., 2014）、グリーンランド南方海域（Uenzelmann-Neben et al., 2012）など、世界各地の研究者によって海底、陸上から続々と同様の火山が報告されており、プチスポット火山に関する論文（Hirano et al., 2006; 2008; 2013; Hirano, 2011）の各被引用率が特に上昇した年であった。

次年度へ引き続く研究課題としては、H_2O と CO_2 成分を付加した溶岩の溶融実験（複数相飽和実験）と、2014 年度 4 月に施行が予定されているプチスポット調査航海が挙げられる。溶融実験では、マグマが生み出された場所（アセノスフェア）のマントルの化学組成を見積もる予定であるが、これによって地球全体（マントル〜プレート〜海洋〜大気）の炭素循環が明らかとなり、全地球の炭素循環や内部構造の議論にも新たな見解を与えることが期待される。2014 年度 4 月の相馬沖日本海溝〜アウターライズにおける航海では、「しんかい 6500」による潜航調査が計画されており、溶岩の形態観察、無数に存在するプチスポット火山の分布とプレート変形構造との関係を明らかにする目的で行われる。さらなる成果を期待している。

後藤　章夫　　GOTO Akio　　助教

生年月日 ／ 1966 年 06 月 15 日

東北アジア研究センター基礎研究部門地球化学研究分野

出身学校

北海道大学・理学部・地球物理 1990 年卒業

出身大学院

北海道大学・理学研究科・地球物理学博士課程 1997 年修了

取得学位

博士（理学）北海道大学

略歴

1999 年～ 2006 年　東北大学東北アジア研究センター　助手
2007 年～現在　　東北大学東北アジア研究センター　助教（職階名変更による）

研究経歴

1990 年～現在　マグマレオロジーの実験的研究
1999 年～現在　爆発的火山噴火の実験的研究
2003 年～現在　火山無人探査システムの開発
2006 年～現在　爆発的火山噴火の観測

所属学会

日本火山学会、日本鉱物科学会、日本地球惑星科学連合、American Geophysical Union

専門分野

火山学

研究課題

マグマのレオロジー
火山爆発

研究キーワード

マグマ、レオロジー、火山、爆発

担当授業科目（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

（全学教育）
自然科学総合実験　2004 年～現在

(学部教育)

夏期フィールドセミナー　1999 年～現在

地球惑星物質科学実習Ｖ　2007 年～現在

野外調査演習　2012 年～現在

フィールドセミナーⅠ　2012 年～現在

(その他)

Dynamics of the Earth　2013 年～ 2014 年

国際会議　発表・講演（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

Viscosity measurements of crystal-bearing natural lava samples from Unzen volcano, Japan[IAVCEI 2013 General Assembly]（2013 年 7 月 20 日～ 2013 年 7 月 24 日，日本国，鹿児島）ポスター（一般）

国内会議　発表・講演（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

無人火山探査移動観測ステーション “MOVE” 開発の総括［日本地球惑星科学連合 2013 年大会］(2013 年 5 月，千葉）口頭（一般）

雲仙普賢岳平成溶岩の粘性係数測定［日本火山学会秋季大会］(2013 年 10 月) 口頭 (一般)

その他の競争的資金獲得実績（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

共同研究費　2013 年 4 月～ 2014 年 3 月

［溶岩流試料の室内実験による粘性係数測定と，野外観測値との比較に基づく，溶岩流流動機構の解明］

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

雲仙普賢岳平成噴火では、ローブ溶岩の粘性係数が観測から 0.9－4.2×10^{10} Pa s と推定されている（福井ほか、1991；須藤ほか、1993)。一方、Goto (1999) は合成した石基ガラスの粘性係数を測定し、800℃で 4×10^{12} Pa s、900℃で 4×10^{10} Pa s の値を得ている。斑晶と石基鉱物を合わせた結晶度(約 50%)を考えると、石基ガラス中の水(0.2－0.6%；Sato, 1996）による粘性低下を考慮しても、観測から求められた粘性係数は低すぎ、ローブ溶岩の運動はニュートン流動では説明できない。ローブ溶岩の運動メカニズムを解明するため、0.057 MPa－10 MPa の間で段階的に応力を変えながら、平成溶岩の粘性係数測定を行った。なお、この研究は東京大学地震研究所との共同研究として行われた。

測定は直径 15 mm または 20 mm の円柱状にくり抜かれたコア試料に対して、840℃、890℃、940℃で、応力を段階的に上げながら行われた。いずれの試料でも時間に対して粘性係数の増加が見られたが、各応力での保持時間が異なる試料で変化の

程度が同じであったことから、脱水や結晶晶出といった熱的影響で起こる現象ではなく、応力に対する粘弾性的な応答であることがわかる。これらの傾向は複数のコア試料で共通で、コアの寸法や向きには関係しない。

各試料の粘性係数には応力依存性が見られるが、840℃で 6.9×10^{11}－9.8×10^{13} Pa s、890℃で 2.8×10^{11}－1.1×10^{13} Pa s、940℃で 1.7×10^{11}－6.6×10^{11} Pa s で、いずれのも石基ガラスの粘性係数（Goto, 1999）より高い。結晶のサスペンジョン効果で粘性が上がっていると見られ、その値は観測から見積もられた粘性係数より明らかに高い。Cordonnier et al. (2009) は同じく平成溶岩の粘性係数を測定し、Hess and Dingwell (1997) のモデルで水の効果を考慮すると、彼らの測定値は観測値と調和的であると述べている。しかし彼らの測定は 940℃－1010℃で行われており、それを噴出時の溶岩で想定される低温（780℃－880℃：Nakada and Motomura, 1999）まで外挿すると、我々の結果よりさらに高い値となる。これらのことから、ローブ溶岩の運動はやはり粘性流動では説明できない。

そこで、観測値をもとにローブ溶岩底面付近のひずみ速度を計算すると 1.6×10^{-5}－3.3×10^{-5} となった。これは石基ガラスの粘性係数が 3.0×10^{12}－6.3×10^{12} Pa s 以上であれば流動による破壊（Webb and Dingwell, 1990）が起こりうることを意味する。石基ガラスがこの粘性係数を持つのはおよそ 790 ～ 810℃で、この値は Nakada and Motomura (1999) の温度範囲に含まれることから、ローブ底部では破壊が起こっていたと考えられ、破壊とその面の滑りが主な移動メカニズムと考えられる。

宮本　毅　　MIYAMOTO Tsuyoshi　　助教

生年月日 ／ 1970 年 07 月 01 日

東北アジア研究センター基礎研究部門地球化学研究分野

出身学校

東北大学・理学部・地学科地学第二 1993 年卒業

出身大学院

東北大学・理学研究科・地学博士課程 1997 年中退

取得学位

修士（理学）東北大学 1995 年

略歴

1997 年～ 2007 年　東北大学東北アジア研究センター　助手
2007 年～現在　　東北大学東北アジア研究センター　助教

所属学会

日本火山学会、日本鉱物科学会，日本地質学会

専門分野

火成岩岩石学、自然災害科学、火山地質学

研究課題

霧島火山群の地質学的・岩石学的研究
白頭山巨大噴火の火山学的研究
中国・白頭山における火山伝承に関する研究
白頭山の噴火年代に関する研究
火山灰土壌中から小規模噴火の痕跡を読む試み

研究キーワード

火成岩岩石学、火山地質

担当授業科目（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

(全学教育)
自然科学総合実験　2004 年～現在
(学部教育)
野外調査演習　1997 年～現在
地学実験　2007 年～現在

地球物質科学実習Ⅰ　2007 年～現在
地殻岩石学実習Ⅰ　2007 年～現在
地殻岩石学実習Ⅱ　2013 年～現在
岩石学実習Ⅱ　2013 年～現在
フィールドセミナーⅡ　2013 年～ 2013 年

国際会議　発表・講演（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

Magma process and systems of the Kyoho eruption of Shinmoe-dake volcano in Kirishima volcanoes, Japan. [IAVCEI]（2013 年 7 月～ 2013 年 7 月）ポスター（一般）

国内会議　発表・講演（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

十和田火山平安噴火の炭素 14 ウイグルマッチング年代［日本火山学会秋季大会］（2013 年 9 月）口頭（一般）

研究論文（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1)　仙台の大地の成り立ちを知る．［地質学雑誌，v. 119, 補遺 , p. 27-46］宮本毅・蟹澤聰史・根本潤・石渡明，査読有り

2)　仙台付近の墓石転倒率調査結果 .［「東日本大震災を分析する」第 1 巻「地震　津波のメカニズムと被害の実態」，明石書店，(2013)］石渡明　宮本毅　平野直人

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

2013 年度も昨年までに引き続き、主に日本国内において有史以降の火山噴火による噴出物の調査を、地質学的・岩石学的に行った。対象は南九州霧島火山群新燃岳、十和田火山、白頭山（正確には白頭山起源火山灰）を主な対象とした。これら火山の中で新燃岳は、2011 年 3 月に最新の噴火活動を行い、この噴火の噴出物について多くの研究者により噴出物の解析が行われてきた。その結果として噴火開始後 3 年となる本年には 2011 年噴火の噴火モデルが多く提示されてきたが、いずれも今回の噴火のみを対象として結論が得られてきた。これに対し私は 2011 年噴火のひとつ前の噴火である享保噴火（1716-17 年噴火）に注目して噴出物の解析を行い、享保噴火におけるマグマ溜りの情報と噴火モデルの構築を目指してきた。その結果を本年 7 月に開催された IAVCEI2014 で報告したが、これに 2011 年噴出物の解析結果を加えたところ、享保噴火のマグマが 2011 年噴火にも大きく関与していたことが明らかとなり、これまで提出されてきた噴火モデルでは 2011 年の噴火は単純には説明できない可能性がでてきた。この結果は今後の噴火を占ううえでも重要なことであり、また、ある意味当たり前のことではあるが、個々の火山の噴火を火山の歴史としてとらえていくことの重要性を再確認できたと考えられる。

本年 9 月に日本地質学会が仙台で開催された。地質学会では学会とあわせて主に会

員向けの巡検が行われるが、今回学会としては初となるアウトリーチ巡検が実施された。私はアウトリーチ巡検の企画・実施を担当し、小学生からプロ研究者までバラエティに富んだ参加者となった巡検を盛況の内に終えることができた。巡検は仙台市内の身近に隠れた火山噴出物を対象としたが、この準備も兼ねて前年度より仙台地域の地質の再調査・検討を開始した。手始めとした約 350 万年前に仙台市北部からもたらされたとされる大規模火砕流堆積物の噴出源が、仙台市西部であった可能性がでてくるなど、新たな知見が得られつつある。今回のアウトリーチ巡検をきっかけに、一般への情報発信として身近なところの地質情報の見直しを、仙台・松島地域を中心にスタートさせた段階である。

工藤　純一　　KUDOH Jun-ichi　　教授

生年月日 ／ 1955 年 12 月 28 日

東北アジア研究センター基礎研究部門環境情報科学研究分野

出身学校

秋田大学・鉱山学部・金属材料 1980 年卒業

出身大学院

東北大学・工学研究科・金属工学博士課程 1987 年修了

取得学位

工学修士秋田大学 1982 年

工学博士東北大学 1987 年

略歴

1986 年〜 1987 年　東北大学選鉱製錬研究所　助手

1991 年〜 1996 年　東北大学大型計算機センター　助手

1996 年〜 2001 年　東北大学大型計算機センター　助教授

2001 年〜現在　　東北大学東北アジア研究センター　教授

所属学会

電子情報通信学会、情報処理学会、IEEE、画像電子学会

学会活動

IEEE TGARS 論文誌査読員　2004 年〜現在

専門分野

情報システム学（画像処理)、環境動態解析

研究課題

森林火災から発生する二酸化炭素削減研究

シベリア画像データベースシステムの構築

東アジア地域の大気汚染解析

シベリア森林火災検出システムの構築

リアルタイムシベリア環境モニタリングシステム

1 メートル級の衛星画像処理

衛星画像を用いた黄砂の抽出

大規模森林火災の管理による二酸化炭素削減構想

研究キーワード

ノア、MODIS、NPP、画像処理、リモートセンシング、シベリア、森林火災、二酸化炭素削減

行政機関・企業・NPO 等参加（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

NPO 法人シベリア研究所（NPO） 理事長　2006 年 2 月～現在

学内活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

ロシア交流推進室副室長　2009 年 11 月～現在

学友会茶道部部長　2003 年 4 月～現在

評価分析室員　2004 年 4 月～現在

片平　雨宮地区等移転整備専門委員会　2004 年 4 月～現在

学位授与数（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

博士 1 人

担当授業科目（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

（大学院教育）

コンピュータアーキテクチャ特論　1996 年～現在

情報基礎科学ゼミナール　2001 年～現在

情報基礎科学研修 A　2001 年～現在

情報基礎科学 B　2001 年～現在

博士基盤研修　2001 年～現在

博士専門研修 A　2001 年～現在

博士専門研修 B　2001 年～現在

博士ゼミナール　2001 年～現在

広域情報処理論　2013 年～現在

国際会議主催・運営（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

TU-SBRAS-FEBRAS-ISTC Seminar -Indigenous flora and marine fauna of Russia with health promoting ingredients（2013 年 11 月 7 日，日本国，仙台）［主催］実行委員長

TU-SBRAS-FEBRAS-ISTC Seminar Semiconductor: - problems of preparation and characterization of functional materials -（2013 年 11 月 7 日，日本国，仙台）［主催］実行委員長

その他研究活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

森林火災の管理による CO_2 排出量取引構想（フィールドワーク） 2009 年～現在

森林火災から発生する二酸化炭素削減研究ユニット（フィールドワーク） 2011 年～現在

受賞・その他特記事項（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

■報道　PM2.5 列島黄信号（資料提供　新聞　産経新聞）2014 年 2 月

研究論文（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1） 大陸からの越境大気汚染飛来把握のための MODIS データ利用法.［日本リモートセンシング学会 , 33 (4), (2013), 298-30700］「査読有」永谷泉，柳澤文孝，三浦崇史，工藤純一

2） MODIS 画像を利用した越境大気汚染の飛来把握手法の開発.［日本写真測量学会平成 25 年度年次学術講演会発表論文集 , (2013), 145-146］永谷泉，柳澤文孝，三浦崇史，工藤純一

3） A methodology for detecting transboundary air pollution using MODIS data. [Proceedings of the International Symposium on Remote Sensing 2013 (ISRS 2013), (2013), 552-555]「査読有」I. Nagatani，T. Miura，F. Yanagisawa and J. Kudoh

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

研究課題:東アジア地域の大気汚染解析は、工学と理学の学際研究の方法で行った。その結果、発生源が中国大陸であることが確認できた。また、PM2.5 を含む大気汚染物質と黄砂の違いを明瞭に区別し可視化することができ、定性解析のレベルは終了した。今後は定量解析への発展を予定している。また、この研究で博士（情報科学）1 名を輩出した。このテーマは社会的な意義が非常に高く、研究成果の一部は 1 年間に 2 度も全国紙の一面に掲載された。

研究課題：大規模森林火災の管理による二酸化炭素削減構想は、同プロジェクト研究の最終年度のため総括を行い、その成果を 2014 年度の戦略的創造研究推進事業に応募した。

日露学術交流：第 4 回日露学長会議（モスクワ大学開催）の準備を行い、コミュニケ原案を作成した。また、日本人学生 100 名のモスクワ大学派遣事業のプログラム作成をモスクワ大学と共同で行い、実施した。さらに、ノボシビルスク大学や極東連邦大学で開催された日露大学合同説明会の準備やロシア科学アカデミーシベリア支部や同極東支部との共同研究に関する連絡調整、ISTC（国際科学技術センター）を共催としたセミナーの開催等を実施した。G30 事業の終了年度であったが、この 5 年間の取り組み、特にモスクワ大学に設置した東北大学ロシア代表事務所、ならびに、ロシア科学アカデミーシベリア支部に設置した東北大学ロシア代表事務所シベリア支部の

活動を支援したことにより、本学がロシアでのプレゼンス向上に繋がったと理解している。2013 年度は日露学術交流において本学が名実共に日本側のゲートウェイになったと言える。本稿執筆時点では、2014 年度応募の世界展開力強化事業実施計画申請 WG（ロシア）の一員として、その任務にあたっている。

佐藤　源之　　SATO Motoyuki　　教授

生年月日 ／ 1957 年 12 月 15 日

東北アジア研究センター基礎研究部門資源環境科学研究分野

出身学校

東北大学・工学部・通信工学科 1980 年卒業

出身大学院

東北大学・工学研究科・情報工学専攻　博士後期課程 1985 年修了

取得学位

工学博士東北大学 1985 年

略歴

1985 年～ 1989 年　東北大学　助手（工学部）
1988 年～ 1989 年　ドイツ連邦国立地球科学資源研究所
1989 年～ 1990 年　東北大学　講師（工学部）
1990 年～ 1997 年　東北大学　助教授（工学部）
1997 年～現在　　東北大学　教授（東北アジア研究センター）
2008 年～ 2011 年　東北大学　ディスティングイッシュト プロフェッサー
2009 年～ 2013 年　東北大学　東北アジア研究センター センター長

研究経歴

1985 年～ 1990 年　地熱開発のための地下計測技術
1990 年～現在　　地中レーダ（GPR）の開発
1997 年～現在　　合成開口レーダ（SAR）の応用
2000 年～現在　　地表設置型レーダ（GB-SAR）による防災 減災技術
2002 年～現在　　人道的対人地雷検知除去技術に関する研究と現場応用
2005 年～現在　　バイスタティックレーダに関する研究
2008 年～現在　　3DGPR（3 次元地中レーダシステム）を用いた遺跡調査
2012 年～現在　　アレイ型 GPR による震災復興のための社会貢献

所属学会

電子情報通信学会、The Institute of Electrical and Electronics Engineers (IEEE)、物理探査学会、日本地熱学会、資源素材学会、Society of Exploration Geophysicists (SEG)、European Association of Geoscientists & Engineers (EAGE)、Applied Computational Electromagnetic Society、日本文化財探査学会、石油検層学会 (SPWLA)

学会活動

物理探査学会　理事　2003 年～現在
石油検層学会（SPWLA）　理事（日本支部）　2003 年～現在
IEEE Geoscience and Remote Sensing Society 東京支部支部長　2006 年～ 2007 年
IEEE Geoscience and Remote Sensing Society AdCom member　2006 年～ 2010 年
電子情報通信学会　電磁界理論研究会　副委員長　2013 年～現在
IEEE Sendai Chapter　副会長　2014 年～ 2016 年

専門分野

電磁波応用計測、リモートセンシング、地下計測工学

研究課題

ボアホールレーダ
地中レーダ
リモートセンシング
人道的地雷検知除去
合成開口レーダ
地上設置型合成開口レーダ（GB-SAR）
環境計測と防災 減災技術

研究キーワード

地中レーダ、地下計測、リモートセンシング、人道的地雷検知

学外の社会活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

金属鉱業事業団　鉱物資源探査に係る研究会委員（その他）　1995 年 2 月～現在
電子情報通信学会電磁界理論研究会専門委員（その他）　1996 年 10 月～現在
Editorial Board, The International Journal of Subsurface Sensors and Applications （その他）　1999 年 7 月～現在
物理探査学会（その他）　2004 年 5 月～現在
出前授業（小中高との連携）　2008 年 12 月～現在
夢ナビライブ（公開講座）　2012 年 7 月～現在
仙台高専専攻科特別講義（講演会・セミナー）　2013 年 5 月
イノベーション・ジャパン 2013 大学見本市（展示会）　2013 年 8 月
みやぎ県民大学（公開講座）　2013 年 10 月
東北大学イノベーションフェア 2013 in 仙台（展示会）　2014 年 1 月
第 18 回「震災対策技術展」横浜（小中高との連携）　2014 年 2 月

行政機関・企業・NPO 等参加（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

宮城県（地方公共団体） 自然環境保全審議会　委員　2000 年 10 月～現在

（独）石油天然ガス・金属鉱物資源機構（その他） 金属資源探査技術開発研究会　委員　2005 年 4 月～現在

環境省（国） 国内における毒ガス弾等に関する総合調査検討会　委員　2006 年 5 月～現在

（財）原子力環境整備促進　資金管理センター（その他） 地層処分モニタリングシステム検討委員会　委員　2006 年 6 月～現在

オープンキャンパス・研究所公開等（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

片平まつり 2013（公開授業・講演）2013 年 10 月

学内活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

学友会陸上競技部部長　2004 年 4 月～現在

学位授与数（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

博士 1 人

修士 1 人

学士 3 人

担当授業科目（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

(学部教育)

電磁気学 I　1991 年～現在

機械知能・航空研修 I　2004 年～現在

機械知能・航空研修 II　2004 年～現在

卒業研究　2004 年～現在

電磁気学 II　2005 年～現在

(大学院教育)

環境リモートセンシング学　2002 年～現在

地球環境計測学特論　2003 年～現在

地球システム・エネルギー学修士セミナー　2003 年～現在

地球システム・エネルギー学修士研修　2003 年～現在

修士インターンシップ　2003 年～現在

地球システム・エネルギー学概論　2003 年～現在

博士インターンシップ研修　2003 年～現在

地球システム・エネルギー学博士セミナー　2003 年～現在

地球システム・エネルギー学博士研修　2003 年～現在

（他大学）

石巻専修大学（電磁波工学） 1998 年～現在

国際会議　発表・講演（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

Ground Penetrating Radar (GPR) UWB radarFundamentals to applications [IET International radar conferece 2013] (2013 年 4 月 14 日 , 中国 , Xian) 口頭（招待特別）

Microwave Remote Sensing for Environmental Studies in Northeast Asia [International Conference on Remote Sensing of Terrestrial Cover using Synthetic Aperture Radars] (2013 年 6 月 24 日 , ロシア , Ulan Ude) 口頭（基調）

Microwave Imaging Radar for Environmental Studies -Archaeology to Disaster mitigation-[2013 International Workshop on Microwave and Millimeter Wave Circuits and System Technology] (2013 年 10 月 24 日～ 2013 年 10 月 25 日 , 中国 , Chendu) 口頭（基調）

Ground Penetrating Radar (GPR) / UWB radar : Fundamentals to applications [PDC Tutorial course at UESTC] (2013 年 10 月 26 日 , 中国 , Chendu) 口頭（招待特別）

国内会議　発表・講演（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

Measurement of the phase center of UWB antennas for calibration of ground penetrating radar systems［アンテナ・伝播研究会（AP）（第 2 種研）］（2013 年 5 月 31 日，松山）口頭（一般）

電波科学による防災　減災技術［ICT 推進フェア 2013］（2013 年 6 月 20 日，仙台）口頭（招待　特別）

地中レーダー　GPR　による遺跡探査［宮城県文化財保護課研修会］（2013 年 9 月 27 日，仙台）口頭（一般）

宇宙から見た東日本大震災：環境リモートセンシング［宇宙政策セミナー（第 8 回仙台）］（2014 年 1 月 16 日，仙台）口頭（基調）

国内会議主催・運営（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

第 12 回　地下電磁計測ワークショップ

（2013 年 11 月 22 日～ 2013 年 11 月 23 日，仙台）［主催］委員長

その他研究活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

地中レーダによるウランバートルの地下水計測（フィールドワーク） 1990 年～現在

東北アジアにおける電磁波地下計測（フィールドワーク） 1997 年～現在

カンボジアにおける地雷除去活動（フィールドワーク） 2009 年～現在

GB-SAR による宮城県栗原市地滑りモニタリング（フィールドワーク） 2011 年～現在

受賞・その他特記事項（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

フロンティアーズ～明日への挑戦「地雷除去」（出演・執筆　その他　FM 東京） 2013 年 4 月

新型レーダーで迅速化　集団移転など地中文化財調査（資料提供　新聞　河北新報） 2013 年 4 月

震災復興と遺跡調査（出演　執筆　その他　FM 仙台） 2013 年 8 月

くらし☆解説　「“ 掘らずに調べる ” 考古学」(出演 執筆　テレビ　NHK 総合テレビ) 2013 年 11 月

古代の埋葬施設はどこに　NHK「とちぎ 640」（出演 執筆　テレビ　NHK 宇都宮支局） 2014 年 2 月

Grear Gear（出演・執筆　テレビ　NHK　World （NHK 国際放送)） 2014 年 3 月

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

基盤研究(A)　2011 年 4 月～ 2014 年 3 月

［最適空間サンプリングによる地雷検知用レーダイメージングの効率化］

その他の競争的資金獲得実績（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

高度通信・放送研究開発委託開発　2012 年 7 月～現在

［建造物非破壊検査診断技術の研究開発］

高度通信・放送研究開発委託開発　2012 年 8 月～現在

［高度通信・放送研究開発委託開発］

高度通信・放送研究開発委託研究　2012 年 9 月～ 2016 年 3 月

［電磁波を用いた建造物非破壊センシング技術の研究開発］

堤防及び河川構造物（コンクリートまたは鋼構造）の点検　診断の高度化技術研究開発　2013 年 4 月～ 2016 年 3 月

［堤防及び河川構造物の総合的な点検 診断技術の実用化に関する研究開発］

研究論文（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1)　Tsunami damage investigation of built-up areas using multi-temporal spaceborne full polarimetric SAR images. [IEEE Transactions on Geoscience and Remote Sensing, 51 (4), (2013), 1985-1997] Si-Wei Chen and Motoyuki Sato （査読有）

2)　Generalized model-based decomposition for polarimetric SAR data. [IET International Radar Conference,, Xi’ an, China, (2013), 1-5] Si-Wei Chen, Xue-Song Wang, Shun-Ping Xiao, Motoyuki Sato （査読有）

3) New Ground Penetrating Radar System for Quantitative Characterization of Snow and Sea Ice. [Proc. IET International Radar Conference 2013, (2013)] H. Liu, X. Xie, and M. Sato （査読有）

4) Deployment of dual-sensor ALIS for humanitarian demining in Cambodia. [Proc. SPIE, 8709 (87090M), (2013)] Motoyuki Sato, Kazunori Takahashi （査読有）

5) OpenACC を用いた GPU による各種 FDTD 法の高速化評価 . [電子情報通信学会アンテナ・伝播研究会技術報告 , 113 (34), (2013), 21-26] 園田潤，小関勇気，佐藤源之 （査読有）

6) Evaluation of electromagnetic scattering from heterogeneous soils for ground-penetrating radar measurements through a simple modeling. [2013 URSI Commission B Int. Symp. Electromagnetic Theory, (2013), 1011-1014] K. Takahashi, J. Igel, H. Preetz, and M. Sato （査読有）

7) Continuous Observation of Natural-Disaster Affected Areas Using Ground-Based SAR Interferometry. [IEEE Journal of Selected Topics in Applied Earth Observation and Remote Sensing, 6 (3), (2013), 1286-1294] K. Takahashi, M. Matsumoto and M. Sato （査読有）

8) 震災復興に向けたアレイ型 GPR による遺跡調査 . [物理探査学会第 128 回学術講演会論文集 , (2013)] 佐藤源之，高橋一徳 （査読無）

9) Compressive Sensing Applied for Handheld GPR Sensor System for Landmine Detection. [電気学会電磁界理論研究会 , EMT-13-66, (2013)] Riafeni Karlina, Motoyuki Sato （査読有）

10) GPU クラスタを用いた FDTD 法による 3 次元室内電波環境のリアルタイム可視化 . [計算工学講演会論文集 , 18, (2013), 4-4] 園田潤，小関勇気，金澤靖，佐藤源之 （査読無）

11) Uniform polarimetric matrix rotation theory. [Proc. IEEE Int. Geosci. Remote Sens. Symp.,Melbourne, Australia,, (2013), 4166-4169] Si-Wei Chen, Yong-Zhen Li, Xue-Song Wang, Shun-Ping Xiao, Motoyuki Sato （査読有）

12) Coherent scatterer selection based on coherence of interleaved sub-images for atmospheric correction of groundbased synthetic aperture radar interferometry. [IEEE Int. Geoscience and Remote Sensing Symp., (2013), 3891-3894] K. Takahashi, M. Matsumoto, M. Sato （査読有）

13) DETERMINATION OF TUNAMI-AFFECTED AREAS BY POLARIMETRIC SAR. [Proc. IGARSS2013, (2013)] Motoyuki Sato and Si-Wei Chen （査読有）

14) 3D GPR survey of an ancient tomb using a self-tracking total station. [Near Surface Geophysics Asia Pacific Conf., (2013)] K. Takahashi, M. Sato （査読有）

15） Development of Array GPR for Archaeological Survey and Disaster Mitigation. [Near Surface Geophysics Asia Pacific Conference, (2013)] Jie Chen, Hai Liu, Kazunori Takahashi, Motoyuki Sato （査読有）

16） ADVANCED GPR FOR ARCHAEOLOGICAL SURVEY. [Proc. IGARSS2013, (2013)] Motoyuki Sato, Kyoji Doi and Kazunori Takahashi （査読有）

17） 深度センサを用いた高速な FDTD 実環境数値モデルの構築 . [電子情報通信学会エレクトロニクスシミュレーション研究会技術報告 , 113 (143), (2013), 189-194] 今野海航　園田潤，金澤靖，佐藤源之 （査読無）

18） Non-destructive Inspection of Buildings using Radar Polarimetry. [Proc. Asian Pacific SAR conference, (2013)] Si-Wei Chen, Masato Ohki, Masanobu Shimada, Motoyuki Sato （査読有）

19） GPU クラスタを用いた FDTD 並列計算による室内実環境 3 次元ポインティングベクトル分布の高速可視化 . [電子情報通信学会ソサイエティ大会講演論文集 , CS-1-4, (2013), S6-S7] 園田潤，小関勇気，金澤靖，佐藤源之 （査読無）

20） GPU クラスタを用いた MW-FDTD 法による雷放電電磁界の実モデル高速解析 . [電気学会基礎・材料・共通部門大会講演論文集 , (2013)] 園田潤, 小関勇気, 佐藤源之, 本間規泰 （査読無）

21） Unique decomposition of a POLSAR coherency matrix using a generalized scattering model. [Proc. APSAR2013, (2013)] Shunichi Kusano, Kazunori Takahashi, Motoyuki Sato （査読有）

22） Non-destructive Inspection of Buildings using Radar Polarimetry. [Proc. APSAR2013, (2013)] Saika Okamura, Kazunori Takahashi, Motoyuki Sato（査読有）

23） Soil Moisture and Biomass Retrieval using ALOS/PALSAR Data. [Proc. APSAR 2013, (2013)] Christian N. Koyama, Motoyuki Sato （査読有）

24） Long-term Landslide Monitoring by GB-SAR Interferometry in Kurihara Japan. [Proc. APSAR2013, (2013)] Masayoshi Matsumoto,Kazunori Takahashi and Motoyuki Sato （査読有）

25） 偏波 GB-SAR によるコンクリート壁内部損傷の非破壊センシングのための基礎実験 . [平成 25 年度電気学会 基礎・材料・共通部門大会 , (2013), 145] 高橋一徳 , 岡村菜花 , 佐藤源之 （査読無）

26） Design of a GPR Antenna Array for Asphalt Pavement Inspection. [Proc. APSAR 2013, (2013)] H. Liu and M. Sato （査読有）

27） Monitoring of displacement on a landslide slope by GB-SAR interferometry. [2013 Asia-Pacific Conference on Synthetic Aperture Radar, (2013)] K. Takahashi, M. Matsumoto, and M. Sato （査読有）

28） 東日本大震災の行方不明者捜索における地中レーダの適用 . [電子情報通信学会宇宙 航行エレクトロニクス研究会技術報告 , SANE2013-56, (2013), 13-18] 園田潤, 渡邉学, 米澤千夏, 佐藤源之 （査読無）

29） Determination of the phase center position and delay of a Vivaldi antenna. [IEICE Electronics Express, (2013), 1-7] H. Liu, M. Sato （査読有）

30） 20GHz 帯 GB-SAR による構造物内部計測の基礎実験 . [電子情報通信学会宇宙航行エレクトロニクス研究会技術報告 , (2013)] 高橋一徳, 劉海, クリスチャン小山, 佐藤源之 （査読無）

31） Fundamental study on high-resolution inspection of damaged wooden building by synthetic aperture radar. [IEICE EMT 2013, Aomori, (2013)] H. Liu, C. N. Koyama, K. Takahashi, and M. Sato （査読無）

32） 電磁波を用いた建造物非破壊センシング技術の研究開発 ～ 25 年度中間成果～ . [電子情報通信学会宇宙航行エレクトロニクス研究会技術報告 , 113 (309), (2013), 25-30] 佐藤源之 高橋一徳 劉海 クリスチャンコヤマ （査読無）

33） Archaeological Survey of Dangoyama Kofun by 3DGPR. [Proceedings of the 11th SEGJ International Symposium,, (2013)] Yi, L., Takahashi, K., and Sato, M （査読有）

34） Development of an Array GPR System for Large-scale Archeological Investigations. [Proc. 11th SEGJ International Symposium, (2013)] H. Liu, J. Chen, L. Zou, K. Takahashi, and M. Sato （査読有）

35) Imaging of buried structures by a GPR combined with a self-tracking total station. [The 11th SEGJ International Symposium, (2013)] K. Takahashi and M. Sato （査読有）

36） Fundamental study of observation of landslide by GB-SAR observation; case study at Aratozawa. [電子情報通信学会宇宙航行エレクトロニクス研究会技術報告 , 113 (309), (2013), 19-24] Lilong Zou Kazunori Takahashi Motoyuki SATO （査読無）

37） 20GHz 帯 GB-SAR による構造物内部計測の基礎研究 . [電子情報通信学会宇宙航行エレクトロニクス研究会技術報告 , 113 (309), (2013), 55-60] 高橋一徳 , 劉海 , クリスチャンコヤマ , 佐藤源之 （査読無）

38） Investigation on 3D migration of non-gridded GPR data. [電子情報通信学会宇宙航行エレクトロニクス研究会技術報告 , 113 (309), (2013), 87-92] Yi, L., Takahashi, K., and Sato, M （査読無）

39） 墳丘の地中レーダによる遺跡調査 . [電子情報通信学会宇宙航行エレクトロニクス研究会技術報告 , 113 (309), (2013), 93-98] 佐藤源之, 高橋一徳 （査読無）

40） 震災復興を促進するアレイ型地中レーダによる遺跡計測 . [電子情報通信学会宇宙航行エレクトロニクス研究会技術報告 , 113 (309), (2013), 81-86] 高橋一徳 , 劉海 , 佐藤源之 （査読無）

41） Fundamental survey on the microwave soil moisture measurement. [Proc. 2013 International Workshop on Terrestrial Change in Mongolia, 113 (309), (2013), 19-24] Motoyuki SATO, Christian N. KOYAMA （査読有）

42） GPU クラスタを用いた MW-FDTD 法による大規模数値地形モデルにおける高速雷放電電磁界解析 . [電子情報通信学会環境電磁工学研究会技術報告 , EMCJ2013-112, (2014), 7-11] 園田潤，小関勇気，佐藤源之，本間規泰 （査読無）

43） Measurement of the phase center of UWB antennas for calibration of ground penetrating radar systems. [電子情報通信学会アンテナ 伝搬研究会技術報告 , (2014), 1-6] H. Liu, J. Chen, and M. Sato （査読無）

44） GPR/SAR による土壌水分計測 . [土壌水分ワークショップ論文集 , (2014), 11-17] 佐藤源之，クリスチャンコヤマ （査読有）

45） Adaptive model-based polarimetric decomposition using PolInSAR coherence. [IEEE Transactions on Geoscience and Remote Sensing, 52 (3), (2014), 1705-1718] Si-Wei Chen, Xue-Song Wang, Yong-Zhen Li and Motoyuki Sato （査読有）

46） General polarimetric model-based decomposition for coherency matrix. [IEEE Transactions on Geoscience and Remote Sensing, 52 (3), (2014), 1843-1855] Si-Wei Chen, Xue-Song Wang, Shun-Ping Xiao and Motoyuki Sato （査読有）

47） 地中レーダと航空機搭載レーダを用いた大規模自然災害における効率的な捜索支援手法の開発 . [電子情報通信学会総合大会講演論文集 , B-2-51, (2014)] 園田潤，渡邉学，米澤千夏，佐藤源之 （査読無）

48） GPU クラスタによる FDTD MW-FDTD 法の高速化と大規模 実問題電磁界数値シミュレーションへの応用 . [電子情報通信学会総合大会講演論文集 , CS-2-8, (2014)] 園田潤，小関勇気，佐藤源之 （査読無）

49） Topographic Correction of Elevated GPR. [IEEE Journal of Selected Topics in Appied Earth Observation and Remote Sensing, 7 (3), (2014), 799-804] Xuan Feng, Motoyuki Sato, Cai Liu, Kazunori Takahashi and Yan Zhang （査読有）

50） Measurement of Dielectric Permittivity and Thickness of Snow and Ice on a Brackish Lagoon Using GPR. [IEEE Journal of Selected Topics in Appied Earth Observation and Remote Sensing, 7 (3), (2014), 820-827] Hai Liu, Kazunori Takahashi and Motoyuki Sato （査読有）

51） 防災 減災のためのレーダ利用 . [電子情報通信学会総合大会講演論集 , BI-3-12,

(2014)] 佐藤源之 （査読無）

52） 光電界センサを利用したイメージングレーダ . [電子情報通信学会総合全国大会論文集 , BCI-2-5, (2014)] 佐藤源之 （査読無）

総説・解説記事（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1） 地表設置型合成開口レーダーによる建造物非破壊センシング . [オーム社 OHM, 100 (12), (2013), 10-11] 佐藤源之

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

本年度は科研費を中心とする地雷除去活動の展開、NICT 受託研究による被災木造建造物の非破壊検査技術、地中レーダによる震災復興の促進という 3 つの研究を主軸に、数多くの研究を推進した。これ以外にも、GB-SAR による地滑りモニタリング、衛星・航空機 SAR の利用など多角的な研究を合わせて行ってきた。

(被災木造建造物の非破壊検査技術)

社会インフラの老朽化と、それのための検査技術に対する要求は急激な高まりを見せている。こうした問題を解決するためにレーダ技術を利用するための研究を続けている。木造建造部に限らず、コンクリート構造物などへの適用をめざしている。

(震災復興のための地中レーダー（GPR）の利用)

地雷除去活動の展開、と被災木造建造物の非破壊検査技術などはレーダ装置の開発と利用手法に関する研究であるのに対して、地中レーダによる震災復興の促進は被災地を中心とした遺跡調査を実施する実践的な研究活動である。この研究は、将来的に東北アジア研究センターが文化財の保護ならびに活用を軸とした研究を展開することを期待し、また私自身がこうした研究を推進するために進めた事業である。まず、総長裁量経費として、遺跡調査推進のための活動費を獲得し、これによって、半年間助教を 1 名雇用することができた。また、センター制度であるプロジェクト研究ユニットとして「減災をめざした電波科学研究ユニット」を新たに組織し、奈良文化財研究所などとの連携を強めると共に、宮城県文化財保護課などを通じた被災地での活動を展開した。こうした活動は、すべてセンター外の資金を獲得して行い、センター経費は全く使用していない。

以下に、本活動に関する平成 25 年度の出張実績を掲げる。震災復興に直接関わらない遺跡調査についても、技術開発の観点から有用と判断した場合、積極的に協力している。

1	9 月 11 日		宮城県東松島市	野蒜築港 GPR

2	9 月 12 日		福島県須賀川市	団子山古墳見学
3	9 月 18 日	9 月 20 日	福島県南相馬市	上渋佐原田遺跡 (調査区東側）GPR
4	9 月 26 日	9 月 27 日	福島県南相馬市	五畝田犬這遺跡 GPR
5	10 月 2 日	10 月 4 日	福島県南相馬市	南才ノ上遺跡 GPR
6	10 月 7 日	10 月 8 日	栃木県小山市	琵琶塚古墳 GPR
7	10 月 9 日	10 月 10 日	福島県南相馬市	南才ノ上遺跡 GPR
8	10 月 18 日		福島県南相馬市	南相馬市教育委員会文化財課
9	11 月 4 日	11 月 6 日	栃木県小山市	琵琶塚古墳 3DGPR
10	11 月 7 日		宮城県東松島市	野蒜築港 GPR
11	11 月 7 日		福島県南相馬市	上渋佐原田遺跡 (調査区西側）GPR
12	11 月 12 日	11 月 13 日	福島県南相馬市	上渋佐原田遺跡 (調査区西側）GPR
13	11 月 19 日		福島県福島市	福島県教育庁
15	11 月 21 日		福島県南相馬市	上渋佐原田遺跡
16	11 月 26 日		福島県南相馬市	上渋佐原田遺跡 (調査区西側）GPR
17	11 月 27 日		福島県南相馬市	上渋佐原田遺跡
18	12 月 2 日	12 月 4 日	埼玉県行田市	さきたま古墳群 (鉄砲山古墳）3DGPR

東北地方では、これまで震災復興活動に人的資源を集中してきたため、学術的な調査はあるていど後回しになってきた。震災後 3 年以上が経過し、今後は通常の学術的な遺跡調査の件数も増加すると予想している。

(レーダーによる地滑りモニタリング)

東北大学は栗原市と連携協力協定を締結し、GB-SAR による地滑り計測手法の有効性を検証する目的で、荒砥沢地区をモデルケースとしたリアルタイム連続モニタリングシステムを 2011 年 11 月に設置し、2012 年 6 月より、現在に至るまで連続計測を開始している。社会実装の実例として、国内でも長期的な GB-SAR の利用例はなく、自治体との連携という点でも極めてユニークな研究であると考えている。

(人道的地雷除去活動)

2009 年以来、引き続き地中レーダー装置（ALIS）を利用した地雷除去はカンボジア地雷除去センター（CMAC）に 2 台の ALIS を貸与し、6 人のチームでカンボジア実地雷原における活動を継続している。本活動は、在カンボジア日本大使館、JICA などとも連携しながら、政府開発援助（ODA）プログラムとして日本からの支援が行えることを目標としている。

(東北アジアの環境計測)

ロシア科学アカデミー研究者や、モンゴル科学技術大学研究者らと共に、モンゴル、

シベリア地域の衛星による広域環境計測と、現場検証試験を融合する研究の準備を進めている。このために 2013 年 9 月、モンゴルからロシアの国境をまたいだ地域の調査旅行並びに関係する研究機関との折衝などを進めた。レーダ技術による土壌水分計測を主軸とした研究を推進している。

高橋　一徳　　TAKAHASHI Kazunori　　助教

生年月日 ／ 1978 年 11 月 30 日

東北アジア研究センター基礎研究部門資源環境科学研究分野

出身学校

山形大学・工学部・機械システム工学科 2001 年卒業

出身大学院

東北大学・工学研究科修士課程 2003 年修了

東北大学・環境科学研究科博士課程 2006 年修了

取得学位

修士（工学）東北大学 2003 年

博士（学術）東北大学 2006 年

略歴

2006 年～ 2006 年　東北大学東北アジア研究センター　助手

2007 年～ 2009 年　ドイツ連邦材料試験研究所　学術研究員

2009 年～ 2011 年　ライプニッツ応用地球物理学研究所　学術研究員

2011 年～ 2013 年　東北大学大学院理学研究科　助教

2013 年～現在　　東北大学東北アジア研究センター　助教

研究経歴

2006 年～ 2006 年　地中レーダと金属探知機を合わせた地雷探知機の開発

2007 年～ 2009 年　超音波探傷による非破壊検査の信頼性解析に関する研究

2009 年～現在　　土壌特性が地中レーダに及ぼす影響に関する研究

所属学会

IEEE、Society of Exploration Geophysicists、電子情報通信学会、物理探査学会

学会活動

APSAR2013 実行委員会　Overseas Correspondence　2012 年～ 2013 年

電気学会電磁界理論技術委員会　委員　2014 年～現在

電子情報通信学会電磁会理論研究専門委員会　幹事補佐　2014 年～現在

専門分野

電磁波計測

研究課題

土壌特性の解析による地雷検知センサ性能評価とその応用

研究キーワード

電磁波計測、環境計測、レーダ

国際会議　発表・講演（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

Evaluation of metal detector pinpointing accuracy under field conditions [The 11th International Symposium Humanitarian Demining] (2013 年 4 月 23 日～ 2013 年 4 月 25 日 , クロアチア , Sibenik) 口頭（一般）

Lessons learned from the deployment of dual sensor ALIS for humanitarian demining in Cambodia [The 11th International Symposium Humanitarian Demining] (2013 年 4 月 23 日～ 2013 年 4 月 25 日 , クロアチア , Sibenik) 口頭(一般)

Evaluation of electromagnetic scattering from heterogeneous soils for ground-penetrating radar measurements through a simple modeling [2013 URSI Commission B International Symposium on Electromagnetic Theory] (2013 年 5 月 20 日～ 2013 年 5 月 24 日 , 日本国 , Hiroshima) 口頭（一般）

3D GPR survey of an ancient tomb using a self-tracking total station [Near Surface Geophysics Asia Pacific Conference] (2013 年 7 月 17 日～ 2013 年 7 月 19 日 , 中国 , Beijing) 口頭（一般）

Development of array GPR for archaeological survey and disaster mitigation [Near Surface Geophysics Asia Pacific Conference] (2013 年 7 月 17 日～ 2013 年 7 月 19 日 , 中国 , Beijing) 口頭（一般）

Coherent scatterer selection based on coherence of interleaved sub-images for atmospheric correction of ground-based synthetic aperture radar interferometry [IEEE International Geoscience and Remote Sensing Symposium 2013] (2013 年 7 月 21 日～ 2013 年 7 月 26 日 , オーストラリア , Melbourne) 口頭（一般）

Advanced GPR for archaeological survey [IEEE International Geoscience and Remote Sensing Symposium 2013] (2013 年 7 月 21 日～ 2013 年 7 月 26 日 , オーストラリア , Melbourne) ポスター（一般）

Monitoring of displacement on a landslide slope by GB-SAR interferometry [2013 Asia-Pacific Conference on Synthetic Aperture Radar] (2013 年 9 月 23 日～ 2013 年 9 月 27 日 , 日本国 , Tsukuba) 口頭（一般）

Unique decomposition of a POLSAR coherency matrix using a generalized scattering model[2013 Asia- Pacific Conference on Synthetic Aperture Radar] (2013 年 9 月 23 日～ 2013 年 9 月 27 日 , 日本国 , Tsukuba) 口頭（一般）

Long-term landslide monitoring by GB-SAR interferometry in Kurihara, Japan[2013 Asia-Pacific Conference on Synthetic Aperture Radar] (2013 年 9 月 23 日～ 2013 年 9 月 27 日 , 日本国 ,Tsukuba) 口頭（一般）

Non-destructive inspection of buildings using radar polarimetry [2013 Asia-Pacific Conference on Synthetic Aperture Radar] (2013 年 9 月 23 日～ 2013 年 9 月 27 日 , 日本国 , Tsukuba) 口頭（一般）

Imaging of buried structures by a GPR combined with a self-tracking total station [The 11th SEGJ International Symposium] (2013 年 11 月 18 日～ 2013 年 11 月 21 日 , 日本国 , Yokohama) 口頭（一般）

Archaeological survey of Dangoyama Kofun by 3DGPR [The 11th SEGJ International Symposium] (2013 年 11 月 18 日 ～ 2013 年 11 月 21 日 , 日本国 , Yokohama) 口頭（一般）

Development of an array GPR system for large-scale archaeological investigations [The 11th SEGJ International Symposium] (2013 年 11 月 18 日～ 2013 年 11 月 21 日 , 日本国 , Yokohama) 口頭（一般）

Fundamental study on measurement of concrete wall structure by GB-SAR[The 11th SEGJ International Symposium] (2013 年 11 月 18 日～ 2013 年 11 月 21 日 , 日本国 , Yokohama) 口頭（一般）

国内会議　発表・講演（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

3 次元 GPR 浅部地盤探査解析システム検討業務報告［物理探査学会第 128 回（平成 25 年度春季）学術講演会］(2013 年 6 月 3 日～ 2013 年 6 月 5 日, 東京）口頭（一般）

GB-SAR を用いた壁内部構造計測のための基礎実験［物理探査学会第 128 回（平成 25 年度春季）学術講演会］(2013 年 6 月 3 日～ 2013 年 6 月 5 日, 東京）口頭（一般）

震災復興に向けたアレイ型 GPR による遺跡調査［物理探査学会第 128 回（平成 25 年度春季）学術講演会］(2013 年 6 月 3 日～ 2013 年 6 月 5 日，東京）口頭（一般）

偏波 GB-SAR によるコンクリート壁内部損傷の非破壊センシングのための基礎実験［電気学会基礎･材料･共通部門大会］(2013 年 9 月 12 日～ 2013 年 9 月 13 日, 横浜）口頭（一般）

地中レーダ計測における不要反射波モデリングの土壌季節変動に対する実験的実証［第 42 回電磁界理論シンポジウム］(2013 年 11 月 14 日～ 2013 年 11 月 16 日, 三沢）口頭（一般）

Fundamental study on high-resolution inspection of damaged wooden building by synthetic aperture radar［第 42 回電磁界理論シンポジウム］(2013 年 11 月 14 日～ 2013 年 11 月 16 日，三沢）口頭（一般）

墳丘の地中レーダによる遺跡調査［第 12 回地下電磁計測ワークショップ］(2013 年 11 月 23 日～ 2013 年 11 月 24 日，仙台）口頭（一般）

Investigation on 3D migration of non-gridded GPR data［第 12 回地下電磁計測ワークショップ］(2013 年 11 月 23 日～ 2013 年 11 月 24 日，仙台）口頭（一般）

震災復興を推進するアレイ型地中レーダによる遺跡計測［第 12 回地下電磁計測ワークショップ］(2013 年 11 月 23 日～ 2013 年 11 月 24 日，仙台）口頭（一般）

20GHz 帯 GB-SAR による構造物内部計測の基礎研究［第 12 回地下電磁計測ワークショップ］(2013 年 11 月 23 日～ 2013 年 11 月 24 日，仙台）口頭（一般）

電磁波を用いた建造物非破壊センシング技術の研究開発～ 25 年度中間成果～［第 12 回地下電磁計測ワークショップ］(2013 年 11 月 23 日～ 2013 年 11 月 24 日，仙台）口頭（一般）

Fundamental study of observation of landslide by GB-SAR observation - case study at Aratozawa -［第 12 回地下電磁計測ワークショップ］(2013 年 11 月 23 日～ 2013 年 11 月 24 日，仙台）口頭（一般）

Influence of antenna polarization on GPR signals of linear targets［74th Annual Meeting of German Geophysical Society］(2014 年 3 月 10 日～ 2014 年 3 月 13 日，Karlsruhe）ポスター（一般）

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）(2013 年 4 月～ 2014 年 3 月)

基盤研究(C)　2012 年 4 月－ 2015 年 3 月

［土壌特性の解析による地雷検知センサ性能評価とその応用］

研究論文（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1)　Influence of soil properties on the performance of metal detectors and GPR. [Journal of ERW & Mine Action, 17.1, (2013), 52-56] Kazunori Takahashi, Holger Preetz, Jan Igel （査読有）

2)　Evaluation of metal detector pinpointing accuracy under field conditions. [Proc. 11th International Symposium Humanitarian Demining, (2013), 63-65] Kazunori Takahashi （査読有）

3)　Evaluation of electromagnetic scattering from heterogeneous soils for ground-penetrating radar measurements through a simple modeling. [Proc. 2013 URSI Commission B International Symposium on Electromagnetic Theory, (2013), 1011-1014] Kazunori Takahashi, Jan Igel, Holger Preetz, Motoyuki Sato （査読有）

4)　Continuous observation of natural-disaster affected areas using ground-based SAR interferometry. [IEEE Journal of Selected Topics in Earth Observations and Remote Sensing, 6 (3), (2013), 1286-1294] Kazunori Takahashi, Masayoshi Matsumoto, Motoyuki Sato （査読有）

5)　3 次元 GPR 浅部地盤探査解析システム検討業務報告 . [物理探査学会第 128 回学術講演会論文集 , (2013), 133-136] 佐藤源之 , 斎藤秀樹 , 高橋一徳 , 横田俊之 , 鈴木浩一 （査読有）

6) 震災復興に向けたアレイ型 GPR による遺跡調査 . [物理探査学会第 128 回学術講演会論文集 , (2013), 125-128] 佐藤源之 , 高橋一徳 （査読有）

8) GB-SAR を用いた壁面内部構造計測のための基礎実験 . [物理探査学会第 128 回学術講演会論文集 , (2013), 121-124] 岡村菜花 , 佐藤源之 , 高橋一徳 （査読有）

8) Coherent scatterer selection based on coherence of interleaved sub-images for atmospheric correction of ground-based synthetic aperture radar interferometry. [Proc. IEEE International Geoscience and Remote Sensing Symposium, (2013), 3891-3894] Kazunori Takahashi, Masayoshi Matsumoto, Motoyuki Sato （査読有）

9) Advanced GPR for archaeological survey. [Proc. IEEE International Geoscience and Remote Sensing Symposium, (2013), 1395-1398] Motoyuki Sato, Kyouji Doi, Kazunori Takahashi （査読有）

10) 3D GPR survey of an ancient tomb using a self-tracking total station. [Proc. Near Surface Geophysics Asia Pacific Conference, (2013)] Kazunori Takahashi, Motoyuki Sato （査読有）

11) Development of array GPR for archaeological survey and disaster mitigation. [Proc. Near Surface Geophysics Asia Pacific Conference, (2013)] Jie Chen, Hai Liu, Kazunori Takahashi, Motoyuki Sato （査読有）

12) Landmine and UXO detection using EMI and GPR – limitations due to the influence of the soil. [First Break, 31 (8), (2013), 43-51] Jan Igel, Holger Preetz, Kazunori Takahashi, Markus Loewer （査読有）

13) Monitoring of displacement on a landslide slope by GB-SAR interferometry. [Proc. 2013 Asia-Pacific Conference on Synthetic Aperture Radar, (2013)] Kazunori Takahashi, Masayoshi Matsumoto, Motoyuki Sato （査読有）

14) Unique decomposition of a POLSAR coherency matrix using a generalized scattering model. [Proc. 2013 Asia-Pacific Conference on Synthetic Aperture Radar, (2013)] Shunichi Kusano, Kazunori Takahashi, Motoyuki Sato （査読有）

15) Long-term landslide monitoring by GB-SAR interferometry in Kurihara, Japan. [Proc. 2013 Asia-Pacific Conference on Synthetic Aperture Radar, (2013)] Masayoshi Matsumoto, Kazunori Takahashi, Motoyuki Sato （査読有）

16) Non-destructive inspection of buildings using radar polarimetry. [Proc. 2013 Asia-Pacific Conference on Synthetic Aperture Radar, (2013)] Saika Okamura, Kazunori Takahashi, Motoyuki Sato （査読有）

17) 偏波 GB-SAR によるコンクリート壁内部損傷の非破壊センシングのための基礎実験 . [平成 25 年度電気学会 基礎・材料・共通部門大会 , (2013), 145-145] 高橋一徳 , 岡村菜花 , 佐藤源之 （査読有）

18） 震災復興を促進するアレイ型地中レーダによる遺跡計測 . [信学技法 , 113 (309), (2013), 81-86] 高橋一徳 , 劉海 , 佐藤源之 （査読無）

19） 20GHz 帯 GB-SAR による構造物内部計測の基礎研究 . [信学技法 , 113 (309), (2013), 55-60] 高橋一徳 , 劉海 , クリスチャンコヤマ , 佐藤源之 （査読無）

20） 墳丘の地中レーダによる遺跡調査 . [信学技法 , 113 (309), (2013), 93-98] 佐藤源之 , 高橋一徳 （査読無）

21） Investigation on 3D migration of non-gridded GPR data. [信学技法, 113 (309), (2013), 87-92] Li Yi, Kazunori Takahashi, Motoyuki Sato （査読無）

22） 電磁波を用いた建造物非破壊センシング技術の研究開発～ 25 年度中間成果～ . [信学技法 , 113 (309), (2013), 25-30] 佐藤源之 , 高橋一徳 , 劉海 , クリスチャンコヤマ （査読無）

23） Fundamental study of observation of landslide by GB-SAR observation; case study at Aratozawa. [信学技法 , 113 (309), (2013), 19-24] Lilong Zou, Kazunori Takahashi, Motoyuki Sato （査読無）

24） Imaging of buried structures by a GPR combined with a self-tracking total station. [Proc. The 11th SEGJ International Symposium, (2013)] Kazunori Takahashi, Motoyuki Sato （査読有）

25） Archaeological survey of Dangoyama Kofun by 3DGPR. [Proc. The 11th SEGJ International Symposium, (2013)] Li Yi, Hai Liu, Kazunori Takahashi, Motoyuki Sato （査読有）

26） Development of an array GPR system for large-scale archaeological investigations. [Proc. The 11th SEGJ International Symposium, (2013)] Hai Liu, Jie Chen, Lilong Zou, Kazunori Takahashi, Motoyuki Sato （査読有）

27） Fundamental study on measurement of concrete wall structure by GB-SAR. [Proc. The 11th SEGJ International Symposium, (2013)] Motoyuki Sato, Saika Okamura, Hai Liu, Christian Koyama, Kazunori Takahashi （査読有）

28） 地中レーダ計測における不要反射波モデリングの土壌季節変動に対する実験的実証 . [電磁界理論シンポジウム , (2013)] 高橋一徳 , ヤンイーゲル , ホルガープレーツ （査読有）

29） Fundamental study on high-resolution inspection of damaged wooden building by synthetic aperture radar. [電磁界理論シンポジウム , (2013)] Hai Liu, Christian Koyama, Kazunori Takahashi, Motoyuki Sato （査読有）

30） Volume scattering power constraint based on the principal minors of the coherency matrix. [IEEE Geoscience and Remote Sensing Letters, 11 (1), (2014), 361-365] Shunichi Kusano, Kazunori Takahashi, Motoyuki Sato （査読有）

31） Measurement of dielectric permittivity and thickness of snow and ice on brackish lagoon using GPR. [IEEE Journal of Selected Topics in Earth Observations and Remote Sensing, 7 (3), (2014), 820-827] Hai Liu, Kazunori Takahashi, Motoyuki Sato （査読有）

32） Influence of antenna polarization on GPR signals of linear targets. [Proc. 74th Annual Meeting of German Geophysical Society, (2014)] J. Igel, K. Takahashi （査読有）

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

科学研究費補助金研究課題「土壌特性の解析による地雷検知センサ性能評価とその応用」において、前年度までは土壌不均質度より電波の散乱量を推定する手法の開発をおこなった。2013 年度はこの結果を受けて、実験による本手法の実証を進めた。実験では、ある土壌で数ヶ月間にわたる地中レーダ計測および TDR 法による土壌誘電率分布の計測を繰り返し実施してデータを取得した。このデータでは日照や降雨により土壌の誘電率およびその空間分布が変化していることが確認でき、したがって自然な状態における土壌不均質度の季節変動を含んでいる。このデータに対し、地球統計学を用いて土壌不均質度の特徴量を抽出し、モデル計算に当てはめることで、電波の推定散乱量を計算した。その結果と実際の地中レーダ計測で観測された電波の散乱量を比較することで、本推定手法が有効であることを実証した。

さらに、2009 年に人道的地雷探知機試験の国際機関である ITEP（International Test and Evaluation Program for Humanitarian Demining）が実施した大規模な探知機性能評価試験のデータに本手法を適用した。この性能評価試験では、ハンドヘルド型地中レーダの性能を評価するために、400 個程度の実地雷および弾丸などの金属片を埋設し、地雷を正しく識別できるかどうかの試験をおこなっている。同時に、使用した 4 種類の土壌での誘電率空間分布を測定しているため、そのデータを用いて推定される各土壌における電波の散乱量を計算した。そして、地中レーダの性能と比較することにより、不均質土壌による電波の散乱量が増加すると地中レーダの地雷識別性能が低下するという関係が明瞭に確認できた。したがって、この不均質土壌による電波散乱量推定手法を用いることで、地中レーダの性能を評価・推定することが可能であることを示した。この手法は、実際の地雷除去作業を開始する前に探知機の性能を把握する際に非常に有効である。さらに、作業の安全性を確保しつつ効率を向上させるために最適な除去手法を選択する際の指標としても用いることができる。

本研究で研究をおこなっている装置性能の事前評価法は、地雷除去作業など危険を伴う作業には欠かせない手順であり、今後本手法のさらなる実証を進めるとともに、地雷除去機関や国連の関連機関等へ本研究の成果について周知を図る。

駒木野　智寛　　Komagino Tomohiro　　助手

生年月日 ／ 1977 年 2 月 20 日

東北アジア研究センター基礎研究部門資源環境科学研究分野

出身大学院

岩手大学大学院教育学研究科教科教育専攻修士課程 2009 年修了
東北大学大学院理学研究科地学専攻博士後期課程 2013 年休学

取得学位

教育学修士　2009 年

略歴

2000 年〜 2001 年　（財）岩手県文化振興事業団　岩手県立博物館
2001 年〜 2004 年　（財）岩手県文化振興事業団　埋蔵文化財センター
2004 年〜 2008 年　岩手県教育委員会　花巻市・盛岡市公立中学校
2007 年〜 2008 年　（財）岩手県文化振興事業団　埋蔵文化財センター

研究経歴

2001 年〜現在　「考古遺跡の発掘調査と出土遺物の研究」
2004 年〜現在　「歴史・考古系の博物館と学校の教育連携の可能性の研究」
2006 年〜現在　「日本と世界の狩猟採集民の生業と環境適応戦略の比較研究」
2009 年〜現在　「縄文時代以降の気候環境の変動と考古遺跡の立地変化の研究」
2012 年〜現在　「歴史地震による古津波堆積層と被災した考古遺跡の研究」

所属学会

日本考古学協会、考古学研究会、情報考古学会、岩手考古学会、宮城県考古学会、
北海道考古学会、日本地理学会、人文地理学会、歴史地理学会、東北地理学会、
地理情報システム学会、情報処理学会、歴史地震研究会、東北史学会

専門分野

環境地理学、考古学、災害考古学、歴史地震
遺跡データベース、地理情報システム（GIS)、地中レーダ（GPR）による遺跡探査

研究課題

地中レーダ（GPR）を用いた震災被災地の遺跡探査

研究キーワード

復興支援、地中レーダ（GPR)、減災・防災、災害考古学

学外の社会活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）特別共同利用研究員 2012 年 4 月～ 2014 年 3 月

御所野縄文博物館（岩手県一戸町）平成 25 年度嘱託研究（研究代表　岩手大学教授　遠藤匡俊）研究協力者 2013 年 4 月～ 2014 年 3 月

国際会議　発表・講演（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

Tomohiro Komagino.「Reconstruction of the Positions of Latter Middle Jomon-Period Pit Dwelling Entrances and Exits in the Iwate Prefecture Area」2013 年 IGU 京都国際地理学会議 . 国立京都国際会館（京都府京都市）. 2013 年 8 月 7 ～ 8 日「査読有」

国内会議　発表・講演（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

(口頭)

相原淳一・駒木野智寛・大畑雅彦～ 2013)「山形県飛島西海岸の考古学的な調査－特に古津波堆積層と遺跡の関係について」2013 年度東北地理学会春季大会（2013 年 5 月 18 日、宮城県仙台市）仙台市震災復興記念館「査読無」

駒木野智寛～ 2013)「砺波地域における集落遺跡の立地景観について ― 住居址出入口と風向との比較から ― 」2013 年度歴史地理学会砺波大会　歴史地理学会（2013 年 5 月 19 日、富山県砺波市）砺波市文化会館「査読無」

相原淳一・駒木野智寛・大畑雅彦～ 2013)「山形県飛島の津波堆積層と遺跡との関係 ― 特に考古学的な視点から」第 30 回歴史地震研究会（2013 年 9 月 15 日、秋田県秋田市）秋田大学「査読無」

相原淳一・駒木野智寛・佐々木潤・中嶋灯奈～ 2013)「岩手県宮古・種市の考古学的調査 ― 特に古津波堆積層と遺跡の関係について」2013 年度日本地理学会秋季大会（2013 年 9 月 29 日、福島県福島市）福島大学「査読無」

(ポスター)

駒木野智寛～ 2013)「東北地方北部の古代住居址における十和田火山灰の影響評価 ― 卓越風向と住居址出入口の検討から ― 」2013 年度考古学研究会　考古学研究会（2013 年 4 月 19 ～ 20 日、岡山県岡山市）岡山大学「査読無」

駒木野智寛～ 2013)「考古遺跡の集落構造 ― 岩手県御所野遺跡を例に」2013 年度人文地理学会秋季大会　人文地理学会（2013 年 11 月 10 日、大阪府大阪市）大阪市立大学「査読無」

その他研究活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

考古遺跡の発掘調査と出土遺物の研究（フィールドワーク）　2001 年～現在

古津波堆積層と考古遺跡の調査（フィールドワーク）　2012 年 8 月～現在

地中レーダ (GPR) による東日本大震災被災地の考古遺跡探査（フィールドワーク）
2013 年 9 月～ 2014 年 3 月
地中レーダ (3DGPR) による古墳探査（フィールドワーク） 2013 年 9 月～ 2014 年 3 月

研究論文（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1) 駒木野智寛（2014 年 4 月）:「災害と考古学」『考古学研究会 60 周年記念誌』pp233 ～ 234, 考古学研究会.「査読有」
2) 相原淳一・駒木野智寛（2014 年 5 月）:「宮城県における古津波堆積層と遺跡―特に南三陸地方を中心に―」第 16 号 , pp1-14, 宮城県考古学会.「査読無」
3) 相原淳一・駒木野智寛（2014 年 5 月）:「日本海東縁における津波履歴と遺跡－青森県深浦町椿山の調査－」,『青森考古』, 第 22 号 , pp1 ～ 12, 青森考古学会.「査読無」
4) 駒木野智寛･相原淳一（2014 年 3 月）:「岩手県における古津波堆積層と遺跡」『岩手考古学』, 第 25 号 ,pp1-20, 岩手考古学会.「査読無」
5) 相原淳一・駒木野智寛・大畑雅彦（2013 年 8 月）:「山形県酒田市飛島西海岸製塩遺跡の調査－特に，遺跡と古津波堆積層の関係について」『山形考古』, 第 43 号 , pp35-63, 山形考古学会.「査読無」
6) 駒木野智寛（2013）「岩手県沿岸部の古津波堆積層と出土遺物の検討」『季刊地理学』Vol.65, pp54 ～ 55, 東北地理学会.「査読無」

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

駒木野は、2012 年 8 月以降、北海道大学理学研究院の平川一臣、相原淳一と共に青森県西津軽郡椿山、秋田県男鹿半島、岩手県洋野町種市、宮古市日出島、宮城県石巻市大谷海岸、山形県酒田市飛島西海岸、新潟県佐渡市西海岸など東北地方沿岸部の海食崖を中心に古津波堆積層の考古学的調査を継続してきた。

その結果、沿岸部では約千年に 1 度の周期で巨大津波が襲来していることを考古遺物と被災遺構の年代により検証することにより、沿岸低地部における遺跡の空白期が巨大津波による被災後と符合する可能性が高いことを確認している。

2013 年 9 月以降に福島県沿岸被災地の考古遺跡において東北大学東北アジア研究センター佐藤源之研究室による震災復興支援を目的とした地中レーダ探査が本格化した。このプロジェクトに総長裁量経費による助手として参加する中で知り得た知見を上記の災害考古学に関する考古遺跡の調査事例の蓄積に盛り込んで、2013 年 10 月、津波被害を受けた考古遺跡を地中レーダ（GPR）で探査して津波災害と考古遺跡との関係を非破壊による遺跡調査方法の確立により明らかにすることを目指して、平成 26 度～平成 27 年度日本学術振興会科学研究費補助金（若手研究(B)「東北地方におけ

る古津波堆積層の考古学的研究 ― 古津波災害科学の提唱 ― 」の研究計画調書を作成して応募したところ、採択の内定を得た。

2014 年度はこの科研費補助金を中心的経費とした研究活動に継続して従事することを望んだが、助手の任用期間が満了する 3 月 31 日以降に科学研究費補助金の交付申請を可能とする研究機関への所属が叶わず、科学研究費補助金の助成を辞退した。

科学研究費補助金による研究活動は実現しなかったが、佐藤源之研究室が開発したアレイ型地中レーダ技術は、考古遺跡で行われてきた 1 度きりの大規模な破壊行為である従来の開発に伴う発掘調査に対して非破壊で遺跡の概要を知ることができ、将来は発掘調査の代用の記録保存に成りえる非常に有効な研究であり、日本の埋蔵文化財行政に与える意義は大きい。

現段階での課題は、地中レーダ探査後に考古遺構の包含の有無を判断できるレベルの画像データを作成するまでに探査面積に応じて時間を要することであるが、今後の改善で処理時間を短縮することで、幅広い活用が実現していくと考えられる。

電波計測技術を応用した記録保存法である地中レーダ探査は、過去の古津波災害の痕跡を豊富な情報量により読み解く災害考古学に果たす役割の大きい研究である。

駒木野は、沿岸部の古津波堆積層の考古学的調査を継続するが、探査を実施できる環境を整えた際には、研究を通じて社会の防災・減災に貢献していきたい。

金　賢貞　　KIM HYEON JEONG　　助教

生年月日 ／ 1976 年 7 月 14 日

東北アジア研究センター研究支援部門学術交流分野

出身学校

韓国・同徳女子大学校・日語日文学科 2000 年卒業

出身大学院

日本・筑波大学・人文社会科学研究科・歴史・人類学専攻修士課程（5 年一貫制）2004 年修了

日本・筑波大学・人文社会科学研究科・歴史・人類学専攻博士課程（5 年一貫制）2007 年修了

取得学位

学士（文学）同徳女子大学校 2000 年

修士（文学）筑波大学 2004 年

博士（文学）筑波大学 2007 年

略歴

2012 年～現在　東北大学東北アジア研究センター助教

研究経歴

2008 年　韓国文化財庁研究プロジェクト「韓国重要無形文化財の管理改善及び拡大について」共同研究員

2008 ～ 2009 年　韓国研究財団 優秀研究支援研究（基礎研究・課題番号 B00810）「Study for Mechanism of Intangible Properties Protection Policy in Japan: Focused on Corresponding to UNESCO's World Intangible Heritage Policy」責任研究員

2009 年　韓国文化財庁研究プロジェクト「韓国の無形遺産における代表目録の分類体系並びに基礎資料の研究」共同研究員

2009 ～ 2012 年　韓国研究財団　博士後国内研修研究（課題番号 B00029）「Study for Aging and Ordinary Life Arena of the Aged in Contemporary Japanese Society: Focused on 'Social Participation' and 'inter-generational Communication'」

2010 年　韓国　文化財保護財団　アジア・太平洋無形文化遺産センター　研究プロジェクト「アジア・太平洋無形文化遺産センターの中長期情報化戦略計画（ISP）の樹立」共同研究員

2008 ～ 2010 年　「文化財保護制度における世界遺産条約の戦略的受容と運用に関す

る日韓比較研究（課題番号 20320133)」(平成 20 年度～平成 22 年度科学研究費補助金（基盤研究(B)）研究協力者

2009 ～ 2011 年 「『伝承・習い事』文化における継承と生涯学習の現代的課題に関する日中韓比較研究（課題番号 21330178)」(平成 21 年度～平成 23 年度科学研究費補助金（基盤研究(B)）研究協力者

2010 ～ 2012 年 「文化遺産ガバナンスと社会関係資本の構築と実践に関する民俗学的研究（課題番号 22・00007)」(平成 22 年度～平成 24 年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）研究分担者

所属学会

日本民俗学会

専門分野

文化人類学・民俗学、特に祝祭・儀礼文化論、地域社会論、文化政策・制度論

研究課題

韓国社会における負の近代遺産政策と地域社会

韓国におけるナショナリズムと土着文化

自然災害と地域社会の再編

研究キーワード

韓国、地域社会、近代遺産（植民地遺産)、文化政策、ナショナリズム、資源化、ダークツーリズム、自然災害

その他研究活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

2012 年 「宮城県地域文化遺産復興プロジェクト　東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査」

2013 年 3 月 9 日　第 91 回現代人類学研究会「『復興』を考える ― 地域社会における民俗芸能と祭礼の『現在』」口頭発表（「ぜいたくな被災地調査？ ― 女川町出島における被災地民俗文化財調査 ― 」）東京大学

著書（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1) 『「創られた伝統」と生きる：地方社会のアイデンティティー』.［青弓社,（2013）9 月］金賢貞

2) 『日中韓の生涯学習：伝統文化の効用と歴史認識の共有』(執筆担当部分）韓国における伝統文化の伝承と国家施策：文化財保護法にもとづく「伝授教育制度」を中心に.［明石書店,（2013）11 月］相庭和彦 _ 渡邊洋子編

3) 『無形民俗文化財が被災するということ：東日本大震災と宮城県沿岸部地域社会

の民俗誌』（執筆担当部分）東日本大震災と離島の民俗文化：女川町出島の獅子振りを中心に.［新泉社,（2014）1 月］高倉浩樹 _ 滝澤克彦編

研究論文（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1） 東日本大地震 에 의한 지역사회의 해체와 토착문화의 현재 : 일본 미야기현 오나가와쵸 이즈시마 섬의 사례를통해.［『第 4 回海洋文化学者大会 proceeding　海と島、コミュニケーションと交流、そして持続可能性』, 2, (2013), 200-208］金賢貞（査読なし）

総説・解説記事（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1） 女川町出島［宮城県地域文化遺産復興プロジェクト平成 24 年度文化庁（「文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」）東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査 2012 年度報告集、(2013)、295-311］

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

2012 年度研究成果はまず、韓国研究財団から 2009 年 7 月から 2012 年 6 月まで研究助成を受けた研究課題 “Study for Aging and Ordinary Life Arena of the Aged in Contemporary Japanese Society: Focused on ‘Social Participation’ and ‘inter-generational Communication’” の成果が論文としてまとめられたことである。本研究は 2002 年に高齢化率 7.2% を記録し、高齢化社会を迎えた韓国において国家的重要案件として浮上した韓国的高齢社会のあり方を探るため、既に 1970 年代に高齢化社会、2010 年には超高齢社会になった日本の現状を事例研究の手法で調べることを目的とした。そのため、宮崎県日向市でフィールドワークを実施し、そこで得られたフィールド・データを分析（ライフヒストリー分析を含む）した結果、行政や NPO などからの社会教育プログラムの充実及び地縁にもとづくコミュニティ支援の積極性がその特徴として導き出された。しかし、定年後のいわゆる老後生活においてパーソナリティの影響が予想どおりに大きく、さらに、コミュニティ内の土着的アソシエーションや社会関係に規定され、コミュニティ外のつながりが広げられない人も多く、韓国との比較の意味で示唆することがきわめて大きい。本研究は、今後さらにその重要性を増すであろう「老い」の日韓比較研究において、個人にフォーカスを合わせたミクロな事例分析を試みた点で画期的な研究成果である。

次に、韓国研究財団から 2008 年 11 月から 2009 年 10 月まで研究助成を受けた研究課題 “Study for Mechanism of Intangible Properties Protection Policy in Japan: Focused on Corresponding to UNESCO’s World Intangible Heritage Policy” の成果が論文として発表できた。本研究は、2003 年に採択されたユネスコの Convention for the Safeguarding of the Intangible Cultural Heritage が、中国、韓国を中心に

して、本来の目的とは乖離し、ナショナルな文化的ステータスを主張する手段あるいはアリーナに化しつつある状況、さらに、日本も本来の対応方針を一変させ、それに加担する様相を呈している現状を、東北アジアのなかで最も長い無形文化財保護制度の歴史を有し、韓国の同制度に多大な影響を及ぼした日本のナショナルな制度と、ユネスコのグローバルな政策との相互関係に注目して分析したものである。この研究は韓国内では類例のない先駆的な研究として高い評価を受けることができた。また、本研究は、岩本通弥（東京大学）及び渡邊洋子（京都大学）の科研における共同研究ともつながっており、それぞれ単行本（共著）として既に出版・出版予定（2013 年 5 月末）である。

荒武　賢一朗　　ARATAKE Kenichiro　　准教授

生年月日 ／ 1972 年 12 月 21 日

東北アジア研究センター寄附研究部門上廣歴史資料学研究部門

出身学校

花園大学・文学部・史学科 1995 年卒業

出身大学院

関西大学・文学研究科・史学博士課程 2004 年修了

取得学位

学士（文学）花園大学 1995 年
修士（日本史学）花園大学 1997 年
博士（文学）関西大学 2004 年

略歴

1996 年〜 2006 年　大阪市史料調査会　調査員
2006 年〜 2009 年　独立行政法人日本学術振興会　特別研究員
2010 年〜 2012 年　関西大学文化交渉学教育研究拠点　助教
2012 年〜現在　　東北大学東北アジア研究センター　准教授

研究経歴

1994 年〜 1996 年　幕末期彦根藩の政治・経済史研究
1997 年〜 2004 年　近世大坂地域の都市と農村研究
2005 年〜 2009 年　江戸時代の流通史研究
2010 年〜 2011 年　熊本県天草諸島の歴史文化総合研究
2012 年〜現在　　江戸時代の都市・海運史研究

所属学会

近世史フォーラム、大阪歴史学会、宮城歴史科学研究会、日本史研究会、明治維新史学会、社会経済史学会、市場史研究会

学会活動

近世史フォーラム　代表委員　2012 年〜現在
宮城歴史科学研究会　研究委員　2012 年〜現在
歴史学フォーラム 2014 実行委員会　委員 2014 年〜現在

専門分野

日本史　日本近世

研究課題

2012 年～継続中　近世日本の商業と交流

研究キーワード

日本近世史、近代史、経済史、環境史

学外の社会活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

山形県立博物館平成 25 年度古文書講座講演会（講演会　セミナー）　2013 年 6 月
山形の歴史を学ぶ（公開講座）　2013 年 9 月
講座：地域の歴史を学ぶ◎鬼首（公開講座）　2013 年 10 月
平成 25 年度みやぎ県民大学活用出前講座（講演会　セミナー）　2013 年 10 月
平成 25 年度みやぎ県民大学活用出前講座（講演会　セミナー）　2013 年 10 月
山形県立博物館平成 25 年度古文書講座講演会（講演会　セミナー）　2013 年 11 月

オープンキャンパス・研究所公開等（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

片平まつり 2013　展示「古文書を読んで歴史を知る」　2013 年 10 月

学内活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

東北アジア研究編集主任　2013 年 4 月～現在

国際会議　発表・講演（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

19 世紀の海運業と沿岸社会の変化［東北大学　ノボシビルスク国立大学：日本アジア学講座］（2013 年 10 月 9 日，ロシア，ノボシビルスク）口頭（招待　特別）

国内会議　発表・講演（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

日本列島市場論と地域物流［近世史フォーラム 2013 年 5 月例会］（2013 年 5 月 18 日，大阪市）口頭（一般）
近世仙台領の番所と足軽 ― 栗原郡鬼首番所を中心に ―［歴史資料学の調査と研究プロジェクト：江戸時代から現代に通じる東北の歴史］（2013 年 7 月 27 日，仙台市）口頭（一般）
近世日本における領政機構の財政支出［歴史資料学の調査と研究プロジェクト：日本列島の文化交渉史―経済と外交］（2013 年 8 月 4 日，仙台市) 口頭（一般）
出羽国飛島の海運記録を読む ― 長井政太郎収集資料を中心に ―［石見銀山研究会］（2013 年 10 月 17 日，島根県大田市）口頭（一般）
出羽国飛島と日本海海運 ― 難船記録と客船帳を中心に ―［仙台近世史フォーラム 2013 年 11 月例会］（2013 年 11 月 8 日，仙台市）口頭（一般）
近世後期大坂商人と大名家 ― 井上市兵衛の記録と情報収集 ―［奈良歴史研究会（2013 年 12 月例会）］（2013 年 12 月 13 日，奈良市）口頭（一般）
陪臣からみた近世社会の実像 ― 東北地方の武士と金融貸借を中心に ―［歴史資料学

の調査と研究プロジェクト：江戸時代から現代に通じる東北の歴史］（2014 年 1 月 26 日，仙台市）口頭（一般）

近世後期大坂商人の記録と情報 ― 井上淡水の文書を中心に ―［歴史資料学の調査と研究プロジェクト:日本列島の文化交渉史―経済と外交］(2014 年 2 月 8 日,東京都) 口頭（一般）

大名家財政と近世社会 ― 領主はどこにお金を使ったのか？ ―［東北大学東北アジア研究センター公募型共同研究「近世化社会との対話」］（2014 年 3 月 9 日，仙台市）口頭（一般）

日本列島の文化交渉史 ― 経済と外交［東北大学東北アジア研究センター研究成果報告会］（2014 年 3 月 28 日，仙台市）ポスター（一般）

国際会議主催・運営（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

2013 年 9 月 16 日～ 2013 年 9 月 20 日　主催　ドイツ・ハイデルベルク大学　国際くずし字ワークショップ　ワークショップ全体のオーガナイザー、講師

国内会議主催・運営（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

2013 年 10 月 19 日　主催　近世史サマーフォーラム 2013「地域と時代を重ねる」実行委員

著書（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1)　地域の歴史を学ぶ ― 宮城県大崎市の文化遺産 ―（執筆担当部分）第 1 部第 2 章「岩出山伊達家の武士と地域史」23 頁～ 40 頁．［東北大学東北アジア研究センター，(2013) 10 月] 荒武賢一朗，堀裕，菊地優子，宮田尚夫，鴇田勝彦，高橋陽一

2)　近世　近代における日本列島の沿海社会と海運（執筆担当部分）「明治時代前期の右近権左衛門家と上方」35 ～ 58 頁．［関西大学文学部,(2014) 3 月］荒武賢一朗，菊池勇夫，曲田浩和

研究論文（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

「書評･高槻泰郎著『近世米市場の形成と展開―幕府司法と堂島米会所の発展―』」（書評）（大阪歴史学会『ヒストリア』237 号，125 ～ 132 頁，2013 年 4 月）査読無

「書評･菊地勇夫著『東北から考える近世史―環境　災害　食料､そして東北史像』」（書評）（東北史学会『歴史』121 号，132 ～ 139 頁，2013 年 10 月）査読無

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

第一は、研究分担者として参画した科学研究費補助金基盤研究(A)「環東シナ海・環日本海沿岸域の文化交渉と歴史生態をめぐる学術的研究」（研究代表者：野間晴雄関西大学文学部教授）が最終年度を迎え、自身の成果をふまえて編著『近世・近代にお

ける日本列島の沿海社会と海運』を発刊することができた。これは日本海沿岸の歴史的特質を明らかにする目的で、19 世紀の社会的動向を詳しく論じることができた。この論考で得られた知識や資料の内容は、研究主題とする「近世日本の商業と交流」において今後も続けて分析を深めていきたい。この日本近世史における海運の分析は、現段階の調査成果として研究発表や講演でも取り上げている。そのなかでも、出羽国飛島（現山形県酒田市）に関する歴史資料、および石見国宅野浦（現島根県大田市）の海運資料について調査を開始したことは大きい収穫であった。これまでの近世海運史では、大阪と北海道の結びつきなど広範囲の輸送主体に注目が集まってきたが、上記の資料では比較的近距離の地域間交易について述べられており、不明なところが多い日本海沿岸各地の商業的特質が明らかになる可能性がある。今年度は調査の一断面を口頭発表にて紹介してきたが、次年度は関連資料の確認を含めた総合化を目指していきたい。

第二としては、前年度から取り組んでいる宮城県の地域史研究に関する成果である。日常的に資料調査や社会人向けの講座を実施している大崎市岩出山地区に関して、「岩出山伊達家の武士と地域史」と題した論考を発表した。これは、編集を手掛けた東北アジア研究センター報告第 10 号『地域の歴史を学ぶ ― 宮城県大崎市の文化遺産 ―』において、研究蓄積の少ない仙台藩領の武士について歴史資料「国井家由緒書上」をもとに江戸時代の武士像を追究したものである。先行研究では本藩（仙台藩）の武士が素材だったが、本論では支藩（岩出山伊達家）の下級武家を扱うことで地域社会の内実に迫ることが可能となった。これは宮城県の江戸時代分析にとどまらず、全国的に検討を要する「本藩 ― 支藩」関係、または武士と領民の関係論にも重要な事例を提供することになったと自負している。

第三は、上記の武士と領民の関係にもつながるが、近世日本における大名家財政と商人による貸付金をテーマに検討を始めたことである。これは、昨年度から研究分担者を務める科学研究費補助金基盤研究(B)「近世・近代移行期における公共財供給と『地域社会』―比較史の視点から―」（研究代表者：谷本雅之東京大学大学院経済学研究科教授）で取り組んでいる課題でもあり、江戸時代の財政史を解明することを目標にしている。従来の財政史は、税収や財源の管理について集中的な分析がおこなわれてきた。その一方で、社会から徴収された税や諸負担はどのように使用され、社会的に還元されていったのかという疑問は残されたままである。その点について、江戸時代の資料に依拠しながら、仙台藩・新庄藩（現山形県）・松代藩（現長野県）・土佐藩（現高知県）などの大名家で、支出費目・金額を詳しく確認する作業を実施している。これによって、18 世紀から 19 世紀の日本では領主が領民に対してどのような公共財を提供しているのか、また政治運営のなかで重点政策として履行したのは何か、といった諸課題を明らかにしていきたいと考えている。一方で、江戸時代の大名家財政は「大

名貸」と言われる商人からの借金に依存していた。その点で重要な役割を果たしたのは江戸・大阪・京都の商人たちであった。東北大学附属図書館狩野文庫には、江戸時代後期に大名貸を手広く展開していた大阪商人・井上市兵衛家の日記・記録が保存されている。この資料は経済史研究においてほとんど触れてこられなかったものだが、大名家と商人の関係を解き明かす多くの情報を集積していることがわかった。日記や記録の内容をもとに大名家と商人の相互補完関係、そして社会的対応について詳しく調査を進める方針である。

高橋　陽一　　TAKAHASHI Yohichi　　助教

生年月日 ／ 1977 年 8 月 19 日

東北アジア研究センター寄附研究部門上廣歴史資料学研究部門

出身学校

東北大学・文学部・人文社会学科 日本史専攻 2001 年卒業

出身大学院

東北大学・文学研究科・歴史科学専攻日本史専攻分野博士課程 2009 年修了

取得学位

博士（文学）東北大学 2009 年

略歴

2008 年～ 2009 年　東北大学東北アジア研究センター防災科学研究拠点グループ　リサーチアシスタント
2009 年～ 2010 年　東北大学百年史編纂室　教育研究支援者
2009 年～ 2012 年　東北大学大学院文学研究科　専門研究員
2010 年～ 2012 年　岩沼市史編纂室　市史編纂専門員
2012 年～現在　　東北大学東北アジア研究センター　助教
2013 年～現在　　東北学院大学　非常勤講師

研究経歴

2000 年～現在　　日本近世史の研究に従事
2008 年～現在　　歴史資料保全についての研究に従事

所属学会

東北史学会、歴史学研究会、日本史研究会、宮城歴史科学研究会、交通史学会、地方史研究協議会、関東近世史研究会、日本温泉地域学会

学会活動

宮城歴史科学研究会　事務　2012 年～現在

専門分野

日本近世史

研究課題

日本近世旅行史の研究
藩領社会史の研究

歴史資料保全と地域行政

研究キーワード

日本近世史、旅、仙台藩、温泉、自然景観、歴史資料保全

学外の社会活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

古文書を読む会（公開講座）　2012 年 4 月～現在

上廣歴史資料学研究部門古文書講座（公開講座）　2013 年 5 月～ 2013 年 12 月

仙台市博物館古文書講座「はじめて古文書講座」（公開講座）　2014 年 1 月

村田町古文書講座「初めての古文書講座」（公開講座）　2014 年 2 月～ 2014 年 3 月

行政機関・企業・NPO 等参加（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク（NPO）会員として、古文書をはじめとする文化財の保全活動に従事している。2003 年 8 月～現在

オープンキャンパス・研究所公開等（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

片平まつり 2013　展示「古文書を読んで歴史を知る」（企画・運営）

学内活動（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

広報情報委員会　2012 年 4 月～現在

担当授業科目（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

（他大学）

生活文化史　2013 年～現在

国内会議　発表・講演（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

江戸時代の温泉旅行と海道交通 ― 仙台藩を事例に ―［最上海道研究会講演会］（2013 年 4 月 28 日）口頭（一般）（招待講演）

近世の定宿講と旅行者［郵政歴史文化研究会］（2013 年 9 月 22 日）口頭（一般）

江戸時代の東北旅行と岩沼 ― 移ろいゆく旅人のまなざし ―［岩沼市民健幸大学］（2013 年 12 月 21 日）口頭（一般）

江戸時代の東北旅行 ― 紀行文　道中日記にみえる松島 ―［上廣歴史文化フォーラム「旅　人はなぜ行くのか ― 東北を見つめた人々 ― 」］（2014 年 2 月 9 日）口頭（一般）

石碑のある風景 ― 近世の旅行者と松島 ―［上廣歴史資料学研究部門共同研究「旅と交流にみる近世社会」研究報告会］（2014 年 2 月 23 日）口頭（一般）

国内会議主催・運営（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

公開講演会「よみがえる村田の歴史～江戸時代からのメッセージ」（2013 年 6 月 29 日，宮城県柴田郡村田町）［主催］

講座：地域の歴史を学ぶ　鬼首（2013 年 10 月 6 日，宮城県大崎市）［主催］

講座：地域の歴史を学ぶ　◎岩出山Ⅱ―戦乱と地域史（2013 年 12 月 1 日，宮城県大崎市）［主催］

上廣歴史文化フォーラム「旅　ひとはなぜ行くのか ― 東北を見つめた人々 ―」(2014 年 2 月 9 日，宮城県仙台市）［運営］

科学研究費補助金獲得実績（文科省・学振）（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

若手研究(B)　2011 年 4 月～ 2014 年 3 月

［本近世近代における観光地形成過程の歴史学的研究］

著書（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1)　東北アジア研究センター叢書 50　江戸時代の温泉と交流 ― 陸奥国柴田郡前川村佐藤仁右衛門家文書の世界 ―.［東北大学東北アジア研究センター，(2013) 12 月］高橋陽一

研究論文（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1)　江戸時代の温泉と交流 ― 陸奥国柴田郡前川村青根温泉を事例に ―.［東北アジア研究センター叢書 50　江戸時代の温泉と交流 ― 陸奥国柴田郡前川村佐藤仁右衛門家文書の世界 ―（東北大学東北アジア研究センター発行），(2013)，15-36］高橋陽一、査読なし

総説・解説記事（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1)　川渡温泉の争論と岩出山 ― 災害と資源利用をめぐって ―.［東北アジア研究センター報告 10　地域の歴史を学ぶ ― 宮城県大崎市の文化遺産 ―，(2013)，133-157］高橋陽一、査読なし

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

2013 年 12 月に、『東北アジア研究センター叢書 50　江戸時代の温泉と交流 ― 陸奥国柴田郡前川村佐藤仁右衛門家文書の世界 ―』（東北アジア研究センター発行）を刊行した。本書は、宮城県柴田郡川崎町青根温泉の佐藤仁右衛門家に所蔵されている古文書の調査報告集であり、佐藤家の古文書の翻刻文を「温泉の歴史」「伊達家との交流」「日記・用留」「温泉の運営」「山林」「取引・交流」「証文」「家」「補遺」の項目に分けて収載している。また、青根温泉の沿革や江戸時代の運営状況、佐藤家と仙南を中心とした周辺の地域住民・温泉との関係を解明した論説も収載している。レジャー・観光といった現代的・牧歌的イメージがつきまとうせいもあってか、前近代の温泉運営の実態については、これまで意外なほど知られてこなかった。本書は古文書の解読と分析という歴史学的手法を用い、江戸時代における温泉の社会状況を通時的に明ら

かにした。特に温泉管理人の湯守（ゆもり）の血縁・地縁・職能といった結合原理を異にする多層的な交流関係を解明した点は大きな意義を持っている。

科学研究費補助金（基金、若手研究(B)）「日本近世近代における観光地形成過程の歴史学的研究」は最終年度を迎えた。前年度までの作業の方向性を維持し、江戸時代に東北地方を旅行した人々の記録（紀行文・道中日記）を網羅的にリストアップ・収集し、具体的な行程の特徴を把握する基礎的作業に取り組んだ。その結果、とりわけ旅行者の来訪割合が高いことが判明した松島（現宮城県宮城郡松島町）を対象に、旅行者のミクロな行動を検証することとし、松島の中でも歌枕・霊場として中世から衆目を集めてきた雄島での行動に焦点を絞り分析を進めた。注目したのは雄島の史蹟（石碑）に対して旅行者が抱く印象である。分析の結果、紀行文執筆者の知識人（学者）層は、中世の石碑に関心を寄せる一方で、同時代（近世）に建立された石碑には忌避感を示しており、道中日記執筆者の庶民層は雄島に対する関心そのものが低調であることが判明した。学者層は旧来の雄島の歌枕・霊場的風景を求めて旅をしているのに対し、庶民層は雄島の風景に関心を寄せず、近世に壮麗な装いで再建された瑞巌寺や松島全体の自然景観に魅了されているのである。このことから、近世においては、まず庶民層が観光的な意識を次第に強めるようになっていったと考えられるのであり、近世に入り一気に物見遊山（観光）が展開したのではなく、信仰的な旅から観光的な旅への移行に階層差があったと理解することができる。

以上の検証結果について、前者の学者層の旅の特徴は、2014 年 2 月に「石碑のある風景 ― 近世の旅行者と松島 ―」と題して、研究者向けの共同研究報告会で発表し、同題で既に論文にもまとめ、投稿中である。今後は庶民層の旅の特徴を検証することにより、旅行者の意識の変容動態を糸口に、松島が観光地化していく過程を描出することが可能になるのではないかと考えている。この点については、引き続き採択された若手研究(B)「日本近世における旅の歴史的特質の解明（平成 26 年～ 28 年度）において、課題の 1 つとして取り組んでいきたい。

また、江戸時代の仙台藩領地域社会研究として、2010 年より継続している一関市博物館所蔵の槻山家文書の調査及び分析を進めた。槻山家は江戸時代に西磐井猪岡村（現岩手県一関市）の村役人をつとめ、明治時代以降は須川温泉の開発にも従事した。集中的に着手したのは、大量に残されている年貢関係史料の解読である。とくに 19 世紀前半の飢饉時における村民の税負担を検証し、村内の生産物や貨幣の蓄積状況など、村の経済状況を明らかにし、論文「天保飢饉における村の負担 ― 仙台藩領村落を事例に ―」（平成 26 年度公表予定）としてまとめた。さらに、これまで手つかずであった 18 世紀の藩領年貢制度改革について、仙台藩の検見（収穫改め）制度改革を検討し、江戸時代の年貢決定過程に百姓がいかに関与していたのか、明らかにした。本成果は、「一八世紀の検見制度改革と藩領社会 ― 仙台藩を事例に ―」として、学

術雑誌『歴史』（東北史学会編）122 号に発表している（平成 26 年 4 月）。

今後も江戸時代の民衆や地域社会に視座を据えた研究を続けていきたいと考えている。

友田　昌宏　　TOMODA Masahiro　　助教

生年月日 ／ 1977 年 3 月 20 日

東北アジア研究センター寄附研究部門上廣歴史資料学研究部門

出身学校

早稲田大学・教育学部・社会科地理歴史専修 1999 年卒業

出身大学院

中央大学・文学研究科・日本史専攻博士課程 2008 年修了

取得学位

（史学）中央大学 2008 年

略歴

2008 年〜 2012 年　中央大学文学部　兼任講師
2009 年〜 2012 年　早稲田大学大学史資料センター　非常勤嘱託
2009 年〜現在　中央大学政策文化総合研究所　客員研究員
2012 年〜 2013 年　町田市立自由民権資料館　嘱託（学芸担当）
2013 年〜現在　東北大学東北アジア研究センター　助教

所属学会

史学会、明治維新史学会 ,、東アジア近代史学会、中央史学会、国史学会

学会活動

東アジア近代史学会　理事　2012 年〜現在

研究課題

宮島誠一郎の研究
近代日本におけるアジア主義の展開
敗者にとっての明治維新

学外の社会活動（2013 年 4 月〜 2014 年 3 月）

「岩出山古文書を読む会」中級講座（公開講座）　2014 年 1 月〜現在

行政機関・企業・NPO 等参加（2013 年 4 月〜 2014 年 3 月）

NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク（NPO）　災害科学国際研究所歴史資料保存分野研究室にて行われている被災資料の保全活動に週 2 日参加。2013 年 10 月〜現在

オープンキャンパス・研究所公開等（2013 年 4 月〜 2014 年 3 月）

片平まつり 2013　展示（上廣歴史資料学研究部門「古文書を読んで歴史を知る」）へ

の参加

国内会議　発表・講演（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

講座：地域の歴史を学ぶ　◎岩出山Ⅱ―戦乱と地域史（2013 年 12 月 1 日，宮城県大崎市）口頭（一般）

国内会議主催・運営（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

講座：地域の歴史を学ぶ　鬼首（2013 年 10 月 6 日，宮城県大崎市）［主催］

講座：地域の歴史を学ぶ　◎岩出山Ⅱ―戦乱と地域史（2013 年 12 月 1 日，宮城県大崎市）［主催］

上廣文化フォーラム「旅　人はなぜ行くのか ― 東北を見つめた人々 ―」（2014 年 2 月 9 日，宮城県仙台市）［主催］

研究論文（2013 年 4 月～ 2014 年 3 月）

1)　幕末期における草莽と諸藩 ― 大野倹次郎とその周辺 ―.［日本歴史，(781)，(2013)，38-55］友田昌宏（査読有り）

本年度の研究成果の研究史上の意義・新知見など

本年度は『日本歴史』誌上に「幕末期における草莽と諸藩 ― 大野倹次郎とその周辺 ―」を発表することができた。大野倹次郎は、天保 5 年（1834）4 月 2 日、新発田藩領である越後国蒲原郡諏訪山に、名主で社郷でもあった大野敬吉（耻堂）を父として生まれた。幕末期、草莽として国事に奔走し、維新後は名を誠と改め、長野県令として令名を馳せる。本稿では、この大野倹次郎を材にとり、幕末期における草莽と諸藩との関係を探りつつ、多くの草莽が運動に挫折した末、あるいは命をおとし、あるいは落剝して再生の道を郷里に探るよりほかなかったのに対して、なぜ倹次郎のみ栄達の道を歩むことができたのかを考察し、そのことを通じて従来とは異なる草莽像を提示しようとしたものである。以下、その論旨を略述する。

江戸での文武修行を通じて熱烈な攘夷主義者として成長した倹次郎は、武士のみならずそれ以外の階級のものも攘夷の実践に向けて力を蓄えねばならないとして、国許において農村子弟に剣術修行を施したが、そのことが新発田藩の忌諱に触れ、慶応 2 年 12 月、新発田藩から名主本役罷免の処分をうける。その後、米沢ついで江戸へ出た倹次郎は米沢をはじめとする諸藩や幕府から重用され、声望を高め、やがては新発田藩もその存在を認めざるをえなくなっていく。それは彼の学識と剣術の技量とともに、文武修行や自らが経営する文武道場を通じて培った独自の情報ネットワークゆえであったろう。近年の幕末史研究では諸藩の周旋活動が注目を浴び、そのなかで周旋方・探索方と呼ばれる藩士たちの活動がクローズアップされているが、倹次郎のような草莽を用いることによって諸藩は彼らとは異なる情報を収集しえたものと思われ

る。また、諸藩にとって彼らはその活動が災いして自らに危害が及ばんとした際にいつでも切ることができるという意味において、まことに都合のよい存在でもあった。しかし、倹次郎は諸方に出入りしながら、戊辰戦争にいたっても決して特定の権力に身をゆだねることをしなかった。新発田藩から譴責を蒙った彼は、権力の残忍さを身に沁みて知っており、権力に深入りすれば思想や行動の自由が奪われることを察知していたのであろう。すなわち、独立独歩の姿勢を保つことで自らの能力を遺憾なく発揮し、志を貫く道を選択したのである。かかるありようは草莽研究の第一人者でもある高木俊輔氏がその著『明治維新草莽運動史』（勁草書房、1974 年）で描き出された、同志を糾合し特定の権力や権威を頼って志の実現をはからんとした「運動型」の草莽像とは大きく異なる。「運動型」の草莽たちが運動の挫折後、郷里に立ち返り地域において教育や宗教に再生の道を見出すよりほかなかったのに対して、倹次郎が仕官のチャンスを獲得し栄達の道を歩みえたのは、権力との巧妙な距離の取り方にあったものと思われる。すなわち、諸家に出入りして人脈を広げる一方で、いずれとも等距離を保つことで身を滅ぼすことを免れえたのである。

戊辰戦争下、米沢藩により暗殺された弟倹三郎の末路は、かかる兄の栄光とは対照的である。彼は米沢藩に大きな期待を寄せ、結果同藩の去就の犠牲となった。そして、倹三郎の暗殺一件をめぐり倹次郎もまた米沢藩に翻弄されることとなるのだが、それについては別稿を用意している。

2013 年 10 月に東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門に配属となって以降では、2013 年 12 月 1 日に大崎市で行われた「地域の歴史を知る　◎岩出山Ⅱ ― 戦乱と地域史」で「戊辰戦争とその影響 ― 岩出山伊達家の場合 ―」と題して講演する機会を得た。講演に先立って、北海道当別町で史料調査も行い、講演はその際の成果が反映されるかたちとなった。内容は岩出山伊達家の北海道開拓移住を戊辰戦争の影響という視点から考察を加えたものである。これまで米沢藩出身の宮島誠一郎をテーマとして研究を続けてきた私は、おりしも、宮島の存在を相対化し、その生涯をより大きな「物語」に接続させるためにも、明治の世を敗者として迎えた他の東北諸藩の人々の足跡を追い、「敗者」にとって明治維新の意義を問う計画を立てていたが、本報告はその一環とも捉えることができる。また、これを機縁となって、2014 年 1 月からは「岩出山古文書を読む会」の中級講座を担当していただくことになった。なお、中級講座のテキストとして使用している「奉宿若御用留」（吾妻家文書より、慶応 4 年〔1868〕正月から 6 月にかけての記録で、仙台藩から岩出山伊達家の達を岩出山伊達家の仙台屋敷留守居が書き留めたもの）は 2014 年度中に東北アジア研究叢書として解説・注記を付して翻刻、刊行される予定である。

専属教員以外の研究者の研究活動

(2013)

ロシア・シベリア研究分野

巽　由樹子　TATSUMI Yukiko　教育研究支援者　2013.4.1 ～ 9.30

研究論文

1) 「帝政期ロシアの定期刊行物と科学､宗教､革命ーソイキン出版社の事例から」(単著)、巽由樹子、『新史料で読むロシア史』、中嶋毅編、pp.53-71、2013 年 4 月、山川出版社、東京（査読無）

口頭発表

1) 「近代ロシアの商業出版と評論家 V・V・スターソフ－移動展派の普及についての考察－」(単独発表)、巽由樹子、日本西洋史学会第 63 回大会、2013 年 5 月 12 日、京都大学

麻田　雅文　ASADA Masafumi　教育研究支援者　2013.10.1 ～ 2014.3.31

著書

1) スチュアート・D・ゴールドン（山岡由美訳、麻田雅文解説）『ノモンハン 1939 ― 第二次世界大戦の知られざる始点』みすず書房、pp. 297-309、2013 年 12 月。

研究論文

1) 「中ソ対立の激化とイギリスの中立化 ― 60 年代を中心として」(単著)､麻田雅文、『国際政治』、国際政治学会、第 173 号、pp. 43-56、2013 年 7 月（査読有)。

口頭発表

1) “Quiet Occupation': Management of the Chinese Eastern Railway under Japan and the Soviet Union, 1932-1935.”（単独発表), Masafumi Asada, Fifth East Asian Conference on Slavic-Eurasian Studies, Osaka, Japan (10 August, 2013).
2) 「キッシンジャー史観を越えて ― 米ソ関係から読み解く中ソ国境紛争、1969 年 ―」(単独発表)、麻田雅文、ロシア史研究会 2013 年度大会、2013 年 10 月 13 日
3) 「ロシアと満洲 ― 中東鉄道略史　1896-1935 ―」(単独発表)、麻田雅文、2013 年 11 月 27 日、国際善隣協会（招待講演）
4) 「辛亥革命前後のロシアの『満蒙』政策 ― 錦愛鉄道とモンゴル縦断鉄道の計画を中心に ―」東北アジア研究センター共同研究「東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的･現在的研究」シンポジウム「越境する東北アジア：共生のダイナミズム」(単独発表)､麻田雅文､2014 年 3 月 8 日､東北大学東京分室 (招

待講演）

その他

1）「拙著『中東鉄道経営史』のその後」（単著）、麻田雅文、『近現代東北アジア地域史研究会 News Letter』（25）、pp.118-120、2013 年 12 月（査読無）
2）「ロシアと満洲をつないだ中東鉄道の 40 年」（単著）、麻田雅文、『善隣』（440）、pp.19-25、2014 年 2 月（査読無）

モンゴル・中央アジア研究分野

滝澤　克彦　TAKIZAWA Katsuhiko　教育研究支援者 2013.4.1 ～ 2014.3.31

著書

1）『東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査 2012 年度報告集』（共編著）、高倉浩樹、滝澤克彦、相澤卓郎、赤尾智宏、赤嶺淳、李善姫、稲澤努、植田今日子、梅屋潔、大沼知、岡山卓矢、金菱清、兼城糸絵、川島秀一、菊地暁、金賢貞、木村敏明、酒井朋子、島村恭則、沼田愛、林勲男、俵木悟、政岡伸洋、山口未花子、全 327 ページのうち「3-C 岩沼市寺島地区」（pp.69-72）；「あとがき」（pp.326-327）を執筆、2013 年 9 月 30 日、東北大学東北アジア研究センター、仙台
2）『無形民俗文化財が被災するということ ― 東日本大震災と宮城県沿岸部地域社会の民俗誌』（共編著）、高倉浩樹、滝澤克彦、梅屋潔、林勲男、政岡伸洋、金菱清、岡山卓矢、小谷竜介、金賢貞、山口未花子、木村敏明、俵木悟、兼城糸絵、川村清志、菊地暁、川島秀一、沼田愛、赤嶺淳、島村恭則、稲澤努、全 318 ページのうち「祭礼を無理に復活させないという選択 ― 岩沼市寺島地区の事例から」（pp.166-176）；「編者あとがき」（pp.312-315）、2014 年 1 月 31 日、東北大学東北アジア研究センター、仙台
3）『講座東北の歴史 第五巻 信仰と芸能』（共著）、佐川正敏、長岡龍作、佐藤弘夫、山田厳子、滝澤克彦、小田島建己、村井早苗、菊地和博、水野佐織、高橋章則、小林文雄、布施賢治、大石泰夫、全 327 ページのうち「オシラサマ信仰の地域的展開」（pp.155-178）を執筆、2014 年 2 月 28 日、清文堂、大阪

研究論文

1）「祭礼の持続と村落のレジリアンス―東日本大震災をめぐる宗教社会学的試論」（単著）、滝澤克彦、『宗教と社会』第 19 号、pp.115-129、2013 年 6 月 15 日、「宗教と社会」学会（査読有）

2) 「竹沢尚一郎著『被災後を生きる ― 吉里吉里･大槌･釜石奮闘記 ―』」(書評論文)、(単著)、滝澤克彦、『宗教研究』第 87 巻第 3 輯、pp. 128-134、2013 年 12 月 30 日、日本宗教学会（査読無）

口頭発表

1) 「震災後の社会空間再編過程における祭礼の意味について」､滝澤克彦 (分科会「東日本大震災に対する人類学者の社会関与とその可能性 ― 2011-12 年度宮城県震災無形民俗文化財調査事業より」代表者：高倉浩樹)、日本文化人類学会第 47 回研究大会、2013 年 6 月 8 日、慶應義塾大学

2) 「東日本大震災後におけるコミュニティの再編と祭礼の持続について」(単独発表)、滝澤克彦、日本宗教学会第 72 回学術大会、2013 年 9 月 8 日、國學院大學

3) 「被災した民俗芸能・祭礼復興の諸相―事例の比較を通して」(共同発表)、滝澤克彦・岡田浩樹、静岡県立大学国際行動論 B 特別講義、2013 年 10 月 21 日、静岡県立大学

4) 「被災民俗調査事業の目的と経過」(単独発表)、滝澤克彦、出張成果報告会 in 気仙沼、2013 年 11 月 3 日、気仙沼市中央公民館

5) 「被災民俗調査事業の目的と経過」(単独発表)、滝澤克彦、宮城県被災文化財調査成果公開事業『民俗芸能のチカラ』調査成果報告会 in 山元町､2013 年 11 月 2 日、山元町中央公民館

6) 「被災した民俗芸能・祭礼復興の多様性 ― 事例の比較を通して ― 」(共同発表)、滝澤克彦・岡田浩樹、公開研究報告「被災した無形民俗文化財と地域復興における研究の役割－東日本大震災に伴う宮城県委託調査事業の報告」、2013 年 12 月 2 日、高知県立大学

7) 「越境する人と宗教 ― ポスト社会主義モンゴルにおけるキリスト教福音派の流行を中心に ―」(単独発表)、滝澤克彦、長崎大学東アジア共生プロジェクト国際シンポジウム「東アジアにおけるヒト・モノ・情報・資本の多元的流通」、2013 年 12 月 14 日、長崎大学

8) 「民俗芸能・神社祭礼の復興の諸相 ― 被災した無形民俗文化財調査から ―」(単独発表)、滝澤克彦、東北民俗の会 12 月例会、2013 年 12 月 21 日、東北大学

9) 「スマートエイジングを支える社会システムテクノロジー」(共同発表)、金貞賢･稲澤努・滝澤克彦・佐藤大介・高倉浩樹、第 4 期研究所連携プロジェクト平成 25 年度成果報告会『ヒューマンサイエンス＆テクノロジー』、2014 年 2 月 5 日、東北大学電気通信研究所

10) 「聖書翻訳における神観念をめぐる諸問題」(単独発表)、滝澤克彦、東北アジア研究センター共同研究「モンゴルにおけるキリスト教宣教と聖書翻訳の過去と現在」

公開シンポジウム「聖書翻訳を通して見るモンゴル世界」、2014 年 3 月 2 日、東北大学東北アジア研究センター

斯欽巴図　スチンバト　教育研究支援者　2013.4.1 ～ 4.30

（専門研究員 2013.5.1 ～ 6.30）

著書

1）『「蒙文倒綱」―モンゴル語ローマ字転写配列―』（共著）栗林　均、斯欽巴図、総頁数 603 頁、東北大学東北アジア研究センター、仙台。

研究論文

1）「近代モンゴル語の学習書『初学指南』の著者とその満洲文字表記モンゴル語の実体」（単著）、スチンバト（斯欽巴図）、『日本モンゴル学会紀要』第 44 号、pp.3-17 頁、2014 年 3 月、日本モンゴル学会。（査読有）

口頭発表

1）「18 世紀末期のモンゴル語学習書『初学指南』の著者とその言語的特徴」、スチンバト（単独発表、モンゴル語）、全国第四回蒙古語応用研究学術検討会、2013 年 11 月 10 日、内蒙古師範大学蒙古学学院、呼和浩特。

青木　雅浩　AOKI Masahiro　専門研究員　2011.4.1 ～ 2015.3.31

研究論文

1）Бодоо, Данзангийн хэрэг ба Зөвлөлт Орос, Коминтерн.（単著）, АОКИ Масахиро, International association for Mongolian studies. Олон улсын Монголч эрдэмтдийн X их хурлын илтгэлүүд. 5. Монголын тусгаар тогтнол, хувьсгал. Улаанбаатар. 2013.6. pp.8-16.（モンゴル語論文：「ボドー、ダンザンの事件とソ連、コミンテルン」（単著）、青木雅浩、国際モンゴル研究協会編、『第 10 回国際モンゴル学者会議報告集 5　モンゴル独立と革命』、ウランバートル、2013 年 6 月、pp.8-16）（査読無）

2）「日本人のモンゴル抑留に関するモンゴルの公文書史料について」（単著）、青木雅浩、『近現代東北アジア地域史研究会ニューズレター』25、近現代東北アジア地域史研究会、2013 年 12 月、pp.19-28.（査読無）

3）「書評：中見立夫著『「満蒙問題」の歴史的構図』」（書評論文）、（単著）、青木雅浩、『Север（セーヴェル）』30 号、ハルビン・ウラジオストクを語る会、2014 年 3 月、

pp.193-201.（査読無）

口頭発表

1) 「新史料から見た 20 世紀のモンゴル」(単独発表)、青木雅浩、ハワリンバヤル 2013 講演会、モンゴルカレッジ ― モンゴル再発見　その歴史と経済 ―、練馬区立光が丘図書館、2013 年 5 月 4 日（講演）

2) 1920-иод оны Монгол дахь «Японы тагнуул»-ын асуудал –Мантэцүү-гийн экспедицийн ангийн хэрэг явдал.（単独発表）, АОКИ Масахиро, Япон Монголын залуу судлаачдын II форум. Зүүн Азийн шинэ дэг журам ба Япон-Монгол. Зохион байгуулагч: Монголын түүх соёлын судлалын нийгэмлэг, МУИС-ын Гадаад хэл соёлын сургууль, Монгол улсын Батлан хамгаалахын эрдэм шинжилгээний хүрээлэн. Дэмжигч: Монгол улс дахь Япон улсын ЭСЯ, МУИС-ын Монгол Японы хүний нөөцийн төв, МУБИС Гадаад харилцааны төв. Гол ивээн тэтгэгч: Тошиба олон улсын харилцааны сан. Хурал болох газар: Монгол Япон хүний нөөцийн төв. Улаанбаатар. 2013. 9. 10-12.（モンゴル語による発表：「1920 年代のモンゴルにおける『日本のスパイ』問題－満鉄調査班事件」(単独発表)、青木雅浩、第 2 回日本モンゴル青年フォーラム「東アジアの秩序の再編における日本とモンゴル」、主催：モンゴルの歴史と文化研究会、モンゴル国立大学国際言語文化学部、モンゴル国防衛研究所、後援：在モンゴル日本大使館、モンゴル日本人材開発センター、モンゴル国立教育大学、助成：公益財団法人東芝国際交流財団、場所：モンゴル日本人材開発センター、ウランバートル、2013 年 9 月 10 日）（基調報告）

3) 「外モンゴルからみた満洲」(単独発表)、青木雅浩、一般社団法人国際善隣協会講演会「満洲シリーズ第 2 集：第 5 回」、主催：一般社団法人国際善隣協会、会場：国際善隣協会、2014 年 1 月 30 日（講演）

4) 「日本人のモンゴル抑留について」(単独発表)、青木雅浩、第 39 回早稲田大学東洋史懇話会大会、主催：早稲田大学東洋史懇話会、会場：早稲田大学、2014 年 3 月 22 日（土）（講演）

その他

・総説、解説記事

1) 「『新しい世代が見た満洲』研究シリーズ第 2 集第 4 回:外モンゴルから見た満洲」(単著)、青木雅浩、『善隣』No.442（通巻 709)、一般社団法人国際善隣協会、2014 年 4 月、pp.11-17.

佐藤　憲行　SATO Noriyuki　専門研究員　2013.7.17 ～ 2014.9.30

研究論文

1) 「第 50 回クリルタイ彙報」(単著)、佐藤憲行、『東洋学報』第 94 巻第 4 号、2014 年 3 月、77-85 頁（査読有）

口頭発表

1) 「清代モンゴル・ハルハにおける耕作地に関する一考察 ― 19 世紀中期イフ・シャビとトシェート・ハン部ザサグ旗間の耕作地紛争を事例に ―」(単独発表)、佐藤憲行、東北大学東北アジア研究センター共同研究「近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究」第 1 回研究会､2013 年 6 月 1 日、東北大学

中国研究分野

盧向春　ル コウシュン　産学官連携研究員　2013.7.1 ～ 2014.1.31

研究論文

1) 『住民の幸福の視点に立つ地域交通システムの評価』(共著) 盧向春 『東北都市学会年報　第 13 号』、pp.17-36、2013 年 7 月（査読有）
2) 『風力発電世界一の中国における風力発電及びエネルギー政策』(共著) 盧向春 『旭川大学紀要　第 72 号』、pp. 21-31（査読有）

口頭発表

1) 「低炭素社会を目指す中国のエネルギー戦略と経済成長」 盧向春（単独発表)、環境経済・政策学会 2013 年大会、2013 年 9 月 22 日、神戸大学
2) Policy of energy strategies and economic growth in China、Xiangchun LU（単独発表)、名古屋大学大学院経済科ワークショップ、2013 年 8 月 20 日、名古屋大学
3) Analysis of Co-benefit of Integrated Policies to Mitigate both Global Climate Change and Local Air Pollution、Xiangchun LU（単独発表)、The Third Asian Seminar in Regional Science, 2013 年 8 月 7 日、National Dong Hwa University, Taiwan
4) Analyses on impacts of ETS on industries in Japan （単独発表） Xiangchun LU、16th Annual Conference on Global Economic Analysis、Global Trade Analyses Project (GTAP)、2013 年 6 月 12 日、Shanghai University of

International Business and Economics, Shanghai, China

5) MERGE ASIA model and Integrated Policies of east Asia、Xiangchun LU（単独発表）、Workshop of Translating Co-benefits Research into Action in Asia: Science, Models, Projects, and Policies、Ministry of the environment (MOE) and International Institute for Applied System Analysis (IIASA)、2013 年 2 月 18、Institute for Global Environmental Strategies (IGES)、Hayama, Japan

稲澤　努　INAZAWA Tsutomu　教育研究支援者　2012.4.1 ～ 2014.3.31

著書

1) 『日本客家研究的視角与方法 ― 百年的軌跡』（共著）、河合洋尚主編、全 10 章 190 ページのうち第 7 章「族群辺界論的展開」(pp.101-113) を執筆（羅鑫訳）、2013 年 10 月、社会科学文献出版社、北京

2) 『無形民俗文化財が被災するということ ― 東日本大震災と宮城県沿岸部地域社会の民俗誌』（共著）、高倉浩樹・滝澤克彦編、全 315 ページのうち「『地区』の祭りと変遷 ― 山元町八重垣神社お天王さま祭りの事例から」(pp.177-187) を執筆、2014 年 1 月 31 日、新泉社、東京

口頭発表

1) 「現代中国における地方文化の資源化と使用 ― 広東省汕尾における地方政府主催民俗イベントを事例に」、稲澤努（単独発表）、日本文化人類学会第 47 回研究大会、2013 年 6 月 9 日、慶應義塾大学（査読有）

2) 「東方地中海における『普渡』― 広東省汕尾と他地域の比較から」稲澤努（単独発表）、東アジア研究所第 28 回学術大会、2013 年 6 月 22 日、慶應義塾大学（査読無）

3) 「現代の僑郷と人の移動 ― 広東省東部の地方都市の事例から」稲澤　努（単独発表）、2013 年度日本華僑華人学会第 2 回研究会「新たな僑郷研究の展開―国内・国外からの視点」、2013 年 12 月 14 日、立教大学（査読無）

4) 「人類学と公共民俗学との対話可能性 ―『パブリック民俗学とパブリック人類学の対話可能性』から」稲澤　努（単独発表）、日本文化人類学会課題研究懇談会「東アジア公共人類学懇談会」中間報告会、2014 年 2 月 20 日、国立民族学博物館（査読無）

その他

・コラム

1) 「お茶を食べる」稲澤努（単著）『旅とフィールドワーク』3：69-70（園田学園女子大学文化人類学研究室発行）。（査読無）

Turmunh Odontuya　トゥルムンフ オドントヤ　専門研究員　2011.4.1 ～ 2015.3.31

著書

1) 『社会主義社会の経験』(単著)、トゥルムンフ・オドントヤ、総頁数 234 頁、2014 年 7 月（印刷中)、東北大学出版会、仙台

李　善　姫　　イソンヒ　専門研究員　2013.4.1 ～ 2015.3.31

著書

1) 『人の移動事典 ― 日本からアジアへ･アジアから日本へ』(共著) 吉原和男ほか編、全 552 頁中 318 ～ 319 頁、「東日本大震災と移民コミュニティ」、李善姫（土田久美子と共同執筆)、丸善出版、東京
2) 『復興を取り戻す ― 発信する東北の女たち』（共著）萩原久美子、皆川満寿美、大沢真理、李善姫他、全 147 頁中 30 ～ 41 頁、「多文化共生 ― 自らを可視化する被災地の結婚移住女性」執筆、2013 年 4 月、岩波書店、東京

研究論文

1) 「変化するジェンダー役割と結婚移住女性のモビリティ：東北地域の事例を中心に」(単著)、李善姫、青山学院大学社会連携機構国際交流共同研究センター・シンポジウム報告書『「多文化共生」の新たな展開に向けて ― 移動する人々からみた日本の社会の課題』(22 ～ 24 頁）(査読無）
2) Chizuko Kawamura(ed.) 3.11 go no Tabunka Kazoku [The Post-3.11 Multicultural Family]（書評論文)、(単著）Sunhee Lee、Social Science Japan Journal (2014) 17 (1): 113-118, University of Tokyo（査読無）

口頭発表

1) 「東日本大震災における移住者支援と移民コミュニティ ― その形成過程と今後の課題」(単独発表)、李善姫、第 12 回多文化関係学会、2013 年 10 月 15 日、立教大学
2) 「変化するジェンダー役割と結婚移住女性のモビリティ：東北地域の事例を中心に」(単独発表)、李善姫、青山学院大学社会連携機構国際交流共同研究センター・国際シンポジウム、2013 年 12 月 7 日（招待報告）
3) “Migrant Women’s Experiences of 3.11 and Law Reform Priorities”(単独発表) 李善姫、「日本 ― カナダ 民主主義、多様性、災害に関する政策対話：オタワから東京へ」2014 年 3 月 14 日、カナダ大使館 オスカー･ピーターソン シアター、主催:

日本カナダ大使館（招待報告）

4) “Experiences of Marriage Migrants in Tohoku”（単独発表）Sunhee Lee、国際会議 “Democracy, Diversity, Disasters: A Japan-Canada Policy Dialogue on Intersectionality and the Challenges of Contemporary Risk Governance”、 主催:ジェンダー、多様性、東北復興に関する 日加学際研究ネットワーク（JCIRN)、2014 年 2 月 6 日、Ottawa, Canada（招待報告）

5) 「被災地における移住女性と復興への取り組み ― 今なお周辺化されている外国籍女性の問題を含めて」（単独発表）李善姫、2013 年 10 月 27 日、第 16 回全国シェルターシンポジウム 2013 in もりおか･岩手､主催:全国シェルターネットワーク（招待報告）

その他

・エッセー

1) 「東日本大震災における移住女性のエンパワーメントと市民社会の役割」（単著）李善姫、月刊『社会運動』 396 号 (2013.3)、18 〜 23 頁、2013-03

2) 「【特集　中国延辺スタディツアー】中国朝鮮族の「移動のスケープ」とトランスナショナル・ファミリーの現状を実感して」（単著）李善姫『国際人権ひろば』No.112、6 〜 7 頁 2013 年 11 月発行号

佐々木　聡　SASAKI Satoshi　専門研究員　2013.4.1 〜 2015.3.31

著書

1) 『『開元占経』閣本の資料と解説』（単編著)、佐々木聡、全 162 ページ、2013 年 12 月 13 日、東北大学東北アジア研究センター、仙台

研究論文

1) 「『天元玉暦祥異賦』の成立過程とその意義について」(単著)､佐々木聡､『東方宗教』第 122 号、pp.24-25、2013 年 10 月、日本道教学会（査読有）

口頭発表

1) 「『開元占経』の基礎的研究 ― 日本・中国・台湾所蔵資料の悉皆調査を中心に」、佐々木聡（単独発表)、笹川平成 24 年度笹川科学研究奨励賞受賞研究発表会、2013 年 4 月 26 日、ANA インターコンチネンタルホテル東京

2) 「祥瑞災異思想の中世以降の展開について」､佐々木聡(単独発表)､術数学国際ワークショップ 2013-7「術数学と宗教文化」、2013 年 7 月 20 日、京都大学

3) 「術数文献をめぐるテキスト問題 ― 天文五行占書を中心に ―」、佐々木聡（単独発表)、日本中国学会第 2 回次世代シンポジウム、2013 年 10 月 14 日、秋田大学

その他

・コラム

1) 「霊ガタリの系譜②中国の鬼」（共著、東アジア恠異学会連載、佐々木は前半を執筆)、佐々木聡・佐野誠子、『幽』第 19 号、メディアファクトリー、pp340-343、2013 年 6 月

資源環境科学研究分野

コヤマ クリスティアン　KOYAMA Christian　産学官連携研究員　2013.4.1 ～ 2014.3.31

研究論文

1) Sato, M., and Koyama, C., “Soil moisture measurement by GPR/SAR”, Proc. of 2013 土壌水分ワークショップ ”, pp. 11-17, 2013.（査読無）

2) Takahashi, K., Liu, H., Koyama, C., and Sato M., “Fundamental study on GB-SAR at 20 GHz for inspection of inner structure of constructions,” IEICE Technical Report, 信学技報 , vol. 113, no. 309, SANE2013-63, pp. 55-60, 2013.（査読無）

3) Sato, M., and Koyama, C., “Fundamental Study on Microwave Soil Moisture Measurements”, Proc. of Workshop on Terrestrial Change in Mongolia 2013”, Dec. 20, Tokyo, Japan, pp. 72-77, 2013.（査読無）

4) Sato, M., Takahashi, K., Liu, H., and Koyama, C., “Development of Non-destructive inspection method for constructions by electromagnetic wave -The intermediate report 2013,” IEICE Technical Report, 113(309), pp. 25-30, 2013.（査読無）

5) Sato, M., Okamura, S., Takahashi, K., Liu, H., and Koyama, C., and Takahashi K., “Fundamental study on measurement of concrete wall structure by GB-SAR,” Proc. of SEGJ International Symposium 2013, Yokohama, Japan, 18-21, pp. 115-118, 2013.（査読有）

6) Liu, H., Koyama, C., Takahashi K., and Sato, M., “Fundamental study on high-resolution inspection of damaged wooden building by synthetic aperture radar,” Proc. IEE Japan EMT Symposium, 2013.（査読無）

7) Koyama, C. N., and Sato, M., “Soil Moisture and biomass retrieval by ALOS/ PALSAR Data”, Proc. of 2013 Asian Pacific Conference on Synthetic Aperture Radar, Sep. 23–27, Tsukuba, Japan, pp. 49-52, 2013.（査読有）

口頭発表

1) Jimbo, M., Koyama, C., Koshimura, S., and Sato, M., “Pi-SAR2 画像を用いた津波被災状況把握についての有効性の検討 ”, JSCE, Sendai, Japan, February, 2014.（査読有）

2) Koyama, C. N., and Sato, M., “L-band Soil Moisture Skin Depth Experiment by using GB-SAR”, 1st ALOS-PI Symposium, Sep. 19-10, Tsukuba, Japan, 2013.（査読有）

3) Schneider, K., Esch, S., and Koyama, C. N., “Monitoring and modeling spatial patterns and temporal dynamics of surface soil moisture”, 1st ALOS-PI Symposium, Sep. 19-10, Tsukuba, Japan, 2013.（査読有）

劉　海　リュウ ハイ　LIU Hai　産学官連携研究員　2013.4.1 ～ 2014.3.31

研究論文

1) H. Liu, M. Sato, “Determination of the phase center position and delay of a Vivaldi antenna,” IEICE Electronics Express, vol. 10, no. 21, pp. 1-7, 2013.（査読有）

2) H. Liu and M. Sato, "Measurement of phase center location of a cavity-backed spiral antenna" in Technical Report of IEICE, Koriyama, Japan, 2013, vol. 113, no. 487, pp. 41-44.（査読無）

3) H. Liu and M. Sato, "A compact polarimetric GPR system for detection of linear subsurface targets," in 12th Workshop on Subsurface Electromagnetic Measurement, Technical Report of IEICE, Sendai, Japan, 2013, pp. 73-78.（査読無）

4) M. Sato, K. Takahashi, H. Liu and K. Christian, "Development of non-destructive inspection method for constructions by electromagnetic wave," in 12th Workshop on Subsurface Electromagnetic Measurement, Technical Report of IEICE, Sendai, Japan, 2013, pp. 25-30.（査読無）

5) H. Liu, C. N. Koyama, K. Takahashi, and M. Sato, "Fundamental study on high-resolution inspection of damaged wooden building by synthetic aperture

radar," in IEICE EMT 2013, Aomori, Japan, 2013, pp. 73-78.（査読無）

6） K. Takahashi, H. Liu, C. N. Koyama, and M. Sato, "Fundamental study on GB-SAR at 20 GHz for inspection of inner structure of constructions," in 12th Workshop on Subsurface Electromagnetic Measurement, Technical Report of IEICE, Sendai, Japan, 2013, pp. 55-60.（査読無）

7） K. Takahashi, H. Liu, and M. Sato, "Archaeological Survey by Array GPR for Disaster Rehabilitation," in 12th Workshop on Subsurface Electromagnetic Measurement, Technical Report of IEICE, Sendai, Japan, 2013, pp. 81-86.（査読無）

8） H. Liu and M. Sato, "Design of a GPR Antenna Array for Asphalt Pavement Inspection," presented at the APSAR 2013, Tsukuba, Japan, 2013.（査読有）

9） H. Liu, J. Chen, L. Zou, K. Takahashi, and M. Sato, "Development of an Array GPR System for Large-scale Archeological Investigations," in the 11th SEGJ International Symposium, Yokohama, Japan, 2013.（査読有）

10） M. Sato, S. Okamura, H. Liu, C. Koyama and K. Takahashi, "Fundamental study on measurement of concrete wall structure by GB-SAR," in the 11th SEGJ International Symposium, Yokohama, Japan, 2013.（査読有）

11） L. Yi, H. Liu, K. Takahashi and M. Sato, "Archaeological Survey of Dangoyama Kofun by 3DGPR," in the 11th SEGJ International Symposium, Yokohama, Japan, 2013.（査読無）

12） H. Liu, J. Chen, and M. Sato, “Measurement of the phase center of UWB antennas for calibration of ground penetrating radar systems,” IEICE Technical Report on Antenna and Propagation, Matsuyama, Japan, 2013, pp. 1-6.（査読無）

13） H. Liu, X. Xie, and M. Sato, "New Ground Penetrating Radar System for Quantitative Characterization of Snow and Sea Ice," in IET International Radar Conference 2013, Xi'an, China, 2013.（査読有）

東北大学東北アジア研究センター

〒980-8576　仙台市青葉区川内 41
TEL / 022-795-6009　FAX / 022-795-6010

センター長・岡　洋樹
編 集 担 当・評価データ委員会
柳田賢二(委員長)、佐藤源之、
鹿野秀一、上野稔弘

2014 年 6 月 30 日発行

無断転載を禁ずる

Center for Northeast Asian Studies
Tohoku University